

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言談話資料（４）：福井・京都・島根

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002273

方言談話資料(4)

—福井・京都・島根—

国立国語研究所資料集 10-4

国立国語研究所

1980

方 言 談 話 資 料 (4)

——福井・京都・島根——

国 立 国 語 研 究 所

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から同51年度にかけて、「『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話を録音し、その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は、機を得て、順次刊行する予定であり、昨年度までに、『方言談話資料(1)―山形・群馬・長野―』『方言談話資料(2)―奈良・高知・長崎―』を刊行した。本年度は、その第三集および第四集（本書）を刊行する。

本書に収めた録音・文字化資料は、もっぱら、佐藤茂（福井県担当地方研究員・福井大学教授）・加藤和夫（同協力者・当時福井大学学生）、佐藤虎男（京都府担当地方研究員・大阪教育大学教授）、広戸惇（島根県担当地方研究員・京都家政短期大学教授）の四氏の尽力によるものである。また、話者もしくは司会者として、加藤久子、山本仁太郎（以上福井県）、坂本アイ、坂本ヨシノ、渋谷計二、山室二郎、山室富江、渡辺信一、渡辺久子（以上京都府）、渋谷徳右衛門、杉原清一、長瀬マス子、藤原安太郎（以上島根県）の各氏の協力を得たほか、有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和55年 1月

国立国語研究所長 林 大

方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯 豊 毅 一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳 川 宗 賢（現在、大阪大学教授） 佐 藤 亮 一（室長） 真 田 信 治（研究員）

沢 木 幹 栄（研究員） 白 沢 宏 枝（研究補助員）

国立国語研究所地方研究員（五十音順）

秋 山 正 次	愛宕 八郎康隆	五十嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	寛 大 城	加治工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄一郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼一郎	後 藤 和 彦	小松代 融 一	斎 藤 義七郎	迫 野 虔 徳
佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世	田 尻 英 三
種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊	日 高 貢一郎
日 野 資 純	広 戸 惇	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄	本 堂 寛
馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉治郎	村 内 英 一
室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋	山 本 俊 治
和 田 實				

「方言談話資料」（４）編集担当者

飯 豊 毅 一 佐 藤 亮 一 真 田 信 治 沢 木 幹 栄 白 沢 宏 枝

収録・文字化担当者（協力者）

福井…佐 藤 茂（加 藤 和 夫） 京都…佐 藤 虎 男 島根…広 戸 惇

目 次

刊行のことば	3
まえがき	7
凡 例	10
I 福井県武生市下中津原町	
解説	13
1. 薬師如来の信仰	24
2. お地藏様の話	36
3. 道具持ちの話	42
4. 祝儀の話(1)	49
5. 同 (2)	67
6. 精勤章(軍隊での)の話	74
7. 幣貨改正	81
8. 戦友の話	91
9. 娘の結婚	97
10. 酒屋の話	126
II 京都府綾部市高槻町字観音堂・桜	
解説	151
1. 黒谷の紙すき	166
2. こどものころの衣服	173
3. 小学校とこどもの遊び	189
4. こどものおやつ	209
5. こどものころ	222
6. 家族のこと	239
7. 結婚当時のこと	253
8. 祭りの日のこと	268
9. 農家の主婦の苦しみ楽しみ	273

III 島根県仁多郡横田町大字大馬木

解説	283
1. いつも襤褸を着て欲のなかった人の話	291
2. こってのにへい	304
3. 田植・草取	308
4. 盆と祭	337
5. 稲刈	350
6. 亥の子さん	366
7. 膝塗り餅・とろへん・ほとほと	370
8. どんど焼・ひとひ正月・こと祭	376

ま え が き

研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

録音・文字化を実施した府県は次の通りである。

青森^{*}、岩手^{*}、宮城^{*}、山形^{*}、群馬^{*}、千葉^{*}、新潟^{*}、石川^{*}、福井^{*}、長野、静岡、愛知、京都、奈良、鳥取、島根、広島、愛媛、高知、長崎、宮崎、鹿児島^{*}、沖縄

51年度は収録地点を4地点減らし(*印の県を割愛した)、19の府県について、原則として50年度と同一の地点で、(a)目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b)老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c)場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、なお、このほかに収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。本書は、50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち、「福井県武生市下中津原町」「京都府綾部市高槻町字観音堂・桜」「島根県仁多郡横田町大字大馬木」の3地点分についてのものである。

話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

1. 老年層話者による談話(50年度)

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常生活ではもっぱら方言を用い、また、録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者で

も差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話（51年度）

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをねらって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧侶対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員（校長など）対その土地の一般的職業（農業・漁業など）に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者（地方研究員）に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

3. 老年層男性と若年層男性との談話（51年度）

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

4. 場面設定の会話（51年度）

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつかなかった。

録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量（51年度については、各項目平均20分、合計60分程度）について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分（話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など）を選択して文字化することとした。

文字化原稿の作成・表記

1. 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。
2. 文字化は原則として表音的のカタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化

作業の能率などを考慮してのことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担当者が「解説」の中で説明することとした。

3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にまかせた。
4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名
2. 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）
3. 収録した方言の特色
 - ①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係
 - ②音声・音韻上の特色
 - ③文法上の特色

B. 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての説明など。

C. 収録内容の概説

1. タイトル
2. 録音年月日
3. 録音場所
4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など
5. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

凡 例

1. 場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し、該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。
2. 発言や録音が不明瞭なため聴き取りが困難な箇所には~~~~~線をつけた。
例 クズレル カンシテ 〈27ページ 3段〉
3. 最終的に聴き取り不能の箇所には~~~~~線のみを記した。
4. 言いよどみは、その末尾に-----線をつけた。
5. 複数の発言が重複した場合には、重複部分に_____線をつけた。
例 Y オワンテナ (K ヒトリデワ オガマレン) 〈27ページ 7段〉
6. 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分に××××××××をつけた。
例 クサ
××××× クサラント 〈26ページ 6段〉
7. 笑い声、咳ばらいなどは、(笑)、(咳)のように示した。
8. 同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や、録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には、該当箇所に*の符号をつけた。

I . 福井県^{たけ ふ}武生市^{しも なか つ はらちよう}下中津原町

収録・文字化担当者 佐 藤 茂
同 協力者 加 藤 和 夫

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名

福井県武生市下中津原町

2. 収録地点の概観

- a) 位置：福井県嶺北地方の南西にある武生市、その武生市の市街地より南西へ約15Km(道のり)のところにある武生市坂口地区のほぼ真中に位置する。南は山を境してすぐ南条郡河野村に接する。
- b) 交通：武生の市街地よりバスで約30分、1日に4往復しかないそのバスで湯谷町(坂口地区の行政上の中心地)下車、東に徒歩約15分で下中津原町に着く。道路は同町から東に向かう県道が武生市春日野町を経て国道8号線に通ずる。しかしこの道は途中が舗装されておらず、ひどいつづら折りの急坂のため同地区以外の人にはあまり利用されない。また同町から西に向かう県道は上述の湯谷町で南北に別れ、南は武生市中山町(坂口地区)を経て海岸の南条郡河野村甲楽城に通じ、北は武生市勝連花町、同市広瀬町などを経て武生市街地へと通じている。10年程前までは下中津原町もバスが通ったが路線変更のため現在は全く通らない。従って殆どの家庭が、このような交通の不便を補うため自家用車を所有している。
- c) 地勢：南から西にかけての海岸山脈を越えればすぐ越前海岸という位置にありながら、標高約150mに位置し武生市中心部より約100m高い山合いの地であるため、夏は涼しく冬は武生市でも一帯の積雪地帯で雪の少ない年でも1mを下ることはまずない。四方をすべて標高300~500mの山系に囲まれており、その山合いの小盆地に水田・畑をわずかに有す。中央を、武生市の北で日野川に合流するところの吉野瀬川の支流が流れている。
- d) 行政区画の変動：江戸時代における旧藩領は、福井県史及び福井県南条郡誌(いずれも署名)によると、西尾藩(三河・松平氏)領(隣接の坂口地区内の下別所町、勾当原町、湯谷町と同様)

とになっている。明治三年の廃藩置県により、最初西尾県の所管に属すが、その後教賀県の所管に属し、また明治17年7月の地方官選任の事と共に、教町村以上に一戸町を置く事になり、その当時は現在の坂口地区六ヶ村として一行政区画を成さず、中津原・下別所・湯谷とともに現在の武生市王子保地区3ヶ村、南条郡河野村1ヶ村と計8ヶ村で1つの役場の下にあった。しかし明治21年4月の市町村制発布により、丹生郡より中山・勾当原両村が南条郡坂口村に編入され、現在の坂口地区六ヶ村の姿を形成するに至った。そして戦後の昭和26年3月に、下中津原は他の5つの部落と同時に武生市に編入され現在の武生市下中津原町に至っている。

- e) 戸数・人口：明治期以来過疎化の進んだ坂口地区の中では珍らしく当下中津原町は戸数及び人口の変動が少ない。これは下中津原町が坂口地区の中でもほぼ真中に位置し、水田、畑などにも恵まれて生活が安定していたためと思われる。

以下、明治以後の人口及び戸数の変動、ならびに現在の状況を示す。

(下中津原)

年度	明治11年	大正9年	大正14年	昭和5年	
戸数	38 軒	40	36	36	
人口	197 名	188	149	130	

(現在)	
昭和36年	昭和51年 ^{1月} 現在
34	31 軒
165	143 名

- f) 主な産業：殆どが農業或は農林業を営む。しかし最近の社会事情や山合いの小盆地という土地条件を反映して、全くの専業農家は一軒もなく殆どどの家庭は夫婦ともに近くや武生市の中心部などの会社、工場に勤めている。土建業などの日雇い人夫も何人

かおり、また大工・左官・水道工事などの専門職に従事する者、公務員も多い。ここ数年来水田の耕地整理が進み、農業の大型機械化による省力化が更にその傾向を押し進めているようである。その点では農家とはいながらも当の農業は全く副業化していると言えそうである。水田における水稻栽培のほかは、畑で自家用の野菜を作る程度で特に目立つ産業はない。ただ一部の家庭で営利を目的としたレタス栽培、しいたけ栽培、栗栽培が行われているが、まだまだ軌道には乗っていない。山地の利用は、戦前は炭焼きが盛んであったが現在は全く見られず、杉や松の植林が行われる程度で特に目ぼしいものはない。

3. 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

まず方言区画上の位置について。方言区画上の位置を言う場合、その方言区画の方法自体に諸説あるので問題は残るが、一心ここでは平山輝男氏の区画に依りたいと思う。それによればこの武生市下中津原町方言は、本土方言の中の西部方言、そのうちでも北陸方言に位置する。福井県は木之芽峠を境に同県でありながら、若狭地方は近畿方言に区画される。従って、武生市下中津原町方言は北陸方言のうちでも、最も南よりの地域に入る方言と言うことが出来る。この区画上の位置は、東条操氏の方言区画（東条操編『日本方言学』昭和28年、33頁）においても同じことが言える。

隣接諸方言との関係について。木之芽峠を境して南の若狭地方、滋賀県地方は近畿方言に入るので、いろいろな面でかなり異なる所もあるが、同じ西部方言として共通点（特に音韻・文法面）も見られる。東の岐阜県は東部方言に入り、その違いは前者よりむしろかなり明らかになる。さてそれでは同じ北陸方言の中での関係はどうであろうか。その1つの手がかりとしたい。これまでになされた平山輝男氏や柴田武氏の報告によると、当武

生市下中津原町方言は一型アクセント地域に入る。この一型アクセントは武生市のほか、それより北の鯖江市・福井市・足羽郡と丹生郡の一部にあると報告されている。それでは武生市の南の南条郡はどうかというと、平山氏は武生市の東、今立郡上池田とともに京阪式アクセントの色彩が強いとしている。その他、武生市の北の丹生郡の一部と坂井郡、それに吉田郡・今立郡の一部には曖昧アクセント、また大野郡石徹白（現在岐阜県）や同郡下穴馬・上穴馬には東京式アクセントが、その西の大野市・勝山市などでは東京式と京阪式アクセントが混在していると報告されている。つまりアクセントのみを考えると福井県嶺北方言は非常に複雑な姿を示していると言えようである。（つけ加えれば、石川県（能登半島の一部を除く）と富山県は京阪式アクセントである）。しかし語彙・文法面ではある特定の地域を除いては、ほぼ同系であると考えてよいように思う。

② 音韻上の特色（モーラ表・音声的特徴）

〔モーラ表〕

u	o	a	e	i			
ku	ko	ka	ke	ki	kju	kjo	kja
gu	go	ga	ge	gi	gju	gjo	gja
ɲu	ɲo	ɲa	ɲe	ɲi	ɲju	ɲjo	ɲja
su	so	sa	se				
zu	zo	za	ze				
ʃu	ʃo	ʃa	ʃe	ʃi			
ʒu	ʒo	ʒa	ʒe	ʒi			
	to	ta	te				
	do	da	de				
tʃu	tʃo	tʃa	tʃe	tʃi			
tʂu	tʂo	tʂa	tʂe	tʂi			
nu	no	na	ne				
ɲu	ɲo	ɲa	ɲe	ɲi			

	ho	ha	he				
ɕw	ɕo	ɕa		ɕi			
Fw		fa	fe				
pw	po	pa	pe	pi	pju	pjo	pja
bw	bo	ba	be	bi	bju	bjo	bja
mw	mo	ma	me	mi	mju	mjo	mja
ju	jo	ja					
rw	ro	ra	re	ri	rju	rjo	rja
		wa	we				
N	Q	E					

〔音声的特徴〕

1. 4つがなの区別なく、ズーズー弁でもない。
2. 語中・語尾のか行子音は〔り〕である。
3. セ・ゼの子音は〔ɕ〕,〔ʒ〕である。
4. 〔kw〕,〔gw〕はない。
5. 1音節語の長音化が見られる。例)〔ki:](木)
6. 長音節の短音化もしばしば現われる。例)クンショー > クンショ(勲章)
7. 〔r〕と〔d〕の混同現象がある。例)〔dazjo〕(ラジオ)
8. 連母音〔ai〕は、全般に〔ai〕がみられるが、〔ɛ:]に変化したものも多い。例)〔ere:](エライ),〔ne:](ナイ)。
9. 連母音〔au〕 > 〔o:]、〔ei〕 > 〔e:] も一般的。

③ 文法上の特色

1. <という>にあたる部分は殆ど全て<クッチュー>か、または短音化した<クッチェ>になる。

2. 断定の助動詞「ダ」は「ジャ」、「ニャ」、「ヤ」に変わる。前の3つは、同一人物でも併用の状態にあり、丁寧断定の助動詞「デス」に対するほどの待遇的差異はないと思われるが、若干の差異が認められる。「エ」も稀に使われる。そしてこれらに続くとき、全般に撥音化が起る。
3. 打消の助動詞「ナイ」は「ン」となることが多く、「書ケナンダ」のように使われて、可能や能力の否定を表わす。
4. 尊敬の助動詞「ナサル」は「ナハル」または「ナル」になることが多い。
5. 輕蔑の意の助動詞として「サラス」が使われる。「ヤガル」と同意。
6. 補助動詞としては、継続体「テイル」が「テル」、その否定形が「テイン」となる。また敬体継続は「テナハル」、「テナル」となる。完了態では「テシマウ」が「テマウ」、「テシマッタ」が「テモタ」に。予備態「テ・オク」は「トク」、供与態「テ・ヤル」は「チャル」となる。
7. 格助詞「カ」や「ヲ」は省かれることが多い。
8. 準体助詞と考えられる「ノ」は「ン」に変わることがある。
9. 接続助詞は「テモ」も「デモ」も使われるが、「タツテ」「カッテ」も併用されている。例) スミヤキ(炭焼き)シタカッテ。また「ケレド」は「ケド」となっている。「カラ」は「サケ」(「サカイ」の訛音)となる。「ノデ」は「ノ」が省かれて「デ」となる。
10. 副助詞では、「バカリ」が「バッカ」、「クライ」が「クレー」となっている。
11. 文末助詞のうち、疑問の「カ」は「ケ」なる場合がある。また念を押す意で「ガ」や「ゲ」が使われる。例) キタンヤゲ、ナフランノデスガ
12. 動詞「スル」は「シル」になる傾向が強い。
13. 代名詞については、「ワタシ」の常体「ウラ」または「ワ

テ」が一般的。対象では常体における「オメー」, 「オメエ」が特徴的。

14. 「ソノ」, 「ソウ」, 「ソシテ」などの「ソ」は「ホ」となりやすい。

15. 文末において断定の助動詞などが省かれて、その前の音節（ノダのノにあたる部分が多いように思われる）が撥音化することがある。例）アルラシン, コシラエタルン。

4. その他（地点選定の理由、協力者の氏名、協力内容など）

地点選定の理由には、まず協力者である加藤和夫（福井大学学生）の生地（武生市下中津原町）であつたということがあげられる。調査地点が協力者の生地であるということは、調査段階および調査結果の整理段階でいろいろ有利な点が多い。まず話者（被調査者）の選定でそのことが言える。協力者は同村（下中津原）の老人を1人ひとりよく知っており、また今回の調査内容・目的も前もって理解していたので、2名の老人に協力を依頼する時点で、出来るだけ方言をよく残していて、かつ、マイクの前に出て相手と気楽に話しの出来るような人を選ぶことが出来る。また、当日の司会も加藤が担当したが、2名の老人にとって司会者が同じ村の者で、かつ青年であり、調査場所の加藤宅も旧知の場所であるので、会話も特に滞ることなく思いのほか順調に進み、4時間分の収録を無事に終わる。その後の調査結果の整理段階でも、地名・人名をはじめ家号などの純ローカルのものについては加藤の知識がこれを助け、その他の文字化、標準語訳等々についても、その都度あらためて被調査者に問い合わせるという煩雑さを多く避けることが出来た。

更に言うなら、調査地であつた武生市下中津原町は一応市に属しているものの、最も山間部の僻地であるので、方言の保存度もかなりいいと予想されたことも、地点選定の理由である。

B. 表記について

1. 仮名表記について

- (1) [sæ] [dæ] [næ] …はサエ, タエ, ナエのように表わす。
- (2) 小さく、かすかに聞こえる音は、小さな仮名で表わした。(例) ソレマタ, ホンデ, ナブランノデスカなど。 注: 但し拗音表記は別。
- (3) [ɛ] については、だいたい三種の表記をした。例えば [de] についてみると、デア, デエ, デ(デー)。 注: しかし概してこちらの方言では [e] が [ɛ] に変わることが多い。
- (4) こちらの方言では、格助詞「ワ」がそのまま正確に発音されることはあまりなく、[wa] の [w] が無声化している。従って格助詞「ワ」にあたる部分は、小さい「ア」を書いた。(例) デルトコァ, サンゾァ, ヨメァなど。
- (5) [ʃe] [ʒe] はシェ, ジェと表わす。
- (6) 「皆」の意の「ミンナ」[minna] の [mi] が聞こえないものはンナと表わす。
- (7) 文末に断定の助動詞の意で小さく「エ」のつく場合があるので、それは小さく「ェ」と表わす。(例) シンデモタンェ, アルイタンェなど。

2. 音声符号表記について(但し、注記における音声符号表記のみ)

※ 上で説明したことはここでは省略する。

- (1) 特に強く発音される音節の前に [1] をつける。(例) [neɛŋa1tsute]
- (2) 「コァ」にあたる部分は [ko^o] と表わす。
- (3) 途中で急にことばが途切れた場合、[ʔ](声門閉鎖音) で表わしたものがあつた。(例) [sainanʔtʃu:] など。 [k^aa] の例もある。
- (4) 同じ「デー」でも、単なる長母音の場合は [de:] と表わすが、時折 [dee] と二重母音に表わす時もある。なるべく後者の場合は「デエ」或は「デエー」と表記した。

(5) 仮名表記での(2)の説明部分は具体的には、[morotake^hdo] のように小さな音声記号で表わした。

3. イントネーション表記について

(1) 上昇調イントネーションか下降調イントネーションかで「」の表わし方をした。特にこの方言の場合、独特のイントネーションのゆれ（文末に多い）があるので、注記において出来るだけ示しておいた。（例）[kedo^hːː] , [itswakameni^hiːː] , [jo^hːːtari^hːː] , [ʒo^hːːzw
ni^hːː]。その他非常に多い。

C. 収録内容の概説

1. タイトル

1. 「薬師如来の信仰」 ～ 10. 「酒屋の話」

2. 録音年月日

昭和50年8月19日

3. 録音場所

福井県武生市下中津原町第50号6番地、司会者加藤和夫の自宅の屋敷。

4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴

- ・1人は山本仁太郎氏で男性、明治37年生れ。職業はすと農業である。（但し、冬季は京都方面の酒屋として出かせぎに出る）特に役職歴はないようだが、現在、武生市坂口地区の老人会の会長をしているようである。生まれてこの方、当下中津原町に住んでいるが、兵役で昭和12～15年の3年間外地（満州方面）にいたことがあるとのこと。話し好きで、72歳という年にもかかわらず仕事も盛んにする人で、この日も自分の過を懐しむように次々と話して、もっぱら相手の加藤久子さんを聞き手にまわしてしまっただ。少々早口で、言いよどみの場面も多く、文字化の際苦労した。方言の保存度は普通であろう。ただ同じ会話の中で「ワタシ（私）」と「ウラ（私）」を併用していたりして標準語がつい出てしまうという場面も見られた。独得の文末におけるイントネーション（「フ」）のゆれも加藤さんに比べると少ないようである。
- ・1人は加藤久子氏（協力者加藤和夫の親戚に当たる）で女性、明治45年生れ。職業はやはりすと農業。役職歴も特になし。現在の加藤家へは嫁いで来たわけであるが、生家も同じ下中津

原町の道端家で、結局生まれてより下中津原に住んでいることになる。(但し15歳、17歳の時に、2年ばかり武生の今の中心部に住んでいたことがあるとのこと) この人も、元來が話し好きの人で、この日もよく話してはくれたが、何しろ相手の山本氏があまりに積極的に話すので、終始リードされた形。しかし、加藤氏の場合、山本氏と年齢が8つ違うのに加えて、15か16で嫁いで以来、家庭の主婦として家にとじこも。たままここまで来ているので、山本氏の話題の豊富さについて行けないのは仕方のないことかも知れぬ。また加藤氏の場合、口調が丁寧で、聞いていてたいへんわかりやすかった。しかし、先にも書いたように、文末の独得のイントネーションなどについては、山本氏よりもさらに方言の保存度が良いと見ることも出来る。

5. 録音環境

同席者は、担当研究者佐藤茂と協力者(司会者)加藤和夫、そして2人の話者、山本仁太郎氏と加藤久子氏の4名である。初めのうちは、話者2人とも佐藤に話しかける(説明する)ような口調が目立ったが、慣れるに従って2人の会話に入っていく。山本氏が非常に話し好きであったために、加藤氏が聞き手にまわったことが多かったが、それでも話しが滞るということは殆どなく、司会者は全くといってよい程、口をはさむ必要がなかった。時期が盆過ぎの過ぎしやすい頃だ。なので、陸奥で庭から入ってくる風を受けながら、落ち着いて会話が進んだ。周囲がたいへん静かな所で、録音状態も良好のようである。4時間という長時間の録音であったが、2人の話者とも熱心に話してくれ、順調に進行した。

1. 薬師如来の信仰

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y マア マア ワタシノ ムラデフ ソレダケガ⁽¹⁾ イチバン ホコリ
 まあ 私の 村では それだけが 一番の 誇り
 ヤネ。 タタリアリツチュート⁽²⁾ ソレマタ⁽³⁾ メーシンジャトカッテ
 だね。 祟りがあると言うと それまた 迷信だとかと言って
 ナモカモ⁽⁴⁾ ユーカモ シランケド マ カナラズ ソレワ⁽⁵⁾ アルラ
 誰もかれも 言うかも 知れないけれども まあ 必ず それは あるらし
 シ。 カナラズ ソレワ。 オタカイニ トシノイッタ モンワ⁽⁶⁾
 い。 必ず それは。 おたがいに 年をとった 者は
 ソレガ⁽⁷⁾ ヤカマシー イーツタワッテ キタンヤゲ⁽⁸⁾。 アンマリ
 それが うるさく 言い伝わって 来たのですよ。 あまり
 ナブランホーニ⁽⁹⁾ シタホーガ イートユー⁽¹⁰⁾。 モー ナブリマシエ
 さわらないように したほうが いいと言う(ぶくに)。 もう さわりません。
 ン。 ホンデ⁽¹¹⁾ トニカク⁽¹²⁾ マー ハルマツリニ イッペン チョッ
 それで とにかく まあ 春祭りに 一度 ちょっと
 ト アケテ⁽¹³⁾ オガマシテ モラウダケデ モー ジェットアイ ナブ
 (御堂を)あけて 拝まして もらうた(けて) もう 絶対に さわ
 ランノ⁽¹⁴⁾ ミカ⁽¹⁵⁾。 ホヤケド イマダニ ウツクシージデス⁽¹⁶⁾。 イー⁽¹⁷⁾
 らないのですよ。 けれども 今だに 美しい地(色)です。 美しい

ヒトデッシャ ナガーイコトタツテモ。 ダ⁽¹⁸⁾ェーブ アノ オヤフ
 人ですよ 長いこと たつても。 大分 あの お薬
 シサマワ フルイラ⁽¹⁹⁾シン。 ニッポン⁽²⁰⁾ニ~~ニ~~ サンタイシカ⁽²¹⁾ ネエン
 師様は 古いらしい。 日本に 三体しか ないん
 ジャツテ。⁽²²⁾
 だって。

K ウーン ホーケ。 ウーン。 * オークー ヒトヤネ。⁽²³⁾
 そうですね。 大きい 人ですねえ。

Y トニカワ フルイワ⁽²⁴⁾ フルインデスワネ。 (K アー ホーケ)
 とにかく 古いことは 古いんですねえ。 (ああ そうですね。)

ナントカタイシキュー⁽²⁵⁾ ヒトガ ホンナシタンヤケド⁽²⁶⁾ ホノ ウシ
 何とか大師と言う 人が 彫られたのですか その 後に

ロニ ソノ カイタ⁽²⁷⁾ ナイラ⁽²⁸⁾ アノ~~xxxxxx~~ ソノー メエー ツフレタ⁽²⁹⁾
 その 書いたものを(何です) その 目が つぶれた

ッキュー⁽³⁰⁾ ヒトガ ヌリカエタトキ⁽³¹⁾ ソノー~~xxxxxxxx~~ ソノ ジオ ケシテモ
 という 人が 塗りかえた時 その 字を 消して

タラシン⁽³²⁾ (K アーア) エー。⁽³³⁾
 しあたらしい。 (ああ) ええ。

K ナンカシラン⁽³⁴⁾ ホノトキニワ カンテー ハイラナンダッテー⁽³⁵⁾ ホ
 何か知らないが その時には 鑑定が 入らなかったとは そ
 レタケワ キーテ⁽³⁶⁾ -----。
 れだけでは 聞いて……。

Y ソリャノ ジオ ケシタデ マー カンテーガ ハイラナンダンニ
 それはね 字を 消したから まあ 鑑定⁽³⁷⁾が 入らなかったのだ
 ャノ。 アンデ マー ソノ ジーサレ ワカレバ ナントカユ
 ね。 あれで まあ その 字さえ わかれば 何とか言う

タイシ⁽³⁸⁾ツューコトダケワ ワカルン。⁽³⁹⁾ ソノ^{xxxxxx} ソノ アレ ケヤ
大師と云うことだけは わかる。 その あれは 櫓

キノ ヒトツノ モンデ⁽⁴⁰⁾ ホツタルデスデ。 ケヤキ イッポンデ。
の ひとつの もので 彫っておりますから。 櫓 一本で。

ナニモ ホカノモンデネー。 モ タダ ケヤキ イケー^(41A) ケヤギオ
何も ほかの物ではない。 もう ただ 櫓 大きい 櫓を

イッポンデ コシラエタルン。 ホンデ ソノ トキノ オイデタ
一本で 作ってある。 それで その 時の いらっしゃ

ノ ナントカユー タイシノ^(41B) マー シエンネンカ マエノ コツテ
つたの 何とかいう 大師の まあ 千年くらい 前の ことで

ショー。 ホヤケド ケヤキヤデ⁽⁴²⁾ アーユー マダ^{xxxx} クサラ
しょう。 けれども 櫓 ばかり ああいう(風に) まだ 腐らな

ント⁽⁴³⁾ アーヤッテ リッパニ アルンデ。 アリヤー ヌリカエタ
いで ああして 立派に あるので。 あれは 塗りかえた

トキニ⁽⁴⁴⁾ ウシロニ ナマエオ ソノ⁽⁴⁵⁾ ヌッシガ ドーカ シタンデ
時に 後の 名前を その 塗師が どうか したので

ソナケナ アレエ⁽⁴⁶⁾ コノ^{xxxx} キョノ^{xxxxxx} コノ センド⁽⁴⁶⁾ イッタ トキ
そうでなければ あれは この 前回 行った 時に

ニ⁽⁴⁷⁾ カンテーニ マ コクホーン ナルンデショ。⁽⁴⁸⁾ コクホーニ
鑑定に まあ 国宝に なるのでしょ。 国宝に

ナルツケタンデスケド ソレオ ウシロノ ジオ ケシタツタン
なると云ったのですけれども それを 後の 字を 消してあつたの

デ モー ワカランノエ。 ホンナケナ アリヤ モー^{xxxxxxxx} アンナモ
で もう わからないんです。 そうでなければ あれは もう

ン⁽⁴⁹⁾ アンナモン コンザイショニ⁽⁵⁰⁾ トットカレンノエネ。 アリヤ
あんなものは この在所には 置いておかれないんですよ。 あれは

ー モー コクホーシ ナル シナモンニヤケニ。⁽⁵¹⁾ アリヤ メズ
むう 国宝に なる 品物だからねえ。 あれは 珍ら

ラシン。 コー ヤッテ ウケマシテンニエ。⁽⁵²⁾ (K ウン) カタ
しい。 こう やって(手)受けましてるんです。 片ー

イッポワ クズレル カンシテ⁽⁵³⁾ コー シテナハンデネエ。 ホイテ
方は 薬を入れる 感じで こう(う風)していらしゃるのです。 そして

オカンデナハルン。 オガンダコト ⁽⁵⁴⁾ ネエ。

拝んでらっしゃる。 拝んだこと ないですか。

K ~~ウ~~ ~~ウ~~ イヤ チラト オガンダコト アルケド ヨー オボエテ
~~xxxx~~ ~~xxxx~~ いえ ちらっと 拝んだこと あるけれども よく 覚えて

エンワネ(笑)⁽⁵⁵⁾。

いませんねえ。

Y ~~テ~~ ~~テ~~デエ コーユー マルイー オワンテナ オワンテナ (K
~~xxxx~~ ~~xxxx~~ 手で こういう 丸い お椀みたいな

ヒトリデワ⁽⁵⁶⁾ オカマレン ヤッパリ(笑)) コーユー マルイ
ひとりでは 拝まれない やっはり こういう 丸い

コー クスリ ウケマス ナンヤワネ。⁽⁵⁷⁾ ホイテ コーヤッテ ウ
こう 薬を 受けます なんですよね。 そして こうして

ケナシテエー-----。

お受けになって……。

K ナンカ タマオ モッテナハルンデ ネンケネ。⁽⁵⁸⁾
何か 玉を 持っていていらしゃるので ないですか。

Y イヤ タマッテ ソリャ クスリ ウケマシテ⁽⁵⁹⁾クル タマヤネエ。
いや 玉と言うが それは 薬を 受けましている 玉ですねえ。

K ~~ア~~ ~~ア~~ー ホーケ。
~~xxxx~~ ああ そうですか。

Y デー アレダ⁽⁶⁰⁾ケガ マー コンザイショ / ホコリジャネ。 (K
これで あれた⁽⁶⁰⁾けが まあ この在⁽⁶⁰⁾所の 誇りですね。

ウン) ナーモ ユーコト ネー ~~モ~~ モー コンザイショ ソレ
ええ 何も 言うことは ない もう この在⁽⁶⁰⁾所は それ
ダ⁽⁶¹⁾ケエア ジマン デキルトコヤ。
だけは 自慢 出来るところです。

K ホヤネ。
そうですね。

Y モー ホカノ コトワ アンマリ ジマンワ デキンシ…… (笑)
もう ほかの ことは あまり 自慢は 出来ないし……。

K ナーモ デキンシ カワッタコトモ ネーシー。⁽⁶²⁾
何も (自慢)出来ないし 変わったことも ないし。

Y モ ソレカラー モ ワタシラー マー メー ジウマレデ⁽⁶³⁾ェ ナ
もう それから もう 余などは まあ 明治生まれて 何
ーモ ムカシノ コツチャデ トシヨリヤケド マー ソレカラ
にしても 昔の ことだから 年寄りだけれども まあ それから
コツチャー カワッタコトモネーシ。
以後は 変わったこともないし。

K サイナン⁽⁶⁴⁾チュコトワ ネーデ⁽⁶⁵⁾ネー。
災難という事は ないですからねえ。

Y オー マー ヨケ サイナンテワ ネーデスワネ。 ホイデ⁽⁶⁶⁾ ヤ
まあ 多くは 災難というのはいのですね。 そして やは
ッパ アノヒトノ ⁽⁶⁶⁾イナハラントキニヤ ヤッパ カジガ オキルンニヤノ
り あの人の いらっしゃる時には やはり 火事が 起⁽⁶⁷⁾こるのですね
ドーモ。 (K ウーン……) ホイデ アノ タンナカサン⁽⁶⁷⁾ラノガ
どうも。 (そして あの たんなかさんの(家)が

ヤケナシタトキラニモ ヤッパ アノ ヤクシニョ ライサマカ テ
焼けられた時などにも やはり あの 薬師如来様が 天
ンエ アガッテナシタ⁽⁶⁸⁾ トキヤッ チュンニャター。 (クウーン)
へ 上っていらした 時だと言うからねえ。

コニヤッテ ウケマシテ⁽⁶⁹⁾。 クスリ モライニ アガンナシタ ト
こうして (キを) 受けまして。 薬を もらいに 上られた

キヤ。 ヤッパ アガルトキニャ ミエルツチュンデスワネ。 ジ
時です。 やはり 上る時には (如来の姿が) 見えると言うんですね。

エシジエン⁽⁷⁰⁾ ウララ ミタコト ネーデスケド。
全然 私は 見たことが ないですけども。

K ネエーナー⁽⁷¹⁾。
ないですねえ。

Y ホヤケド ソンナトキニャ⁽⁷²⁾ ワタシラー モー サカヤエ イッテ
けれども そんな時には 私は もう 酒屋へ 行って
マスモンヤデ ソーユー ソノ スガタオ ミルツチュウコトワ デケナ⁽⁷³⁾
ますものですから そういふ その 姿を 見るということは 出来な

ンダンデスケド ヤッパ アガルトキヤ アガルンヤッテコトワ
からたのですけれども やはり 上る時には 上るんだと言う事は

ワカルンニヤッチュコトワ⁽⁷⁴⁾ (Kヤッパ) コノ ダンナンガ⁽⁷⁵⁾
(その姿が) わかるんだと言う事は (やはり) この(家の) 旦那が

ソー ヨー イーナシタワネ。 ホリヤ フシギナンジャゾ ナー
そう よく おっしゃったね。 それは 不思議なんだを なあ

キンニョ モンチュター⁽⁷⁶⁾ ワタシニ アノ ダンナン ヨー イー
金右衛門と言っでは 私に 旦那が よく おっ
ナシタンデスガ。

しゃったのですよ。

K アノー オマワシサマワー⁽⁷⁷⁾ アノ コツキニ マエー コツキニ コ
お薬師様は 前は

コデ⁽⁷⁸⁾ ウマレタ ヒトワー シンコーシテナハルンニャア。 ウー
ここで 生まれた 人は 信仰していらしゃるのです。⁽⁷⁹⁾

ン。⁽⁸⁰⁾ タサエモンノー アノー マチンキョノ⁽⁸¹⁾ イマノ オババノ
太左衛門の まちんきよのね 今の お婆さんの

アネサンデー⁽⁸²⁾ トーキョーカラ マインナシテ⁽⁸³⁾ イマデモ ヤッ
姉さんで 東京から (お薬師様に) 参られて 今でも やはり

バ シンコーシテナハルツキマシタ。 ウン。
信仰していらしゃると言いました。

Y ホンナモン ホントノ カラダ ワルイヒトワ モー アソコエ
そんなもの 本当に 体の 悪い人は もう あそこへ

モー⁽⁸⁴⁾ フェイニチ マイッテルワノ。
もう 毎日 参ってるよ。

K ホイテ アレ ガンガケット⁽⁸⁵⁾ クギオ ツツツンケノ。⁽⁸⁶⁾
そして あれは 願掛けという くぎを 打つのですかねえ。

Y ウン (ノー) ⁽⁸⁷⁾ ソリャー ソーユークトシタ ヒトモ アルシ
ええ (ねえ) それは そういうことをした 人も あるし

ー ソリャ マー ナンシルヒトモ⁽⁸⁸⁾ アルカシランケド-----。
それは まあ そうする人も あるかもしれないけれども……。

K コノゴロワ ナカナカ ホンナ ヒト ネエーケドノ ナカナカ。⁽⁸⁹⁾
この頃は なかなか そんな 人は ないですけれどもねえ。

Y モー イマ ソンナコトシル ヒト ネーモ。
もう 今は そんなことを する 人 ないですもの。

K ネエーナー。⁽⁹⁰⁾
ないねえ。

Y ジャケド コノ ヨンジュ－ネンマ⁽⁹¹⁾ エニヤ
けれども この 四十年前には ソーユー ヒトモ
そういう人も

アッタンエノ。

あったのですからねえ。

K アー ナンカシラン⁽⁹²⁾ チョット^{xxxxxxxx} チラットー^{xxxxxxxx} フギオー イチ^{xxxx} ヤッパ
ああ 何か(よく)知らないが くぎを やはり

イチ^{xxxx} オマエリシルタンビニ⁽⁹³⁾ イッポン モッテッテ ウツンカノ。
お参りするたびに 一本 持って行って 打つのですかね。

Y ウン ホラ ミツケラレタラ モー アカンノヤ。 ヒトニ ミラ
それは (人に) 見つけられたら もう 駄目なのです。 人に 見ら
レタラ……。
れたら……。

K アー ミツケラレルト モー アカン。 アー ホーケ。 ガシガ
ああ 見つけられると もう 駄目。 ああ そうですか。 願掛
ケツ⁽⁹⁴⁾ チューモンフノ ヨカ アケンマニ。 ウーン。
と言うものはね 寂か 明けないうちにね。

Y トモカフ シロイ ショーゾクデネ イクニヤデ。 ソリヤ モ
とにかく 白い 装束でね 行くのですから。 それは も

チロン フギウツタルノ ミタコトモ アリマス。 ホラ コー
ちろん くぎを打ってあるのを 見たことも あります。 それは まあ

ソーユー ヒトモ アッタンニヤロイ⁽⁹⁵⁾ コノザイショニワ。 マー
そういう 人も あったのでしょ う この在所には。 まあ

ソーユーフーニ イッショーケンメーニナル ヒトモ アッタフケ
そういう風に 一所懸命になる人も あったわけ

ヤネ⁽⁹⁶⁾ ホヤケド イマワ ソーユーコト シルヒトワ……。 モ
ですね。 けれども 今は そういうこと する人は……。 も

Y - ヨノナカ カワッテシマイマシタ デネー。 アー。 ムカシト
う 世の中 変わってしまいましたですからね。 ああ。 昔と
チゴテ-----。
違って……。

注記

- (1) 薬師如来をさす。 (2) タタリアルツチュートの言い誤りであらう。文字化部分には出ないが、他の所で「タタリアルツチュート」と言っている。 (3) 「ソマタ」とも「レマタ」とも聞こえる。「ソ」も「レ」も非常に短い音になっている。
- (4) 本来は「何もかも」の意であるが、ここでは「誰もかれも」の意か、或いは、迷信をさして言う「何もかも」か。 (5) 祟り。
- (6) 「モンニフ」の言い誤り。 (7) 「ヤカマシク」の「シク」が [ʃi:] となる。 (8) 「ケ」 [ŋe] は相手に念を押したりする時使う終助詞。 (9) 「ように」と「ほうに」の混同。
- (10) 前の「イーツタワッテ」の部分にかかって行く。倒置。
- (11) は、きり聞きとれないが間違いないだろう。 (12) この村で毎年3月に行なわれる豊作祈願の祭り。 (13) 薬師如来の姿を。
- (14) は、きりしなないが「デス」が短かく小さく聞こえる。「カ」は「ケ」と同様の働きの終助詞。 (15) 「そうだけれども」の意。
- (16) 薬師如来に塗られてある色の意。 (17) 美しい、きれいの意。
- (18) [dæ:bw] (19) [fɯrwiraʃiN] (20) [ni] と [ne] の中間。
- (21) 三体しかないというのは話者がそう信じ込んでいるだけである。
- (22) [neɛŋaɫtsute] (23) 小さくひとり言のように言う。
- (24) 「フルイノワ」の「ノ」が省かれた。 (25) 薬師如来を彫った人は不明。 (26) 薬師如来像の。 (27) 「ノ」があいまいながら聞こえる。 (28) 特に意味のないつなぎ言葉。「なんですねえ」くらいの意。 (29) [mee:] (30) 昔、薬師如来の色を塗り変えた塗師が、像の眉間にあつた宝玉を盗んだら、祟りでめくらになつてしまつたという言い伝えがある。 (31) 誰が像を彫つたかという彫師の名。 (32) [raʃiN] (33) ため息をつくように。 (34) 自分に確信がない時などに使う。 (35) 当村の薬師如来像がかなり古いものとして伝わっているので、専門家が鑑定しに来る予定だ。らしい。 (36) 「いました」の省

- 略。 (37) [ʒiːsæ] (38)彫師は僧と言われっているようである。 (39) [wakarwn] (40)樺の一木造りの意。
- (41A)「タダ」から「ケヤキオ」まで一気に言う。「ケヤキオ」となったのは、その後に「使って」というようなことを言おうとしたか。 (41B)「タイシノ」まで言いかけてまた話の転換。
- (42)「フーニ」の省略。あとの「アーヤッテ」と同様の意。
- (43)言いかけ。 (44)「オショー」とも聞こえる。[ʊo:]か。意は「後の」であろう。 (45)薬師如来の色を塗りかえた塗師の意であろう。 [nwʃi] (46)「先度」の意で、一度像を鑑定のために村から持ち出したことがあるので、そのことをさす。
- (47)「ネ」に近い。 (48)このあたり語順が混乱。 (49)「コノザイショ」の転。在所は村の意。 (50)「トットク」は「とって置く」と同意で保存する意。 (51)「ケニ」がついて「～ねえ」の意を添える。 (52)「受けます」は「受ける」の敬体。ここでは主語が薬師如来だからこうなる。 (53)「ワズレルカンジデ」とも聞こえる。意味ははっきりしないが「薬を入れる感じで」と解釈した。 (54) [ne] 問い直す感じ。 (55)照れ笑いの気味。 (56)恐れ多くてという。 (57)前のことを受けて相手に言いかける。 (58)小さくかすかに。 (59)「ウケマストキノ」とも。 (60) [aredakeŋa] (61) [dake]
- (62) [neʔiʃiʔ] 独特のイントネーション。 (63)薬師如来を鑑定のために持ちだして、それが戻ってから。 (64) [sainanʔtʃu:]
- (65) [neʔdeneʔ]. 独特のイントネーション。 (66)薬師如来の擬人化。 (67)加藤久子氏の家の家号。 (68)薬師如来が年に一度、天へ薬をもらいに上ると言われている。 (69)は、きりしないが、こう聞こえる。 (70)「ソレ ソンナ」とも。
- (71) [neːnaʔ] (72) [ne] (73)「デケナ」は関西的。普通は「デキナ」 (74)言いさかすようにくり返し言う。 (75)協力者加藤和夫の祖父を言う。 (76)「ホリヤ～キンニョモン」は加藤の祖父の言葉。「キンニョモン」は山本仁太郎氏の家

の家号。(77) [samawa¹] (78) [ɕitowa¹] (79) [pa¹]
 (80) 自分の言ったことを頭の中で反復するような口調。(81) 家号。
 (82) [anesande¹] . 独特のイントネーション。(83) [ʃite¹]
 (84) [mæinitʃi] (85) 「ガンカケトイウト」の省略形 (86) 「ウ
ツツン」とも。(87) [sorja¹] (88) 「ソーユーコト」に対
 して、特に1つのものをさすのではなく、「別のこと」とでもい
 う意か。(89) 弱く付け足す。(90) [ne¹ na¹] (91) 「四十年
 ばかり前には」の意。(92) 確信ない時によく使う。(93) 「イ
 と「エ」の中間の音。(94) 夜が明けぬうちにしなくてはいいな
 いんですね、というような意。(95) [njaroi?] で [i] はかすか
 に聞こえる程度。(96) この「ヤネ」は次の「ホヤケド」にすぐ
 続くのでは。きりせず。

2. お地蔵様の話

話し手

(田舎号) (氏名) (性別) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤 久子 女 明治45年生れ

K ホイテ アノ オジゾーサンカッテ⁽¹⁾ ヤッパ アノー ホカノ ザイ
そして あの お地蔵様だって やはり ほかの 在
ショノ ヒト シンジテナルッテ⁽²⁾。 メイガ……アツノ⁽³⁾ カワラノ⁽⁴⁾ カワラノ⁽⁵⁾
所の 人 信じていらっしゃるってね。 目が 明くの 上の

オジゾサン。

お地蔵様。

Y オー ホイテ コノ⁽⁶⁾ コノ⁽⁷⁾ コノ オジゾサンモ ナカナカ フシ
ああ そして この お地蔵様も なかなか 不思議
ギナ オジゾサンヤ。 コンザイショノ オジゾサン。 アラ ア
議な お地蔵様です。 この在所の お地蔵様。 あれば
ノー アンナトコニ ヒョコント タツテナハルケド アレ フガ
あんな所に ひこりと 立っていらっしゃるけれども あれば
ワレワレマ⁽⁶⁾ オネガイシテ⁽⁷⁾ ヒョイト カタテデー ラワーニ カ
私が お願ひして ひよいと 片手で 衆に か
タゲルンニヤザ。 オネガイシテ カタテデャ……。 ホカノ ヒ
つけるのですよ。 お願ひして 片手で……。 ほかの 人
ト カタテデ ジェツタイニ ウゴカンワノ ミナサエー。 イク
片手で 絶対に 動かないですよ 見なさい。 いくら

ラ カタテデモ⁽⁸⁾ ドンナ チカラカケテモ。⁽⁹⁾
片手でも どんな 力を入れても。

K アレ イツノ タイフーヤッタヤロー アノ キズイキナハラ
あれは いつの 台風だったかねえ 傷つけられながら
ナンダヤノ⁽¹⁰⁾ー。 オドームシラ⁽¹¹⁾ トーント⁽¹²⁾ タンボエ⁽¹³⁾ テックフリカ
たのですねえ。 お堂ごと とんと 田んぼへ ひっくり返
エッテモタンニエノ。
てしまったんですよ。

Y ミナ ジェンブ⁽¹⁴⁾ ファイテッテモタゲノ⁽¹⁵⁾ー。 ホヤケド オジゾサン
皆 全部 吹いていってしまったんですね。 けれども お地藏様⁽¹⁶⁾
ダケ ヒョコント タツテナハル。 ホイデ ウラ キノドクナデ⁽¹⁷⁾
だけ ひっくりと 立っていらしゃる。 それで 私は 気の毒だから
ウラ アンナモン オータモ⁽¹⁸⁾。 ホイデ アト ヒョット⁽¹⁹⁾ マタ
私は あれを 背負いました。 そして あとを ひょっと また
ウエマシタモ⁽²⁰⁾。 ホヤケドー モー ソノ ホカニヤア モー ド⁽²¹⁾
上に乗せましたもの。 けれども もう その ほかには もう ど
ンナコトシテモ ウゴカンデノ。 ホンナモン カヤッタリシルモ
んなことをしても 動かないですからね。 そんなもの 倒れたりするもので
ンデワ ネンニヤデノ。 ナンカ ソリヤ ヤッパ ムカシノ ナ
は ないのですからね。 何か それは やはり 昔の
ンケウカネ⁽²²⁾ コノ サカミチカラ⁽²³⁾ ヤタヒトガ ココデ マヨ
何と言うかねえ この 坂道から 来た人が ここで 迷って
テ タオレテ シンダトカナントカ エンデ ソノー オジゾサン
倒れて 死んだとか何とか 言うんで その お地藏様
オ ナンシタラシンニヤワネ。 (K アー) オオサカノ⁽²⁴⁾。 ムカシ
を 何したらしいんですね。 (ああ) 大坂のね 昔は
(建てた)

ヤー コノミチヲ ホレ コンネ イー ミチデ ナカッタゾノ。

この道は ほら なんとに 良い 道で なかったよ。

コンナ⁽²³⁾ オゾイ⁽²⁴⁾ ミチデ グリーツト マワッテ ホンナモン ワ
こんな ひどい 道で ぐるっと 回って そんなもの

レワレガ モ マ⁽²⁵⁾ イクカッテ ザーツト⁽²⁶⁾ マワッテ デエテイクノ⁽²⁷⁾
我々が もう 町へ 行くにしても ずうっと 回って 出ていくのに。

ニ。 ホイテ イマ⁽²⁸⁾ コッゾエ トンネルヲ アルデ。 ムカシャ
そして 今こそは トンネルが あるから。 昔は

トンネルヲ ネンデス-----。

トンネルは ないんです……。

K ヒロシエノ ホーエ デタデエ⁽²⁹⁾。 ヒロシエエ⁽³⁰⁾。
弘瀬の 方へ 出たからねえ。 弘瀬へ。

Y ヒ ヒ ヒロシエエ デルツタッテ ホンナモン デルトコ⁽³¹⁾ャ ネ
弘瀬へ 出ると言っても そんなもの 出るころは な

ー コトハラノ⁽³²⁾ ホシエー⁽³³⁾ ミチ ヨー イッタンニヤシ。 ホン
い 勾当原の 細い 道を よく 行ったのだし。 そんな

ナモン カブラヤカイドーバツカヤデー⁽³⁴⁾。⁽³⁵⁾

なもの 甲斐城街道ばかりです。

K オーサカヤマエノ⁽³⁶⁾ー。 (Y ウン) オーサカヤマエ イッタデー⁽³⁷⁾。
大坂山へねえ。 大坂山へ 行ったからねえ。

Y オーサカヤマバツカ トーッタデ。 ホイテ コノ オーサカカラ
大坂山ばかり 通ったから。 そして この 大坂(山)から

デテキテノ オーユキ マヨーテ ココエ ドッカ ユキミチノ
出てきてね 大雪に 迷って ここへ どこか 雪道の

ナンカデ⁽³⁸⁾ タオレテ ココデ⁽³⁹⁾ シンダンヤノ。 ホンデ ソレノ
何かで 倒れて ここで 死んだのですね。 それで それの

＼ ナンデ⁽⁴⁰⁾ ココエ オジゾサンオ タテタァ。⁽⁴¹⁾
何で ここへ お地蔵様を 建てた。

注記

- (1) 村の上の県道端にある地蔵。 (2) [naruttento:] (3) [me] > [mei] (4) 盲目の人の目が開くという地蔵様の御利益のことであろう。 (5) 「川原」という村内の字名。そこに地蔵堂がある。 (6) 複数の言い方であるが、ここでは単数の意で使われる。 (7) 「お願いしてかつがせてもらえば」という気持か。 (8) 「いくら片手でかつごうとしても」の意。 (9) 前文「ホカノ ヒト」から、この「チカラカケテモ」まで早口で一気に話す。 (10) [janot:] (11) 「～ごと」との意でよく「ムシラ」を使う。 (12) 擬声語。 (13) 「ひっくり返る」の強調。 (14) 地蔵様に対して恐れ多いという気持であって、一般に言われる「かわいそう」とは少しニュアンスが違う。 (15) ぞんざいな口調。 (16) 擬態語。簡単に衆、た感じを与える。 (17) このように聞こえるが、意味ははきりしない。たぶんこうであろう。 (18) [hokanjæ:] (19) 次に起こることばの思いつかない時などに使うつなぎことば。 (20) 現在の県道から、昔の街道へ通ずる道が、地蔵堂の前から山に向かってあった。 (21) こういう言い伝えがあるらしい。 (22) 現在の武生市湯谷町から同市当ヶ峰に抜けた旧甲斐城街道の途中にある山の名で大坂山。京都と近江の境にある逢坂山と同起源の名か。 (23) 昔の街道をさすのであって、今の道ではない。 (24) 「ひどい」とか「古ぼけた」、「役に立たない」の意でよく使われる。 (25) 現在の武生の市街地をさす。 (26) 「グリーン」と同様、擬態語。 (27) [dete] (28) 「コンドヤ」とも「コッソヤ」とも。 (29) [detadeɾi:]、独特のイントネーション。 (30) 町名。武生市広瀬町。 (31) [derwtokʰa] (32) 町名。武生市勾当原町(坂口地区) (33) [hoʃe:] (34) 南条郡河野村甲斐城(カブラキ)から坂口地区内を抜けて武生市当ヶ峰へ通じていた旧街道。この街道は江戸期まで、南条郡河野村の港河野と府中(現武生)を結ぶ重要な街道として栄えた。 (35) 「デー」はあい

まい。(36) [jamae^{no}] (37) [ittadeⁿⁱ] (38) 「何かの原
因で」という意か。(39) 主語はある旅人。[jan^o] (40) 「そ
の(死んだ)旅人の供養で」の意か。(41) [tatetaa]。この
あとにかすかに「ラシンニャ」と聞こえるような気がする。

3. 道具持ち⁽¹⁾の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y イヤ ムカシワ⁽²⁾ (笑)
いや 昔は。

K キンニヨモサンノ トーチャン ウタ シッテナハルンニヤ ナカ
金右衛門さんの 父さん 歌を 知っていらっしゃるんです 長持
モチウタ⁽³⁾
歌。

Y シニヤ⁽⁴⁾ イヤ ソンナモンワ……(笑)
いや そんなものは……。

K ナガモチウタ ジョーズデネーケノ⁽⁵⁾ ノーオ。 ジョーズデネン
長持歌 上手ではないですか。 ねえ。 上手ではなかつ
ケノ。
たのですか。

Y イヤ ホーヤ⁽⁶⁾ ケド (^K ダアーブ イキナシタヤロノ) オー ド
いや そうだけれども 大分 行かれたでしょう。 ああ

ーワモチヤ ジョ⁽⁷⁾ ジョーサン イッタノ。 オー マー コンデ
道具持ちは たくさん 行ったね。 ああ まあ これで

ザイショエモ モー イカントコ⁽⁸⁾ ネエーノ。
在所へも もう 行かないところは ないね。

K ホヤロノ⁽⁹⁾。
そうだろうねえ。

Y タイカイノ ウッチャ モー イッタワノ。 マー コレダケワ
大概の 家は もう 行たね。 まあ これだけは
シアワシエヤノ⁽¹⁰⁾。 コリヤ ヤッパ⁽¹¹⁾。
幸せだね。 これは やはり。

K アカーイ テヌグイ カブツ⁽¹²⁾テエエ。
赤い 手ぬぐい かぶって。

Y ウーン カ^xカラダ カトナケナ⁽¹³⁾ アカンノヤワノ。
体が 丈夫でなければ 駄目なのですよ。

K ホイテ アノー コノ ヒトワノ⁽¹⁴⁾ オサケー ノミナシタカッテ
そして この 人はね お酒を 飲まれても
ホシナ アノ ヨータリー⁽¹⁵⁾ ホシナ シナハラン。 ジョーズニ⁽¹⁶⁾
そんな 酔ったり そんなことは なさらない。 上手に
モー ナカナカ⁽¹⁷⁾ フロテワー ウタウトテワ ナンシタサケ⁽¹⁸⁾ ホイ
もう なかなか 笑ってはね 歌っては 何したから それで
テ⁽¹⁹⁾ ミンナガ ノー タノミナシタンニヤワノ⁽²⁰⁾。 ウーン。 ダッ
皆が ねえ 頼まれたのですよ。 大分

ーブアン ナニ モー ホントニ イキナハラン ウチャ ネーヨーナ
何です もう 本当に (道具持ちに) いらっしゃらない 家は ないような
モンヤロノ⁽²¹⁾。
ものでしょうね。

Y マー タイカイノ トコロワ ヨシテモ⁽²²⁾ロタノ。
まあ 大概の 所は 寄せてもらったね。

K ノ ムカシャ⁽²³⁾ フルマヤワノ。 ホン ムカシャ⁽²⁴⁾ ニノタンニヤ
ねえ 昔は 車ですよええ。 ごく 昔は 背負った

ケド。 ウーン。 タンス ナガモチ……。 イマ ナガモチッ
けれども。 罫 哥 長持 今は 長持というの

⁽²⁵⁾ ムノワ アリマシェンワネー。 ⁽²⁶⁾ イツゴロカラ ナガモチャ ネー
は ありませんよねえ。 いつ頃から 長持は ないで

カネー。 アレ ヤクブロン ⁽²⁷⁾ ナツ ツノワ。
すかねえ。 あれが 夜具風呂に なたのは。

Y ホンデ ワタシガ マー イチバン サイショニ ドーク モッテ
それで 私が まあ 一番 最初に 道具を 持って
⁽²⁸⁾ ツツノワ オクボサンノ ⁽²⁹⁾ アノ マルカ イツ ツノ (^K アーア)
行ったのは おくぼさんの あの 丸岡へ 行った(時)の事 ああ

ワタシ アノトキ ジュークカナ。
私は あの時 19かな。

K アーア ソーカ。 モット イッテルヤロイノ。
ああ そうですね。 もっと (年)とっているでしょうが。

Y ジュークカ ハタチャ。
19か 20です。

K イヤー ニジュー (^Y ナニシエ ⁽³²⁾ モー) ⁽³³⁾ サングレエーヤロ。
いや 23くらい (何しろ もう...) でしょう。

Y アジチ ⁽³⁴⁾ キタ ヨメガ マダ キテエンノヤケノ。 (^K アー ホ
あじちへ 来た 嫁が まだ 来ていないんですからね。 ああ そう

ーケ) ⁽³⁵⁾ ホイテ アノ ヨメカー ウラ ウトテッタラ フロテ
ですか) そして あの 嫁が 私が 歌って行ったら 笑って

タンヤデノ。 (^K アーア ⁽³⁶⁾ ホーケ ウーン。) ⁽³⁷⁾ ナカツハラノ
いたのですからね。 ああ そうですね 中津原の

アンチヤン ⁽³⁸⁾ フカイモンガ ウトテキタ ッチエテ フライヨッタン ⁽³⁹⁾
兄ちゃん 若い者が 歌って来たと言って 笑いやからんだ

ヤデノ。⁽⁴⁰⁾ ホリヤー ヨワッタンニヤ。⁽⁴¹⁾ アレ⁽⁴²⁾ ヤマオクニ アッ
からね。 それは たいへんだらた。 あれ 山奥に あ

テノ。 イッチバン オクニ アッタンヤデノ。⁽⁴³⁾ アツコエ。 イ
てね。 一番 奥に あったんですからね。 あそこへ。

マコソ ミチベエリ⁽⁴⁴⁾ エ デ テテ イー ウチ タテナシタ^ド。
今こそ 道端へ 出て いい 家を 建てられたけれども。

K シンルイジャモノ⁽⁴⁵⁾ -----。 イトコケノ。
親類だものねえ……。 いとこでしたかね。

Y オフボサントケ。
おくぼさんとですか。

K アノ マルカノ⁽⁴⁶⁾ アノ シニナシタ アジチ⁽⁴⁷⁾ ー (ウ ウー
丸岡の 死なれた あじちの

ン ウ ウケノ テテ⁽⁴⁸⁾) アノ ハジメサン⁽⁴⁹⁾ / オッカチャンフ
私の 父親 あの 肇さんのお母さんは

イトコヤンノ。⁽⁵⁰⁾ イ ハジメサンノ オッカチャント。 イトコデ
いとこでしょう。 肇さんのお母さんと。 いとこで

エア ネンケノ。
はいねえですか。

Y ハジメノ カーチャントケ。 (ウ ン) ウ ウケノ ー テテオ
肇の 母さんとかい。 ええ 私の 父親と

ヤト アソコノ オジジト キョーダイジエノ。
あそこの おじいさんと 兄弟だよ。

K ウン ホンデ イトコヤノ ウー⁽⁵¹⁾ ン。
それで いとこですよ。

Y ホリヤ ⁽⁵²⁾ ヨー ヨワッテモタンエ。 モ・ソリヤ ⁽⁵³⁾ イチバンサキ。
それは 奥に 困ってしまったのです。 もうそれが 一番先。

ソレカラ アト スー ツト オヤノ カワリエノ。⁽⁵⁴⁾
それから あと すうと 親の かわりですよ。

K ⁽⁵⁵⁾ ホイテ ナガモチウタ イッペン ウタイネノ。(笑) チョッコ
それで 長持歌 一度 歌いなさいよ。 少し

ウタノ⁽⁵⁶⁾ ウタノ ヒトツモ ハイラナ アカン。(笑)
歌の ひとつも 入らなくては いけない。

Y ホンナモン ウタウト ア⁽⁵⁷⁾ アノ オンサン ナニ ユーヤラト
そんなもの 歌うと あの おじさん 何を 言うやらと
オマウサゲ。
思うから。

K ホンナコト ネー。
そんなこと ない。

注記

- (1) 結婚式の時、近所の男子が嫁入り道具を運ぶ役目をした。
 (2) 司会者加藤の「昔の結婚式はどんな様子だ、たんですか」という質問に答えて。(3) 道具を運びながら歌う歌。(4) [ɲɲja]
 (5) [noːɾɔ]. 独特のイントネーション。(6) [dæ:bw] (7)
 「仰山」の訛音。(8) [tokə] (9) [hojaronoːɾ] (10) おめで
 たい結婚式にいつも間接的にではあるが参加できるから。
 (11) 「ヤッパ」のあとに「シアワシェヤノ」に類した語が省略され
 ている。(12) [te'eɾ] (13) 「体がかたい」で「体が丈夫(健康)
 だ」を意味する。(14) [ɕitowanɔ] (15) [joːɕitariːɾ]
 (16) [joːɾiːzuniːɾ] (17) [warotewaːɾ] (18) 「道具持ちに行っ
 た」ことをさす。(19) [hoide] (20) 道具持ちを頼まれた。
 (21) [jaronɔ] (22) この車は昔の大八車をさすのだろう (23) 「
 ホン」は「ホンノ」の転か。(24) 「ニナウ」は「両肩で背負う
 (かつぐ)」の意。(25) 「ツ」とも (26) [ɕenwaneːɾ] (27)
 「ヤヅフロニ」の「ニ」が「ン」に。ふとんなどを入れる木製の
 戸棚。(28) 家号。(29) 地名。武生市丸岡(まるか)町。(30)
 山本氏の言う19歳が少し若すぎるのではと疑っている様子。
 (31) [hataːtɕa] (32) 19か20だということを証明しようとするが
 加藤氏の声にさえぎられる。(33) 山本氏の言葉がまた信じられ
 ないという口調。(34) 家号。山本氏の親戚。(35) 道具持ちに
 行って長持歌を。(36) [aːɾa] (37) 下中津原のこと。(38)
 「アンチャン」と言ってまた別の「フカイモンカ」と言い直す。
 「アンチャン」を方言と意識したか。(39) 「～シヨル」は関西
 的。(40) 「ホラー」とも聞える。(41) ここの方言では「ヨワ
 ル」は、「疲れる」とか「困る」とか「弱くなる」などいくつか
 の意に使われる。ここでは「困る」の意に近い。(42) 嫁の実家。
 (43) 「アコエ」とも「アゴエ」とも聞える。(44) 「エ」と後の
 「デ」がひと続きで「デエ」とも。(45) 下降調のイントネーシ

ョン。 (46) [no^h:¹] (47) [no^h:¹]。独特のイントネーション。
(48) 加藤氏の声ではっきり聞きとれず。 (49) 人の名。 (50) 「イ
トコ ヤロノ」の転。 (51) 自分で得心した感じの「ウーン」。
(52) 「ヨク」が「ヨー」に変わった。程度がそれによって甚だしく
なっている。 (53) 「道具持ち」に関しての最初。 (54) 親のか
わりに「道具持ち」に行った。 (55) 「ホイテ」は普通「そして」
の意で使われるが、時折りこういう使い方も見られる。 (56) お
どけて笑いながら、テープに「長持歌」を録音しろと言っている。
(57) [omow] > [omaw]

4. 祝儀の話(1)

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y トニカワ ワラジ ハイター⁽¹⁾ キター⁽²⁾ ホイテ シンヤケド⁽³⁾ オヤ
 とにかく 草鞋 はいてね 来て そして (祝儀を)するのだけと"
 ジャー⁽⁴⁾ ミツカクレワ カオ⁽⁵⁾ ミンノヤソノ。 ヨメサンノ カオ
 親父は 三田くらいは 顔を見ないのですよ。 嫁さんの 顔は。
 ワ。 * イヤー デルッテ⁽⁶⁾ ソリヤ ミュートサカ
 いや (祝儀に) 出るとしても それは 夫婦盃は
 ズキワ シルケド マ ミツカクレェア モー ナモン アワン
 するけれども まあ 三田くらいは もう そんなもの 合わな
 モノ。(笑) * ミツカクレワ ナンジャソノ⁽⁷⁾ ヨソ イッテモテ。
 いのですよ。 三田くらいは 何です よそへ 行ってしまて。
 ウン ホイテ ムラジュ ヨンデ ムラジュ ムラシューギ⁽⁸⁾-----。
 そして 村中 呼んで 村中 村祝儀……。
 キタヒワ⁽⁹⁾ ソイテ マー ツビノ⁽¹⁰⁾ シューギヤシ アクルヒワ ム
 来た日は それで まあ 旅(の人)の 祝儀だし 明日は
 ラシューギデスワノ⁽¹¹⁾。 ムラシューギ スンデ ホイテ マー ア
 村祝儀ですよね。 村祝儀が すんで そして まあ 明
 ケタ⁽¹²⁾ ヒーグレニワ⁽¹³⁾ カオ ミルカナ。(笑)
 けた 日くらいには 顔を見るかな。

K ホリヤ ミタヤロゲノ (笑)。 ホンナモン ドコ イッテルッタ
それは 見たでしょうよ。 そんなもの どこへ 行っていると言っ

ッテ ヨソ イッテ トマツタンデワ ネーヤロデ。(笑)
ても よそへ 行って 泊ったのでは ないでしょうから。

Y ⁽¹⁴⁾おジャケドー ウチノ ⁽¹⁵⁾ヨメラ キタト キ ドノ ヒトガ オヤッ
けれども うちの 嫁などは 来た時に どの 人が 旦那さ
サンヤラ シラナンダツチュモ。 (^Kウーニ) ソリヤ ソーヤ
んやら 知らなかつたと言うもの。 それは そうです
ゾノ。
よ。

K ダエーブ オッカチャン ウブナツタンニヤモ⁽¹⁶⁾ノ。 ノー。
大分 興さん 初心だったのですね。

Y ウーニ。 ンナモン ジューハチグレエーヤサケエ ンナ モー。
そんなもの 18くらいだから そんなの もう。

K ホリヤ ホーヤ。 ミンナ ンナ ホーヤケドー⁽¹⁷⁾。
それは そうです。 みんな 皆 そうですけど。

Y ワカイサケエニ。
若いから。

K ワタシラー アノ オッカサン⁽¹⁸⁾ イナハラナンダデノ。 (^Yアー)
私などは お母さんが いらっしゃらなかつたからねえ。 (ああ)

⁽¹⁹⁾イナハラナンダデー。 シュギ^{xxxxxx} シュギノ アイダグレア ナーモ
いらっしゃらなかつたから。 祝儀の 間くらいは 何も

ンナモン ⁽²⁰⁾オニヤフ^ル ウーニ。 ホイテ ムカシワ ゴカニチッ
そんなもの 何ですよね。 そして 昔は 5ヶ日という

キューノ シタシイ。
のを したし。

Y ホーデス。

そうです。

K イツカメニイ⁽²¹⁾ アノ^{xxxx} アノ オヤモトエ カエリマス⁽²²⁾ン。
5日目に 親元へ 帰ります。

Y デ¹ マタ イツカ ヤスンデ¹ カイツテフルン。
(それで) また 5日 休んで 帰って来る。

K ホイテ トーカ^{xxxxxx} ジュッカニチュテ⁽²³⁾ トーカメニ ネ カエッテキ
そして 104日と言って 10日目に ねえ 帰ってきます。
マスン ウン。

Y ムカーシカラ ソリヤマー マ ナンデモ イッショヤケド イマ
昔から それはまあ まあ 何でも 同じだけれども 今

ト⁽²⁴⁾ ナモン (K ホリヤ カタイデ⁽²⁵⁾ノ) カタイデ⁽²⁵⁾ー ナカナ
とは そんなもの (それは 真面目だからね 真面目だから なかな

カ⁽²⁶⁾ ナモン ナカナカ ムツカシーデ⁽²⁶⁾ ナカナカ ヨメ モラウ
か そんなもの なかなか 気むずかしい(人間)だから なかなか 嫁を もらう

ッテ ミアイモ シタコト ナケナ……。 ワタシラ ナンデスモ
と言って 見合いも したことは なければ……。 私などは 何ですよ

ソノ ヨメ モラウッタッテ ドンナ ヨメサン クルヤ コノ⁽²⁷⁾
その 嫁を もらうと言っても どんな 嫁さんが 来るか この

ヨメサン クルヤ シランノヤモ。

嫁さん 来るか 知らないんですもの。

K アー ホンデァ トショリシユーガ⁽²⁸⁾ アノ ミテキテ キメナシタ⁽²⁷⁾
ああ それでは 年寄り衆が (嫁を) 見て来て 決められた
⁽²⁹⁾
ンニャ。
んですね。

Y ホヤ ホヤ シランノヤモ。 ホイテ サカヤ⁽³⁰⁾ー イッテタデショ。
そうです 知らないんですもの。 そして 酒屋へ 行っていたでしょう。

サ サカヤカラ シカツツイタチニ キタニヤデノ。 ホイテ サ^{xx}
酒屋から 4月1日に (帰て) 来たのですからね。 そして

カ^{xx} サカヤオ アンデ⁽³¹⁾ サケダシッ シット ヤッパ アンデ⁽³²⁾ ニ
酒屋を あれで 酒出しを すると やはり あれで

カツノ ハツカゴロンナケナ カエレンノヤ。 アゲダルテ⁽³³⁾ カエ
4月の 20日頃でなければ 帰れないんです。(それ)上げ樽で 帰っ

ッテキタニヤ。 ホイテ ウチカラ ナンデモ ダンネ⁽³⁴⁾ シカツツ
て来たのです。 そして 家から 何でも いい 4月1日

イタチニ カイッテコナ ウチャ ドーモナランノヤケ⁽³⁵⁾ ドーデモ
に 帰ってこなければ 家は どうにもならないんだから どうでも

カイッテコナ アカン。 ナニオイテモ ダンネ ヒマ モッテ
帰ってこなければ 駄目だ。 何を おいても いい 暇を もらって

カイッテコイッテユー。 ナモ ヨメトルトモ ナンモ ユワンモ
帰て来いと言う。 何も 嫁をとるとも 何とも 言わないも
ノ。

のね。

K ウーン。 ホンナンヤッ タヤロノ。⁽³⁶⁾
そんなことだったのですか。

Y ヨメモラウトモ ナンモ ユワンモ (K ウーン) ソリヤ ヨメ
嫁をもらうとも 何とも 言わないも それは 嫁

モラウトモ ナンカ ユヤー マー コッチモ ソノ カクゴシテ⁽³⁷⁾
をもらうとか 何とか 言えば まあ こちらも その 覚悟して

カイッテクル。 (K ウーン) ナンニモ ユワンノヤモ。 (K
帰て来る。 何にも 言わないんですもの。

ホーン) タダ シカ ツツイ タチニャー モッテ⁽³⁷⁾ ジヒィ⁽³⁸⁾ カイツ
ただ 4月1日には もって 是非 帰って

テコナー (クウン) ウチー ヨーカ° アルンニャサケー モー
ニおければ 家に 用が あるのだから もう

カカサレンノヤ。⁽³⁹⁾ ホンテ モー サトツタケドー。アー
駄目だと言うことは出来ないんだ。 それで もう 悟ったけれどもね。 ああ

コリヤ ヘー タイカラ カイツタデ ヨメデモ トレッチェンニャ
これは 兵隊から 帰ったから 嫁でも とれと言うんだな

ナー マー ホンナコッチャワイト オモテ マー イムテワ⁽⁴⁰⁾ イ
まあ そんなことだろうと 思って まあ 行ては い

タワイ。 (クウン) ホイタラ エキエ アノー シンヤノ⁽⁴¹⁾ オ
ましたよ。 そしたら 馬へ しんやの

ツツァガ⁽⁴²⁾ ムカエニ キタワイノ。 (クウン) ンデ オンサ
親父が 迎えに 来ましたよ。 (それで おじさ

ン⁽⁴³⁾ ナンカ ワルイコツカイツタラ ナンヤ ワルイコトッテ シ
ん 何か 悪い事かいと言ったら 何だ 悪い事って

ランノカッタデ^{xxxx} シラン ンナモ シッテタラ ワルイコツカ
知らないのかと言ったから 知らない そんなもの 知ってたら 悪い事かって

ッテ トワン。 イヤ ホンネンニャ コンバン ヨメサ
聞かない。 いや そうではないんだ 今日晩 嫁さん

ン クルンデナッテ。
が 来るのでねと言って。

K コンバン ヨメサン。 ホンナンヤッタンケノ。⁽⁴⁴⁾ (笑)
今晚 嫁さん。 そんなことだったのですか。

Y ダ^{xxxx} ダレノエ⁽⁴⁵⁾ ダレノエノッタラ アンチマンノヤーッテ ユーサケ バカナ
誰のだいと言ったら 兄ちゃんの代って 言うから 馬鹿な

(46)
 コト ユエマ ナーモ ユワントイテ ンナモン コンバン ヨメ
 こと 言え 何も 言わないでいて そんなもの 今晚 嫁
 サン クルッ タッテ ウラ シランジャ。 ンナモン カオモ シ
 さん 来ると言っても 私は 知らないよ。 そんなもの 顔も 知
 ラナ ナモ シランモン ホンナ ヨメサンテ アルケッテ ラヌニ
 らなければ 名も 知らないもの そんな 嫁さんなど あるかいってまあ

(47)
 ユーテ ソーユーテ カラコーテイタン^キ。 ^ト ドレカ ニモツ
 言て そう言て からかっていたのです。 どれか 荷物が

アルンナラ ニモツ モッテクワイノッテ。 ホイタラ マー サ
 あるのなら 荷物 持って行きますよって。 したら まあ 酒

カヤカラ コーリモ アルシノ サケノカスモ ナモカモ ミナ
 屋から 行李も あるしね 酒の粕も 何もかも 皆

アツタシ ホイデ^キ ヨメデモ トルッテ^キンナラ モット サケ
 あたし それで 嫁でも 取るというのなら もっと 酒を

コーテ カイルンニヤケドノ ホンナコト シランシノ。 (^キ ア
 買って 帰るのだけれどもねえ そんなこと 知らないし。

(48)
 ーア) ホヤイノ。 (^キ ホーヤ) サケデモ ドント コーテ
 そうでしょうよ。 (そうです。) 酒でも どんと 買って

カイルン。 ソンナコト シラン。 (^キ ウー) タダ カイツ
 帰るのに。 そんなこと 知らない。 ただ 帰って

(49)
 テコイチュデ ホーイッテ カイツテキタダ^キケノコト。 ホイテ
 来いと言うから はいと言って 帰って来ただけのこと。 したら

(50)
 エキ ムカエニ キタン。 (^キ ウン) ケツナー イツモ ホン
 駅に 迎えに 来た。 おかしい いつも そんな

ナモン ムカエニ キタコター ネーノニ (^キ ウン) キョーニ
 なもの 迎えに 来たことは ないのに 今日に

カギッテ ムカエニ キタ。 ナンカ コリヤ フルイコッテ⁽⁵¹⁾
限って 迎えに 来た。 何か これは 悪いことだ"な

ロクナ コッテネーワイ。⁽⁵²⁾ オンサン ナンカ フルイコツカーツタ
ろくなことではないだろうよ。 おじさん 何か 悪いことかって言ったら
イヤ ベツニ フルイコツデネンニヤ。 トテモ イーコッチャ。
いや 別に 悪いことではないんだ。 とても いいことだ。

(^Kウー) ホーカ (^Kアーア)⁽⁵³⁾ ホイトラ アンチャンノ
そうか。 そしたら 兄ちゃんの

ヨメサン キョー コンバン クルンデ (^Kウー) ドーデモ
嫁さん 今日 今晚 来るので どうでも

キョー カイッテコナ モー アカンノヤ (^Kウー) キョー
今日 帰って二なければ もう 駄目なんだ 今日

ワ ドーデモ カイッテコナ アカンノヤ ヨサリマデ⁽⁵⁴⁾ (^Kウー)
どうでも 帰って二なければ 駄目なんだ 夜までに

) ナンシエナ⁽⁵⁵⁾ アカンノヤッタ。 (^Kウー) ナー⁽⁵⁶⁾ ソーヤッ
何しなければ 駄目なんだと言った。 それなら そうして

テ ヒトコト ユーテクレナ アカンモッテ ユートラ イヤ ソ
ひと言 言ってくれなければ 駄目だって 言ったら いや そ

レ ユート アンチャン モー カイッテコント オモタサケー
れを 言うと 兄ちゃん もう 帰って二ないと 思ったから

(^Kアーア) イワンノヤロツテ……。 ソーカノ ソレモ アル
言わないうたろうって……。 そうかね それも ある

カモシランケト⁽⁵⁷⁾……。 ウラ エー ヨメサン アルンニヤガイッ
かも知れないけれど……。 私は いい 嫁さん あるんですよって

テ ホーユーテ カラコータンエ。 (^Kオーン)⁽⁵⁸⁾ ナニ グダン
そう言て からかったんですよ。 なに 具谷に

ニ ホントニ エーコガ⁽⁶⁹⁾ アッタンエ。 (^K ウン) (笑) グ
本当に いい娘が あったのです。

ダンカラ モラ ウンニヤデ⁽⁶⁰⁾ インナモン アカニッテ ウラ ユーテ
具谷から もらうんだから そんなもの 駄目だって 私 言って

カラコーテ イタンエ。 (^K ウー ン) ベ^{xxxx} ベツニ ダンネ マ
からかって いたんです。 別に いい まあ

ー ナンジャフイッテ⁽⁶¹⁾ ユーテ マー シカタネー タケフニ ㄥ
何だよって 言って まあ い仕方ない 武生に (嫁に)

ルモン アッタラ⁽⁶²⁾ マー ビンボニン キテフレル ムヌメ アレ
来る者が あったら まあ 貧乏人に 来てくれる 娘 あれば

バ ホンデ イーワイ ユーテフ マー トニカフ ビンボニンニ
それで いいよ(と) 言っては まあ とにかく 貧乏人だから

ヤケ ドーデモダンネ⁽⁶³⁾ ダーデモ キテフレルモン アッタラ モ
どうでもいい 誰でも 来てくれる者が あったら もう

ー ナカヨーシェ シテフレリヤ インニヤッテ マー シンヤノ
仲よくさえ してくれれば いいんだって まあ しんやの

オツツァン カラコーテ カイツタ。 ホイタラ アノ マンジュ
親父を からかって 帰った。 そしたら あの 饅頭屋

ーヤ アル^ㄩロノ (^K ウン ウン) オガワノ⁽⁶⁴⁾ コッチニ⁽⁶⁵⁾。
あるでしょう 小川の こちにねえ。

K キントキトーヤロ⁽⁶⁶⁾。
金時糖でしょう。

Y ウン キントキトー。
ええ 金時糖。

K ウン イマモ アルカシランケト⁽⁶⁷⁾。
ええ 今も あるかもしれないけれども。

Y アッコデー オメエ⁽⁶⁸⁾ (^K ココワ ニナ) マンジュヤナンカ ニナ ツム
 あそいで あなた (ニニは 皆) 饅頭や何か 皆 積む
 ニエー。 (^K アーア) (笑) ホンデ⁽⁶⁹⁾ エア ウソデ⁽⁷⁰⁾ ネンニヤ
 んです。 (^K アーア) (笑) ホンデ⁽⁶⁹⁾ エア ウソデ⁽⁷⁰⁾ ネンニヤ
 ろ。 ホイテ ナーニヤ ホノ アソコデ⁽⁷¹⁾ ウマソニ ヨブモン
 ろう。 そして 何です その あそいで⁽⁷¹⁾ うまそうに 呼ぶ者の
 ノ ニナ ゴツツォ モー ツムニエノ。 マー ホンナトキニ
 皆 ごちそうを もう 積むんですよ。 まあ そんな時には
 ヤー マー ジョーサン コータッテ ヤスイコッチャワイノ。
 まあ たくさん 買ったって 安いんですよ。
⁽⁷²⁾ カー コリヤ モ サカヤカラ ⁽⁷³⁾ モロテキタノ ナンシタコッチャ
 ああ これは もう 酒屋から もらって来たのは 何したのかわか
 ワカラシ。 コリヤ ニナ ジェン イッテマウンカシラン。 ソ
 らない。 これは 皆 お金 なくなってしまうのかもしれない。
 ー オモタシ⁽⁷⁵⁾ノ。 ナンジャシラン ヨソカ ゴキテナラン⁽⁷⁶⁾ ゴ
 そう 思ったしねえ。 何か知らないか よそが 出来ない ゴ
 ツツォ シンニヤッ⁽⁷⁷⁾ チュサケ ホレ ニナモ ナニヤー ゴツツォ
 ちそうを するのだと言うから それ そんなもの 何故 ごちそうを
 シエナ ナンジュッ⁽⁷⁸⁾テ。 イヤ ソーユワケニ イカンノヤ モ
 しなれば(いけないだ) なんだって。 いや そういう訳には いかないんだ もう
 アルテード ゴツツォ シエナ アカンノヤ。 タノムワ トニカワ
 ある程度 ごちそうをしなれば(いけないだ)。 頼むよ とにかく
 ニナ ツンデ カイルンニヤケ。 ホー……。 モー シカタネー
 皆 積んで 帰るのだから。 ほう……。 もう 仕方ない
 オメエ⁽⁷⁹⁾ サカヤカラ カインノ マタ コンダ シャツ イチマイ
 あなた 酒屋から 帰るのに また 今度は シャツ 一枚に

ン ナッテ ⁽⁸⁰⁾ コンナ イーミチデナシノー アノ キューナ サカ
なつて こんな いい道ではないしねえ あの 急な 坂を

オ アッコオ ガラガラ ガラガラト カナグ⁽⁸¹⁾ルマデ アカッテキ
あそこを ガラガラ ガラガラと 金車で 上つて来た

タンヤツノ マタ アノ キューナトコ。 イマコソ アンネ ミ
のですよ また あの 急な所。 今こそ あんな 道

チャ アルケド ウララ ヨメモロタ⁽⁸²⁾マデ ナーモ ミチャー
が あるけれども 私が 嫁をもらったけれど 何も 道は

ナカッタンヤデノ。マンブ デタトコノ アノ キューナトコ オリテキタンヤデノ。
なかったのですからねえ。トンネルを 出た所の あの 急な所を 下りてきたんだからね

K ウン シタノホーガ アッタ ^{アソコ} アソコ-----。
ええ 下の方(の道)が あった あそこ……。

Y オー キュードーノ アレ。
旧道の あれ。

K アッコ ⁽⁸³⁾ ナカイサケエー。
あそこ 近いから。

Y アノ キュードー アカッテキタンヤ ⁽⁸⁴⁾ ミナ。 (^K ウーン) ソ
あの 旧道 上つて来たのです みんな。

⁽⁸⁵⁾
レカラ アトエ アノ イーミチャ デキタンヤデノ。
それから あとへ あの いい道が 出来たのですからねえ。

K ホヤ ホヤ。
そう そう。

Y アノー ⁽⁸⁶⁾ コザエーモン ヒトガ ソンチョー シテタンデ ⁽⁸⁷⁾ ホイデ
あの 小左衛門の 人が 村長を していたので それで

アノ ヒトガ カネ トッテキテ ホイテ マンブカラ アッチエ
あの 人が 金を もらってきて そして トンネルから あちらへ

ミチツケナシタン。 アンデー-----。

道をつけられた。 あれで.....。

K アレカラ アトヤッタンカノ。 ホヤケド (Y モー ゴジュー
あれから 後だったのですかねえ。 けれども もう 50年....。

(89) ネン-----) ワタシラ ホノトキニワ ホンナ モー イナ
私など その時には そんな もう いら

ハランゴノ コザエーモンノ アノー イマノ オアンサンノ オ
っしやらないですよ 小左衛門の 今の 旦那さんの お

トッ ツァンワ イナハラン。

父さんは いらっしやらない。

Y イヤー ソノヒトガ⁽⁹³⁾ モロテキテ ミチオ ツケナシタノ。 カネ
いや その人が もらってきて 道を つけられたのですよ。 金を

オノ。イナハランケド。 ホヤズド⁽⁹⁴⁾ ソノ⁽⁹⁵⁾ トキラ⁽⁹⁶⁾ニ ウララ
ね。 いらっしやないけれども。 けれども その時などに 私達は

マー アンナ シタミチ オリタケド ホンナケナ モー ソー
まあ あんな 下道 下りたけれども そうでなければ もう そう

⁽⁹⁸⁾ フワッタッテ オリラレル ミチデ ナカッタニエ。
くぐったって 下りられる 道で 下ったのですよ。

K ホリヤ ホーヤノ。⁽⁹⁹⁾
それは そうですね。

Y カッコーダケ デキタダケデ。 ホレカラ ズーット アト ナオ⁽¹⁰⁰⁾
形だけ 出来ただけで。 それから ずっと あとに 直し

イタデ イケルヨンナッタン。 (K アーア) ホリヤ オゾカッ
たから 行けるようになった。 それは ひどかった

タンヤデノ。 ソ ソレモマタ ニーツンダッテ カナアルマニ イ
んですからね。 それもまた 荷を 積んでも 金車に

ケー バイオ ソエテ フジデ ヨッテ キッキリコー キッキリ
大きい 棒を そえて 藤で 纏って ききりニー ききりニー
ユーッテ⁽¹⁰¹⁾ ナラカイト アノ キューナ マワリオ オッテキタン
と言って 鳴らして あの 急な まわり(道)を 下りて来たの
やデノ。 ウン グリグリ マワッタンヤ……。 マ ムカシア
ですからね。 ぐるぐる まわったんです……。 まあ 昔は
マダ⁽¹⁰²⁾ タイ⁽¹⁰³⁾ ゲン ヤヤコシトコオ アルイテイツタンニヤワノ。
まだ 大概 めんどうな所を 歩いて 行ったのですよねえ。

ホイテ マ ゴツツオ ソンデ カイツタワインニヤケド。 ホイタラ
そして どちらかを 積んで 帰ったはいんだけれども したら
ナント ミンナ ジョーサン キテルジャロイノ。⁽¹⁰⁴⁾ ドーモ アン
何と みんな たくさん 来てるでしょう。 どうも 兄ちゃ

チャン カイツテキトフレタンカッテ。 ウーン カイツテコイッ
ん 帰ってきて下さったのかと言って。 うーん 帰って来いと言う

チュサケ カイツテコナ ドーシンニヤッテ ユーテャ カラコー
から 帰ってこなければ どうするんだって 言っては からからて

テイタンニヤケド。⁽¹⁰⁵⁾ ホレカラ ソノ ママデ アンデ ミョート
いたんだけれど。 それから その ままで あれで 夫婦 盃

サカズキシテー ホレカラ モー コンナトコニ イタッテ オモ
して それから もう こんな所に いたって 面白

ッショネー ドツカイツラ アソンデ⁽¹⁰⁶⁾ コーオモテ。(笑) ミョ
くない どこか 行って 遊んで しようと思つて。 夫婦

ートサカズキシテカラモ トード アスビニイッテモテ モ ワカ
盃してから とうとう 遊びに行つてしまつて もう 若い

イシュントコエ イッテモテ アスビニイッテ カイツテコンノ ヤ
衆の所へ 行つてしまつて 遊びに行つて 帰って来ないんですもの。

モ。 ホイテ フタバノホド カイツテコナンダヤロ。 ホイタラ
そして ニ晩 ほど 帰って二なかつたでしやう。 したら

一 アンデ ミッカメワ ムラシユーギ スンデ アクルヒカ -----
あれで 三日目は 村祝儀が すんで 明る日か

チクオンキ ナライテ ウチノ オジボワ⁽¹⁰⁷⁾ リキンデ オジボワ (
蓄音機 鳴らして 私の 弟は 頑張つて 弟は

笑) シェンソーイッテ シンダ オジボワ イッショケンメー
戦争に行つて 死んだ 弟は 一所懸命

チクオンキ コンナ イッケー ラッパツイタネー。 ムカシノ
蓄音機 こんな 大きい ラッパのついたねえ。 昔の

チクオンキヤデ マー フルクシェーコトワ フルクシェーノ。
蓄音機だから まあ 古くさいことは 古くさいね。

⁽¹⁰⁸⁾
ソレオ チクオンキ ナライテ コー オジボワ イッショケンメ
それを 蓄音機を 鳴らして こう 弟は 一所懸命

ヤッテルトコエ⁽¹⁰⁹⁾ ヘー ヨメサン ソレ シラント ミッカメヤ
やっている所へ 嫁さん それ 知らないで 三日目だ

サケ ソレ デテミタンヤデ。⁽¹¹⁰⁾ ホイテ サンゾ⁽¹¹¹⁾ ムコサンカト
から それ 出て見たんだって。 そして 三蔵が 婿さんかとは

バツカ オモタンヤデノ。 (⁽¹¹²⁾ アーア (笑)) ウラノ オトト⁽¹¹³⁾
かり 思つたんだってね。 私の 弟が

ガイノ。⁽¹¹⁴⁾ ソイデ チョード アウシノ。 ウラト ムッツ チー
ねえ。 それで 丁度 (井か) あうしねえ。 私と 6つ 小さ

シェンニヤケ⁽¹¹⁵⁾ ホイデ⁽¹¹⁶⁾ ヨメマ ホンデ ウラト ココノツ チカ
いんだから それで 嫁は それで 私と 9つ 違う

ウンニヤケノ。 ヨメマ ソンデ⁽¹¹⁷⁾ ヨーニアウト オモトニヤロイ⁽¹¹⁸⁾
んだからね。 嫁は それで よく似合うと 思つたんでしやう

ノ。(笑) ホイテ ウラー (笑) ヒョコント カイツテキタモ
よ。 として 私が ひょっこりと 帰って来たもの

ンジャケ-----。 ホイタラ ナカド(119) アノヒトア アンタノ ト
だから……。 したら 仲人は あの人は あなたの 父

ーチャンヤジニノー ムコサンヤッテ ユータンッテ。 ホイ
ちゃんですよ 婿さんだって。 言ったんだって。 して

テ マー ヘータイカラ カイツタシ ゲンキャイーシ(120)。 オー
て まあ (私は) 兵隊から 帰、たし 元気はいいしねえ。 おお

カオワ コロ(121)ット チカウサケ ホー アノヒトガ トーチャンケ
顔は まるきり ちかうから ほう あの人が 父ちゃんですか

ノッテ。 ソヤッテ アノヒトガ ソヤッテ ユータンニヤッテノ。
って。 そうだて あの人が そうだて 言ったんだってね。

ホイテ マー アイテ ナットワシタラシンニヤ。 モー タッタ
それで まあ あれで 納得したらしいんです。 もう てきり

モンニ(122) ソノ(123) オトトオ(124) ソノ(125) ヨメサンニ ムコサンカト バッカ
その 弟を その 嫁さんでは 婿さんかとばかり

オモタラシンニヤ。 ウケノ ヨメデァ-----。 ウラ ソー オモ
思ったらしいんです。 私の 嫁では……。 私は そうは 思わ

ワンシノ。 カタッボワ リキンデ チフオンキ ナラシテ キカ
がいしね。 片一方は 頑張って 蓄音機 鳴らして 聞か

ショトオモテ イッショケンメ ヤッテンニヤツツンジャサケ。
せよと思って 一所懸命 やってるんだって言うんだから。

ウラ。 オメ アスビニイッテモテ マ-----。 アホラシ テレフシ
私は あなたの 遊びに行ってしまうて まあ……。 あほらしいし 照れくさ

エーシ(126) ムカシノモンワ イケ(127)アッタシノ カタカ
いし 昔の者は ~~一概あったしね~~ 固かった

注記

- (1) [haitee¹] (2) [kitee¹] (3) 「シルンヤケド」 とも。
 (4) 父親の意ではなく、嫁に対する「夫」の意。 (5) 嫁の(顔を)。
 (6) 司会者加藤の「だんなさん (=夫) は祝儀に出ないんですか」の
 問いに答えて。 (7) 特に意味はない。 (8) 村祝儀の説明をし
 ようとしてやめる。 (9) 嫁が来たその当日。 (10) 遠くから来
 た人達のためにやる初日の祝儀。 (11) 二日目は村内の人に来て
 もらったの祝儀。 (12) [si:ri^ure:niwa] (13) 嫁の(顔を)
 (14) 「ホヤケド」と同様、断定の助動詞「ダ」の部分が「ヤ」から
 「ジャ」に転じている。ここでは語頭の「ホ」は聞こえず。
 (15) 「ラ」は「等」の意で複数を表わすのではなく、「～などは」
 という意で謙そんした気持ちを示す。 (16) 「ウブダッタンニヤ
 モノ」の混乱か。 (17) [kedo¹] (18) 「お姑さん」。 (19)
 [dade¹]。 (20) 「特にどうということはないですよね」ぐ
 らいの意か。 (21) [itsukameni¹]。独特のイントネーション。
 (22) [masun] (23) 「10ケ日」は「5ケ日」で初めて里帰りした嫁
 が、実家で5日休んで、結婚式から10日目に嫁ぎ先に帰ることを
 言う。 (24) [imato^o] (25) 人間が硬い。 (26) 当時の兵役後の
 男子の性格を言っている。 (27) 特に意味のない不定代名詞。
 (28) 山本氏の両親のこと。 (29) 「ニヤ」が弱く聞こえる。 (30) 杜
 氏で酒屋へ行っていた。 (31) 新酒の酒出し。 (32) 酒出しの1
 つ前の行程。 (33) 「タンネ」は肯定的にも否定的にも用いられ
 る。ここでは肯定。 (34) 結婚式が出来なくなること。 (35) 語
 形は肯定だが、意味は疑問形。言い誤りか。 (36) 覚悟というの
 は少し大げさ。「つもり」ぐらいの意であろう。 (37) 漢文調の
 言い方。 (38) [gisi]。 [gesi] とも聞こえる。 (39) 「欠か
 されんのや」の「欠く」は用を、つまり結婚式を止めることを言
 うのだろう。 (40) 酒屋から「帰る」ことを「行く」と言うか。
 (41) 家号。 (42) 普通は義称であるが ここでは単なる親しみをこ

- めた意ととっていいだろう。(43) 実際に呼ぶ時の言い方。
- (44) 少しあきれたという口調。(45) 誰の嫁さんだいの意。(46)
- 「ユウ」の命令形に助詞のついた形。(47) 「カラカウ」は一般に悪い意味で使われるが、ここの意味にはそれはない。(48) [ho jãino]. 「だってそうでしょう」の意。(49) 「ホーイ」は返事そのもの。(50) 「妙な」の意。[ketʃunã:] (51) はっきりしないがこう聞こえる。(52) [neɾiːwai]. (53) [aɾiːa]. 独特のイントネーション。(54) こう聞こえる。「ヨサリ」は「夕方」の意。(55) 「帰ってこなければ」という内容だろう。(56) [ɲna:]. (57) 「そう言われれば、そういうこともあったかもしれないが」の意。(58) 地名。南条郡河野村具谷。(59) 「エー」は関西的。(60) 「親が勝手に決めても駄目だ」の意。(61) 特に意味はない。(62) 「武生に、私の所へ嫁に来る者があたら」の意。(63) [dɔːdemo]. (64) 武生市内にある魚屋の名。(65) 上昇調のイントネーション。(66) 饅頭屋の店名。(67) [ʃirankedoro]. (68) 「この村では、皆饅頭はあそこで買いました」と言いかけた。(69) [hondeɔ]. (70) 「ウマソナ」の言い誤りか。(71) 「お客さん」の意。(72) 「これは困った」という感じの声。(73) 「給料」のこと。(74) 「結婚式の金として、どこかへ行ってしまってもいけない」の意。(75) [omotaʃin'oɾi]. (76) あいまいではっきりしない。(77) [napaɾi]. (78) [nangetʔte]. 前の「ゴツツォシエナ」も「ナンジェツテ」も言いかけで、意味がはっきりつかめない。(79) 特に「あなた」と言うのではなく、相手に対しての呼びかけの意をもつ。(80) 急に話しが転換する。(81) 車輪が金属で出来た大八車か。(82) [morotakeˈdo] (83) [sakeɾiː]. 独特のイントネーション。(84) 「ン」と「ミ」の中間。(85) [atɕ]. (86) [kozaɾiːmon]. 家号。(87) 「ホ」が短かく入る。(88) 「ノ」は弱い。(89) 「50年も前のことだ」とでも言おうとしたか。(90) [anoˈo]. (91) [imanoˈo] (92) 旧家の主人などを呼ぶ言い方。(93) [ʃitogaɾiː]. (94) 「道をつけにその人」は

いないけれども。(95)「ケド」ははっきりせず。あいまい。
 (96)「ソノトキ」とは「道路のつく前」のことか。(97)「新しい
 道が出来なかったら」の意。(98)「体を曲けても」の意で道の
 ひとさを表現する。(99) [ho:ja'nŋo]。(100)「道の」形。
 (101)擬声語。(102)「ケノ」とも聞こえる。(103)「複雑な」から
 「めんどうな」の意に派生。(104)「結婚式」に。(105)一般に
 言う「からかう」のニュアンスはない。(106) [k'ojo:] (107)
 「オジボ」は弟のこと。(108)蓄音機をさす。(109)ため息を
 つくように。(110)どこから出て来たのか。どこか同じ家の中で
 じっとしていたのだろう。(111)山本氏の弟の名。(112) [a':ʔa]
 (113)「弟」を「オジボ」から「オトト」に言いかえる。(114) [so
 'ide]。(115)「ホ」短かい。(116) [jome]。(117)「似合いの夫
 婦」の「似合い」の意。(118)「オモテタンニャロイ」または「
 オモテタンヤロイ」とも。(119) [nakəðə] (120) [i:ʔsinŋo]。
 (121)「コロリト」の転か。(122)「てっきり」の意か。(123)
 連体詞「ソノ」。(124)単なるつながりことば。(125)「エ」と
 も。(126) [kwse:ʔji]。(127)「度量」あるいは「器量」の意
 か。(128)「そんなものでは」の意か。(129) [datʃɛ] (130)こ
 う聞こえるか、意味はわからず。[haremo]。

5. 祝儀の話(2)

話し手

(田舎号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y ホイテ ウチラノ ヨメ⁽¹⁾ ヨリモ ゴリモ アルトカ⁽²⁾ フルンニ
そして 私の 嫁は 四里も 五里も ある所から 来るんだ
ヤケ トーイワイノ。
から 遠いですよ。

K ヨワッテマウワノ⁽³⁾。
疲れてしまうよね。

Y モー ココマデ フンノニ ヘトヘトンナッテマウ。 (K ホーヤ
もう ニニまで 来るのに ヘトヘトになってしまう。 そうです
) ホンデ フラジデモ ハイテコナ コラレン。 *⁽⁴⁾ ウン ウン
それで 草鞋でも はいて二なければ 来れない。
ンナモ アッコカラ ホコヤ。⁽⁵⁾ (笑) アソコニヤ⁽⁶⁾ ソンナ モー
そんなもの あそこから そこだ。 あそこへは そんな もう
ジュッポンホド アルキャー イッテマウサケ。
十分ほど 歩けば 行ってしまうから。

K ホイテ⁽⁷⁾ ユキナカヤッタサケニ⁽⁸⁾ ユキナカヤッタサケニ。 サンガ
それでも 雪中だったから 雪中だったからね。 三月
ツノ アレ ジュー フンチヤッタケド ヨーケ アノトシモ ユキ
の あれば 十九日 だったけれども たくさん あの年も 雪が

ヤ フリマシタンニャワネ。 ウーン。 アッデー ~~ゴタイ~~ ゴタ
降りましたのですよ。 あれで

イソーノトシヤッタニャノー。⁽⁹⁾
御大葬の年だったんですねえ。

Y タイショー -----。
大正……。

K ゴタイソーノ⁽¹⁰⁾ アノー -----。
御大葬の あの……。

Y ~~シヨウワノ~~ ショーワノ。
昭和の。

K ウン タイショーテンノーガ⁽¹¹⁾ シニナシタトキノジャッタンニャロ
ええ 大正天皇が お七くなりになった時だったんだらう
ト オマウガネ。 *⁽¹²⁾ ハーン ソノトキ オーユキヤッタ
と と思いますがねえ。 ええ その時 大雪だった

ンデスネ。 タケフネ イマシテ タケフネモ アノ マドカラ
んですね。 武生に いまして 武生でも 窓から

デハイリシマシタンデス。 アー⁽¹³⁾ (Y アー ホーカ) アノ ト
出入りしましたのです。 ああ (ああ そうか) あの

シモ オーユキヤッタンニャワネ。 ヒドカッタンニャワネ。 ン
年も 大雪だったんですねえ。 ひどかったんですよ。

デ マー ムカシノコッチャデネー。⁽¹⁴⁾ アノ ホンナジブンワ マ
それで まあ 昔のことだからねえ。 あの そんな時分は まあ

ー ゴチソーケュマシタカッタ ニシンヤトネ⁽¹⁵⁾ ダイコント タイ
ごちそうと 言いまして も にしんとね 大根と 里

モオネ ニタ オカズト⁽¹⁶⁾ ホシテ カズノコッチュノワ ホンナジ
芋をね 煮た おかずと として 数の子と言うのは そんな時

ブン ヤスゴザンシタデネー (17) ナンカシラン (18) ウチノ シ フタシ
分には 安うございましたからねえ 何かしらん うちの 私が

か ヨシテモロタトキワ カズノコカ ヨケ アツタンデ (笑)
(嫁に) 寄せてもらった時は 数の子が たくさん あったので

ミンナカ (19) カズノコ タベテモロタンジャッテ イーマスカー。 (20)
みんなに 数の子を 食べてもらったんだって 言いますがね。

ウーシ シント (21) ボータラノニツケトネ ホンナ ゴッツオデシタ
それと 棒 鱈の 煮付けとね そんな ごちそうでしたの

ンニヤフネ。 ウーシ ホンター マー リョーリヤナンカラ ト
です。 それで まあ 料理屋などから (料理と)

ルナンテ ホンナコトワ シマシエンサケネー。 (22) ウン ナニシエ
とるなんて そんなことは しませんからねえ。 何しろ

カズノコト ボータラト ニシントノ ゴッツオヤッタニヤノ。 (23)
数の子と 棒 鱈と にしんとのごちそうだったんですね。

Y ホイテ マチカラキタ オカシグレーダケ。
そして 町から来た お菓子くらいだけです。

K ホヤ オカシワ ヤッパ マンジューワ (Y ウン) カザッタン
そう お菓子は やはり 饅頭は (ええ) 飾ったん

ヤネ。 マンジューワ。
ですね。 饅頭は。

Y マチカラ キタデネ。 (24) オカシルイワ ミンナ アツタスケドー。 (25)
町から 来たからね。 お菓子類は みんな あったけれども。

モー ツクリヤッテ (26) ンナ リョーリヤッテ ネーシネー。 ホイ
もう 刺身 だって そんな 料理屋というのは ないしねえ。 もし

デ モー ウチラノ ウチャー コノ サカナヤ マー ナンシタ
て もう 私の 家は この 魚屋は まあ 何した

(27) カシランゲド ウチノ オツツァー ハデモンヤッテ サカナリョ
か知れないけれど 私の 親父は はで着でして 魚料理

ーリ ツクンナツタサケ カブラケ イッテ サカナオ コーテキ
を 作られたから 甲斐城へ 行って 魚を 買って

タワイノ。 ジョーサン。 (^K ヤッパ サカナワ……) ホイデ
来たよね。 たくさん。 やはり 魚は

⁽²⁹⁾
ホ ホイデ ツフリワ ダイケ リョーリシテ シテ…… (^K キ
そして 刺身は まず 料理して… き

レーノ リョーリノシル ジョースナヒト タノンデ ホイデ シ
れいに 料理をする 上手な人を 頼んで して

テモロタンデスワネー。 ⁽³⁰⁾ ウーン。) シテ クワシタゲド。 ⁽³¹⁾ ホ
してもらったのですねえ。 して 食べさせたけれども。

⁽³²⁾
ンデ ゴツツオワ ンナ ウチマカシエヤネ。 ホンネ ソンネ
それで ごちそうは みんな 内まかせですね。 それで そんなに

ワリー カネカカラナンダンデスワネ。 イマ ミナサイノ ホン
割に 金が かからなからたんですよ。 今 ごらんさいよ そんな

⁽³³⁾
ナモン チョーットシタツテ モー ツフリヒトサラ モロタツテ
なもの 少ししても もう 刺身 一皿 もらっても

⁽³⁴⁾
ナンジェンエンテ カカッタマウン ニヤロイノ。 ンナモン ンナ
何千円と かかってしまうんでしょう。 そんなもの みんな

⁽³⁵⁾ カスナ ⁽³⁶⁾ ハナシンナツテモタンジャカイヤ モー。 マエワ オメ
たいへんな 話になってしまったのですね もう。 前は あなた

⁽³⁷⁾
シェンエンモ ニシェンエンモ ジェン モッテナ カスナ ダン
千円も 二千円も 金を 持っていたら たいへんな 金

⁽³⁸⁾
ナンショヤツテ ユタンニエ。
持ちだって 言ったんだ。

K ホリャ ホーヤノー。
そりゃ そうだねえ。

Y イマ ミナシエーノ イッシエンヤ⁽³⁹⁾ ニシエン⁽⁴⁰⁾ モッテルモンナン⁽⁴¹⁾
今は ごらんねさいね 千円や 二千円 持っている者は

マー ダンナンショヤッテ ユワン……。
まあ 金持ちだっては 言わない……。

注記

- (1) [jome] (2)「アルトコロカラ」の省略形。 (3) [mauwan^o] (4)司会者加藤の「おばちゃん(加藤ス子氏)ときは、どうや、たの問いに答えて。 (5)加藤氏の生家が嫁入り先のすぐ近くであることを言う。 (6)加藤氏の嫁入り先を言う。 (7)「ソイデモ」>「ホイデモ」の「モ」が消えた。 (8) [jattasake^ɾ]。独特のイントネーション。 (9) [jattanjan^o]。 (10) [gotaiso^ɾn^o]。独特のイントネーション。 (11) [sininaʃi2ta]。 (12)研究担当者佐藤の声が入る。 (13)自己のうなずき。 (14)「昔のことで大変だった」の意のことを言いかけている。その後自分の祝儀に話しをもどす。 (15)「ニシンヤ ～ヤ」と言いかけて「ニシントネ」と言い直す。それの続いた形。 (16)副食の意。 (17)このあたり、ことばが少し丁寧になっている。佐藤に話しかける口調。末尾上昇調のイントネーション。 (18)「うちの祝儀には」の意。 (19)「みんなが 数の子を食べる」と「みんなに 数の子を食べてもらう」の混乱で「か」になったのだろう。 (20) [i:masunga^ɾ] (21)こう聞こえる。 (22) [sakene^ɾ] (23) [gotto]。 (24) [okaʃi^lwa]。あとの「マンジューフ」も「ワ」が強い。 (25)「アッタテステドー」の省略形。 (26) [ne^ɾʃi ne^ɾ]。 (27)具体的に何をさすのか不明。 (28)「スタイリスト」の意ではなく、「田舎者らしくない、いろんなことをやっ人」というような意か。 (29)「ダイイチ」>「ダイチ」。「第一に」の意。 (30)上昇調のイントネーション。 (31)客に。 (32)自分の家の中だけで用意する。他人の世話にならぬ。 (33) [tʃoʃt to]。 (34)小さくて最後聞こえず。 (35)「かすな」は「ひどく」とか「大変な」の意で使われる。 (36)いかにも最近の物価高騰にあきれたという様子。 (37)「モッテナ」この様な「ナ」の使い方は珍しい。 (38)「旦那所」からか。金持ちや昔の地主などを言う。 (39)はっきりしないが、こう聞こえる。 (40)「エ

ン」が省略されたか。 (41)「モッテルモンワ」の變形か。或は
「モッテルモンナンゾワ」の意。

6. 精勤章（軍隊での）の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)
 Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ
 K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y ナン⁽¹⁾ マジメイッポーデ ショーネンハーシエーキンショー⁽²⁾ モ
 何の 真面目一方で 初年兵 精勤章を
 ロタンヤデ⁽³⁾ノ。 ココエ シエーキンシエ モー イッペン モロ
 もらったのですからね。 もう 一度 もら
 タンヤデ⁽⁴⁾ ショーネンハーノ ハナカツツイタチニ。 ⁽⁵⁾ホラ モー
 ったのだから 初年兵の 八月一日に。
 ハリヤモ⁽⁶⁾ マジメイッポーヤッタ⁽⁷⁾ンヤ。 ホンナモ チュータイ
 それけもう 真面目一方だったのです。 そんなもの 中隊で
 デ⁽⁸⁾ ヒトリシカ アタラナンダンヤデ。 ソレ モロタンヤデ シ
 ひとりしか もらえなかったのですから。 それを もらったのだから
 エーキンショー⁽⁹⁾。 ホイタ⁽¹⁰⁾ モー ニネンハーモ モー ナンニモ
 精勤章。 したら もう 二年兵も もう 何にも
 ユフナンダデ⁽¹¹⁾ノ モ ソレカラ。 ホラ ワタシダケ オコラナン
 言わなかったからね もう それから。 それは 私だけは おこらなか
 だ⁽¹²⁾ノ。 (^Kウー^Nン) ジェットタイ オコラナンダジャ。 ホンナ
 たね。 絶対に おこらなかつたんだ。 そんなも
 モン タタキモシエナ モー オコリモシエナンダ。 ホリヤ ア
 の たたきもしなければ もう おこりもしなかった。 それは あ

ノ シェーキンショーノ トクデ⁽¹³⁾ノ。 (^Kウー) シェーキンシ
の 精勤章の 得でね 精勤章を

ヨー モロテンモンワ ヤッパ シカ⁽¹⁴⁾フ ネーニヤデ⁽¹⁵⁾ノ。 (^K
もらってない者は やはり 資格が ないんですからね。)

ウー) ウー。 マ シェーキンショーチュノワ ヨカッタヤ。
まあ 精勤章 と言うのは よかったんです。

コライラ⁽¹⁶⁾ ホラ イッパン バツウケテモ ソノ シェーキンショ
それは 一度 罰を受けても その 精勤章が

ー アレバ バツ⁽¹⁷⁾ ノー ナッテマウンニヤデ⁽¹⁸⁾ノ。 (^Kアーア)
あれば 罰が なくなってしまうんだからねえ。

バツ バツソ⁽¹⁹⁾フ ノガレルンニヤデ。 ホイデ アレ シヨネン
罰則を 逃れるんだから。 そして あれ

ショネンハーノ アイデ ジューガツカ ジューイチガツノ ジュ
初年兵の あれで 十月か 十一月の 十九

ーウニチノ シアイニ デェテエ ユーショーシタヤン⁽²⁰⁾ノ。 (^K
日の 試合に 出て 優勝したでしょうね。)

アーア) アノ ヒトニ⁽²¹⁾ チカラ アッタサカエー ンナモ ドン
あの ----- 力が あったから そんなもの どん

ナモン ミムナ カチオッテモタンヤサケ。⁽²²⁾ ジューニン マカサナ
なものも 皆 折ってしまったのだから。 十人 負かさ

アカンノヤケ⁽²³⁾ノ。 (^Kアー) ホンナモン エラカッタ⁽²⁴⁾ンジャ。
なければいけないんですよ。 そんなもん 大変だったんです。

ホンナ ホンナモン デナカッタ⁽²⁵⁾ンジャ。 (^Kウー) イチバンアトニ
そんなものではなかったですよ。 一番あとには

ワ トクサンガ デンニヤ トクムソーチョーチュノ。 ハータイ
特さんが 出るんです 特務曹長 と言うの。 兵隊

えん イケバン エレー⁽²⁵⁾ トクサンヤデノ。 (^K アー) ソレカ
達の 一番 偉い 特さんだからねえ。 () それから

ラ マー ショーイン ナルンニヤケド ソノ トクサンオ マカ
まあ 少尉に なるのだからと その 特さんを 負か

サナ アカンノヤケナ。 アンナ オメエー イッペーソツカラ
さなければいけないんだからねえ。 あんな あなた 一矢報から

アガッテ トクサンオ マカサナ アカンノヤケ (^K アーア)
上って来た 特さんを 負かさなくては いけないんだから。 ()

モー カエスツキューマデ⁽²⁶⁾ ムコー ウツテマワナ アカンノヤケ
もう 返すと言うまでに むこうを 打ってしまわなければいけないんだから

ホンナモ カエスツキューマデ⁽²⁷⁾ モー バースト モー ムコーノ
そんなもの 返すと言うまでに もう ばーんと もう むこうの

モクジュ⁽²⁸⁾ カチオッテ⁽²⁹⁾ ウラ オツテモタン。 (^K アーア)
もくじゅを 折って 私 折ってしまった。

) えんタラ ヨッシャーチュテ⁽³⁰⁾ テー アゲンニヤ。⁽³¹⁾ オメエラ
それなら よしっ と言って 手を 上げるんだ。 お前ら

アカン コノ ヘータイニヤ イクラ カッテモ カタレンノヤッ
駄目だ この 矢隊には いくら 打っても 勝てないんだと

テ ヨッシャー。⁽³²⁾ イヤ ソノトキノ⁽³³⁾ ウレシカッタノー。 ホヤ
言って よしっ。 いや その時には 嬉しかったねえ。 けれ

ケド ジュッポン ヨー マカイタト オモウワノ。 (^K ホー ジ
ども 十本 よく 負かしたと 思うね。 () そうで

ヤノー) コンナ メタル アルンデスワ (^K ウー ン) サンロ
すねえ こんな メダルが あるんですよ 三六

ワッテ⁽³⁴⁾ カイタネ メダル。 (^K ウー ン) えん イマ⁽³⁵⁾ ワタシ
と 書いたね メダル。 () それは 今も 私の

／ キネンニ ダイジニ トッタルシデ、ショネンヘーノネ。⁽³⁶⁾
記念に 大事に 残してあるんです 初年兵のねえ。

⁽³⁷⁾ ツエ ソラ アタランノヤ。⁽³⁸⁾ ヒトリシカ アタランノヤ。⁽³⁹⁾
だって それは もらえないんだ。 ひとりしか もらえないんだ。

ア－ア) ホンナモン チカラマカシエヤモ モ ホンナモン ダ
そんなもの カまかせだもの もう そんなもの 誰

⁽⁴⁰⁾ レモ ヨーシャシェンノヤモ。 ンナ ネレエーモンヤトオモテ
にも 容赦しないんだもの。 そんな 偉い人だ"と思って

ヨーシャシテタラ コツチャ マケンニヤデ"。 カマエツツテ ユ
容赦していたら こちらが 負けるんだから。 構えつ、と

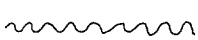
ーマデニ パーント ムコーノ モクジュ ケシオツテモタンヤデ。
言うまでに ぽーんと むこうの もくじゅを へし折ってしまったんですから。⁽⁴²⁾

(⁽⁴³⁾ ^Kウーニ) チカラマカシエヤツテ ンナモ モー カマワンノ
カまかせだって そんなもの もう かまわなはん

ヤデ"。 カマエツツテ ユーマデニ ムコーノ モクジュ ポーニ
だから。 構えつ、と 言うまでに むこうの もくじゅ ぽーん

ト オツテモタンエ。⁽⁴⁴⁾ (^Kウニ) ヨッシャー。 ソーシェナ
と 折ってしまったんだ。 よし、。 そうしなければ

カテンノヤモ。 モ マトモニ ムコータラ ムコーガ ハエーン
勝てないんだもの。 もう まともに 向かったら むこうが 早いんだ

ニヤケ  ナンジューネンテ フローシテルンニヤ。⁽⁴⁶⁾
から 何十年で 苦労しているんです。

ホンナモンニ カトーツタラ マケヤデ コーリヤ コレ ヨシ
そんな着に 勝とうと言ったら 負けだから これは これ よし

マデ アンナモンワ モー ケシオツテヤラナ アカンノヤ。 モ
侍て あんなものは もう へし折ってやらなくては いけないんだから。

ー オラレタラ ツイテコラレンノヤサケ ⁽⁴⁸⁾ カマエツツチュマデニ
もう 折られたら 突いてこられないんだから 構えつ。 と言うまでに
バート ⁽⁴⁹⁾ キシエオ ⁽⁵⁰⁾ オッテモタン。 ハタシテ チカラワア
はーんと ヘし折ってしまった。 なるほど 力のある

ル オトコヤッテ ユータモンデ ホリヤ チカラ アッタンヤデ
男だって 言ったくらいで それは カガ あったんだから

ホンナモン ニジュッカンノ イシナ ポイト ウケタンヤサケ
そんなもの 二十貫の 石を ほしいと 受けたんだから

デニヤ チカラ アッタンヤケ。 ⁽⁵¹⁾
手には カガ あったんだから。

K コメ ニヒョーモ オイナシタツチュンニヤデー ⁽⁵²⁾ チカラ アンナ
米を ニ俵も 背負われたというのですから カガ お有り
シタンニヤノー。 ⁽⁵³⁾ ⁽⁵⁴⁾ ウン。
になつたんですねえ。

Y チカラ ダケワ ⁽⁵⁵⁾ デタンニヤノー ドダイガ。 ⁽⁵⁶⁾ シナモン ホンナケ
力だけには 出たんだねえ そもそもが。 そんなもの そうでな

ナ ヤッパ ⁽⁵⁷⁾ メタル トレナンダノ。 (^K ホーヤ) ホイテ ソ
ければやはり メタル 取れなかつたからねえ。 ⁽⁵⁸⁾ ⁽⁵⁹⁾ ⁽⁶⁰⁾ ⁽⁶¹⁾ ⁽⁶²⁾ ⁽⁶³⁾ ⁽⁶⁴⁾ ⁽⁶⁵⁾ ⁽⁶⁶⁾ ⁽⁶⁷⁾ ⁽⁶⁸⁾ ⁽⁶⁹⁾ ⁽⁷⁰⁾ ⁽⁷¹⁾ ⁽⁷²⁾ ⁽⁷³⁾ ⁽⁷⁴⁾ ⁽⁷⁵⁾ ⁽⁷⁶⁾ ⁽⁷⁷⁾ ⁽⁷⁸⁾ ⁽⁷⁹⁾ ⁽⁸⁰⁾ ⁽⁸¹⁾ ⁽⁸²⁾ ⁽⁸³⁾ ⁽⁸⁴⁾ ⁽⁸⁵⁾ ⁽⁸⁶⁾ ⁽⁸⁷⁾ ⁽⁸⁸⁾ ⁽⁸⁹⁾ ⁽⁹⁰⁾ ⁽⁹¹⁾ ⁽⁹²⁾ ⁽⁹³⁾ ⁽⁹⁴⁾ ⁽⁹⁵⁾ ⁽⁹⁶⁾ ⁽⁹⁷⁾ ⁽⁹⁸⁾ ⁽⁹⁹⁾ ⁽¹⁰⁰⁾ ⁽¹⁰¹⁾ ⁽¹⁰²⁾ ⁽¹⁰³⁾ ⁽¹⁰⁴⁾ ⁽¹⁰⁵⁾ ⁽¹⁰⁶⁾ ⁽¹⁰⁷⁾ ⁽¹⁰⁸⁾ ⁽¹⁰⁹⁾ ⁽¹¹⁰⁾ ⁽¹¹¹⁾ ⁽¹¹²⁾ ⁽¹¹³⁾ ⁽¹¹⁴⁾ ⁽¹¹⁵⁾ ⁽¹¹⁶⁾ ⁽¹¹⁷⁾ ⁽¹¹⁸⁾ ⁽¹¹⁹⁾ ⁽¹²⁰⁾ ⁽¹²¹⁾ ⁽¹²²⁾ ⁽¹²³⁾ ⁽¹²⁴⁾ ⁽¹²⁵⁾ ⁽¹²⁶⁾ ⁽¹²⁷⁾ ⁽¹²⁸⁾ ⁽¹²⁹⁾ ⁽¹³⁰⁾ ⁽¹³¹⁾ ⁽¹³²⁾ ⁽¹³³⁾ ⁽¹³⁴⁾ ⁽¹³⁵⁾ ⁽¹³⁶⁾ ⁽¹³⁷⁾ ⁽¹³⁸⁾ ⁽¹³⁹⁾ ⁽¹⁴⁰⁾ ⁽¹⁴¹⁾ ⁽¹⁴²⁾ ⁽¹⁴³⁾ ⁽¹⁴⁴⁾ ⁽¹⁴⁵⁾ ⁽¹⁴⁶⁾ ⁽¹⁴⁷⁾ ⁽¹⁴⁸⁾ ⁽¹⁴⁹⁾ ⁽¹⁵⁰⁾ ⁽¹⁵¹⁾ ⁽¹⁵²⁾ ⁽¹⁵³⁾ ⁽¹⁵⁴⁾ ⁽¹⁵⁵⁾ ⁽¹⁵⁶⁾ ⁽¹⁵⁷⁾ ⁽¹⁵⁸⁾ ⁽¹⁵⁹⁾ ⁽¹⁶⁰⁾ ⁽¹⁶¹⁾ ⁽¹⁶²⁾ ⁽¹⁶³⁾ ⁽¹⁶⁴⁾ ⁽¹⁶⁵⁾ ⁽¹⁶⁶⁾ ⁽¹⁶⁷⁾ ⁽¹⁶⁸⁾ ⁽¹⁶⁹⁾ ⁽¹⁷⁰⁾ ⁽¹⁷¹⁾ ⁽¹⁷²⁾ ⁽¹⁷³⁾ ⁽¹⁷⁴⁾ ⁽¹⁷⁵⁾ ⁽¹⁷⁶⁾ ⁽¹⁷⁷⁾ ⁽¹⁷⁸⁾ ⁽¹⁷⁹⁾ ⁽¹⁸⁰⁾ ⁽¹⁸¹⁾ ⁽¹⁸²⁾ ⁽¹⁸³⁾ ⁽¹⁸⁴⁾ ⁽¹⁸⁵⁾ ⁽¹⁸⁶⁾ ⁽¹⁸⁷⁾ ⁽¹⁸⁸⁾ ⁽¹⁸⁹⁾ ⁽¹⁹⁰⁾ ⁽¹⁹¹⁾ ⁽¹⁹²⁾ ⁽¹⁹³⁾ ⁽¹⁹⁴⁾ ⁽¹⁹⁵⁾ ⁽¹⁹⁶⁾ ⁽¹⁹⁷⁾ ⁽¹⁹⁸⁾ ⁽¹⁹⁹⁾ ⁽²⁰⁰⁾ ⁽²⁰¹⁾ ⁽²⁰²⁾ ⁽²⁰³⁾ ⁽²⁰⁴⁾ ⁽²⁰⁵⁾ ⁽²⁰⁶⁾ ⁽²⁰⁷⁾ ⁽²⁰⁸⁾ ⁽²⁰⁹⁾ ⁽²¹⁰⁾ ⁽²¹¹⁾ ⁽²¹²⁾ ⁽²¹³⁾ ⁽²¹⁴⁾ ⁽²¹⁵⁾ ⁽²¹⁶⁾ ⁽²¹⁷⁾ ⁽²¹⁸⁾ ⁽²¹⁹⁾ ⁽²²⁰⁾ ⁽²²¹⁾ ⁽²²²⁾ ⁽²²³⁾ ⁽²²⁴⁾ ⁽²²⁵⁾ ⁽²²⁶⁾ ⁽²²⁷⁾ ⁽²²⁸⁾ ⁽²²⁹⁾ ⁽²³⁰⁾ ⁽²³¹⁾ ⁽²³²⁾ ⁽²³³⁾ ⁽²³⁴⁾ ⁽²³⁵⁾ ⁽²³⁶⁾ ⁽²³⁷⁾ ⁽²³⁸⁾ ⁽²³⁹⁾ ⁽²⁴⁰⁾ ⁽²⁴¹⁾ ⁽²⁴²⁾ ⁽²⁴³⁾ ⁽²⁴⁴⁾ ⁽²⁴⁵⁾ ⁽²⁴⁶⁾ ⁽²⁴⁷⁾ ⁽²⁴⁸⁾ ⁽²⁴⁹⁾ ⁽²⁵⁰⁾ ⁽²⁵¹⁾ ⁽²⁵²⁾ ⁽²⁵³⁾ ⁽²⁵⁴⁾ ⁽²⁵⁵⁾ ⁽²⁵⁶⁾ ⁽²⁵⁷⁾ ⁽²⁵⁸⁾ ⁽²⁵⁹⁾ ⁽²⁶⁰⁾ ⁽²⁶¹⁾ ⁽²⁶²⁾ ⁽²⁶³⁾ ⁽²⁶⁴⁾ ⁽²⁶⁵⁾ ⁽²⁶⁶⁾ ⁽²⁶⁷⁾ ⁽²⁶⁸⁾ ⁽²⁶⁹⁾ ⁽²⁷⁰⁾ ⁽²⁷¹⁾ ⁽²⁷²⁾ ⁽²⁷³⁾ ⁽²⁷⁴⁾ ⁽²⁷⁵⁾ ⁽²⁷⁶⁾ ⁽²⁷⁷⁾ ⁽²⁷⁸⁾ ⁽²⁷⁹⁾ ⁽²⁸⁰⁾ ⁽²⁸¹⁾ ⁽²⁸²⁾ ⁽²⁸³⁾ ⁽²⁸⁴⁾ ⁽²⁸⁵⁾ ⁽²⁸⁶⁾ ⁽²⁸⁷⁾ ⁽²⁸⁸⁾ ⁽²⁸⁹⁾ ⁽²⁹⁰⁾ ⁽²⁹¹⁾ ⁽²⁹²⁾ ⁽²⁹³⁾ ⁽²⁹⁴⁾ ⁽²⁹⁵⁾ ⁽²⁹⁶⁾ ⁽²⁹⁷⁾ ⁽²⁹⁸⁾ ⁽²⁹⁹⁾ ⁽³⁰⁰⁾ ⁽³⁰¹⁾ ⁽³⁰²⁾ ⁽³⁰³⁾ ⁽³⁰⁴⁾ ⁽³⁰⁵⁾ ⁽³⁰⁶⁾ ⁽³⁰⁷⁾ ⁽³⁰⁸⁾ ⁽³⁰⁹⁾ ⁽³¹⁰⁾ ⁽³¹¹⁾ ⁽³¹²⁾ ⁽³¹³⁾ ⁽³¹⁴⁾ ⁽³¹⁵⁾ ⁽³¹⁶⁾ ⁽³¹⁷⁾ ⁽³¹⁸⁾ ⁽³¹⁹⁾ ⁽³²⁰⁾ ⁽³²¹⁾ ⁽³²²⁾ ⁽³²³⁾ ⁽³²⁴⁾ ⁽³²⁵⁾ ⁽³²⁶⁾ ⁽³²⁷⁾ ⁽³²⁸⁾ ⁽³²⁹⁾ ⁽³³⁰⁾ ⁽³³¹⁾ ⁽³³²⁾ ⁽³³³⁾ ⁽³³⁴⁾ ⁽³³⁵⁾ ⁽³³⁶⁾ ⁽³³⁷⁾ ⁽³³⁸⁾ ⁽³³⁹⁾ ⁽³⁴⁰⁾ ⁽³⁴¹⁾ ⁽³⁴²⁾ ⁽³⁴³⁾ ⁽³⁴⁴⁾ ⁽³⁴⁵⁾ ⁽³⁴⁶⁾ ⁽³⁴⁷⁾ ⁽³⁴⁸⁾ ⁽³⁴⁹⁾ ⁽³⁵⁰⁾ ⁽³⁵¹⁾ ⁽³⁵²⁾ ⁽³⁵³⁾ ⁽³⁵⁴⁾ ⁽³⁵⁵⁾ ⁽³⁵⁶⁾ ⁽³⁵⁷⁾ ⁽³⁵⁸⁾ ⁽³⁵⁹⁾ ⁽³⁶⁰⁾ ⁽³⁶¹⁾ ⁽³⁶²⁾ ⁽³⁶³⁾ ⁽³⁶⁴⁾ ⁽³⁶⁵⁾ ⁽³⁶⁶⁾ ⁽³⁶⁷⁾ ⁽³⁶⁸⁾ ⁽³⁶⁹⁾ ⁽³⁷⁰⁾ ⁽³⁷¹⁾ ⁽³⁷²⁾ ⁽³⁷³⁾ ⁽³⁷⁴⁾ ⁽³⁷⁵⁾ ⁽³⁷⁶⁾ ⁽³⁷⁷⁾ ⁽³⁷⁸⁾ ⁽³⁷⁹⁾ ⁽³⁸⁰⁾ ⁽³⁸¹⁾ ⁽³⁸²⁾ ⁽³⁸³⁾ ⁽³⁸⁴⁾ ⁽³⁸⁵⁾ ⁽³⁸⁶⁾ ⁽³⁸⁷⁾ ⁽³⁸⁸⁾ ⁽³⁸⁹⁾ ⁽³⁹⁰⁾ ⁽³⁹¹⁾ ⁽³⁹²⁾ ⁽³⁹³⁾ ⁽³⁹⁴⁾ ⁽³⁹⁵⁾ ⁽³⁹⁶⁾ ⁽³⁹⁷⁾ ⁽³⁹⁸⁾ ⁽³⁹⁹⁾ ⁽⁴⁰⁰⁾ ⁽⁴⁰¹⁾ ⁽⁴⁰²⁾ ⁽⁴⁰³⁾ ⁽⁴⁰⁴⁾ ⁽⁴⁰⁵⁾ ⁽⁴⁰⁶⁾ ⁽⁴⁰⁷⁾ ⁽⁴⁰⁸⁾ ⁽⁴⁰⁹⁾ ⁽⁴¹⁰⁾ ⁽⁴¹¹⁾ ⁽⁴¹²⁾ ⁽⁴¹³⁾ ⁽⁴¹⁴⁾ ⁽⁴¹⁵⁾ ⁽⁴¹⁶⁾ ⁽⁴¹⁷⁾ ⁽⁴¹⁸⁾ ⁽⁴¹⁹⁾ ⁽⁴²⁰⁾ ⁽⁴²¹⁾ ⁽⁴²²⁾ ⁽⁴²³⁾ ⁽⁴²⁴⁾ ⁽⁴²⁵⁾ ⁽⁴²⁶⁾ ⁽⁴²⁷⁾ ⁽⁴²⁸⁾ ⁽⁴²⁹⁾ ⁽⁴³⁰⁾ ⁽⁴³¹⁾ ⁽⁴³²⁾ ⁽⁴³³⁾ ⁽⁴³⁴⁾ ⁽⁴³⁵⁾ ⁽⁴³⁶⁾ ⁽⁴³⁷⁾ ⁽⁴³⁸⁾ ⁽⁴³⁹⁾ ⁽⁴⁴⁰⁾ ⁽⁴⁴¹⁾ ⁽⁴⁴²⁾ ⁽⁴⁴³⁾ ⁽⁴⁴⁴⁾ ⁽⁴⁴⁵⁾ ⁽⁴⁴⁶⁾ ⁽⁴⁴⁷⁾ ⁽⁴⁴⁸⁾ ⁽⁴⁴⁹⁾ ⁽⁴⁵⁰⁾ ⁽⁴⁵¹⁾ ⁽⁴⁵²⁾ ⁽⁴⁵³⁾ ⁽⁴⁵⁴⁾ ⁽⁴⁵⁵⁾ ⁽⁴⁵⁶⁾ ⁽⁴⁵⁷⁾ ⁽⁴⁵⁸⁾ ⁽⁴⁵⁹⁾ ⁽⁴⁶⁰⁾ ⁽⁴⁶¹⁾ ⁽⁴⁶²⁾ ⁽⁴⁶³⁾ ⁽⁴⁶⁴⁾ ⁽⁴⁶⁵⁾ ⁽⁴⁶⁶⁾ ⁽⁴⁶⁷⁾ ⁽⁴⁶⁸⁾ ⁽⁴⁶⁹⁾ ⁽⁴⁷⁰⁾ ⁽⁴⁷¹⁾ ⁽⁴⁷²⁾ ⁽⁴⁷³⁾ ⁽⁴⁷⁴⁾ ⁽⁴⁷⁵⁾ ⁽⁴⁷⁶⁾ ⁽⁴⁷⁷⁾ ⁽⁴⁷⁸⁾ ⁽⁴⁷⁹⁾ ⁽⁴⁸⁰⁾ ⁽⁴⁸¹⁾ ⁽⁴⁸²⁾ ⁽⁴⁸³⁾ ⁽⁴⁸⁴⁾ ⁽⁴⁸⁵⁾ ⁽⁴⁸⁶⁾ ⁽⁴⁸⁷⁾ ⁽⁴⁸⁸⁾ ⁽⁴⁸⁹⁾ ⁽⁴⁹⁰⁾ ⁽⁴⁹¹⁾ ⁽⁴⁹²⁾ ⁽⁴⁹³⁾ ⁽⁴⁹⁴⁾ ⁽⁴⁹⁵⁾ ⁽⁴⁹⁶⁾ ⁽⁴⁹⁷⁾ ⁽⁴⁹⁸⁾ ⁽⁴⁹⁹⁾ ⁽⁵⁰⁰⁾ ⁽⁵⁰¹⁾ ⁽⁵⁰²⁾ ⁽⁵⁰³⁾ ⁽⁵⁰⁴⁾ ⁽⁵⁰⁵⁾ ⁽⁵⁰⁶⁾ ⁽⁵⁰⁷⁾ ⁽⁵⁰⁸⁾ ⁽⁵⁰⁹⁾ ⁽⁵¹⁰⁾ ⁽⁵¹¹⁾ ⁽⁵¹²⁾ ⁽⁵¹³⁾ ⁽⁵¹⁴⁾ ⁽⁵¹⁵⁾ ⁽⁵¹⁶⁾ ⁽⁵¹⁷⁾ ⁽⁵¹⁸⁾ ⁽⁵¹⁹⁾ ⁽⁵²⁰⁾ ⁽⁵²¹⁾ ⁽⁵²²⁾ ⁽⁵²³⁾ ⁽⁵²⁴⁾ ⁽⁵²⁵⁾ ⁽⁵²⁶⁾ ⁽⁵²⁷⁾ ⁽⁵²⁸⁾ ⁽⁵²⁹⁾ ⁽⁵³⁰⁾ ⁽⁵³¹⁾ ⁽⁵³²⁾ ⁽⁵³³⁾ ⁽⁵³⁴⁾ ⁽⁵³⁵⁾ ⁽⁵³⁶⁾ ⁽⁵³⁷⁾ ⁽⁵³⁸⁾ ⁽⁵³⁹⁾ ⁽⁵⁴⁰⁾ ⁽⁵⁴¹⁾ ⁽⁵⁴²⁾ ⁽⁵⁴³⁾ ⁽⁵⁴⁴⁾ ⁽⁵⁴⁵⁾ ⁽⁵⁴⁶⁾ ⁽⁵⁴⁷⁾ ⁽⁵⁴⁸⁾ ⁽⁵⁴⁹⁾ ⁽⁵⁵⁰⁾ ⁽⁵⁵¹⁾ ⁽⁵⁵²⁾ ⁽⁵⁵³⁾ ⁽⁵⁵⁴⁾ ⁽⁵⁵⁵⁾ ⁽⁵⁵⁶⁾ ⁽⁵⁵⁷⁾ ⁽⁵⁵⁸⁾ ⁽⁵⁵⁹⁾ ⁽⁵⁶⁰⁾ ⁽⁵⁶¹⁾ ⁽⁵⁶²⁾ ⁽⁵⁶³⁾ ⁽⁵⁶⁴⁾ ⁽⁵⁶⁵⁾ ⁽⁵⁶⁶⁾ ⁽⁵⁶⁷⁾ ⁽⁵⁶⁸⁾ ⁽⁵⁶⁹⁾ ⁽⁵⁷⁰⁾ ⁽⁵⁷¹⁾ ⁽⁵⁷²⁾ ⁽⁵⁷³⁾ ⁽⁵⁷⁴⁾ ⁽⁵⁷⁵⁾ ⁽⁵⁷⁶⁾ ⁽⁵⁷⁷⁾ ⁽⁵⁷⁸⁾ ⁽⁵⁷⁹⁾ ⁽⁵⁸⁰⁾ ⁽⁵⁸¹⁾ ⁽⁵⁸²⁾ ⁽⁵⁸³⁾ ⁽⁵⁸⁴⁾ ⁽⁵⁸⁵⁾ ⁽⁵⁸⁶⁾ ⁽⁵⁸⁷⁾ ⁽⁵⁸⁸⁾ ⁽⁵⁸⁹⁾ ⁽⁵⁹⁰⁾ ⁽⁵⁹¹⁾ ⁽⁵⁹²⁾ ⁽⁵⁹³⁾ ⁽⁵⁹⁴⁾ ⁽⁵⁹⁵⁾ ⁽⁵⁹⁶⁾ ⁽⁵⁹⁷⁾ ⁽⁵⁹⁸⁾ ⁽⁵⁹⁹⁾ ⁽⁶⁰⁰⁾ ⁽⁶⁰¹⁾ ⁽⁶⁰²⁾ ⁽⁶⁰³⁾ ⁽⁶⁰⁴⁾ ⁽⁶⁰⁵⁾ ⁽⁶⁰⁶⁾ ⁽⁶⁰⁷⁾ ⁽⁶⁰⁸⁾ ⁽⁶⁰⁹⁾ ⁽⁶¹⁰⁾ ⁽⁶¹¹⁾ ⁽⁶¹²⁾ ⁽⁶¹³⁾ ⁽⁶¹⁴⁾ ⁽⁶¹⁵⁾ ⁽⁶¹⁶⁾ ⁽⁶¹⁷⁾ ⁽⁶¹⁸⁾ ⁽⁶¹⁹⁾ ⁽⁶²⁰⁾ ⁽⁶²¹⁾ ⁽⁶²²⁾ ⁽⁶²³⁾ ⁽⁶²⁴⁾ ⁽⁶²⁵⁾ ⁽⁶²⁶⁾ ⁽⁶²⁷⁾ ⁽⁶²⁸⁾ ⁽⁶²⁹⁾ ⁽⁶³⁰⁾ ⁽⁶³¹⁾ ⁽⁶³²⁾ ⁽⁶³³⁾ ⁽⁶³⁴⁾ ⁽⁶³⁵⁾ ⁽⁶³⁶⁾ ⁽⁶³⁷⁾ ⁽⁶³⁸⁾ ⁽⁶³⁹⁾ ⁽⁶⁴⁰⁾ ⁽⁶⁴¹⁾ ⁽⁶⁴²⁾ ⁽⁶⁴³⁾ ⁽⁶⁴⁴⁾ ⁽⁶⁴⁵⁾ ⁽⁶⁴⁶⁾ ⁽⁶⁴⁷⁾ ⁽⁶⁴⁸⁾ ⁽⁶⁴⁹⁾ ⁽⁶⁵⁰⁾ ⁽⁶⁵¹⁾ ⁽⁶⁵²⁾ ⁽⁶⁵³⁾ ⁽⁶⁵⁴⁾ ⁽⁶⁵⁵⁾ ⁽⁶⁵⁶⁾ ⁽⁶⁵⁷⁾ ⁽⁶⁵⁸⁾ ⁽⁶⁵⁹⁾ ⁽⁶⁶⁰⁾ ⁽⁶⁶¹⁾ ⁽⁶⁶²⁾ ⁽⁶⁶³⁾ ⁽⁶⁶⁴⁾ ⁽⁶⁶⁵⁾ ⁽⁶⁶⁶⁾ ⁽⁶⁶⁷⁾ ⁽⁶⁶⁸⁾ ⁽⁶⁶⁹⁾ ⁽⁶⁷⁰⁾ ⁽⁶⁷¹⁾ ⁽⁶⁷²⁾ ⁽⁶⁷³⁾ ⁽⁶⁷⁴⁾ ⁽⁶⁷⁵⁾ ⁽⁶⁷⁶⁾ ⁽⁶⁷⁷⁾ ⁽⁶⁷⁸⁾ ⁽⁶⁷⁹⁾ ⁽⁶⁸⁰⁾ ⁽⁶⁸¹⁾ ⁽⁶⁸²⁾ ⁽⁶⁸³⁾ ⁽⁶⁸⁴⁾ ⁽⁶⁸⁵⁾ ⁽⁶⁸⁶⁾ ⁽⁶⁸⁷⁾ ⁽⁶⁸⁸⁾ ⁽⁶⁸⁹⁾ ⁽⁶⁹⁰⁾ ⁽⁶⁹¹⁾ ⁽⁶⁹²⁾ ⁽⁶⁹³⁾ ⁽⁶⁹⁴⁾ ⁽⁶⁹⁵⁾ ⁽⁶⁹⁶⁾ ⁽⁶⁹⁷⁾ ⁽⁶⁹⁸⁾ ⁽⁶⁹⁹⁾ ⁽⁷⁰⁰⁾ ⁽⁷⁰¹⁾ ⁽⁷⁰²⁾ ⁽⁷⁰³⁾ ⁽⁷⁰⁴⁾ ⁽⁷⁰⁵⁾ ⁽⁷⁰⁶⁾ ⁽⁷⁰⁷⁾ ⁽⁷⁰⁸⁾ ⁽⁷⁰⁹⁾ ⁽⁷¹⁰⁾ ⁽⁷¹¹⁾ ⁽⁷¹²⁾ ⁽⁷¹³⁾ ⁽⁷¹⁴⁾ ⁽⁷¹⁵⁾ ⁽⁷¹⁶⁾ ⁽⁷¹⁷⁾ ⁽⁷¹⁸⁾ ⁽⁷¹⁹⁾ ⁽⁷²⁰⁾ ⁽⁷²¹⁾ ⁽⁷²²⁾ ⁽⁷²³⁾ ⁽⁷²⁴⁾ ⁽⁷²⁵⁾ ⁽⁷²⁶⁾ ⁽⁷²⁷⁾ ⁽⁷²⁸⁾ ⁽⁷²⁹⁾ ⁽⁷³⁰⁾ ⁽⁷³¹⁾ ⁽⁷³²⁾ ⁽⁷³³⁾ ⁽⁷³⁴⁾ ⁽⁷³⁵⁾ ⁽⁷³⁶⁾ ⁽⁷³⁷⁾ ⁽⁷³⁸⁾ ⁽⁷³⁹⁾ ⁽⁷⁴⁰⁾ ⁽⁷⁴¹⁾ ⁽⁷⁴²⁾ ⁽⁷⁴³⁾ ⁽⁷⁴⁴⁾ ⁽⁷⁴⁵⁾ ⁽⁷⁴⁶⁾ ⁽⁷⁴⁷⁾ ⁽⁷⁴⁸⁾ ⁽⁷⁴⁹⁾ ⁽⁷⁵⁰⁾ ⁽⁷⁵¹⁾ ⁽⁷⁵²⁾ ⁽⁷⁵³⁾ ⁽⁷⁵⁴⁾ ⁽⁷⁵⁵⁾ ⁽⁷⁵⁶⁾ ⁽⁷⁵⁷⁾ ⁽⁷⁵⁸⁾ ⁽⁷⁵⁹⁾ ⁽⁷⁶⁰⁾ ⁽⁷⁶¹⁾ ⁽⁷⁶²⁾ ⁽⁷⁶³⁾ ⁽⁷⁶⁴⁾ ⁽⁷⁶⁵⁾ ⁽⁷⁶⁶⁾ ⁽⁷⁶⁷⁾ ⁽⁷⁶⁸⁾ ⁽⁷⁶⁹⁾ ⁽⁷⁷⁰⁾ ⁽⁷⁷¹⁾ ⁽⁷⁷²⁾ ⁽⁷⁷³⁾ ⁽⁷⁷⁴⁾ ⁽⁷⁷⁵⁾ ⁽⁷⁷⁶⁾ ⁽⁷⁷⁷⁾ ⁽⁷⁷⁸⁾ ⁽⁷⁷⁹⁾ ⁽⁷⁸⁰⁾ ⁽⁷⁸¹⁾ ⁽⁷⁸²⁾ ⁽⁷⁸³⁾ ⁽⁷⁸⁴⁾ ⁽⁷⁸⁵⁾ ⁽⁷⁸⁶⁾ ⁽⁷⁸⁷⁾ ⁽⁷⁸⁸⁾ ⁽⁷⁸⁹⁾ ⁽⁷⁹⁰⁾ ⁽⁷⁹¹⁾ ⁽⁷⁹²⁾ ⁽⁷⁹³⁾ ⁽⁷⁹⁴⁾ ⁽⁷⁹⁵⁾ ⁽⁷⁹⁶⁾ ⁽⁷⁹⁷⁾ ⁽⁷⁹⁸⁾ ⁽⁷⁹⁹⁾ ⁽⁸⁰⁰⁾ ⁽⁸⁰¹⁾ ⁽⁸⁰²⁾ ⁽⁸⁰³⁾ ⁽⁸⁰⁴⁾ ⁽⁸⁰⁵⁾ ⁽⁸⁰⁶⁾ ⁽⁸⁰⁷⁾ ⁽⁸⁰⁸⁾ ⁽⁸⁰⁹⁾ ⁽⁸¹⁰⁾ ⁽⁸¹¹⁾ ⁽⁸¹²⁾ ⁽⁸¹³⁾ ⁽⁸¹⁴⁾ ⁽⁸¹⁵⁾ ⁽⁸¹⁶⁾ ⁽⁸¹⁷⁾ ⁽⁸¹⁸⁾ ⁽⁸¹⁹⁾ ⁽⁸²⁰⁾ ⁽⁸²¹⁾ ⁽⁸²²⁾ ⁽⁸²³⁾ ⁽⁸²⁴⁾ ⁽⁸²⁵⁾ ⁽⁸²⁶⁾ ⁽⁸²⁷⁾ ⁽⁸²⁸⁾ ⁽⁸²⁹⁾ ⁽⁸³⁰⁾ ⁽⁸³¹⁾ ⁽⁸³²⁾ ⁽⁸³³⁾ ⁽⁸³⁴⁾ ⁽⁸³⁵⁾ ⁽⁸³⁶⁾ ⁽⁸³⁷⁾ ⁽⁸³⁸⁾ ⁽⁸³⁹⁾ ⁽⁸⁴⁰⁾ ⁽⁸⁴¹⁾ ⁽⁸⁴²⁾ ⁽⁸⁴³⁾ ⁽⁸⁴⁴⁾ ⁽⁸⁴⁵⁾ ⁽⁸⁴⁶⁾ ⁽⁸⁴⁷⁾ ⁽⁸⁴⁸⁾ ⁽⁸⁴⁹⁾ ⁽⁸⁵⁰⁾ ⁽⁸⁵¹⁾ ⁽⁸⁵²⁾ ⁽⁸⁵³⁾ ⁽⁸⁵⁴⁾ ⁽⁸⁵⁵⁾ ⁽⁸⁵⁶⁾ ⁽⁸⁵⁷⁾ ⁽⁸⁵⁸⁾ ⁽⁸⁵⁹⁾ ⁽⁸⁶⁰⁾ ⁽⁸⁶¹⁾ ⁽⁸⁶²⁾ ⁽⁸⁶³⁾ ⁽⁸⁶⁴⁾ ⁽⁸⁶⁵⁾ ⁽⁸⁶⁶⁾ ⁽⁸⁶⁷⁾ ⁽⁸⁶⁸⁾ ⁽⁸⁶⁹⁾ ⁽⁸⁷⁰⁾ ⁽⁸⁷¹⁾ ⁽⁸⁷²⁾ ⁽⁸⁷³⁾ ⁽⁸⁷⁴⁾ ⁽⁸⁷⁵⁾ ⁽⁸⁷⁶⁾ ⁽⁸⁷⁷⁾ ⁽⁸⁷⁸⁾ ⁽⁸⁷⁹⁾ ⁽⁸⁸⁰⁾ ⁽⁸⁸¹⁾ ⁽⁸⁸²⁾ ⁽⁸⁸³⁾ ⁽⁸⁸⁴⁾ ⁽⁸⁸⁵⁾ ⁽⁸⁸⁶⁾ ⁽⁸⁸⁷⁾ ⁽⁸⁸⁸⁾ ⁽⁸⁸⁹⁾ ⁽⁸⁹⁰⁾ ⁽⁸⁹¹⁾ ⁽⁸⁹²⁾ ⁽⁸⁹³⁾ ⁽⁸⁹⁴⁾ ⁽⁸⁹⁵⁾ ⁽⁸⁹⁶⁾ ⁽⁸⁹⁷⁾ ⁽⁸⁹⁸⁾ ⁽⁸⁹⁹⁾ ⁽⁹⁰⁰⁾ ⁽⁹⁰¹⁾ ⁽⁹⁰²⁾ ⁽⁹⁰³⁾ ⁽⁹⁰⁴⁾ ⁽⁹⁰⁵⁾ ⁽⁹⁰⁶⁾ ⁽⁹⁰⁷⁾ ⁽⁹⁰⁸⁾ ⁽⁹⁰⁹⁾ ⁽⁹¹⁰⁾ ⁽⁹¹¹⁾ ⁽⁹¹²⁾ ⁽⁹¹³⁾ ⁽⁹¹⁴⁾ ⁽⁹¹⁵⁾ ⁽⁹¹⁶⁾ ⁽⁹¹⁷⁾ ⁽⁹¹⁸⁾ ⁽⁹¹⁹⁾ ⁽⁹²⁰⁾ ⁽⁹²¹⁾ ⁽⁹²²⁾ ⁽⁹²³⁾ ⁽⁹²⁴⁾ ⁽⁹²⁵⁾ ⁽⁹²⁶⁾ ⁽⁹²⁷⁾ ⁽⁹²⁸⁾ ⁽⁹²⁹⁾ ⁽⁹³⁰⁾ ⁽⁹³¹⁾ ⁽⁹³²⁾ ⁽⁹³³⁾ ⁽⁹³⁴⁾ ⁽⁹³⁵⁾ ⁽⁹³⁶⁾ ⁽⁹³⁷⁾ ⁽⁹³⁸⁾ ⁽⁹³⁹⁾ ⁽⁹⁴⁰⁾ ⁽⁹⁴¹⁾ ⁽⁹⁴²⁾ ⁽⁹⁴³⁾ ⁽⁹⁴⁴⁾ ⁽⁹⁴⁵⁾ ⁽⁹⁴⁶⁾ ⁽⁹⁴⁷⁾ ⁽⁹⁴⁸⁾ ⁽⁹⁴⁹⁾ ⁽⁹⁵⁰⁾ ⁽⁹⁵¹⁾ ⁽⁹⁵²⁾ ⁽⁹⁵³⁾ ⁽⁹⁵⁴⁾ ⁽⁹⁵⁵⁾ ⁽⁹⁵⁶⁾ ⁽⁹⁵⁷⁾ ⁽⁹⁵⁸⁾ ⁽⁹⁵⁹⁾ ⁽⁹⁶⁰⁾ ⁽⁹⁶¹⁾ ⁽⁹⁶²⁾ ⁽⁹⁶³⁾ ⁽⁹⁶⁴⁾ ⁽⁹⁶⁵⁾ ⁽⁹⁶⁶⁾ ⁽⁹⁶⁷⁾ ⁽⁹⁶⁸⁾ ⁽⁹⁶⁹⁾ ⁽⁹⁷⁰⁾ ⁽⁹⁷¹⁾ ⁽⁹⁷²⁾ ⁽⁹⁷³⁾ ⁽⁹⁷⁴⁾ ⁽⁹⁷⁵⁾ ⁽⁹⁷⁶⁾ ⁽⁹⁷⁷⁾ ⁽⁹⁷⁸⁾ ⁽⁹⁷⁹⁾ ⁽⁹⁸⁰⁾ ⁽⁹⁸¹⁾ ⁽⁹⁸²⁾ ⁽⁹⁸³⁾ ⁽⁹⁸⁴⁾ ⁽⁹⁸⁵⁾ ⁽⁹⁸⁶⁾ ⁽⁹⁸⁷⁾ ⁽⁹⁸⁸⁾ ⁽⁹⁸⁹⁾ ⁽⁹⁹⁰⁾ ⁽⁹⁹¹⁾ ⁽⁹⁹²⁾ ⁽⁹⁹³⁾ ⁽⁹⁹⁴⁾ ⁽⁹⁹⁵⁾ ⁽⁹⁹⁶⁾ ⁽⁹⁹⁷⁾ ⁽⁹⁹⁸⁾ ⁽⁹⁹⁹⁾ ⁽¹⁰⁰⁰⁾ ⁽¹⁰⁰¹⁾ ⁽¹⁰⁰²⁾ ⁽¹⁰⁰³⁾ ⁽¹⁰⁰⁴⁾ ⁽¹⁰⁰⁵⁾ ⁽¹⁰⁰⁶⁾ ⁽¹⁰⁰⁷⁾ ⁽¹⁰⁰⁸⁾ ⁽¹⁰⁰⁹⁾ ⁽¹⁰¹⁰⁾ ⁽¹⁰¹¹⁾ ⁽¹⁰¹²⁾ ⁽¹⁰¹³⁾ ⁽¹⁰¹⁴⁾ ⁽¹⁰¹⁵⁾ ⁽¹⁰¹⁶⁾ ⁽¹⁰¹⁷⁾ ⁽¹⁰¹⁸⁾ ⁽¹⁰¹⁹⁾ ⁽¹⁰²⁰⁾ ⁽¹⁰²¹⁾ ⁽¹⁰²²⁾ ⁽¹⁰²³⁾ ⁽¹⁰²⁴⁾ ⁽¹⁰²⁵⁾ ⁽¹⁰²⁶⁾ ⁽¹⁰²⁷⁾ ⁽¹⁰²⁸⁾ ⁽¹⁰²⁹⁾ ⁽¹⁰³⁰⁾ ⁽¹⁰³¹⁾ ⁽¹⁰³²⁾ ⁽¹⁰³³⁾ ⁽¹⁰³⁴⁾ ⁽¹⁰³⁵⁾ ⁽¹⁰³⁶⁾ ⁽¹⁰³⁷⁾ ⁽¹⁰³⁸⁾ ⁽¹⁰³⁹⁾ ⁽¹⁰⁴⁰⁾ ⁽¹⁰⁴¹⁾ ⁽¹⁰⁴²⁾ ⁽¹⁰⁴³⁾ ⁽¹⁰⁴⁴⁾ ⁽¹⁰⁴⁵⁾ ⁽¹⁰⁴⁶⁾ ⁽¹⁰⁴⁷⁾ ⁽¹⁰⁴⁸⁾ ⁽¹⁰⁴⁹⁾ ⁽¹⁰⁵⁰⁾ ⁽¹⁰⁵¹⁾ ⁽¹⁰⁵²⁾ ⁽¹⁰⁵³⁾ ⁽¹⁰⁵⁴⁾ ⁽¹⁰⁵⁵⁾ ⁽¹⁰⁵⁶⁾ ⁽¹⁰⁵⁷⁾ ⁽¹⁰⁵⁸⁾ ⁽¹⁰⁵⁹⁾ ⁽¹⁰⁶⁰⁾ ⁽¹⁰⁶¹⁾ ⁽¹⁰⁶²⁾ ⁽¹⁰⁶³⁾ ⁽¹⁰⁶⁴⁾ ⁽¹⁰⁶⁵⁾ ⁽¹⁰⁶⁶⁾ ⁽¹⁰⁶⁷⁾ ⁽¹⁰⁶⁸⁾ ⁽¹⁰⁶⁹⁾ ⁽¹⁰⁷⁰⁾ ⁽¹⁰⁷¹⁾ ⁽¹⁰⁷²⁾ ⁽¹⁰⁷³⁾ ⁽¹⁰⁷⁴⁾ ⁽¹⁰⁷⁵⁾ ⁽¹⁰⁷⁶⁾ ⁽¹⁰⁷⁷⁾ ⁽¹⁰⁷⁸⁾ ⁽¹⁰⁷⁹⁾ ⁽¹⁰⁸⁰⁾ ⁽¹⁰⁸¹⁾ ⁽¹⁰⁸²⁾ ⁽¹⁰⁸³⁾ ⁽¹⁰⁸⁴⁾ ⁽¹⁰⁸⁵⁾ ⁽¹⁰⁸⁶⁾ ⁽¹⁰⁸⁷⁾ ⁽¹⁰⁸⁸⁾ ⁽¹⁰⁸⁹⁾ ⁽¹⁰⁹⁰⁾ ⁽¹⁰⁹¹⁾ ⁽¹⁰⁹²⁾ ⁽¹⁰⁹³⁾ ⁽¹⁰⁹⁴⁾ ⁽¹⁰⁹⁵⁾ ⁽¹⁰⁹⁶⁾ ⁽¹⁰⁹⁷⁾ ⁽¹⁰⁹⁸⁾ ⁽¹⁰⁹⁹⁾ ⁽¹¹⁰⁰⁾ ⁽¹¹⁰¹⁾ ⁽¹¹⁰²⁾ ⁽¹¹⁰³⁾ ⁽¹¹⁰⁴⁾ ⁽¹¹⁰⁵⁾ ⁽¹¹⁰⁶⁾ ⁽¹¹⁰⁷⁾ ⁽¹¹⁰⁸⁾ ⁽¹¹⁰⁹⁾ ⁽¹¹¹⁰⁾ ⁽¹¹¹¹⁾ ⁽¹¹¹²⁾ ⁽¹¹¹³⁾ ⁽¹¹¹⁴⁾ ⁽¹¹¹⁵⁾ ⁽¹¹¹⁶⁾ ⁽¹¹¹⁷⁾ ⁽¹¹¹⁸⁾ ⁽¹¹¹⁹⁾ ⁽¹¹²⁰⁾ ⁽¹¹²¹⁾ ⁽¹¹²²⁾ ⁽¹¹²³⁾ ⁽¹¹²⁴⁾ ⁽¹¹²⁵⁾ ⁽¹¹²⁶⁾ ⁽¹¹²⁷⁾ ⁽¹¹²⁸⁾ ⁽¹¹²⁹⁾ ⁽¹¹³⁰⁾ ⁽¹¹³¹⁾ ⁽¹¹³²⁾ ⁽¹¹³³⁾ ⁽¹¹³⁴⁾ ⁽¹¹³⁵⁾ ⁽¹¹³⁶⁾ ⁽¹¹³⁷⁾ ⁽¹¹³⁸⁾ ⁽¹¹³⁹⁾ ⁽¹¹⁴⁰⁾ ⁽¹¹⁴¹⁾ ⁽¹¹⁴²⁾ ⁽¹¹⁴³⁾ ⁽¹¹⁴⁴⁾ ⁽¹¹⁴⁵⁾ ⁽¹¹⁴⁶⁾ ⁽¹¹⁴⁷⁾ ⁽¹¹⁴⁸⁾ ⁽¹¹⁴⁹⁾ ⁽¹¹⁵⁰⁾ ⁽¹¹⁵¹⁾ ⁽¹¹⁵²⁾ ⁽¹¹⁵³⁾ ⁽¹¹⁵⁴⁾ ⁽¹¹⁵⁵⁾ ⁽¹¹⁵⁶⁾ ⁽¹¹⁵⁷⁾ ⁽¹¹⁵⁸⁾ ⁽¹¹⁵⁹⁾ ⁽¹¹⁶⁰⁾ ⁽¹¹⁶¹⁾ ⁽¹¹⁶²⁾ ⁽¹¹⁶³⁾ ⁽¹¹⁶⁴⁾ ⁽¹¹⁶⁵⁾ ⁽¹¹⁶⁶⁾ ⁽¹¹⁶⁷⁾ ⁽¹¹⁶⁸⁾ ⁽¹¹⁶⁹⁾ ⁽¹¹⁷⁰⁾ ⁽¹¹⁷¹⁾ ⁽¹¹⁷²⁾ ⁽¹¹⁷³⁾ ⁽¹¹⁷⁴⁾ ⁽¹¹⁷⁵⁾ ⁽¹¹⁷⁶⁾ ⁽¹¹⁷⁷⁾ ⁽¹¹⁷⁸⁾ ⁽¹¹⁷⁹⁾ ⁽¹¹⁸⁰⁾ ⁽¹¹⁸¹⁾ ⁽¹¹⁸²⁾ ⁽¹¹⁸³⁾ ⁽¹¹⁸⁴⁾ ⁽¹¹⁸⁵⁾ ⁽¹¹⁸⁶⁾ ⁽¹¹⁸⁷⁾ ⁽¹¹⁸⁸⁾ ⁽¹¹⁸⁹⁾ ⁽¹¹⁹⁰⁾ ⁽¹¹⁹¹⁾ ⁽¹¹⁹²⁾ ⁽¹¹⁹³⁾ ⁽¹¹⁹⁴⁾ ⁽¹¹⁹⁵⁾ ⁽¹¹⁹⁶⁾ ⁽¹¹⁹⁷⁾ ⁽¹¹⁹⁸⁾ ⁽¹¹⁹⁹⁾ ⁽¹²⁰⁰⁾ ⁽¹²⁰¹⁾ ⁽¹²⁰²⁾ ⁽¹²⁰³⁾ ⁽¹²⁰⁴⁾ ⁽¹²⁰⁵⁾ ⁽¹²⁰⁶⁾ ⁽¹²⁰⁷⁾ ⁽¹²⁰⁸⁾ ⁽¹²⁰⁹⁾ ⁽¹²¹⁰⁾ ⁽¹²¹¹⁾ ⁽¹²¹²⁾ ⁽¹²¹³⁾ ⁽¹²¹⁴⁾ ⁽¹²¹⁵⁾ ⁽¹²¹⁶⁾ ⁽¹²¹⁷⁾ ⁽¹²¹⁸⁾ ⁽¹²¹⁹⁾ ⁽¹²²⁰⁾ ⁽¹²²¹⁾ ⁽¹²²²⁾ ⁽¹²²³⁾ ⁽¹²²⁴⁾ ⁽¹²²⁵⁾ ⁽¹²²⁶⁾ ⁽¹²²⁷⁾ ⁽¹²²⁸⁾ ⁽¹²²⁹⁾ ⁽¹²³⁰⁾ ⁽¹²³¹⁾ ⁽¹²³²⁾ ⁽¹²³³⁾ ⁽¹²³⁴⁾ ⁽¹²³⁵⁾ ⁽¹²³⁶⁾ ⁽¹²³⁷⁾ ⁽¹²³⁸⁾ ⁽¹²³⁹⁾ ⁽¹²⁴⁰⁾ ⁽¹²⁴¹⁾ ⁽¹²⁴²⁾ ⁽¹²⁴³⁾ ⁽¹²⁴⁴⁾ ⁽¹²⁴⁵⁾ ⁽¹²⁴⁶⁾ ⁽¹²⁴⁷⁾ ⁽¹²⁴⁸⁾ ⁽¹²⁴⁹⁾ ⁽¹²⁵⁰⁾ ⁽¹²⁵¹⁾ ⁽¹²⁵²⁾ ⁽¹²⁵³⁾ ⁽¹²⁵⁴⁾ ⁽¹²⁵⁵⁾ ⁽¹²⁵⁶⁾ ⁽¹²⁵⁷⁾ ⁽¹²⁵⁸⁾ ⁽¹²⁵⁹⁾ ⁽¹²⁶⁰⁾ ⁽¹²⁶¹⁾ ⁽¹²⁶²⁾ ⁽¹²⁶³⁾ ⁽¹²⁶⁴⁾ ⁽¹²⁶⁵⁾ ⁽¹²⁶⁶⁾ ⁽¹²⁶⁷⁾ ⁽¹²⁶⁸⁾ ⁽¹²⁶⁹⁾ ⁽¹²⁷⁰⁾ ⁽¹²⁷¹⁾ ⁽¹²⁷²⁾ ⁽¹²⁷³⁾ ⁽¹²⁷⁴⁾ ⁽¹²⁷⁵⁾ ⁽¹²⁷⁶⁾ ⁽¹²⁷⁷⁾ ⁽¹²⁷⁸⁾ ⁽¹²⁷⁹⁾ ⁽¹²⁸⁰⁾ ⁽¹²⁸¹⁾ ⁽¹²⁸²⁾ ⁽¹²⁸³⁾ ⁽¹²⁸⁴⁾ ⁽¹²⁸⁵⁾ ⁽¹²⁸⁶⁾ ⁽¹²⁸⁷⁾ ⁽¹²⁸⁸⁾ ⁽¹²⁸⁹⁾ ⁽¹²⁹⁰⁾ ⁽¹²⁹¹⁾ ⁽¹²⁹²⁾ ⁽¹²⁹³⁾ ⁽¹²⁹⁴⁾ ⁽¹²⁹⁵⁾ ⁽¹²⁹⁶⁾ ⁽¹²⁹⁷⁾ ⁽¹²⁹⁸⁾ ⁽¹²⁹⁹⁾ ⁽¹³⁰⁰⁾ ⁽¹³⁰¹⁾ ⁽¹³⁰²⁾ ⁽¹³⁰³⁾ ⁽¹³⁰⁴⁾ ⁽¹³⁰⁵⁾ ⁽¹³⁰⁶⁾ ⁽¹³⁰⁷⁾ ⁽¹³⁰⁸⁾ ⁽¹³⁰⁹⁾ ⁽¹³¹⁰⁾ ⁽¹³¹¹⁾ ⁽¹³¹²⁾ ⁽¹³¹³⁾ ⁽¹³¹⁴⁾ ⁽¹³¹⁵⁾ ⁽¹³¹⁶⁾ ⁽¹³¹⁷⁾ ⁽¹³¹⁸⁾ ⁽¹³¹⁹⁾ ⁽¹³²⁰⁾ ⁽¹³²¹⁾ ⁽¹³²²⁾ ⁽¹³²³⁾ ⁽¹³²⁴⁾ ⁽¹³²⁵⁾ ⁽¹³²⁶⁾ ⁽¹³²⁷⁾ ⁽¹³²⁸⁾ ⁽¹³²⁹⁾ ⁽¹³³⁰⁾ ⁽¹

注記

- (1)「真面目一方で」の程度を強める働きをしている。(2)発音がいまいではっきりしないが、「ショーネンヘー」は「ショネンヘー」の言い誤りであろう。(3)このように聞こえるが、はっきりわからない。(4)倒置的表現。山本氏はこういう表現が多い。(5)「ハ」とも「ホ」とも聞える。(6)〔harjamo:](7)軍隊での。(8)「あたる」は「人から貰える」の意。(9)〔se:kinʃo:](10)〔hoitara] (11)このあたり語気強い。(12)特に意味のないつまみことば。(13)〔tokudenʔ]。(14)〔morotein] >〔moroten]。(15)「特別の扱いを受けるだけの資格」とでもいう意か。(16)あいまいで聞きとれず。(17)「バツ」とも。(18)〔ʃitaʃanno] (19)聞きとれず。「アンナ ヒトイキ」で「あの頃 一時は」の意か。(20)「折る」の強調。(21)〔jakenʔ]。(22)この方言では「エライ」は「偉い」の意と「つらい」、「疲れた」、「大変な」などの意と併用されている。この場合は、試合で10人抜きをするのは大変だったの意。(23)「何も知らない人が考えるようは、そんな簡単なもんじゃない」の意であろう。(24)軍隊階級名。兵隊の中での一番上の階級。(25)「エライ」の訛音。ここは文字通り「偉い」の意。(26)試合中の号令かかけ声だろう。(27)棒で相手を打つ時の擬声語。(28)いわゆる「木銃」か。(29)このあと「～しまわなくてはいけないんだ」の意のことばが続くらしく、「それで私は折ってしまっ た」と後に続く。(30)審判の判定の声であろう。(31)審判が勝着の方に手を上げるのか、それとも、直接手を握ってあげるのか。(32)これも審判の声だろう。(33)〔tokinez]。(34)鯖江36連隊。(35)あいまい。(36)〔nonʔ]。(37)はっきり聞こえない。こう聞こえる。(38)〔atʃarannʔja]。(39)棒試合で力まかせに相手を打ったことを言う。(40)「手加減を加える」意。(41)試合はじめの号令か。(42)「折る」の強調。(43)相手のことなど(構わない)の意。(44)

これも審判の号令か。(45)相手の打ってくるのが(早い)の意。
(46)相手の上官が軍隊で何十年も苦勞しているの意。(47)「コー
リャ」も「コレ」も「ヨシ」も「マタ」もともに、当時山本氏が
試合の時に思ふことそのままの表現。あと「アカンノヤ」まで
続く。(48)「相手が棒を折られたら、もう自分を突いてこられ
ないから」の意。(49)「ケシ」とも聞こえる。(50)特殊な使
い方。(51)このあたり、思いつくままに言葉を並べてる感じ。
(52) [paɾeːʔ] 独特のイントネーション。(53) [paŋoːo]、上昇調
のイントネーション。(54)自己のうなずき。(55)「土台が」
の意。(56)特に意味のないつなぎことば。(57) [metoːɾu]。
試合で優勝した時のメダル。(58)「兵隊での訓練を受けて」の
意。

7. 幣 貨 改 正

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

- K アー オボエテエンケドー⁽¹⁾ アノー ヘーカカイシェーンナツタト
 ああ 覚えていないけれど あの 幣貨改正になった時に
- キニ⁽²⁾ー アノー アノ オカネが ミンナネ カヨイニ アツテモ
 お金か みんなね 通帳に あっても
- アレー イチジ^{xxxx} ニンズーニヨツテネー アノー ギンコーナ
 あれが 一時 人数によってね 銀行なり
- リ ノーキョーナリ アズケタツタ ソレガ⁽³⁾ー ニンズーニヨツテ⁽⁴⁾
 農協なりに 預けてあった それが 人数によって
- ダサレタデ。 イクラ ヨケー アツタカッテ ジブンガ ホシー
 出されたから。 いくら たくさん あっても 自分が 欲しい
- ダケツチュテ ダサレマセナンダンニエ。 アレ ヘーカカイシェ
 だけと言って 出されませんでしたのです。 あれは 幣貨改正の
- ーノトキヤツタンヤノー。⁽⁵⁾ (Yウー。 ウン ホリヤー……)
 時だったんですねえ。 それは……
- モー ケッコンシキャ ナンカ^{xxxx} ショート オマウト エレコ⁽⁶⁾
 もう 結婚式や 何か しようと 思うと たいへん
- ツキヤツタンニヤ。 ミンナネ ヤッパリ ホレ カシテモラワナ
 なことだったんです。 みんなに やはり (ほら (金) 貸してもらわな

ネエ⁽⁷⁾ デキマシエンデネエ⁽⁸⁾ ウーン。 ~~アレモ~~ オゾイコトヤッタ
くではね 出来ませんからねえ。 あれは たいへんなことだった

ンジャ アレモ⁽⁹⁾ オゾイコト オータノ⁽¹⁰⁾。 (Y ホーデス) ウー
んです あれも ひどい目に 会ったね。 (そうです)

ン。 (Y ~~マ~~ マ……) オカネノ キリカエヤッタデー。
お金の 切り替えだったから。

Y アンナトキネ ヤッパ ジェンガ アッタヒト⁽¹¹⁾ ャッパ⁽¹²⁾リ⁽¹²⁾ンナ
あんな時に やはり 金か あった人は やはり みんな
ソレデ……。
それで……。

K ミンナ ダシマシタンデスデネ オカネオ。 アリマシテモ。 ホン
みんな 出したのですね。 お金を。 ありまして。 それ
デモ アンナジフンニ⁽¹³⁾ ジューエンアルト⁽¹⁴⁾ ダエーブ⁽¹⁴⁾ イケー カ
でも あんな時分に 十円 があると 大分 大きい 金
ネノヨーニ オモタガノ⁽¹⁵⁾。 (Y ホーデス) ジューエンサツツチ
のように 思ったかねえ。 (そうです) 十円ねと言うのか
ユーノガ⁽¹⁶⁾ アリマシタンニヤ。
ありましたのです。

Y ホイデ アノ カンナカツツアラノ⁽¹⁷⁾ シンニョモンチュノ⁽¹⁷⁾アー (
それで あの 上中津原の しんによもんと言うのは
K ウン) アッコニ イケマン⁽¹⁸⁾ シンカ⁽¹⁸⁾ イケマン⁽¹⁹⁾ ナンジェンエンカ⁽¹⁹⁾
あそこには 一万(円) か 一万何千円かを

チョキンシタツタンエ。 ソレ⁽²⁰⁾ンナ モー フーサンナツテモタ
貯金してあったんです。 それか みんな もう 封鎖になってしまった
ヤンノ⁽²¹⁾。 ホレ キヌエシエン⁽²²⁾ナツテモタヤロノ。 モー ソノ
でしょう。 ほら 旧⁽²²⁾銭に なってしまったでしょう。 もう その

トキニ⁽²³⁾ ナー ソンナトキノ⁽²⁴⁾ イチマンエンチュト ホレ イカ
時に ねえ そんな時の 一万円と言うと それは 大
カッタラシーワノ。⁽²⁵⁾
きかたらしいですよ。

K ホーヤロー。
そうでしょう。

Y ソレガ モー ニシエンエンカ ソコラシカ トレナンダンニヤ。
それか もう ニ千円か そこいらしか もらえなかつたんだ。

(^Kウーニ) ホイデ⁽²⁶⁾ マー オッカ ボケテモタンヤデノ⁽²⁷⁾。
それで まあ 母さんは ほけてしまったんだからね。

K アーア⁽²⁸⁾ ホーケ) ホンデ アレカラ モー アイノコ シンデ⁽²⁹⁾
そうですか) それで あれから もう まもなく 石んで

モタンエ。 ソラ モー ジェンガ⁽³⁰⁾ クレントナルト ボケテマウ
しまったんだ。 それは もう 金を くれないうとすると ほけてしまい

ワイノ。 ニナモン アタルモンモ アタランノヤデ。⁽³¹⁾
ますよ。 そんなもの もらえるものも もらえないんだから。

K アノトキモ コマッタワノー。 アノ オカネガ アノー フーサ⁽³²⁾
あの時も 困ったよねえ。 お金か 封鎖
ンナッタトキモ。⁽³³⁾
になった時も。

Y フーサンナッタン⁽³⁴⁾ ナサケネー モンジャモ。 モー アッテ
封鎖になったんだから 憎めないものですよ。 もう (金か)あつて
モ クレノヤケ。 (^Kホーヤー⁽³⁵⁾) ウチラ イッシエンモ ダ
も くれないうんだから。 (そうです) 私の家など 一銭も 出
シテモウエナンダ。⁽³⁶⁾ ヒトカ スケナカッタデ アカン。 モー
してもらえなかった。 人が 少なかつたから 駄目だった。 もう

フーサンナツタキリヤツタエン。 ⁽³⁷⁾ ホイデ" マー フワイギンコイ
封鎖になつたきりだったんです。 それで まあ 福井銀行に

ニ チョッコ ジェン アツタデ" ソレ トンニイッたら ソレモ
少し 金が あつたから それを 取りに行つたら それも

アカンチュンニヤロ。 ⁽³⁸⁾ マー アンナ オモッシェ コトモ ナカッ
駄目だつて言うんでしょ。 まあ あんな 面白くないことも なから

タノ。

たね。

K ⁽³⁹⁾ ホントヤーノー。

本当だ"ねえ。

Y ⁽⁴⁰⁾ アレアー ⁽⁴¹⁾ フワイギンコアー クスノギチョーニ アツタンエ。
あれは 福井銀行は 榎町に あつたんだ。

アノフキンニ コーネー。 (^K ウーン) アノ ギンコー イマ
あの付近に こうねえ。 (^K ウーン) あの 銀行 今は

⁽⁴²⁾ コ コツチェ サクラチョーノ ンナ カワッテ イーノ タテタ
~~xxxx~~ こちへ 桜町の(方へ) 変わって いいのを 建て

ケド。 (^K ウーン) マエァ ⁽⁴³⁾ ムカイガワニ ⁽⁴⁴⁾ アッテ。 (^K
たけれども。 (^K ウーン) 前は 向こう側に あつてね。 (^K

ウン) アノ サクラチョーノ ムカイガワニ アツタ チーシェ
あの 桜町の 向こう側に あつた 小さい

ー ⁽⁴⁵⁾ ギンゴガ ⁽⁴⁶⁾ イッケンガ。 ソコエー アズケタツタノ トンニ
銀行が 一軒が(あつた)。そこへ 預けてあつたのを 取りに

イッたら ⁽⁴⁷⁾ モー ⁽⁴⁸⁾ ホンナモン ⁽⁴⁹⁾ アカンノヤツ。 アカーンチュコト
行つたら もう そんなもの 駄目なんだ。 駄目ということとは

ネーワ ンナモン アズケタモン チョッコダケデモ クレツテ
ないよ そんなもの 預けたもの 少しだ"けても くれって

モ チョッコ モラフナッ タラ アカンテ。 ⁽⁵⁰⁾ ホカ ⁽⁵¹⁾ マー アカン
もう 少しは もらわなくてはと云たら 駄目だ。 そうか まあ 駄目な

モンナラ アキラメルワ ⁽⁵²⁾ ンナ カエ モヤイテマウワ。 ホヤケ
ものなら 諦めるよ それなら 返せ 燃やしてしまうよ。 けれども

ド モヤサントキナシエ ⁽⁵³⁾ マタ アトネ ~~マタ~~ マタ キクコトモ
燃やさないうて おきなさい また あとに また 使えることも

アルサゲッテ。 ⁽⁵⁴⁾ ホイテ アレ モー ~~ジュ~~ ジューネン ホド タッ
あるからって。 として あれで もう 十年程 たってから

テカラ ⁽⁵⁵⁾ (^K ウー ン) イ ッタンニヤ (^K アーア) ホイタラ
行ったんだ したたら

クレタモ。 ⁽⁵⁶⁾ (^K ウー ン) アレデ リソク ダイブ ツケテ ク
(金) くれました。 あれで 利息 大分 つけて く

レタ。 ⁽⁵⁷⁾ ヨー モヤサント ホットキナシタワノッテ。 オー ホ
れた。 よく 燃やさないうて 放っておかれましたよね。 ああ

ヤッテ モー アカンサゲ ⁽⁵⁸⁾ モヤイテマオト オモタンヤケド マ
だって もう 駄目だから 燃やしてしまおうと 思、たんだけれど 待

テ コンナモン マタ ⁽⁵⁹⁾ モヤイテモタッテ ナンニモナランデ マ
て こんな物 また 燃やしてしまっても 何にもならないから ま

ー モッテテミー ⁽⁶⁰⁾ マタ アクカ イッペン ⁽⁶¹⁾ メーツェトエ オモテ
あ 持っていてみる また きくか 一度 思、て

ホイテ トイニイッタラ ⁽⁶²⁾ マー ソレナラ モー モ ニッポンモ
として 開きに行ったら まあ それなら もう 日本も

ナンシテキタシ ⁽⁶³⁾ フワイギンコーモ ナンシテキタサゲー オアゲ
何してきたし 福井 銀行も 何してきたから 差し上

シマスツチュサケ ⁽⁶⁴⁾ オー ホーカ ホンナラ クレツチュテ モロ
けますと言うから ああ そうか それなら くれと言って もら

タ。 ヤッパ ソノトキ モヤイテモタラ モー ソンデ アカン
た。 やはり その時 燃やしてしまったら もう それで 駄目な

ノエ。 ソヤケド ワタシナンカ コノ シェンソニ イッテ コ
んだ。 けれども 私なんか この 戦争に 行って(もらった)
(61)

クサイ ニオモー タダ アカンワノ。 シェンソニ イッテ ナ
国債 みんな もう 全く 駄目なんだ。 戦争に 行って

(62) ガエーイ アイダ ハタライテキタ ナンシタコッチャ ワカラン。
長い間 働いて来たのは 何した事か わからない。

アタッタ コクサイ。 (^クウン) イッシェンモ アカンノヤ。
もらった 国債。 一錢も 駄目なんだ。

(63) シンナ ムコー ナッテモタ。 ワンショニ サガッテキマシタネ。
みんな 無効に なってしまった。 勲章に 下がって来ましたね。

ソノ コクサイガ モー アカンヨンナッテモタ。 ロッピャクエ
その 国債が もう 駄目になってしまった。 六百円と言

ンテ マタ ソノトキノ ロッピャクエン イケーゾ。 * (^クホー⁽⁶⁴⁾
うが また その時の 六百円は 大きいよ。 そう

ヤ) ウーン。 サンジューゴネンノサキノ ロッピャクエンタラ
です) ああ。 三十五年 前の 六百円と言うのは

イケーデッシャ。 ホンナコト ユート ミナ フラウケド ~~オカ~~
大きいですよ。 そんなこと 言うと みんな 笑うけれども

(65) シ オカシモ ナーモ ネンニャモ。 ソノトキノ ~~ッ~~ ロッピャクエ
おかしくも 何とも ないんですもの。 その時の 六百円は

(66) シッ マタ ホンナモン イケー ショタイヤッタンエ。 ホイデ
また そんなもの 大きい 所帯だったんです。 そして

ソレ サカグチノ ユービンキョク オクツチュア アカンチュニ
それ 坂口の 郵便局へ 置と言えは 駄目だって

ヤ。 ホンデ カナサエ オフッテモタンエ。 (^K アーア) ホ
言うんだ。 それで 金沢へ 迷ってしまったんです。 ああ

イタラ コレー シェンソニ マケタデショ。 (^K ウン) ホンデ
したら これ 戦争に 負けたでしょう。 それで

モー アカンテ ソノ シェンソニ イッタ ソノ コクサイノ
もう 駄目だって その 戦争に 行った その 国債の

カネワ ムコーヤツチュンニエ。 イッシェンモ アタラン。 ホ
金は 無効だって言うんです。 (68) 一銭も もらえない。 そ

デ ロッピャクエン ソノトキ サンネン ショーフ ニジューゴ
れで 六百円 (69) その時 昭和 (70)

ジューゴネン ジューロクネンヤ サカッテキタンヤデノ クンシ
15年 16年だ 下がって来たんですからね 勲章

ョト イッショニ。 ソノカリ (71) イッシェンモ アタラン。 ナナ
と いっしょに。 そのかわり 一銭も もらえない。 みんな

ムコーエ。 ホヤデ ヤッパ イケー ソンシテルフノ。 ホイデ
無効です。 だから やはり 大きい 損をしてるよね。 それで

(72) ナーンシテキタコツチャラ。 (73) ホイテ ウラ コレー アノ タケ
何をしてきたことか。 それで 私は これで 武生

(74) フ イッテ フフッシェンター イッテ コレ ナントカナランノ
へ 行って 福祉センターへ 行って これは 何とかならないの

(75) カッチュータラ ダマッテルサケ モー ユワンモ。 モー ユ
かって——言ったら 黙っているから もう 言わないもの。 もう 言

ータッテ アカンノヤ マー イノチダケ オイテモロテ マー
っても 駄目なんだ まあ 命だけでも 与えてもらって まあ

タッシャデ イルサケ ダンネワイ ホンナモン モウワンカッテ
元気で いるから いいよ そんなもの もらわなくても

ド-カッ チェンテ"サエ-シト⁽⁷⁶⁾ オモテ モー タ"マッ テルカ-⁽⁷⁷⁾.....。
どうかと言うのではなしと 思っ て もう 黙っているのですかね…。

注記

- (1) [kedo:ʔ]. 独特のイントネーション。 (2) [tokini:ʔ] (3) 貯金してあったお金。 (4) 家族の人数によって。 (5) [tanja no:ʔ]. 上昇調のイントネーション。相手に問いかける感じ。
- (6) [oməwto]. (7) [nɛ]. (8) [nɛ] (9) 幣貨改正をさす。
- (10) [o:tano:ʔ]. (11) [sitə]. (12) 「ヤ」がかすかに聞こえる。
- (13) [ɟwʔ:en]. (14) [dæ:bw]. (15) [nɔ]. (16) [paʔa]
- (17) 家号。 (18) 「エ」がかすかに聞こえる。 (19) こう聞こえる。
- (20) 幣貨改正を「貨幣封鎖」とも言った。 (21) [jannɔ]. (22) 現行で通用しない金ということ。 (23) [tokini:ʔ]. (24) 初めこう言うつもりだったのに、先に「ソノトキニ」と言ってしまったので言い変えた。
- (25) 「大金」の意。 (26) 「ホンテ」とも。
- (27) 「頭がおかしくなった」の意。 (28) [aʔ:aʔ]. (29) 「あいなく」の変化した形か。「間なく」で「まもなく」と解釈。 (30) 助詞は「オ」であるべき所。時折り「を」と「が」が混乱している。
- (31) 「当然もらえるはずの金も」という気持ち。 (32) [wano:ʔ]. (33) [tokimo:ʔ]. 独特のイントネーション。 (34) はっきりしない。
- (35) 弱く、ささやくように。 (36) [swkɛna]
- (37) [ginkɔ:ini]. (38) 「面白い」はこの場合、「妙な」の意。
- (39) 小さい声であいまい。 (40) 地方銀行名。 (41) 町名。武生市楠町。
- (42) 町名。武生市桜町。 (43) 桜町のちょうど道をはさんで向こう側に楠町があった。 (44) 倒置表現。 (45) 「山本氏が福井銀行に預けてあった金」の意。 (46) 特に意味はない。
- (47) [akannojaʔ]. (48) [akaʔ:ntʃwʔkoto]. (49) この前までが山本氏の銀行員に対することば。これが銀行員のことば。 (50) 小さく。
- (51) [kaɛʃe] の [ʃe] が無声化。 (52) [atone]. (53) [hɔdo]. (54) 早口で下降調のイントネーション。 (55) 「捨てておく」の意ではなく、「手をつけずに残しておく」とでもいう意。
- (56) 「使えるようになるか」の意。 (57) このように聞こえるか。

意味はわからず。(69)「景気もよくな、て来た」とでもいう意
 か。(60)「お金を」差し上げます。(61)無効の意。(62) [naŋæ:i]。(63)兵役の報酬として国から下がつて来た。(64)小
 さくかすかに。(65) [sonotokin°N]。(66) [enˈa]。(67)「財
 産」に近い意。(68) [iʃiˈenmo]。強勢の前で短い休止。(69)
 「その時の六百円は大きかった」というようなことを言いかけた
 か。(70)言いよどみというより言い誤り。(71) [sonok°ri]。
 「戦争に行って働いてきたかわり、今になって」という気持ちか。
 (72) [naˈi:n]。(73)「(何をしてきたことか)わからない」の意。
 (74)市の福祉センター。(75)国債が無効になつたことに対して、
 何の処置もとれないということ。(76) [næˈɜ:i]。(77) [ŋaˈiː]

8. 戦友の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y ホヤケド⁽¹⁾ モー タケフ イッテモ モ ワタシト イッショニ
けれども もう 武生へ 行っても もう 私と いっしょに (戦争

イッタノワ サンニンシカ インノエ。 (^K アーア) アノー
に) 行ったのは 三人しか いないんだ。 ああ

アノ ショーワチョーニ⁽²⁾ タナカッテ カミドンヤ アッテショ。
あの 昭和町に 田中という 紙問屋が あるでしょう。

(^K ウーン)⁽³⁾ タナカッテ (^K ウーン) イター カミドンヤ
田中という 大きい 紙問屋が

アルゲノ。 (^K ウーン)⁽⁴⁾ ニシショカッコノ (^K ウン) チョッ
あるじゃないか。 西小学校の 少し

ト コエニ。 アソコノ オヤジカ ウラト イッショエ。 (^K
前に。 あそこの 主人が 私と いっしょです。

アーア) コナイダモ ヒョコント オータラ ソリヤー⁽⁵⁾ メズラ
この間も ひょこりと 会ったら それは 珍しい

シーモン オータノ。 ナーンヤ カタカッタンカッテ。 イヤ
人と 会ったね。 どうだい 元気だったかいって。 いや

カタインニヤ。⁽⁶⁾ ホンナ イッペン ノミニイコサッタテ⁽⁷⁾ イヤー
元気なんだ。 それなら 一度 飲みに行こうと言ったから いやあ

オツツァラ⁽⁸⁾ト ノミニイクト ンナ イケー ショタイノモント
親父と 飲みに行くと そんな 大きい 所帯の者と

イナカノ ヒヤクヒ~~xxxxxx~~ ショーツレノ⁽⁹⁾ オツツァ ンナモン ツ
田舎の 百姓 なんかの 親父が そんなもの

ツッキアイ ナンシンノ イヤヤ ンナ アカン アカン マタ コ
おつき合いなと するの いやだ そんなの 駄目だ 駄目だ また 今
ンドヤッテ。 イヤ コンドッテユwant イッペン イッテコサ
度だ。 いや 今度と言わないで 一度 行ってこよう

ツチュー。 アンナモント ツキアイシット ナンカ イッケー
と言う。 あんな者と つき合いすると 何しろ 大きい

ショタイヤシ ンナモン (^Kウン ホーヤ ~~ホ~~ イッケー カミ
所帯だし そんなもの ええ そうです 大きい 紙

ドンヤヤノ⁽¹⁰⁾ イッケー ザイバッチャシ⁽¹¹⁾ ザイバッチャシ ンナ
問屋だおえ 大きい 財閥だし そんな

モン コンナモンニ アイテンナルト コリヤ (笑) イナカ
なもの なんか者に 相手になると これは 田舎から

デタモン ネコソギ⁽¹²⁾ ⁽¹¹⁾トラレテマウト アカンフト オモテ オクッ⁽¹²⁾
出た者は 根こそぎ とられてしまうといけないなと 思って やめる

チュテ オイタニ⁽¹³⁾ニヤカ。 (^Kウン) ホヤケド⁽¹³⁾ ホンナモンヤ
と言って やめたんだが。 しかし そんなものだ

ッテ (^Kウン) ⁽¹⁴⁾イマ サンニンシカ イン。 (^Kウン)
って 今はまだ 三人しか (戦友は) いない。

アノ カミチ⁽¹⁵⁾ノ スギタニッテ ⁽¹⁶⁾マタスケネ (^Kアー) スマシ
あの 上帝の 杉谷という 又助かね 醤油

ヤノ オトト。 (^Kアー) アニキデナシニ オトトンカタ。
屋の 弟。 兄きではなくて 弟の方。

アノ ヒトモ イッショニ シェンソニ イッタ……。
あの 人も いっしょに 戦争に いった……。

K アノ ヒトァ ドッカ ミシェ グイテナハレンケ。
あの 人は どこかへ 店を 出してらっしゃるんですか。

Y スマシヤ シテルケノ。
醤油屋 してますよ。

K アーア ホーケ。
ああ そうですか。

Y マタスケノ⁽¹⁷⁾ (K アーア) スギタニマタスケ シンナハラノカ
又助の(醤油屋) 杉谷又助は 知りませんか

アノヒト。
あの人。

K マタスケサン アンナハルー。
又助さん ございます。

Y ウン アソコノー オトト。
ああ あそこ 弟です。

K アー ホイテ アニキサンデ⁽¹⁸⁾ ナシニ オトトサンガ (Y アノ
ああ すると 兄さんでなくて 弟さんが あの

ミシェ) ミシェシテナハル。
店 店を やってらっしゃる。

Y ソノヒニ⁽¹⁹⁾ ミシェ イッテ マー アニキノ テットテンニャロケ
毎日 店に 行って まあ 兄きの(仕事を) 手伝っているんだらう
⁽²⁰⁾
ド。
けれど。

K アー ホーケ。
ああ そうなの。

Y アッコニバカリデ スマシ ハイタツシテルンニヤ。 (^K アー
 あそこにはかりいて 醤油を 配 達してるんだ。 ああ
 ホーケ) ジデン シャンノッテヤ。 ソレモ コナイダ ⁽²¹⁾ ホーラ
 そう) 自転車に 乗ってねえ。 その人 此の間 孫達を
 ツレテ エーガ ミニイコト オモテ ホーラ (^K ウーン) サ
 連れて 映画を 見に行こうと 思って 孫達 (^K ウーン) ミ
 ニニン ヨッタリ ツレテ (^K ウーン) (笑) エーガ ミニ
 人 四人 連れて (^K ウーン) 映画を 見に
 イッタンニヤ。 (^K ウーン) ホイタラ エーガカン / マエデ
 行ったんだ。 (^K ウーン) したら 映画館の 前で
 ヒョコント オーテノ (^K アーア) スマシニ。 (^K ウーン)
 ひっくりと 会ってね (^K アーア) 醤油(屋)に。 (^K ウーン)
⁽²²⁾ ナンジャ ミタコト アルンヤナ エー ナンジャイッテ。 ナン
 なんだ 見たこと ある(人)だね (こんな所まで一体)なんだって。 何
 デ オメー ホーラ ツレテ モー トシヨッタシ エーガ ミニ
 お前 孫達を 連れて もう 年とったし 映画を 見に
 イコト オモウンニヤッタラ (^K ウーン) ハハー イナカニ
 行こうと 思ってた"と言ったら (^K ウーン) ほう 田舎に
 イテ ソンナ ノンキナコタ デキルンカッ ⁽²³⁾ ~~テ~~ ⁽²⁴⁾ ~~ヤー~~ ~~ツ~~ ~~テ~~ ン キ
 いて そんな のんきなことが 出来るのかって。 だって のんびり
ナシエオアカン (^K ウーン) トシヨッテカラ ン ネ ヨクシエン
 しなくてはいけない (^K ウーン) 年とってから そんなに 欲げるこ
 ナランコトネー ⁽²⁵⁾ ケ / ッ テ ユーテ カラコーテイタ。 ホイテ
 とないじゃないかって 言っ たら 言っていた。 として
⁽²⁶⁾ イカニ (^K ウーン) ホナ イッペン ドツカ イッテコサーッ
 それなら 一度 どこかへ 行って二ようって

テ。 イヤー コリャ アカン コンナ コドモガ イルンニヤ
(言う)。 いや これは 駄目だ こんな 子どもが いるんだ(から)

アカン アカン。 ンナ アカンノヤ。 ンナ アンタラト イッ
駄目だ 駄目だ。 そんなのは 駄目なんだ。 そんな あなたと いっし

ショニー イカレンノヤ コドモー イルンニヤケ。 モ イカレ
よには 行けないんだ 子どもが いるんだから。 もう 行け

ン イカレン。 (^kウー ン) ナニショ モ コノトシンナルト
ばい 行けない。 何しろ もう この年になるとね

ノ (^kウ ン) ソノ ナツカシサケ ⁽²⁷⁾ ソノ イッペー ノミニ
その 懐しいから その 一杯 飲み

イコッテ テナフンノエノ。 (^kウー ン) ドッ カ イ
行こうと言って かなわないんです。 どこか ー

⁽²⁸⁾ ッペー イッテ ノンデコサッ チュテ (^kウー ン) ウン。 イク
杯でも 行って 飲んで二ようと言って うん。 行

ンナー イーケド (^kウ ン) ヒトリントキネヤー イーケドノ
くのは いいけれども ひとりの時はねえ いいけれどね

(^kウ ン) コドモ ツレテテァ ンナモン ノンダッテ オモシ
子どもを 連れていては そんなもの 飲んだって 面白く

ロネーシ (^kホリャ ----- ウン。) アカン アカニチュニヤ。
ないし それは…… 駄目だ 駄目だって言うんだ。

ホイテ コドモ ツレテルトキバツカリ アウンニヤッテ イジノ
そして 子どもを 連れていてる時はかりに 会ったって 意地

ワルイ。 (笑) コドモ ツレテイントキネヤー カマフンノヤケ ⁽²⁹⁾
の悪い。 子どもを 連れていない時には 構わないんだけ

ド。

れども。

注記

- (1)「ホ」は短かい音。(2)町名。武生市昭和町。(3)よく知らないという感じの返事。(4)力をこめて言う。(5)「かたい」は「元気」,「丈夫」の意。(6) [katæ'ɲɪa]。(7)「デ」は弱い。このあたり山本氏と相手のことはが交互に来る。(8)輕蔑の意が少し加わる。「う」も複数を表わすのではなく、「～など」という意で見下した感じを与える。(9)「ツレ」は「連中」の意か。(10) [ja'janɔ]。(11)「金を(とられる)」つまり使わされるということ。(12)「おく」は「止める」,「よす」の意。(13)「ジャ」とも聞こえる。(14)「イ」は短くかすか。(15)町名。武生市上市町。(16)醤油屋の屋号。(17) [mataswkeno'ɪ]。独特のイントネーション。(18)「サン」と「デ」の間に小休止。(19)「その日,その日に」の意で「毎日」ということであろう。(20) [kedo'ɪ]。(21)普通は「ボー」は「坊」の意で「子ども」のことであるが、ここでは山本氏の孫である。(22)ここからしばらく、山本氏はいかにも相手と自分が話した時に似せて話す。(23)「出来るのかって(言う)」の意。(24)前のことはにすぐ続いているが、この部分はあとにかかって行く。発音はあいまい。(25) [ne'ɲɛno]。(26)「エーカニ」とも聞こえるが、あいまい。(27)「昔の友人に会うのが(嬉しいから)」の意。(28) [ippe]。(29)「いっしょに飲みに行っても(構わない)」の意。

9. 娘の結婚

話し手

(田舎号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

K ホラ ムカシモ ケッコンシキツチュト ヤッパ オゾイコト ナ
それは 昔も 結婚式と言うと やはり ひといい目に
(1) イマシタンネ イマモ ヤッパ ホーデスネ。(2) ケッコンシキツチ
あいましたけれども 今も やはり そうですね。 結婚式と言うと
ユト ヤッパシ イロシナ ネー オカネガ カカリマスゲネ ム(3)
やはり 色々な ねえ お金か かかりますよねえ 娘
スメ モッタ オヤワネー。(4) デ ムカシワ ヤッパ イナカグレ
を 持った 親はねえ。(それ) 昔は やはり 田舎ぐら
ーヤト オカネガ ネー。(5) ホンネ ハイリマシエンサケ ヤッパ
た"と お金か ない(です)。そんなに (金)か) 入りませんから やはり
オゾイコッタヤッタヤロナート オモイマス ウーン。(6) イマー...
たいへんなことだった"ろうなと 思います ええ。 今とは
トァ マタ アノ イショーモ チガイマスシネー。 シナ ヨー
また 衣装も 違いますしねえ。 そんな 洋
フクナシカー ムカシ ハヤリマシエンデー。(7) シナ ヨーフクナ
服なんかは 昔は はやりませんから。 そんな 洋服など
ンチャ イチメーモ アリマシエンゲドネ。 ウーン。 ヤッパ
と言うのは 一枚も ありませんけれどもね。 やはり

ケッコンシキヤ イッショニ ⁽⁸⁾ イチレー ヤッチュ マスケド イマモ
結婚式は 一生に 一度 たって言いますけれども 今も

ムカシモ ヤッパ オヤワ オゾイコト ナイナシマシタンニヤワ
昔も やはり 親は ひどい目に あったんですよ。

ネ。 ウーン。

Y ホンナ モー ~~コ~~ ヨメインノ ハナシシルト モー ~~ホニナモ~~
そんな もう 嫁入りの 話をすると もう

ホンナモン カスナモンジャモ。 (^K ウーン) ワタシャー コ
そんなもの たいへんなものなんですもの。 私は こ

レ オンナ ヨッタリ ヨメニ ダイタンニヤカ オゾイコッチャ
れで 女を 四人 嫁に 出したのですが たいへんなことだ

ッタワネ。 (^K ホヤー) イヤー ⁽⁹⁾ ホンナコトユート マター
ったねえ。 (そうですね) いえ そんなことを言うと また

ワカコノ ハジオ タダ ダイタンニヤケド ⁽¹⁰⁾ ホリヤ ⁽¹¹⁾ メーロ ヨッ
自分の子供の 恥を ただ だしたようなものだけれども それは 女が 四人

タリ アルト ホリヤ ホントネ アタマ アカランワネ。 * ⁽¹²⁾ アー
あると それは 本当に 頭が 上らないね。 ああ

メーロ ヨッタリ ヨメン ヤッテ ンナ コドモ マゴ ン
女を 四人 嫁に やって みんな 子どもが 孫が みんな

ナ アルワ。 (^K ジョーズニ ンナ コドモ サン シアワシエ ⁽¹³⁾
な あります。 (上手に みんな 子どもさんは 幸せか

イーデノー。) イマ アルサケヤケドー。 (⁽¹⁴⁾ ^K ウン) オゾイ
いいからねえ。) 今は (子どもがあるから) だけだけれども。 ひどい

コト ナエンシタワノー。

目に あいましたわねえ。

K ホリャ オゾイコッチャフ / オヤワー。⁽⁴⁵⁾
それは たいへんなことですよええ 親は。

Y ホリャ イケバン アトラノ ヨメニ ヤットキラニャー ホン
それは 一番 あとの(娘)を 嫁に やった時などには 本当
トニ ヤッパ モノ⁽⁴⁶⁾ カヤー アルンニャシ (^K アー) マー
に やはり 物を 買えば あるんだし まあ

ヒトトーリ ソロエテヤランナランッテ ヤッテ サー イナカヤ
ひと通り (嫁入り道具を) そろえてやらなくてはいけなくて (そろえて) やって さあ 田舎だ

サゲッテ コメ イッピョー カワキシエテ アンナ (^K アー)
からって 米の 一俵も 上皮をかぶせて あんぱに⁽⁴⁷⁾

ワザニノ カワキシエテ (^K アーア) トーントシテ ノシテヤ
わざわざ 皮をかぶせて どんとして 乗せてや

ルンニャー。⁽⁴⁸⁾ ソラ マチェ マルト ソンナモンニャカ。 ^{ホヤム}
るんだ。 もりゃ 町へ (嫁に) やると そんなものだからねえ。 けれど

⁽⁴⁹⁾
ど ヨー ウラ ヤッテキタト オモイマスカ。
も よく 私も やって来たと思いますがねえ。

K ホントヤ エラカッタノー。⁽²⁰⁾
本当に 立派でしたねえ。

Y ウーン ホリャー……。
うーん それは……。

K ナカナカ オゾイコッチャデー⁽²¹⁾ ヨメニ……。
なかなか たいへんなことだから 嫁に……。

Y デヨーッタカト マ ソラ カスナ ダンナンショ マカシェノ コ
(嫁への)出る様子と言っても まあ それは たいへんな 金持ちの(家が) するような 準
シラエモ デキンケド マー ヒトトリダケワ シテヤッタヤサ
備も できないが まあ ひととおりだけは してやったのだから

ケ。 ホンデモ コドモラ ヨロコンデ。 ホイテ マタ コドモ
それでも 子ども達は 喜んで(いた)。 そして また 子ども

ラ ナ シエ... (^K シア ワシエカ イーデノー) ネー ヨッ
達は みんな (幸せが いいからねえ) ねえ 四

タリトモ ナ (^K ウーシ) リッパナ ウチオ タテテ (^K
人とも みんな (立派な 家を 建てて

ホヤー) ヤシキ コーテ ウチタテタデ (^K ホヤー) マ ソ
そうです) 屋敷を 買って 家を建てたから (そうです) ま そ

レデ イーワイト。 (^K ナ シヤシエ...) モ コ
れで いいかと。 (みんな 幸せ...) もう 今

トシラ イケー ソンジャソノ フタリトモ ウチタテサラスター。
年ほど 大きい 損ですよ (娘が二人とも 家を建てやがるから。

K アー フタッ フタリジャッタンケノ。
ああ 二人(とも) だったのですかねえ。

Y アネト イモートトー。
姉と 妹と。

K アー イケダノモ ホヤッタンケノ。
ああ 池田(へ嫁に行った人)も そうだったのかいねえ。

Y イケダノ フタリ。 (^K アーア) イケダ イッタ フタリトモ。
池田の 二人。 (池田へ 行った 二人とも。

K アーア イケダノガ フタリジャッ (⁽²⁵⁾) タテナシタンケノ。
ああ 池田(へ行った娘さん)が 二人だ 建てられたんですか。

Y アー イー ウチ タテタワイノ。 ナ イケー (^K アー)
ああ 立派な 家を 建てましたよ。 みんな 大きい(家を)

ロクハチノヤツ。
(27)

六間に 八間(はつ)の ですよ。

K アー ホンデ⁽²⁸⁾ ヒデー イケーゲノ。
ああ それでは ひとく 大きいですよ。

Y イケー⁽²⁹⁾ (^Kウー ン) ロクハチノ ヨツツメニ ホイテ コー
大きい 六間八間の 四つ目に そして こう

ンナ カッテガ アルンデショ。 (^Kウー ン) ホイテ コノ
みんな 台所が あるのでしょうか。 そして この

オーシェツマ アンデショ。 (^Kウー ン) ~~ンナ~~ ~~ンナ~~ モー
応接間が あるのでしょうか。 そんなもの もう

ジェータクナモンジャワイノ。 ⁽³⁰⁾ ンナー ヨッポド ジェン^カ ^タ
せいたくなもんです。 みんな よほど 金^カ

マツタンヤナー (^Kヤマドコヤサケ ヤッパ キカ アンナハ…
たまにたんですねえ 山所だから やはり 木^カ おおりに…

…) ~~キカ~~ ⁽³¹⁾ キカ アルシノ。 (^Kオ ン) キオ フロニ ナンジ
木^カ あるしね。 木を(切るの) 苦勞はないんだ

ヤケ ナンカ (^Kキカ アンナハルデノー) ニサンゲン タテ
から 何か 木^カ おおりになるからねえ ニ・三軒(の家を) 建

タツテ アルツチュンニヤサケ テナワンゲノ。 ⁽³²⁾ (^Kオ ン)
ても あると言うんだから かないませんよ。

⁽³³⁾ ナ イモートントコラ ホンナモン (^Kウー ン) ジブンノ ~~カ~~
そんなもの 妹の所ねえ そんなもの 自分^カの

~~マ~~ ヤマノキ サンゲンモ シケンモ タテルキ アルツチュンニ
山の木は 三軒も 四軒も 建てる木^カ あると言うんだか

ヤケ (^Kウー ン) ソラ モー イバツタモンジャモ。
ら。 それは もう 威張ったものですもの。 ⁽³⁴⁾

K ホントヤノー。 ⁽³⁵⁾
本当だねえ。

Y アイデ イモトノウチャ ドーシテ アンナ イケー ショタイニ
あれで 妹の 象は どうして あんなに 大きい 所帯に

シタンヤロト オモウカノ。
したんだらうと 思いますかね。

K アー ア ⁽³⁶⁾ ホー ケノー。
ああ そうかねえ。

Y ソレー イママデ⁽³⁷⁾ オッツァ シンデカラ ヤット ウラニ イー
それを 今まで (向うの) 親父が 死んでから やっと 私に 言い
ニカカッタンエ。
始めたんです。

K ウン。 アー イマ モー ア ヒトオヤ ヒト (^Y ヒト) ヒ
ああ 今ほ もう
⁽³⁸⁾
トオヤ シニナシタ……。
ひと親 亡くなられた……。

Y ウン キョネン オトトシカノ。 (^K アー ホーケ) シニナシ
ええ 去年 おとししかねえ。 (ああ そう) 亡くなられた
タンエ。 (^K ホーン) ソネ マデワ (^K ウン) ⁽⁴³⁾ イッ タカ
んです。 (^K ホーン) それまでは (^K ウン) ⁽⁴³⁾ (家) 行っても、

ッテ ソノ ヤマータラ ナンタラッテ ウラニャー ヒトコトモ
その 山とか 何とからて 私には ひと言も

ムスコワ ユフナンダケド⁽⁴⁰⁾ (^K ウー) オヤ シンダラ⁽⁴¹⁾
息子は 言わなかったけれど (^K ウー) 親が 死んだら (

^K ウン) トーチャン コーユトコニ コーユーヤマモ アンニャ
父ちゃん こういう所に こういう山も あるんだ

シノ (^K ウン) トーチャンニモ ユートカナー ワタシャー
しね (^K ウン) 父ちゃんにも 言っておかなければ 私は

ヤッパ ワカイトキ カジエテ ナシネンカンモ ⁽⁴²⁾ アーヤッテ ジ
やはり 若い時 風邪で 何年間も ああして 自

ドーションノッテ ナンシテンニヤサケー ⁽⁴³⁾ (^ク アーア) ソレダ
動車に乗って 何しているのだから それだ

ケフ チョット ニギワルテ ⁽⁴⁴⁾ タムムッテ ユーフーニフ (^ク ウ
けは ちょっと 頼むって 言うふうに(言った)).

ーン) アー マー コレテ ケッコナコッチャナ ソンナコト
ああ まあ これで 結構なことだな そんなことを

⁽⁴⁵⁾ ユーテフレルダケテモ ⁽⁴⁶⁾ マ エーフィナト コー オモテ-----。

言ってくれるだけでも まあ いいなと こう 思っているんです。

K イマモ スミヤキシテナハルンケ。

今も 炭焼きをしていらっしゃるんですか。

Y イマ シェンノヤ。

今は しないんだ。

K ア マ モ ショーバイ カエナシタン。

ああ もう 商売を 変えられたのですか。

Y アー。

ええ。

K アー ミンナ シャフシェカ イーデノ。

ああ みんな 幸せが いいからねえ。

Y アー。 ホンデ スミヤキシタカッテ ンナモー ツキニ ニヘン

ああ。 それで 炭焼きをしても そんなもの 月に ニ回

モ サンベンモ ダスンニヤケ ンナモン タイシタ カネヤザ。

も 三回も (炭を) 出すのだから そんなもの たいした 金ですよ。

(^ク アーア) ウン。
うん。

K ホンデワ テバヤナンニャノ。⁽⁴⁷⁾
それでは(仕事) 手早やなんだね。

Y ハエンニャ。 シナモ ホイテ ナンジャモ ヒトト チャウモ。⁽⁴⁸⁾
早いんだ。 そんなもの そして 何でも 人と 違うもの。

K ウーン。 タイカワカ インニャロシ。
うーん。 体格が いいんだろし。

Y ウン インデス。 (^K オーン) スミ ヤケテマウデショ (
ええ いいんです。 ああ 炭が 焼けてしまうでしょう

^K オン) ホイト カマカラ ンナ ジェンブ ドーット モー
ええ) すると 釜から みんな 全部 どーっと もう

(^K オン) ⁽⁴⁹⁾ カマ ンナ ジェンブ ヒョーニシエント ンナ ダ
釜を みんな 全部 俵にしないで みんな 出

イモテ ホテ キー ターット ンナ イモテ(^K アー) ヒーツケテ ホテ ヒーツケテ バンシガテラネン
にはえ して 木をざーと みんな入れてしまて 火をつけて して 火をつけて 番をしながらね みんな

ナ ヒョーシテルワネ。 (^K アーア) ンナモ チョットモ カ
な 俵をしてるよね。 そんなもの ちっとも 釜

マモ ヤスマシエン。 (^K ウーン) ⁽⁵⁰⁾ ホンデ (^K デー...) ソ
も 休ませない。 として

レデモ ヒマツカラ デンニャデ イケージャ。 ホヤクトー ⁽⁵¹⁾
れでも 白から (俵が) 出るんだから 大きいですよ。 けれどもね

^K イケーコトヤー) ソンナコトバツカ シテルト カラダ ヨワ
大きい ことです) そんなことはかり していると 体が 弱る

ルサケツテ (^K オン) コンダ シゴト カエタン ⁽⁵²⁾ (^K アー
からって 今度 仕事を 変えた。 ああ

ヤメナシタン アーア。) ホンデ ⁽⁵³⁾ イマ ジドーシャン ノ ッター ⁽⁵⁴⁾
やめられたの ああ) それで 今 自動車に 乗って

マエニチ⁽⁵⁵⁾ ヒトオ ジューナンニンッテ ニンブオ ノシエテー
毎日 人を 十何人って 人夫を 衆せて

ドッカ (^K アー カヨテナハルン) サバエノ⁽⁵⁶⁾ ホーエ イクンデ
どこか (ああ 通っていらっしゃる) 鯖江の方へ 行くんで

スガ サバエノ ナンタラユー カイシャ イクンデスガ。 (^K
すが 鯖江の 何とか言う 会社へ 行くのですねえ。 (

アーア) ホンデ ラクヤテネ。⁽⁵⁷⁾ (^K ウン) カラダガ。 (^K
それで 楽だっけね。) 体が。 (

ウーシ ソーヤンノ⁽⁵⁸⁾ アンマリ アツタ~~xxxxxx~~ アツ~~xxxx~~ ヤ ヤッパ
ああ そうでしょうね) あまり ~~xxxx~~ やはり

アンナシット アツイシノ カラダガ。

あんた(炭焼きを)すると 暑いしね 体が。

K ジカンニ カインナハラレルデ⁽⁵⁹⁾ (^Y ウン) カイシャワノ。⁽⁶⁰⁾
(決まった)時間に 帰られますから () 会社はねえ。

Y インデ ウチー ハヤメニ カイルシー⁽⁶¹⁾ (^K ウーシ) ホイテ ヒ
それで 家へ 早めに 帰るし () そして 百

ヤクショーモ シェナアカンシー。⁽⁶²⁾

姓(仕事)も しなくては いけないし。

K ウン。 タンボモ ツクッテナハルデー。

ええ。 田んぼも 作ってらっしゃるからねえ。

Y アー。 ホンデ ヤマバッカ イッテルト ソノ ヒヤクショー
ああ。 そして 山ばかり 行っていると その 百姓(仕事)が

オロソカンナンニヤッテネ。⁽⁶³⁾

おろそかになるんだってね。

K ウーシ ソヤロー。⁽⁶⁴⁾

ああ そうでしょう。

Y ウーン。 ンデ モー ヤッパ カマデルト キネャ イーナアカン
それで もう やはり 釜から(炭が)出る時には(側に)いなく

シ (^Kウーン) キー キラナアカンノヤシ。
てはいけな 木を 切らなくてははいけなんだから。

K ソー ソー キー キラナ-----。
そう そう 木を 切らなくては……。

Y キー ヨシエナアカンノヤシ。 (^Kホージャ ホージャ) ンデ
木を 集めなくてははいけなんだし。 (そうです そうです) それ

モ ホンナコトシテルト カラダバッカ モネテ (^Kウーン)
でも そんなことしていると 体ばかり ----- ええ

アトニャ カラダ ワコーテ ヨワシテマウサケッテ (^Kウーン)
後には 体を 若くて 弱くしてしまうからって ええ

コンダ ヤメタンエ (^Kアー ホーケ) キョネン キョネンカラー。
今度 (炭焼きを)やめたんです (ああ そうか) 去年から。

(^Kウーン) アンマリ アツイ シコトバッカ カマ アツイシネ。
あまり 熱い 仕事ばかりは 釜が 熱いしねえ。

(^Kホーヤッテノー) ホイデ ヤメタンニエ。 (^Kアー ホー
そうだってねえ) それで (炭焼きを)やめたんです。 (ああ そう

ケ) タラ ジブンノ ヤマ モー サンネン ヨネン ゴネン
か) もしたら 自分の 山では もう 三年や 四年 五年

ヤイタッテ ヤケワシエンノヤッ チュンニャケ (^Kウーン) エ
焼いても (全部の木は) 焼けはしないんだからって言うんだから (ああ) ね

ー ヤッパ ダイズ イケーコト アンネャ チカイネー。 (^K
え やはり 大分 たくさん あるには 違いない。)

ホヤノー) ウーン ホンナコト ユンデワ。 (^Kウーン) ホ
そうだねえ) うーん そんなことを 言うんでは。 () そ

ンデ⁽⁶⁷⁾ マー イーワイ マ ダンネ ナントカナルゲッタラ ~~~~~
れで まあ いいよ まあ いい 何とかやるよと言ったら

~~~~~<sup>(68)</sup> モーチョット<sup>(69)</sup> トショツテカラ<sup>(70)</sup> ボチボチ  
もう少し 年とってから ほつほつ

ト ヤコカート オモテ。 ( <sup>k</sup>ウーニ ) マ イマ ワカイアイ  
と炭を焼こうかと思ってる(と言う)。 まあ 今 若い間は

が アンマリ カラダ ムリシテ イタメテマウト…… ( <sup>k</sup>ウニ  
あまり 体を 無理して 痛めてしまうといけないと思ひ )

ヤメタンニヤツケン。  
やめたんだと言う。

K ヤマドコ<sup>(71)</sup> イキナシタデノー。 ウン。<sup>(72)</sup>  
山所へ いらっしゃったからねえ。

Y イヤー コンダ~~xxxxxx~~ コンダ フケイ タテテモタンエ。  
いや 今度 家は 口の方へ 建ててしまったんだ。

K アー ウチ。 バショ カワッテ。  
ああ 家を。 場所を変えて。

Y ウーニ コンダ マタ ベツノ ヤシキオ トーット フケ デテ  
うーん 今度 また 別の 屋敷を(買ってね) ずーっと (村の) 口へ出  
モテ。

てしまて。

K アー<sup>(73)</sup> ムラノ ベンリイートコ デナシタンニヤ。  
ああ 村の 便利のいい所へ 出られたんですね。

Y ウン ホン ミチノ トーリバタノー。 ( <sup>k</sup>アーア ) ムラノ<sup>(74)</sup>  
ええ (ほんの 道の 通り端の(所へ)。 ) 村の

マンナカエ デテモタンエ。 トーットフケ。 ( <sup>k</sup>アー ホーケ。  
真中へ 出てしまったんです。 ずーっと口の方へ。 ) ああ そうですか。

ウー ン) イヤ ヨー アンナト コエ エー ヤシキ<sup>(75)</sup> タテタト<sup>(76)</sup>  
 いや よく あんな 所へ いい 屋敷を 建てたと

オモウカネ。 ( <sup>K</sup>ウー ン ) ヤッパ ジェンカ<sup>\*</sup> アルサケエ カ  
 思うけれどね。 やはり 金が あるから 買

エンニヤケド。 ( <sup>K</sup>ウー ン ソーヤ ) アノ カ カミノ ソネ<sup>\*\*\*\*</sup>  
 えるんだけれど。 うーん そうです。 あの 上(中津原)の

ーモサンカラ<sup>(77)</sup> キナシタノー ( <sup>K</sup>アー ハー ) ソネモサンエ  
 そねえ門さんから いらっしゃたねえ ああ けあ そねえ門さんへ

( <sup>K</sup>ハー ハー ) イケダカラ キナシタ ( <sup>K</sup>ウー ン ソーソー )  
 けあ けあ 池田から いらっしゃた ええ そうそう

ソノヒトカ<sup>(78)</sup> ダイブ オクヤケド ソノ マタ クチエ デテモタ  
 その人(家)が 大分 興たけれど その また 口へ 出てしま

ンヤデノ。 ( <sup>K</sup>オー ン ) トーット クチエ デテモタンエ。  
 ったんだね。 へえ ずっと 口の方へ 出てしましたんだ。

( <sup>K</sup>ウー ン ) デ アンナト コデ ヨー アンナ エー ヤシキ<sup>(79)</sup>  
 それで あんな所で よく あんな いい 屋敷を

カワレタトオモテ。 ( <sup>K</sup>アー ア ) ソレカ ニケンクレア タデ  
 買えにと思って。 ああ それが ニ軒くらい (家)建て<sup>(80)</sup>

ルバ アンニヤジャゾ。 ( <sup>K</sup>アラー ホー ン ) イケー ヤシキオ  
 る場所があるんだ。 あら へえ 大きい 屋敷を

コーテモタンエノ。 ( <sup>K</sup>ウー ン ) ンデ-----。  
 買ってしまったんだよ。 として

K ホイテ タンボ ツブシナシタトコエ タ-----。  
 として 田んぼを うめ立てた所へ 建てた……。

Y イヤ ソンネンニエ ソノ ----- ( <sup>K</sup>ヤッパ ヤッパ ウー ン ) ア  
 いや そうではないんだ その…… やはり あ



ンデー ソコニ ダレカ イタ ヒト ガー アレ チニシタ ッタンヤ  
れて、 そこに 誰か(知らないが) (誰か) 居た 人が 荒地 にしてあ、 たんですわ

ノー ( <sup>(81)</sup> <sup>K</sup> アーア アーア ) ハタ ケヤ アキチンナ ッテ モテ (   
え ( ああ ああ ) 畑や 空地 になつてしまつて

<sup>K</sup> アーア ホリヤ イートコエ ----- ) ソノ デタヒトニ カイニ  
ああ それは いい 所へ .... ) その(土地を) 出た人の所に 買いに

イッタンヤ ッテネー ( <sup>K</sup> アーア ウーン ) ホイタラ アンタナ  
行つたんだってわえ ( ああ ) そしたら あつたな

ラ ウッテヤルット。 ホイタラ コータ ッチュテ テーウッテ  
ら 売つてやると(言う)。 そしたら 買ったと言つて 契約をして

ジェン ウッテモタンエ ( <sup>K</sup> ウーン ) ウン ダイブ タカカッ  
金を 渡してしまつたんだ ( ) 大分 高かつた

タラシケド。 ソラ マー ホンノ ミチノ イー リッパナ ミ  
らしいけれども。 それは まあ ほんの 道の いい 立派な 道

チノ トーリバタノ ( <sup>K</sup> ウーン ) ホンヨコエ モノ タテタン  
の 通りばたの ( ) すぐ 横へ 家を 建てたん

<sup>(82)</sup> ヤサケ ( <sup>K</sup> ウーン ウーン ホーケ ) コッデ ヤッパ ホデ  
だから ( ) うーん そうか ) これで やはり それで

イマ シアフシエヤ。 ( <sup>K</sup> ウーン ) マダ イチドモ オクニ  
今は 幸せですよ。 ( ) まだ 一番

イタンヤ オクニ イルンニヤ デノー ( <sup>(83)</sup> <sup>K</sup> アーア ) ホレカ ト  
xxxxxxxx 奥に いるんだからわえ ( ) ああ ) それが す

ーット クチー デエテ ホンノ ミチバタノ イー トコエ デ  
うと 口の 方へ 出て すぐ 道端の いい 所へ 出

タンニヤデ。 ( <sup>K</sup> ホーケ ) イケエー ウチ タテテ コナイダ  
たんだから。 ( ) そうか ) 大きい 家を 建てて この間 <sup>(84)</sup>

ボンニ キター モー カベ ツケテモタンニヤシノ カワラモー  
盆に(糸田)来て もう 壁も 塗ってしまったね 瓦も

ンナ ノシエテモタンニヤシノーッテ。 ンナ オジジニ ナンシェ  
みんな のせてしまったんだしねえと言って。 それではおじいちゃんに 何しに

ニ テッテニ コイツンニヤッテ マー (K ウン) コンダ  
手伝いに 来いと言うんだって まあ (K ウン) 今度

ヤドカエシットキニ イッペン テッテニ キテモラワナ。 アー  
ひっこしする時に 一度 手伝いに 来てもらわなくては(と云) ああ

ホーカ (K アーア (87) ホーン) ソー ユーテ イマ イッショケ  
そうか (ああ へえ) (と)そうかと言って 今は一軒懸命

ンナ シテンニヤサケ ンナ イッタッテ アカン。 (K ウン)  
建てているのだから そんなもの 行っても(糸田)役に立たない

タテマエヤナンカニ イッテキタンデスケドー。  
建て前やなんかには 行って来たんですけれども。

K アー ヒチカツネ タテナシタンケ。 (K ウン) アーア ホー  
ああ 七月に 建てられたんですか。 (ええ) ああ そう  
ケ ウーン。  
か。

Y (88) モー フタリヤ ツズケテ……。  
まあ 二人が 続けて(建てるから)……。

K アーア コトシャ ホンナニ イッショナ ニケン タテマエ シ  
ああ 今年に そんなに いっしょに ニ軒の 建て前を な  
ナシタンニヤ。  
さ、たんですね。

Y アン アー ヨー ヨワッテモタンエ。 アネントコヤ モー ジ  
ああ ひどく まいってしまったよ。 姉のところは もう 十

ユーイッ カッテ <sup>(89)</sup> イッタンニャ。 ( <sup>K</sup> アー ン ) <sup>(90)</sup> キソカラ ニナ  
何日って 行ったんだ。 ああ (家の基礎作りから みんな

ヒッパラレテモタンエ。

呼ばれてしまったんだ。

K アーア タウエ スグ・スンデカラ スゾヤノ。  
ああ 田植え すんでから すぐですね。

Y ウン。 ホーリャ ヨワッタンエ。 ホリャ ナンシニコ <sup>(91)</sup>ーイ カ  
ああ。 それは まいったんだ。 くら 何をしにこい あ  
ンシニコイッテ ( <sup>K</sup> ウー ン ) デンワ カカッテフル。 ホーデ <sup>(92)</sup>  
れをしにこいて 電話が かかってくる。 それでも

エ ( <sup>K</sup> ウー ン ) ヤッパ ワカコァ カワイサケ イカナアカン  
やはり 我が家は かわいいから 行かなくてはい

ト オモテ。

けないと 思って。

K ホーヤ。 ホリャ ホーヤ。 ( <sup>Y</sup> 笑 ) ウー ン ホーケ。 ホンデ  
そうです。 それは そうです。 ああ そうですか。 それでは

モー <sup>(93)</sup> ホントニ タノシミヤワノー。  
もう 本当に (皆さん) 楽しみだわねえ。

Y ホンデ マー イマ イマ イツナンドキ イッテモ ウレシヤ  
それで まあ 今は いつ何時 (娘の所へ) 行っても(大丈夫だから) 結構

ト オモテ。 ( <sup>K</sup> ウー ン ) マー フクイラモ アデ マ アン  
だと思て。 まあ 福井の(娘の家)なども あれで まあ あれ

デ フクイラ モー ハジメ タテ タメニ <sup>(94)</sup> <sup>(95)</sup> ホー ン イッケンヤ  
で 福井の(娘)なども はじめ 建てた時には ただそのあたりに一軒だっ

ッタンエノ。 ( <sup>K</sup> ウー ン ) モー ソノアタリ モ ヨンジュッケ  
んだよ。 (それが) もう (今では) そのあたり もう 四十軒くらい

ングレ タテタエ。 ( <sup>K</sup> アーア ) デ ソコノ ホニチャンエノ  
が (家を) 建てたよ。 ああ (それで) その

( <sup>K</sup> アーア ) ウチワラエ <sup>(97)</sup> デンフ タツテノ ( <sup>K</sup> アーア ) モ  
ああ 電話が 立ってね ああ も

ー ナ ソレ ナ リッパナ ウチャ・ タツテモタンヤデ マ  
う みんな それは みんな 立派な 家が 建てしまったんだから ま

ー アソコエ デッダケカ イチバン ハヤカッタサケーヨ。 <sup>(98)</sup> ヤシ  
あ あそこ(の場所)へ 出たのだけが 一番 早かったから。 (その辺)の屋

キ ダレモ ナ イナシタサケー。

敷に (まだ) 誰も そんな いなかったから。

<sup>(99)</sup> K ソレ マエヤツテ ヨカッタワノ <sup>(100)</sup>  
それは (そんな) 前で よかったよねえ。

Y ホイテ ホニノ ミチバタノ ( <sup>K</sup> ウン ) ホニノ <sup>(101)</sup> エートコエ <sup>(102)</sup>  
そして すぐ 道端の、 ひどく いい所へ

タテテモタンヤケ アレデ ウマイモンジャモ。 <sup>(103)</sup> ( <sup>K</sup> ウン ) ホ  
建てたもんだから あれで うまいもんだよ。 そ

イデノ マエノエ ジョーサン コー ナンゲンモ タツタ ソノ  
れでね 前の方へ たくさう こう 何軒も (家が) 建った その

<sup>(104)</sup> シタエ ( <sup>K</sup> ウン ) アノ テツカン ウズメテ ホイテ ヤマノ <sup>(105)</sup>  
(家の) 下へ 鉄管を うめて - そして 山から

デル キレーナ ミズ ソレガ コンコント ( <sup>K</sup> アーア トツテ  
出てくる きれいな 水 それが 渾々と ああ (その水をとて

--- ) <sup>(107)</sup> ウチー ヒッパットケツテ ユータンエ。 ( <sup>K</sup> オーン )  
... (お前の) 家へ 引いておけと 言ったんだ。 ああ

ホジジ ウマイコト ユーノッタラ ホンナラ ソーシルカノ。

おじいちゃん うまいことを 言うねと言って それなら そうするかね(と言う)。

ウー ン ダンネ ジェンカカッテモ ソーシトケ アトカラ ラク  
あめ いいよ 金がかかっても そうしておきたい あとで 楽だ

ヤデナ ( <sup>K</sup>ウー ン ) コンナ チョビチョビノ ミズワ ( <sup>K</sup>ウ  
からね ) こんな 清んだ 水は

ン ) ナカナカ トロツタッテ トレンノヤ ソリヤ スイドーワ  
なかなか とうろと思つても 手に入らないんだから そりゃ 水道は

スイドーヤ ナニヤ <sup>(109)</sup>フルケド ( <sup>K</sup>ウー ン ) トットケ マ コ  
水道だ 確かに(水は)来るけれども 引いておけ まあニ

ンナ ンナモン ダーレモ マダ ハイランノヤシ ヤシキヤ ウ  
んは そんなもの 誰も また(その辺に) 入っていないのだし 屋敷は 売

レテエンノヤ ソノ シタ クグッテ ダエートクノワ ニンナラ <sup>(110)</sup>  
れてないんだから その 下を くぐって (水を) 出しておくのは かまわな <sup>(111)</sup>

ンサケツタラ ( <sup>K</sup>アーア ) ダンネヤロカッテ ダンネクレーノ  
いんだからと言たら ああ いいだろうから言うから いいよ (その) <sup>(112)</sup>

シタ クグッテラ ンナ ニンナラシエ。 ホカナ。

下を くぐっていて そんなもの かまわないよ(と言たら) そうかな(と言って)。

K <sup>(113)</sup>ンデァ <sup>(114)</sup>イー <sup>(115)</sup>ジキン カイナシタモノー。

それでは いい 時期に 買われましたよねえ。

Y <sup>(116)</sup>ホイテ テッカシ クグアイテ シタ トーシタンニヤ ( <sup>K</sup>ウー ン  
そして 鉄管を 通して 下を 通したんです。

) <sup>(117)</sup>ホイテ ソレオ ~~ソノ~~ ソノ ミズデ コー シェンスイ コシエテ  
そして その 水で こう 泉水を 作って

ソレニ <sup>(118)</sup>キンギョ <sup>(119)</sup>コイガ <sup>(120)</sup>イルンニャー。 ( <sup>K</sup>ウー ン ) ホリ  
それの中に 金魚や 鯉が いるんだ。 それほ

ヤ <sup>(121)</sup>イーモンジャワノ。 ニフニフ モー アケテクレテ ナカレ  
いいもんですよ。 庭には もう 明けても暮れても(水が)流

テクンニャケ。( <sup>K</sup> アーア ) ホイテ ナガイアイダ<sup>xxx</sup> フワル  
れてくるんだから。( ああ ) そして 長い 間 (地面の下を) くぐ

サケエ ホンネ <sup>(122)</sup> ケブトネンニエ。( <sup>K</sup> アーア ) ソノ ヘンモ  
るから そんなに 冷たくはいんです。( ああ ) その 辺も

コンダ<sup>(123)</sup> ウチャー ンナ タツテモタンヤサ。( <sup>K</sup> アーア ) <sup>xxx</sup> ソ  
今度は 家が みんな 建てしまったのだからね。( ああ )

<sup>xxx</sup> ノ ソノ ( <sup>K</sup> オン ) ジメンノトコエー ( <sup>K</sup> ウー<sup>ン</sup> ) ズラー  
その ええ 地面の所へ すりり

ット ウチャ ンナ タツテモタンエ。 コナイダ イッタラ マ  
と 家が みんな 建てしまったんだよ。 この 間 行ったら ま

タ <sup>(124)</sup> ビラッ クリシテモタンエ。 ホー ハエー タチニカカット  
に びっくりしてしま、たんだよ。 ほう はあ 建ち始めると

ハエーモンジャト オモテマウンニャ。 <sup>(125)</sup> ホット<sup>(126)</sup> ヨメニ ヤルト  
早いもんだと 思うんだ。 けれども 嫁に やる時

キニャ オゾイコト ノータケド ヤッパ イマンナット ラクヤ  
には たいへんな目に 会いましたけれども やはり 今になると 楽だ

ト オモウ。

と 思う。

K ウーン イマ イーデノ。 <sup>(127)</sup> シャ フシエ <sup>(128)</sup> イーヒトヤデー。  
ええ 今は いいからねえ。 幸せが いい人だから。

<sup>(129)</sup> Y イヤー ヒトイキア オゾイコト ナエンシタエノ。 <sup>(130)</sup> ヨメニ  
いや 一時は ひどい目に 会いましたんですよ。 子は 嫁に

ヤランナランシ ヨメ トランナランシ コリャ コマッタコッチ  
やらなくてはいけないし (息子には) 嫁を もらわなくてはいけないし これは 困ったことだ

ヤナート オモテ シンパーシテタンヤケド ンデモ <sup>xxx</sup> ヤッパ  
あと 思って 心配したんだけど それでも やはり

ドーカコーカ ナッ ナントカナッテキタ。

どうかこうか 何とか来て来た。

K ホントヤノ<sup>(131)</sup> シャフシェ ヨカッタンニヤフノ。 ウン。  
本当にね 幸せか 良かったんだね。 ええ。

Y コリヤ アンマリ シャツキンワ シトナカッタンデノー。 シャ  
コリヤ あまり 借金 は したくなのだからねえ。 借

ッキンシルト コリヤ モー ドーモ コモナランシ ~~よモモ~~<sup>(132)</sup> カオ  
金すると これはもう どうにもこうにもならないし (本当に)もう 顔

モ アケラレンシナート オモテ ドーカシテ<sup>(134)</sup> シャツキンシェン  
も あげられないしなあと思っ てる どうかして 借金をしないで

ト ハナイテヤロウツテ<sup>(135)</sup>。 アンデ オゾイコト ノーテ ハタラ  
(嫁に)出してやろうと(思っ、)。 あれで ひといい日に あつて 働い

イタワイノ。 イマジョーノ ヤマオクニ ナンネンテ イタンヤ  
たよね。 今の 山奥に 何年て いたんで

ゾノ。 ( <sup>K</sup>ウン ) スミヤイテ。 ホリヤ ソノトキネアー ダ  
すよ。 ( ああ ) 炭を焼いて。 それは その時には 大

イフ ジェンモ モーカッタケド<sup>(136)</sup> ンナ ドコヤ ソラ<sup>(135)</sup> コドモニ  
分 金も もう来たけれど みんな どこえやら そら 子どもに

ンナ フィテッテモタン。 (笑) ンナモ イクラ ジェン タ  
みんな 飛んでいってしまった。 そんなもの いくら 金を た

メテモ アカナンダフノ。 ( <sup>K</sup>ウン ) モー イマワ ムスコ  
めても 駄目だ、たですよ。 ( ) もう 今は 息子が

ヨメ モロテ ムスコニ マゴァ アルサケ モー ラクジャ。  
嫁を もらつて 息子に 孫が あるから もう 楽だ、

モー コデ ムスコ コンダ<sup>(137)</sup> ヨメニヤルジブンニヤー ムスコ  
もう これで 息子が 今度(今年)嫁に出す時分には 息子

ァ ドーデモ シルサケ シナモー マゴノ コタァ カンカエン  
ガ どうでも するから そんなもの 孫の ことは 考えなくて

デイーサケ。

いいから。

K ウーン ホリャ ホーヤ。(笑)

うーん それは そうです。

Y 主 ホンデ ムスコニ シャッキンシェー<sup>(338)</sup> ノコサナイト コニ  
もう それで 息子に 借金さえ 残さなければいいと こう

オモ<sup>(339)</sup>テンニモ。ウララ オヤカラ シャッキン モロタンヤサケノ。  
思ってるんです。 私など 親から 借金を もらったんですからね。

(<sup>K</sup> ウーン (笑) ) ホンデ オソイコッチャッタワイノ。  
それで ひどいことだったんですよ。

K アノ キンニョモンノ オジジァ<sup>(440)</sup> サケガ スキヤッタデー。<sup>(441)</sup>

あの 金右衛門の おじいさんは 酒が 好きだったからねえ。

Y アー モー ドコイッテモ サケバッカ ノンデタンヤ ンナー。

ああ もう どこへ行っても 酒ばかり 飲んでたんだ そんな(人だった)。

K サケ スキヤッタデー ( <sup>Y</sup> ホンデ アカンノヤ ) サケ スキヤ  
酒が 好きだったからねえ ( それで 駄目なんだ ) 酒が 好き

ッタサケ。

だったから。

Y ホヤデ ハヨ シンタワイノ。

だから 早く 死んだよね。

K ホヤー フリト ハヤカッタノー。

そうに 割に 早かったねえ。

Y ロクジュー。 ロクジューデ シンデモタンエ。

六十だ。 六十(歳)で 死んでしまったんだ



- K ログジュージャットンケノ。<sup>(142)</sup> (Y ウン) ホンデ イケー オニサンヤッタシ ナ  
六十だったかね。 (ええ) それで (体格の) 大きい おじさんだったし け  
ンヤケド コシャ<sup>(143)</sup> チョット カカンデ"タワノー。  
けれど"も 腰は 少し 曲がっていたよねえ。
- Y ウン コシャ フタヨヤ。<sup>(144)</sup> (K ノー<sup>(145)</sup>) モ ホンナモン ツェバ  
ええ 腰は ニ重だ。 (ねえ) もう そんなもの 杖を  
<sup>(146)</sup> イ ツイ テェアー ドコデモ アルイテアー ホイテ テ-----。  
ついては どこでも 歩いては として て……。
- K ホンデァ イマノ カーチャント<sup>(147)</sup> ナンネンモ ホンネ ナンネン  
それでは 今の 母さんとは 何年 も そんなに 何年とは  
<sup>(148)</sup> テ ソワ ナンダンヤノ。  
いっしょにいたかたんだね。
- Y サンネンホド イタンカネー。  
三年ほど (いっしょに) いたのかねえ。
- K ウー<sup>(149)</sup>ン ホンナモンカノ。  
ああ そんなものかね。
- Y ウー ホンナモンジャ。  
ああ そんなもんた。
- K トショリラシュー ミエタガノー (Y ホリヤ トショ -----) ロ  
年寄りらしく 見えなかねえ (ねえ) それは 年寄り……  
ワジュージャットンケノ。 マダ<sup>(150)</sup> フカカッタニヤノー。  
六十だったのかねえ。 まだ 若かったんだねえ。
- Y ハハオヤガ<sup>(151)</sup> ゴジューヒチケナ。<sup>(152)</sup>  
母親 か(おんなのは) 五十七 かな。
- K ホーヤ オバサンモ<sup>(153)</sup> ハヤカッタノー。  
そうです おじさんも 早かったねえ。

Y ンナ ワカジニヤ。 ンナ ウラ ヒトリ イキノコッテンニヤモ。  
みんな 若死にた。 そんなもの ね ひとり 生き残ってるんだもの。

モ キョーダイモ シニャー ナーモ インノヤモ。 モー オラ  
もう 兄弟も 死んでしまて 誰も いなくなんだもの。 もう ね

ヒトーリ。

ひとり(ただけです)

K ウン キョーダイシュー <sup>(154)</sup> ハヤカッタデー。  
兄弟 誰 か(死んだのか) 早かったから。

Y ウン キョーダイア <sup>(156)</sup> モー ~~モ~~ サンジューネンマエニ ンナ  
ええ 兄弟は もう 三十年前に みんな  
シンデモタンヤデ。 <sup>(157)</sup> サンジューネンマエッテ モー ヨンジュー  
死んでしま、たんだから。 三十年前って もう 四十年くら

ネン グレ・タツヤロ ンナ シンデカラ。

い たつたろう みんな 死んでから。

K ウー ン ロクジューヤッタンカノ オンサン。 ( <sup>Y</sup> アー ン ) タ  
あめ 六十になったのかねえ おじさん。 ( ええ ) 大  
イブ トショリラシュー ミエタンニヤノ。 <sup>(158)</sup>  
分 年寄りらしく 見えたんかね。

Y ホリヤ トショッタッテ モー コリヤ ジクダレンサッタ <sup>(159)</sup> ツエ  
それは 年をとって(何だ?) もう 二れは 杖

バイ ツイテ アルイタンエ。 ( <sup>K</sup> ホヤ ) ホラ オゾカッタン <sup>(160)</sup>  
を ついて 歩いたんだ。 ( そう ) それは みずほらしから

エ。

んだ。

K ウー ン ロクジューデ イマノ ロクジューデア マダ ワカイワノー。 <sup>(161)</sup>  
六十では 今の 六十では まだ 若いものねえ。

Y ホイデ イマノ ロクジューノ ヒトワ ホンネ コシ カガンデ  
それに 今の 六十の 人は そんなに 腰の 曲がって

アルイテル、ヒトア ネーモノ。  
歩いている 人は ないもの。

K ホヤ ヨケー ネーノ。 ~~コシカガン~~ オトコノ ヒトデ コシ  
そうだと たくさんは ないね。 男の 人で 腰

カガンデル ヒトッデ ヨケー ネーワノ。 ウーン。  
が曲がっている 人と言うのは 多くは ないですよ。

Y ホイデ ウラ コレデ ナイラ オヤノ カワリ コンデ ジュー  
それで 私は これで 何ですよ 親の かわりに これで 十二・

~~ニ~~ニサンネン ナガイキシタンニエ。 ウラノ トシニヤ モー  
三年 長生きしたんです。 私の 年には もう

ジューニサンネンサキニ シンデモテンニエ。

(親は) 十二・三年前に 死んでしまってるんです。

K マエワ ホイデ ナナジューッサイマデニ シンダワノー。<sup>(63)</sup>  
以前は それに 七十歳 までに 死んでしまったねえ。

Y ウーン ンナ シンデモタニエ。  
ああ みんな 死んでしまったんだ。

K ウーン ハチジューマデ<sup>(64)</sup> ノコルモンテ ヨケー インサケー。<sup>(65)</sup>  
ええ 八十(歳) まで 残る 者などは(そう)たくさんは いないから。

ウン。

Y ンナ タエーガイ ロクジュー……。 ( K ヒチジュー ナルマデ  
みんな 大概 六十……。 七十(歳)に なるまで

ニ シンデモタノ ウン ) アン ロクジューノ ヤクドシ コシ  
に 死んでしまったね ああ 六十の 厄年が 越

エルカ コシエンカ。 マ ヤクドシ コスト チョット ナカイ  
せるか 越せないかね。 まあ 厄年を 越すと 少し 長生

キシルクド ヤクドシ コシエント ンナ ロクジューノ ヤクド  
きするけれども 厄年を 越せないと みんな 六十の 厄年

シマデニ<sup>(166)</sup> シヌノ。 シンデモタノ<sup>(167)</sup>ー。

までに 死ぬね。 死んでしまったねえ。

K ハエー ヒトァ シジューニグレエデノ。 (Y アー) ウン。  
早い 人は 四十ニくらいでね。 (ああ)

Y テ イマヤカッテ コデ オトコワ モー イング。 モ ンナ  
それで 今にって これで 男は もう いませんよ。 もう みんな

シンデモタニェ。

死んでしまったんだ。

K ホヤ ホヤ モー ハチジュー コシテイル ヒト ンナンテ ナイ  
そう そう もう 八十を 越している 人なんて ない

ーデー<sup>(168)</sup> (Y アー) モ ハチジューニサン ナルト ンナ シ  
から (ああ) もう 八十二・三に なると みんな

ノー マチンキョノヤラー<sup>(169)</sup> タライモンノ<sup>(170)</sup> オジジラ ンナ ハチ  
ねえ まちんぎよのや 太郎右衛門の おじいさん達は みんな 八十

ジュ チョット コシタラ シンデ マイナシタデー。<sup>(171)</sup>  
を 少し 越えたら 死んでしまいましたからねえ。

Y ヤッパ ナカイコト イラレンノヤ。<sup>(172)</sup>  
やはり 長いことは(ね)いられないんだね。

K ヤッパシ オトコノヒトワ チカラシゴトオ シナハルサケ ドー  
やはり 男の人は カ仕事を なさるから どう

シテモノ。 (Y ナカイコト……) オンナヨリ ハヤジニシナハン  
いてもねえ。 (xxxxxxxxxxxxx 長いこと……) 女より 早く死になさるん

<sup>(173)</sup>  
ニヤノ。  
にね

Y ナカイコト イラレンノヤノ カニカエテミット。  
長いこと (生きて) いられないんだね 考えてみると。

K イナカデ<sup>(174)</sup>ァ ノー。 ウン。  
田舎では ねえ。

注記

- (1)「ナウ」は [kotoni aw] > [kotonaw] となったものであろう。  
 (2) [ho:deswne<sup>ɾ</sup>], (3)倒置。(4) [ojawane<sup>ɾ</sup>], (5) [ne<sup>ɾ</sup>], (6) [masw<sup>ɾ</sup>], (7) [sende<sup>ɾ</sup>], (8)「一例」か。(9) [ija<sup>ɾ</sup>]  
 (10)発音があいまい。こう聞こえる。(11)「女」を言う。今では蔑称に近い。  
 (12)「苦勞ばかりで顔を上げられない」というような意か。(13)山本氏の娘さん達をさす。(14) [jakedo<sup>ɾ</sup>],  
 (15) [ojawa<sup>ɾ</sup>], 独特のイントネーション。(16)嫁入り道具のこと。  
 (17)嫁入りの時、道具といっしょに車か何かに米俵を積んでその上に飾り皮を乗せて、持っていったらしい。(18) [pa<sup>ɾ</sup>], (19)「ホヤケド」に近くも聞こえる。(20)「ねえ」にあたる部分は上昇調のイントネーション。(21) [tʃade<sup>ɾ</sup>], (22)「(いいなと)思っ」の意。(23)「～さらす」は相手を見下げた言い方。ここでは、自分の子どもらが生意気にも家を建てた、というよう  
 な気持ち。(24)「建てた」が省略。(25)言い切ったかに見える。また続ける。(26)驚いたかのような返事。(27)家の敷地が縦横六間と八間の家ということ。(28) [ike<sup>ɾ</sup>:he<sup>ɾ</sup>no], 途中で上昇したイントネーションは最後まで下らず。(29)家の中の四つの部屋がちょうど田型になっている意。(30) [jæppodo], (31)「心聞いて書いてみたがは、きりせず」。(32)「テナワン」は「手に合はん」から。つまり「手におえない」の意。[teni awan] > [tenawan], (33)かすかに聞こえる。(34)「すごいものだ」, 「立派なものだ」の意。(35) [no<sup>ɾ</sup>], (36) [ho<sup>ɾ</sup>:ke<sup>ɾ</sup>:no<sup>ɾ</sup>], 独特のイントネーション。(37)「(今まで)言わなかったのに」の意。(38)片親。(39)「ソレ」とも。(40) [kedo<sup>ɾ</sup>], (41) [sindara<sup>ɾ</sup>], (42)こう聞こえるが、あいまい。(43)注(42)の部分からここまで何のことを言っているのかわからない。(44)意味つかめず。(45)自分(山本氏)の娘婿に対して言う。  
 (46)発音少しあいまい。(47)「手が早い」つまり「上手」だとい

うこと。(48)特に意味のないつなぎことば。(49)釜の中の焼けた炭を。(50)いかにも感心したという声。(51)「大きい金になりますよ」の意。(52) [kaetɛN]。(53)「イ」は小さく短かい。(54)「notte<sup>ɛ</sup>」。(55) [mæ:nitsi]。(56)地名。武生市の北にある人口5万の市。(57)「体が(楽だ)」の意。(58) [so:jannɔ̃]。(59) [rerude<sup>ɛ</sup>]。(60) [kaiɟawanɔ̃]。(61) [ɟi<sup>ɛ</sup>」。(62) [ɟi<sup>ɛ</sup>」。(63)「(仕事か)十分に出来ない」意。(64)最後小さくなる。(65)聞きとれず。(66) [atɟwisin<sup>ɛ</sup>]。(67)「マー」から「ナントカナルゲ」まで山本氏が娘婿に対して言、た言葉。「そんなに炭焼きの方はあわてなくても何とかなるよ」というような気持ちか。(68)ことばがあいまいでわからず。(69)ここから娘婿のことば。(70) [toɟotte]。(71) [no<sup>ɛ</sup>」。(72)小さく自己のうなずき。(73) [a<sup>ɛ</sup>:a<sup>ɛ</sup>」独特のイントネーション。(74) [batano<sup>ɛ</sup>」。(75) [ɛ:」。(76)これは土地のことではなく「家」そのものを言う。(77)家号。[sonɛ:mosanɟkara]。「カラ」は「エ」の間違いか。(78)「その人の実家が」の意。(79) [jo<sup>ɛ</sup>」。(80)この「屋敷」は土地のこと。(81) [a:<sup>ɛ</sup>」。(82) [sa<sup>k</sup>ɛ]。(83)まだ今は家が完成していないから、村の奥の方にいるということ。(84) [tatete<sup>ɛ</sup>」。(85)「おじいさん」に対する最も一般的な呼び方。(86)「宿がえ」。つまり元の家から新しい家に移ること。(87) [a<sup>ɛ</sup>:a<sup>ɛ</sup>」。(88)は、きり聞こえず。(89)「十幾日」の意。(90)「基礎工事」の意。(91) [nanɟiniko<sup>ɛ</sup>:i] (92)発音 あいまい。意味はこうであろう。(93) [no<sup>ɛ</sup>」。「将来が(楽しみ)」の意。(94) [haɟimæ]。(95)「ッ」は聞こえないようにも。「建った目」でこの「目」は「三ヶ目」というような時の使い方だろう。(96)こう聞こえるが、意味は、きりせず。(97)(96)と同様意味つかめず。(98) [sa<sup>k</sup>ɛ<sup>ɛ</sup>」。(99)「ンデ」とも聞こえる。(100)上昇調のイントネーション。(101)この「ホン」はいろいろな意味に使われる。強調の意で用いられると考えられる。(102) [ɛ:to<sup>k</sup>ɔ̃]。(103)「うまいことやったもんだよ」

の意。(104) [ʃitæ]. (105)「ヤマノ ミズ」と言うつもりで「ノ」を使ってしまうのでは。(106)言いかけ。(107)「鉄管で水を(引いておけ)」の意。(108)「非常に量の少ないこと」をこの「チョビチョビ」で表現することもあるが、ここでは「清んだきれいな」の意であろう。(109) [naʃ:njaʔ]. (110) [dæ:tɔkw]  
 (111)「ニンナラン」で「関係ない」,「かまわなない」の意を表わす。  
 (112) かすかに聞こえる。(113) [ndæ]. (114) [ʝikinɨ]. (115) [noʃ:].  
 (116) [paʃa]. (117) 庭の小さな池。(118)「キンギョ」も特に鯉などと区別しないで、鑑賞用の魚一般を言うこともあるので、ここも鯉のつもりかも。(119) [npaʃʔ]. 独特のイントネーション。  
 (120) 感心したという声。(121) こう聞こえるが、あいまい。(122)「冷たい」を「チブテー」と言う。(123)「最近」の意か。(124)「ビツフリ」の「ビ」が「フ」に近く聞こえる。  
 (125) このあたりかなり早口で発音がつかみにくい。(126) [hoʝado]. 「ホヤケド」と同じ。(127) [iʃ:ʔdenʃo]. 独特のイントネーション。山本氏の娘さん達をさす。(128) [i:ʝitoʝadeʃʔ].  
 (129) ここからのことは、山本氏が昔を振り返って感慨無量という感じの静かな口調。(130) [koʔ]. (131) [janʃo] (132) [ʔtonimo:ʃ]  
 (133)「恥ずかしくて(顔も上げられない)」の意。(134)「どうかして」の意。(135)「離して」の音便化。「親の手元から離す」つまり「嫁にやる」の意。(136)特に意味のないことば。  
 (137)嫁にやるのに金のたくさんいることを言う。(138) [neʔ:]  
 (139) [ʃee:]. [sae:]の転か。(140)声が小さくて聞き取りにくい。  
 (141) [oʝizɨæ]. (142) [dɛʃ:ʃe]. (143)驚いたような声。(144) [ko siwa]の[iw]が無声化。(145)「ふたよ」は「二重に重なった」の意。腰の曲がっていることの形容。(146) [noʃ:]. (147)「杖棒」の意。「木の棒」は「バイ」になる。[tsebai]. (148)山本氏の奥さんをさす。(149)「添う」。「連れ添う」の意。つまり姑といっしょに暮らすの意。(150) [nʃo]. 疑問の意を表わす。  
 (151) [panoʃʔ]. 独特のイントネーション。(152)山本氏の母親。



- (152) [ɕitɕikæna]. (153) [no<sup>ɾ</sup>ː<sup>1</sup>] (154) 人に対して「何も」という  
 ような使い方をしている。 (155) [dɛ<sup>ɾ</sup>ː<sup>ɾ</sup>ː]. (156) [da<sup>i</sup>æ].  
 (157) 少し考えて訂正する。 (158) [pān<sup>o</sup>]. (159) こう聞こえる。  
 意味はは、きりしないが、「腐りかかった」とでもいう意か。  
 (160) 人間の形容に「おぞい」を使うことは稀。特にこう意味では。  
 「下らない(役に立たない)人間」では割に使われる。 (161) [wak<sup>ɾ</sup>aiwa<sup>no</sup>ː]. 独特のイントネーション。 (162) [ne<sup>ɾ</sup>ːwa<sup>no</sup>ː].  
 (163) [si<sup>n</sup> da<sup>wa</sup>no<sup>ː</sup>]. (164) 「生き(残る)」の意。 (165) [ke<sup>ɾ</sup>ː]  
 (166), (167) 上昇調のイントネーション。 (168) [na<sup>i</sup>de<sup>ɾ</sup>ː<sup>1</sup>]. (169)  
 家号。 (170) 家号。 (171) [dɛ<sup>ɾ</sup>ː<sup>1</sup>]. (172) [no<sup>i</sup>a]. (173) 上  
 昇調のイントネーション。 (174) [inaka<sup>ɾ</sup>de<sup>ɾ</sup>ː<sup>1</sup>].

## 10. 酒屋の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)  
 Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ  
 K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y モー ホンデ コレカラ ラクシター<sup>(1)</sup> アンマリ エレーコトナワ  
 もう それで これから 樂<sup>(2)</sup>をして あまり つらい目にあわ  
 ント コリヤ サカヤ イッテャー<sup>(3)</sup> ラクシテャー<sup>(4)</sup> ケッコ ジェ  
 ないで これは 酒屋へ 行ては 樂しては 結構 金  
 ン モロテャー ホイテ ホイテ~~~~~<sup>(5)</sup> ラクシテンナラ  
 を もらては として 樂をしていなくては  
 ント コー オモテルンニエ。  
 と こう 思ってるんだ。

K ホーヤ ホントニ。(笑)  
 そうだ 本当に。

Y ホラ サカヤ ラクナネンジェノ。<sup>(6)</sup>  
 それは 酒屋は 樂なんですよ。

K イーワノ<sup>(7)</sup> ( Y ウーン ) ココランテナ アノ サブネーシネー。<sup>(8)</sup>  
 いいですね ええ このあたりみたいに あの 寒くないしねえ。<sup>(9)</sup>

Y ホイテ ウケニ イテ ソツダケ ジェン アタランモ。  
 として 家に いて それだけ 金 もらえないもの。

K ウン ホリヤ アタラン。 ホリヤ アタラン。 ンナ ナーモ  
 ああ それは もらえない。 それは もらえない。 そんなもの 何も

シゴトカ<sup>(40)</sup> シナ マウ シゴトカ ナエデノー ココラデフ。 ト  
仕事か そんな(自分の)合う 仕事か ないからねえ このあたりでは 年  
シニ オータ。  
に あった(仕事か)。

Y ウチネ イテ ヤッパ ツキニ ジューゴマンエン モーケラレン  
家に いて やはり 月に 十五万円は もうけられな  
モ。  
いもの。

K ホリヤ モーケラレン。 ホンナン モーケラレン。  
それは もうけられない。 そんなもの もうけられない。

Y アー。 ヤッパ コレ サカヤ イキャー ゴシエンエン アタル  
ああ やはり これで 酒屋へ 行けば(日)五千円は もらえる  
ンニヤフ。 ソレ ヤッパ コフシテモロテ イケー ジェン<sup>(11)</sup> <sup>(12)</sup>  
んだから。 そら やはり たくさんの 金……。

(<sup>K</sup>ウーン) ウーン。 ヤッパ ムスコァ ドンダケ モーケル  
やはり 息子は どれだけ もうける  
カ シランケド ソレー ヤッパ ヒトツダケ<sup>(13)</sup>  
か 知らないけれども それは やはり

K ホリヤ ヤッパ<sup>(14)</sup>ー アノ カラダカ<sup>(15)</sup> タッシャナラノー。  
それは やはり 体が 健康 ならねえ(出来るけれども)。

Y ン イヤ タッシャヤサケ コナ コナコト ユーテラレルンニヤ  
あ いや 健康にから こんなことを 言っているんだけ  
ケド ヨワカッタラ ヤッパ コイツテモ イカレン。  
れども(体が)弱かったら やはり(向うが)来いと言っても 行けない。

K イカレンワノ ウーン。  
行けないよね。

Y モー コトシ イチネン イッテオカンナランノエ。 ニジューネ  
もう 今年 一年は 行っておかなくてははいけなひんです。 二十年(勤続)

ンノ サカズキ モロテオカンナランノエ。  
の 盃を もらっておかなくてははいけなひんです。

K アー アーア アノ キンゾクデ サカズキカ テナハルン<sup>(17)</sup> ノミ  
ああ ああ 勤続で 盃が いただけるの 組合

アイカラ。  
から。

Y コトシ コトシ イキマストー。  
~~xxxxxx~~ 今年 行きますとね。

K アー ホーケ。 ホンデァ<sup>(18)</sup> ノ サカズキダケァ<sup>(19)</sup> モライナハラ  
ああ そう。 それでは その 盃だけは いたでかなく  
ナ アカン。  
ては いけない。

Y モー カエルトキァ<sup>(20)</sup> ダンナン<sup>(21)</sup> テー ニギッテ ハナサンノヤ。  
もう 帰る時には ご主人が 手を 握って はなさないんだ。

(<sup>K</sup> ウン) マー モー イチネン キバッテ<sup>(22)</sup> コイヤ<sup>(23)</sup> ナツ ナ  
(ああ) まあ もう 一年 頑張って 来いよ 夏に 何

ーモ シゴト シェントナ ケエテ。  
も 仕事を しないでな と言って。

K アア。 ナレタ ヒトワノー<sup>(24)</sup> ヤッパ イーサケニ。  
ああ。 慣れた 人はねえ やはり いいから。

Y ウン カエ カエルトキ ソー ユーテ<sup>(25)</sup> (<sup>K</sup> ウーン) モン  
~~xxxxxx~~ (酒屋から)帰るときに そう 言って

モンマデ オクッテ テテキタンエ。 (<sup>K</sup> ウーン) ホンナコト  
明まで 送って 出てきたんです。 そんなことを

シタコト ネンニヤ ッチュンニヤ ノー。 ( <sup>K</sup> ウン ウン ) <sup>(26)</sup> ニヤ  
したことは (今更) ないんだって言うんだねえ。 だけ

ケト ( <sup>K</sup> ウン ) ホヤッテ ナガイコト イルッチュモンワ ヤ  
ども そうして 長いこと (杜氏) いるという者は ヤ  
ッバ カワイヤラ <sup>(27)</sup> さん。  
はり (ご主人も) かわいいやらね。

K ホイテ ワカイ ヒトワ ホンネ モ テナハランデー。 <sup>(28)</sup>  
そして 若い 人は そんなに もう (杜氏) 出られないから。

Y イヤ モー ワカイモン バッカヤゾノ ウラントコヤ。  
いや もう 若い者はかりだよ 私のところ(の酒屋)は。

K アー イマ。 ( <sup>Y</sup> ウン ) アー ホーケ。 千カイトコノ ヒト  
ああ 今は。 ああ そうか。 近い所の 人  
ヤ。

かい。

Y イヤ カブラ <sup>(29)</sup> ケヤラ <sup>(30)</sup> シラヤマヤラ。  
いや 甲斐城やら 白山やら。

K アーア <sup>(31)</sup> ハマノ ヒトカノ。 ウーン。  
ああ 浜の 人がね。

Y カブラケ <sup>(32)</sup> マカ シラヤマ ( <sup>K</sup> ウン ウン アーア ) シナ ワ  
甲斐城 糠 白山 ああ そんなもの 若

カイモン バッカヤ。 ( <sup>K</sup> アー ) ウラ ヒトリジャノ トシヨ  
い若 はかりだ。 ああ 私 ひとりだもの 年寄

<sup>(33)</sup> リア。 ( <sup>K</sup> ウーン ) シナ ゴジュー グレーノ モンバッカヤ。  
りは。 みんな 五十くらいの 若 はかりだ。

( <sup>K</sup> アー ホーケ ウーン ) <sup>(34)</sup> シナ モント シゴトシザカリノ モ  
ああ そうか そんなもの 本当に 仕事し盛りの 若

ンバックヤサー。<sup>(35)</sup> ( <sup>K</sup> アーア ) ソーユモンニ マケントコト  
ばかりだよ。 ああ という者 に 負けないうと

オモンニヤケ エレーワイノ。

思うんだから たいへんだよ。

K ホリヤ イレー。<sup>(36)</sup> ホリヤ イレー。 ( <sup>Y</sup> ウン ) ウーン ホリヤ  
それは たいへんだ。 それは たいへんだ。 それは たいへ

イレ。

んだね。

Y ニナモン キューシェン タンクガ アルンニヤ。 キューシェン  
そんなもの 九千(九)の タンクが あるんだ。 九千の

タンクキュータラ イケー ゴーシ シコム タンクヤガ ソレ アラ  
タンクと言ったら 大きい こうじを 仕込む タンクだが それを 洗

イニ <sup>(38)</sup> <sup>(39)</sup> ハインニヤガー ホレ ナーモ モタント ポーイト トン  
いに 入るんだが それに 何も もたずに ほーいと 飛ん

デ アガッテコナ アカンノヤケノ。 ( <sup>K</sup> ウン ) スベル タン  
で 登ってこなくては いけないんだからね。 すべる タン

ク。 ( <sup>K</sup> ウーン ) <sup>(40)</sup> ダレモ アガッテコレノヤデ。 ( <sup>K</sup> ウ  
クを。 誰も 登ってこられないんですから。

ーン ) <sup>(41)</sup> <sup>(42)</sup> ソレー ウラ ポーイト アガッテクンニヤ ゾノ。 ( <sup>K</sup>  
それを 私は ほーいと 登ってくるんですよ。

ウーン ) <sup>(43)</sup> <sup>(44)</sup> ホンデモ ワカイシユア ドンナモンモ ア アガラレ  
それでも 若い衆は 誰も 登れな

ンノヤ。 ハシゴ サイテクレックシェンニエ。 ( <sup>K</sup> ウーン ) ウ  
いんだ。 はしごを さしてくれて言うんです。 私

ラ ハシゴ ササント アガッテクンニヤケ。

は はしご(はしご) ささずに 登ってくるんだから。

K ホー キツインジャ。<sup>(45)</sup> ホヤケド ヨージンシテ<sup>(46)</sup> ハジゴ サシナ  
 ほう 強いんだ。 けれども 用心して はしごを さしな  
 サイ コトシワ。 (笑) コンダ イキナシタラ。 ノー。 (こ  
 さい 今年は。 今度(酒屋へ)いらっしゃたら。 ねえ。  
 笑)

Y イヤー モー ホンデ ホンナトツカラ アカレンヨンナツタラ  
 いや もう それで そんな所から 登れないようになったら  
 イカントカンナラン。  
 行かないでおかなくてはいけぬい。

K ウーン ヤンナルデ。  
 (あなはなかなかな) やり手だからねえ。

Y ンナモン コッチャッテ。 ソラ ミンナ アカラレンノワ スベ  
 そんなもの 二つにって。 そら みんなが 登れないのは すべ  
 ッテ アカラレンノヤケノー<sup>(47)</sup> ンナモン コツカ<sup>(48)</sup> ナケナ アカラ  
 って 登れないんだからねえ そんなもの 二つに<sup>(49)</sup> なくては 登れ  
 レン ( <sup>K</sup>ウーン ) ジェットタイ。 ヤッバ テニニ<sup>(50)</sup> ウデニ チ  
 ない。 絶対に。 やはり 手に 腕に カ  
 カラ ナケナ アカッテコレンノヤ。 ポーイト トビツイテ シ  
 か なくては 登ってこれないんだ。 ほーいと とびついて す  
 ャット<sup>(51)</sup> アカッテコレナ アカンノヤデノ。 ( <sup>K</sup>ウーン ) ンナモ  
 っと 登ってこれなくては いけないんだから。 そんなもの  
 タカインニヤゾノ マタ コノ<sup>(52)</sup> コノ ウエトワ タカイン  
 高いんだよ また この 天井とは 高いん  
 ニヤゾノ マタ。  
 だよ。

K ウーン サカヤノ ワタシモ チョット ミシエ テモロタガ<sup>(53)</sup> アノ  
 うん 酒屋の(中は) 私も 少し 見せてもらっただけども  
 ナニガ<sup>(54)</sup> ナランデルモネー ギョーサン。 チョット……。

Y 何が 並んでるものねえ たくさん。 ちょっと……。

Y ウチノ クラ キューシェンノ ハコエ シコミノ タルガ ジュー  
 私の 倉は 九千(九)の 箱が 仕込みの 樽が 十三  
 サンボン ナランデルンニヤ コレ ガーット。 ソノウエデ ウ  
 本 並んでるんです こうして すうと。 その(タンク)の上で 歌  
 タウトタノガ <sup>(58)</sup> ノッテルンニヤ <sup>(59)</sup> コンダノ。 ( K アーア アーア  
 を歌ったのか 出てるんだ 今度の(テレビには) ( ああ ああ  
 ) ジェンブ ソノ タンクニ シナ ヒトリズツ カイ モタシ  
 全部の その タンクに みんなが ひとりずつ(衆) 權を持た  
 テ ( K ウン ウン ) ホイテ ワタシワ コツチデ ウツテルノ  
 せて ( そして 私は こちらで 歌っているの  
 が ( K アーア ) ワタシノ ウタニ アワシテ カクゴシテルト  
 が ( ああ ) 私の 歌に あわせて 準備していると  
 コガ ウタニ デテルン。 ( K アーア ホーケ ) ホイデ ウラ  
 ころが 歌に(あわせて) 出ている。 ( ああ そうか ) それで 私  
 ー ハチマキシテ ウタウトテットコガ デタンニエ。 ( K ウー  
 は はちまきして 歌を歌っている所が 出たんだ。 )  
 N ) ナーント コーゴシイ オッツァヤッテ。  
 何て 立派な 親父だって(みんなが言た)。

K ホンテァ ウチニモ シャシン アンナハンニャンロノ。  
 それでは 家にも (その時)の写真が おありになるんでしょう。

Y アリマス。  
 あります。



K アンナ<sup>ル</sup>。 ( <sup>Y</sup> ウン ) ウーン。 ホノトキネ<sup>(63)</sup> ナカモチウタオ  
 おありになる。 ええ ああ。 その時に 長持(5)歌を  
 ウタイナシタンカ。 ( <sup>Y</sup> ウン ----- ) ホレワ サケノウタカ。  
 歌われたんですか。 ええ... (それむ)それは 酒屋の歌ですか。  
 ( <sup>Y</sup> ウン サカヤノウタオ ) サカヤノウタオ。 アーア ウー  
 ああ 酒屋の歌をね 酒屋の歌を(歌われた)。 ああ  
 ン。

Y モ サカヤノウタモ ウタウモン ネンジャフノ。 ( <sup>K</sup> アーン )  
 うう 酒屋の歌も 歌う者が いないんだよ。  
 ンナ ワカイサケ ソンナコト モ-----。  
 みんな 若いから そんなこと(する人がいない) もう...。

K ウタフレンノヤ。 ( <sup>Y</sup> オン ) イチネンヤ ニネン イタッテ  
 歌えないんだね。 ああ 一年や 二年 (酒屋へ) 行ても  
 オボエラレンシ。  
 覚えられないし。

Y ナロテインサケ オボエラレンノエ。  
 習っていないから 覚えられないんですよ。

K ウーン。<sup>(65)</sup> コエカ<sup>(66)</sup> イーサケノ。  
 (あはれ)声が いいからね。

Y ホヤ コエ-----。  
 そう 声...。

K キンニョ モンサン コエカ<sup>(67)</sup> イーサケー。  
 金右衛門さん 声が いいから。

Y イヤ コエカ イーッテ ソデ マ コエダケワ マ ナカモチ  
 いや 声が いいって それで まあ 声だけは まあ 長持(5)(歌を)

ウタウダケヤサケー ホテ コンダ タケフデ ナンカ<sup>(68)</sup>  
 歌うだけだから それで 今度 試みて 何か  
 アツタラ テレビニ<sup>(69)</sup> デンナラント オマウンヤケドー。 トシヨ<sup>(70)</sup>  
 あつたら テレビに 出なくてはいいかいと 思うんだけどね。 年とった  
 ッタモンガ テルト ワラウジャロ<sup>(71)</sup> ホヤケド。<sup>(72)</sup>  
 者が 出ると 笑うだろう んだけど。

K ワラワン ワラワン。<sup>(73)</sup> テレビラデモネー アノ トシノ イッパ  
 笑わない 笑わない。 テレビなんかでもねえ あの 年の とった  
 ヒトカ<sup>(74)</sup> デナハルト ヤッパ ニンキ アリマスゲネ。 ウーン。  
 人が 出られると やはり 人気が ありますかね。

Y イッペン デンナラント オマウンニヤ。  
 一度 出なくてはと 思うんだ。

K ト トショリラノ イッペン ホノ ウタオ ウトトクレノ。 (   
 年寄りなどの(もまたいい) 一度 その 歌を 歌えて下さいね。

笑) ナカモチウタオ (笑)。 ダレモ シランヤロ ウタワレン<sup>(75)</sup>  
 長持歌を 誰も 知らないだろう 歌えないだ  
 ヤロー ＊ イマ ノー。<sup>(76)</sup> ダレモ<sup>(77)</sup> ……。  
 ろう 今は ねえ。 誰も ……。

Y ホリヤ マー チョット ウタワレンノー。<sup>(78)</sup>  
 それは まあ ちょっと 歌えないねえ。

K ノー。 タダッサン<sup>(79)</sup> ダレカニ ナロタンカ チョット ウタウカ  
 ねえ 正さんは 誰かに 習ったのか 少し 歌うかも  
 シランケト ( Y アーン。 モー モー …… ) ヤスダッサンノワ  
 しれないけれどもね ああ もう もう …… 安田さんの(御歌)は  
 ウタウカ。  
 歌いますか。

Y アノ ヒトモ チットワ ウタウデショノ。 マー マネゴト グレ  
 あの 人も 少しは 歌うでしょうね。 まあ 真似事ぐら  
 ーワ。 ナカナカ ウタワレンノヤトコトイ。 ソノ ハジメ オ<sup>(80)</sup>  
 いは。 ほかほか 歌えないんだって。 その はじめの 音<sup>(81)</sup>  
 ントカ ナケナ。  
 頭が なくて(歌えない)。

K モンクカノー。 ( Y ア ) モンクカ シラナ ウタワレンデ。<sup>(82)</sup>  
 ことばかりねえ。 ことばかり わからなくて(歌えない)から。  
 ( Y ア ) ヤスダサンワ コエガ イーケドノー。 モ チョット<sup>(83)</sup>  
 安田さんは 声が いいけれどねえ。 まだ ちょっと<sup>(84)</sup>  
 ヤッパ ワカイデー。 ダレカニ オシエトイトクレナ アカンワ<sup>(85)</sup>  
 やはり 若いからねえ。 誰かに 教えておいてくれなくて(はい)けないよ<sup>(86)</sup>  
 ホリャー。(笑)  
 それは。

Y ホヤノー。 ( K ノー ) アノー タライモンノ トカミネ イッ<sup>(87)</sup>  
 そうだねえ。 (ねえ) あの 多郎右衛門の(か) 当ヶ山峯に(嫁に)<sup>(88)</sup>  
 タトキラナー ミチカラ モー ドーグ ンナ オロイテモテ (   
 行(た)時(ど)には 道(の)所(か)ら もう 道具を みんな おろしてしまて  
 K ウン ウン ) クルマニ ツメカエテノー ( K アー ) クルマ<sup>(89)</sup>  
 車に 積みかえてねえ (ああ) 車  
 ヨダイニ モ ツンデ ( K オン ) ホイチ アノー シンニョモ  
 四台に 積んで (ああ) そして あの しんにょもん  
 (90) シキュー アソコ イッタンヤケノー トカミネノ。 ( K ウン  
 とさう あそこへ 行(た)んだからねえ 当ヶ山峯の。  
 ウン ) ソコマデ コー ウト・テクンニャ ソンナモン ( K ウン )  
 (91) そこまで こう 歌(う)て 行(く)んだ イんなもの

ホレカ モー キンニョ モンノ<sup>(92)</sup> トーチャン シェントーヤッテ  
 それが もう 金右衛門の 父ちゃんが 先頭 たって(言うから)  
 ウラ サキンナッテ<sup>(93)</sup> ウトテ<sup>(94)</sup> ホイー ウラ オメー ソノ トキ  
 糸が 先頭 になって 歌って として… 私は あなた その 時  
 アッコエ<sup>(95)</sup> ハイルノニ<sup>(96)</sup> サケ ナンジョーッテ ノンデモタンヤゾ  
 あそこへ 入るのに 酒を 何升って 飲んでしまったんだ  
 ノ。 ( <sup>K</sup>アーア ) ミナ デテキテ<sup>(97)</sup> ノムンデ<sup>(98)</sup>。 ( <sup>K</sup>アーア )  
 よ。 ( ああ ) みんなか 出てきて (酒を) 飲むんで。 ( ああ )

モ タンボネ イルモン ンナ アカッテキテモテ。  
 もう 田んぼに いる 皆も みんな あがってきてしまって。

K ウーン。 ウタ ウタイナ ハルサケネ ミンナ ヤッパ ヒキヤラ<sup>(99)</sup>  
 歌を お歌いになるからね みんな やはり

-----。

Y ホイテ ウタ ウン ウタ ウテテル モンヤケ。 ホイテ ウラ  
 として 歌を 歌ってるものだから。 それに 私は  
 アワテンノヤロ。 ( <sup>K</sup>ウン ) ウタ ウタウンニヤケ。 ( <sup>K</sup>ウ  
 あわてないのでしょう。 歌を 歌うんだから。 )  
 ン ) ホイテ テヌクイ カブッテアー ヒョッキシテエニ<sup>(100)</sup> ナーン<sup>(101)</sup>  
 として 手ぬぐいを かぶっては 何  
 オモッシェー コト シテルモンヤサケ ( <sup>K</sup>ウン ) ミナ ソレー  
 面白いことを してるものだから みんな それを  
 ミテァ サケ ノンデァ<sup>(102)</sup> ワロテルン。 ニモツヤ タンスワ ソ  
 見ては 酒を 飲んで は 笑っている。 荷物や タンスは せ  
 コニ インニャケド ハヨー イケッテモ ユワン。 ソリヤ  
 二に いるんだけれども 早く 行けとも 言わない。

リヤ ゴツツオヤサケ<sup>(103)</sup> ( <sup>K</sup>ホヤー ) ハヨ イケッテワ ユワレ<sup>(104)</sup>  
それが ごちそうだから ( そう ) 早く 行けとは 言えな

ンノヤ。 デ<sup>(105)</sup> ウラ ウゴカナ クルマ デテコラレ<sup>ン</sup> アッテ  
いんだ。(それで 私か 働かなくては 車か 出てこれイいので あれで

モー ヤッパ オシロノモニモ ウタウシノ。 ソレガ ゴツツオ  
もう やはり 後の 昔も 歌うしね。 それが ごちそうだ

ヤサケ。 ( <sup>K</sup>ホヤ ホヤ (笑) ) ホヤケド ダイクサンノ<sup>(106)</sup>  
から。 ( そう そう ) けれども たいくさんの(人)が

アノ オームシ イキナシタトキニ ( <sup>K</sup>ウン ) アノ ダイクノ  
あの 大虫へ 行かれた時に ( ) あの たいくの

オトツツァン<sup>(107)</sup> アンナトキヤー ゴムクルマヤッタンヤ ( <sup>K</sup>ウー  
親父さん あんな時には ゴム車 たったに

ン ) アレ ヨダイ イッタンエ。 ( <sup>K</sup>アーア ) ホイデ<sup>(108)</sup> アノ  
あれ 四台で 行たんです。 ( ああ ) それで あの

ー ホレーノ アタシヤノ<sup>(109)</sup> イワマツツァンモ<sup>(110)</sup> イタシ タライモ  
ほら あたしゃの 岩本さんも いたし 多郎右衛

ンノ<sup>(111)</sup> ムスコラモ<sup>(112)</sup> ナ イタンニヤ。 ( <sup>K</sup>ウー ) ホイデ  
門の 息子らも みんな いたんだ。 ( ) それで

コッチカラ ヨッタリ イッタンエ ソイデ<sup>(113)</sup> ウラモ イッタンヤ。  
こちらから 四人 行たんです それで 私も 行たんです。

イヤー ホーヤケド オームシ イッタトキラ イマ カーチャン<sup>(114)</sup>  
いや けれども 大虫へ 行った時など 今は 母ちゃんも

モ トシイッテモテ イケー マゴカ アルケド。 ( <sup>K</sup>ホヤ ホ  
年とてしまて 大きい 孫か あるけれども。 ( そう そ

ヤ ) ナー アンナトツカラ イッテンニヤケ ソレ マー ダ  
う ) そんな あんな時から (道具持ちに) 行っているんだから それは まあ 大

イブ コデ ナンジャワノー。 (116) ホイデ オームシ ハイニンニー (117) (118)  
命 これが 何ですよええ。 それで 大虫へ 入るのに

オミヤサンノ マエカラ モー イカシエンノヤゾノ。 (K ウー  
神社の 前から もう 行かせないんですよ。)

ン) ホラ マー ジョーサンノ モンカ タンボカラ アガッテ  
しら まあ たくさんの 者が 田んぼから あがって

キテ サー サケ ダシエッテ イーネカカッタンエ。 (119) (K ウー  
来て さあ 酒を 出せて 言い始めたんです。)

ン) サケダスンナラ ンナ ウタウサケ サー ンナ ウタデ  
酒を出すのなら それなら (私が) 歌うから さあ みんなも 歌で

ナンシトクレノー サケモ ノンドクレレ イーシ ウタネ ツケ (120)  
あわして下さいね 酒も 飲んで下されば いいし 歌に あわ

テ ウトトクレノーッテ。 (K ウン) ソノ アノ ウケワノ (121)  
して 歌って下さいねって(言た)。) その あの 家はね

コンダ コノ オミヤサンカ コー ココギッテ コー ホソイ  
今度は この 神社が(あるところ)こう 横ぎって こう 細い

ミチ ハイッテカナ アカンノエ。 (K アーア) ホイデ マ  
道を 入って行かなくてはいけいんですよ。 (ああ) それで まあ

ンナ ジェンブ (122) ヨダイ クルマデ イッタサカイー マー ハイ  
みんな 全部 四台の 車で (123) 行ったから まあ 入

ッテ イッタンニャガー。 (124) アレ ヨータンニャ。 ホイタラ ウ  
て 行ったんだか。 あれは 酔ったんだ。 もしたら 私

ララ (K ウン) サンニャ ヨーテモテ ウラ ドーシテ カ  
達 (125) 三人は 酔ってしまって 私は どうして 帰

イル。 ナンカ ナニ ジドーシャ アルンデナシノー。 (126)  
る(ことが出来る)。 何か かに 自動車か あるのではないしねえ。

K ホヤ イマワノ ジドーシャデ<sup>(127)</sup> ンナ オフルケドノ<sup>(128)</sup>。 マエワ  
 そう 今はねえ 自動車で みんな 送るけれどもねえ。 以前は  
 ホンナ…… ( Y ムカシヤデノ<sup>(129)</sup> ) アルイテ ヤッパ カインナ  
 そんな…… ( 昔たからねえ ) 歩いて やはり 帰られた  
 シタンニャ ロテ<sup>(130)</sup>。 クルマ ヒッパッテ カイランナランゲノ /  
 んだらうから。 車を 引っぱって 帰らなくてははいけないですね  
<sup>(131)</sup>  
 ー。  
 ねえ。

Y クルマ ムコーノ クルマ モッテキタンエ ンナ。  
 車は おこの 車を 持って来たんだ みんな。

K アーア ホーケ。 アー ムカイニ オイデタンニャ。 ウーン。  
 ああ そうか。 ああ 迎えに いらしゃったの。

Y ホンデ ホレ コッチカラ ツンデ イッタンニエ。 ( <sup>K</sup>ウーン )  
 それで ほら こちから (荷物を) 積んで 行ったんだ。

イヤ オゾイコト ノータワノ。  
 いや ひどい目に 会いましたよ。

K デ ダエイブ ソコラジュー イッテナハルモノ。 ホイデ ウト  
 それで 大分 そこいら中へ 行ってらっしゃるものねえ。 そして 歌  
<sup>(132)</sup>  
 テー……。  
 て……。

Y ホデ ナンジャモン キューサフノ オッカチャン クルトキネ<sup>(134)</sup> ア  
 それで 何ですもの 久作の 母さんが 来る時に あ  
 リヤー アデ<sup>(135)</sup> シロサキデ<sup>(136)</sup> スズキサンデ<sup>(137)</sup> ウケトッテキタンヤテ  
 れは あれで 白山崎で 鈴木さんで 受けとってきたんだからね  
<sup>(138)</sup>  
 ノ。 ソノトキラモ アノ カワカミノ オッツァヤラ ンナ ア  
 え。 その時なども あの 川上の 親父や あ

ーユー トショリノ ジェン<sup>(139)</sup> ホソカワノ。 アノトキモ アデ  
あ言う 年寄りの 糸田川のや。 あの時も あれで

コッチカラ ハチニン イッタンニャー。 <sup>(141)</sup> ( <sup>K</sup> アー ホーケノー <sup>(142)</sup> )  
こちらから 八人が 行ったんだ。 ( ああ そうかねえ )

ソレ ウラー ヤッパ シェントーヤ ワカイケド。 イチバン  
それも 私が やはり 先頭だ 若いけれども。 一番

アンナトキネァ ワカイヤノ ンナモン。 ( <sup>K</sup> ワカイ ) ンナ  
あんな時には 若いでしょう そんなもの。 ( 若い ) みんな<sup>(おけ)</sup>

トショリ バツカリニャー。 ( <sup>K</sup> ホージャ ホリヤ ワカイ ) ウラ  
年寄りばかりだ。 ( そうだ それは 若い ) 私

ニ オッツァニ イケッタンニエ<sup>(143)</sup>。 ( <sup>K</sup> ウン ) オッツァ ア  
は 親父に 行けと言ったんだよ。 ( すると ) 親父は 駈

カンノヤ オッツァワ サケ ノムト イッペン ウダクダ ユー  
目なんだ 親父は 酒を 飲むと すぐに ぐどぐど 言う

サケ アカンノヤー モー アンチャン コナ アカンノヤー ッテ  
から 駈目なんだ もう 兄ちゃんか 来なくは 駈目なんだって

ミンナ ユーンニエ。 ( <sup>K</sup> ウーン ) イヤ ウラ ワカイモンガ  
みんなが 言うんだ。 ( いや 私(のような) 若い者が

モ トショリジャカイッテ ユー。 ( <sup>K</sup> ワカイモノー ) キュー  
む(細い人はみんな)年寄りにからって 言う。 ( 若いものねえ ) 久作<sup>(144)</sup>

サノ オッカサン キナシテカラ イクラ タツ ヨンジューナ  
の 母さんが (嫁に) いらしから 何年 たつ 四十何年に

ンネンタツ イマ ムスコガ シジューイフツ ナッテンジャロデ<sup>(145)</sup>。  
つよ 今(もう) 息子が 四十いくつに なってるんだろうから。

( <sup>K</sup> ホヤ ホヤ ) <sup>(146)</sup> ウー。 ( <sup>K</sup> ホージャ ) ソンナトキネ ドー  
( そう そう ) ( そうです ) そんな時に 道



7° モッテッテンニヤケ ヤッパ ダイブ マエカラ イッテルッ  
具を 持ていっているんだから やはり 大分 前から 行っていると言

チュコトガ ワカル。 ( <sup>K</sup> ホーヤノー <sup>(447)</sup> ) <sup>(448)</sup> ホイデー アントキラ  
うんとか わかります。 ( そうだねえ ) それで あの時は

モ ホンデ アンデ スズキサンデ ウタウトテ。 ホイデ ウタ  
ども それで あれて 鈴木さんで 歌を歌って。 だって 歌を

ウタワナ ワタサン チュサケ。 <sup>(ミンナ)</sup> トショリノ オッツアラ  
歌わなくては (道具を) 渡さないと言うから。 <sup>(歌えいんたー)</sup> みんな 年寄りの 親父ら

ウタエンノエ ウタイサラサンノエ。 <sup>(449)</sup> (笑) ワカイモンガ……。  
歌えないんだ 歌いやからないんだよ。 若い者が……。

K ホソカフノ オンサンワ アホダラキョーヤッタンケノ。 <sup>(450)</sup> ( <sup>Y</sup> エ  
糸田川の おじさんは あほだら経 だったのかね。 ( え

ー ) (笑)  
え )

Y アノ オッツァ マタ オモッシエコト ユーデワ……。 (笑)  
あの 親父は また 面白いことを 言ては……。

アノ オッツァモ マタ アノ ドーグ テルマエネフノー <sup>(451)</sup> ( <sup>K</sup>  
あの 親父も また あの 道具の 出る前はねえ

ウン ) <sup>(452)</sup> オモッシエー ヒョータン ダイテノー。 ( <sup>K</sup> ウン )  
面白い 瓢箪を 出してねえ。

ドッカラ ヒョータン……。 ヤッパ カクイテ モッテッタンヤ  
どこから 瓢箪 (出したのか)…。 やはり 隠して 持っていたんだ

ノー アレ。 ( <sup>K</sup> アー ホーケ ) アホダラキョー ネーカッタ  
ねえ あれは。 ( ああ そう ) あほだら経は ないかと言

<sup>(453)</sup> ンエ ホイトラ マタ クルマ テルノ オソナルゲノ ホンナ  
んだ。 そんなものがあると また 車の 出るのが 遅くなるかね そんな

モン ( <sup>K</sup> ウーン ) ナンカ ヒトイキショーケッテ ユーテァ オ <sup>(154)</sup>  
もの ( ) 何とか ひと息入れようかって 言ては あ

メー <sup>(155)</sup> モンク ユーンニャサケ。

なな 又句を 言うんだから。

K ホソカワノ オジジワー <sup>(156)</sup> アーユー アホドラキョーオ ( <sup>Y</sup> アー )  
細川の 親父は ああいう あほだら経を ああ

シューキョウレー <sup>(157)</sup> アルト アノ <sup>(158)</sup> ウトタワノ。 <sup>(159)</sup> ウーン。  
祝儀ぐらい あると 歌ったよね。

Y ホイテ マー キューサクラノ ナンベンモ イッタノ。 <sup>(160)</sup> ホンボ  
そして まあ 久作の(祝儀には) 何回も 行ったね。 本保へ

モ イッタシノ ( <sup>K</sup> アー ホーケ ) <sup>(161)</sup> ホンボイサ。 アレモ コ  
も 行ったしね ( ああ そう ) 本保へさ。 あれも 国

ワドーカラ モー オロイテ ( <sup>K</sup> アー ) クルマカラ オロイテ  
道の所から もう(荷物を)おろして ( ああ ) 車から おろして

ハイッテッタンニャ。 ( <sup>K</sup> アーア ) ホリャ モー ニギヤカヤ  
入って行ったんだ。 ( ああ ) それけ もう にぎやか

ッタ。 <sup>(162)</sup> ( <sup>K</sup> アーア ) <sup>(163)</sup> ホーニテ モ コテ ジョーサン イッテ  
だった。 ( ああ ) それで もう これで たくさん(道具持ち)行て

ルノ コテ。 <sup>(164)</sup> リャー ヤッパ ダイブ イッテルノ。  
るね これで。 これは やはり 大分 行てるね

K ウーン ダイブン ダイブン タイター イッテ アノ イッテナ  
xxxxxxxxxx xxxxxxxxxx xxxxxxxxxx xxxxxxxxxx xxxxxxxxxx  
大分 大抵(家の道具持ちに) 行てら、

<sup>(165)</sup>  
ハルヤロー。  
しゃるでしょう。

Y ダエイクサンカラ アノー <sup>(166)</sup> アワノ イッタッタケノ <sup>(167)</sup> アワノエ……。  
たいくさんから 栗野へ 行ったのでしたのね 栗野へ

アワノ イッタ ヒトヲ シンナハランカ。

栗野へ 行った 人は ござらないですか。

K アノ アワノデ<sup>(168)</sup> ネー……。 アワノデ<sup>(168)</sup> ネー……。  
あれは 栗野じゃない……。 栗野じゃない……。

Y アノ シラヤマノ アワノツチユートコ アルゲノ ドコヤラ。  
あの 白山の 栗野と言う所 あるじゃないですか どこだったかに。

K マキデ<sup>(169)</sup> ネンケ<sup>(170)</sup>。 ( Y マキツチユンケナ ) ウニ。  
牧では ないですか。 ( 牧っていったかねえ ) ええ。

Y アノー コトハラ<sup>(171)</sup> アソコエ キテル コー ソーヤデノー。  
勾当原の あそこへ 来ている 娘か? そうですからねえ。 (

K うん ) アノ アノトキモ ドークモチニ アッコ イッタ  
あの時も 道具持ちに あそこへ 行ったん

ニヤデノ。

だからね。

注記

- (1) 酒屋へ杜氏に行くことが楽だととらえられているとは意外。  
 (2), (3) はともに [te:]。 (4) 「かなりの」の意。 (5) 聞きとれず。  
 (6) 「ラウナネン」の「ネン」は、関西で「あの人だ」と言うのに「あの人やねん」と言うのと同じか。 (7) [i:<sup>1</sup> wan<sup>0</sup>]  
 (8) なくは武生（或いは福井）、狭くは下中津原を言うか。 (9) [sabune:<sup>1</sup> si:<sup>1</sup>]。独特のイントネーション。 (10) [næ:<sup>1</sup> de<sup>1</sup> no:<sup>1</sup>]  
 (11) は、きり聞こえず。お金を小さい金に両替することをここでは「こわす」と言うから、そのことか。 (12), (11) よりもややはっきり聞こえるが、意味はあいまい。 (13) 「ダケ」は聞こえないようにも思う。意味は不明。 (14) [jappa:<sup>1</sup>]。 (15) 語尾は上昇調のイントネーション。「達者なら」の意。 (16) [n<sup>0</sup>]  
 (17) 「お出になる」の意。酒造組合から勤続20年の盃が出ることを言う。 (18) [de] (19), [ke] (20) [toki<sup>0</sup>]。 (21) 「旦那」で「酒屋の主人」のこと。 (22) 「気張って」。 (23) [kōij<sup>0</sup>a]  
 (24) 上昇調イントネーション。 [no:<sup>1</sup>]。 (25) [ju:<sup>1</sup> te:<sup>1</sup>]。独特のイントネーション。 (26) こう聞こえる。 (27) 「コソ」と聞こえるような気がする。 (28) [de:<sup>1</sup>]。 (29) 地名。前出。  
 (30) 地名。武生市白山地区（坂口地区の北西にある）。 (31) これは前の「甲斐城」を受けて言う。「海岸」あるいは「漁村」などに対して「浜」を使う。 (32) 地名。丹生郡越前町糠。甲斐城の北にある漁村。 (33) [toʃori<sup>0</sup>]。 (34) 「ホント」の言い誤りか。  
 (35) 末尾の「ザー」は少々ぜんざいな言い方。 (36) [ire:]  
 (37) 「コージ」の言い誤りか。 (38) [paŋa:<sup>1</sup>]。 (39) 「9千のタンク」をさす。「ソレ」 と 「ニ」 が かすかに 聞こえる。  
 (40) [de]。 (41) はっきりしないが、こう聞こえる。 (42) 擬態語。  
 (43) [wakaiʃu<sup>0</sup>]。 (44) 「どんな者も」の意。 (45) 山本氏の年に似合わぬ行為を誉めて言う。 (46) 「けかをするといけないから」という気持ち。 (47) 末尾こう聞こえるがあいまい。

(48) この「コツ」は「カ」の意に近い。(49) [gettãi]。(50) [tẽ:] と長音化。(51) すばやく登ることを言う擬態語。(52) 司会者加藤の家の天井(座敷の天井)を見て言う。(53) [morotajaɽː]。(54) 酒のタンクのこと。(55) 酒屋のことを「倉」と呼ぶ。(56) このように聞こえる。(57) 擬態語。(58) 「テレビに映る」ということを「テレビにのる」という言い方をする。(59) 山本氏が酒屋で歌を歌っているのが、その春にテレビで放映されたいらしい。(60) 酒の原料をタンクの中で混ぜるための櫂。(61) 「覚悟している」が文字通りの意味だが、ここでは、山本氏の歌に合わせて櫂を動かせるように「用意する」、「準備する」というような意であろう。(62) 「神々しい」であろうが、ここで使うには一般的な意味ではあまりに大げさすぎる。山本氏がカメラの前で歌っているその「立派さ」をこう表現したのでだろう。(63) [ne] (64) 山本氏に尋ねる口調。(65) 末尾が上がる。(66) [iɽːsakenoɽː]。独特のイントネーション。(67) [sakẽɽː]。(68) のど自慢のようなものか。(69) 「ビニ」の発音があいまい。(70) [kẽdoɽː]。(71) 上昇調のイントネーション。(72) 倒置。(73) 「いやそんなことはないですよ」という口調。(74) [sitonãɽː]。(75) [ʃiranjarõː]。(76) [renjaroɽː]。(77) [daremoː]。(78) [utawarennoɽː]。(79) 同じ村の人の名。(80) 「とても出来るわけがない」というような確信をこめた言い方をする場合、語尾に「トコトイ」をつけることがある。(81) 「節付け」の意か。(82) [ndẽɽː]。(83) 人の名。家号でもある。(84) [noɽː]。(85) [wakaidẽɽː]。(86) 長持歌を教える。若い若に伝え残すこと。(87) 家号。(88) 地名。武生市当ヶ峠町。前出。(89) 「ツミカエテ」の言い誤りか。嫁が先の村の道が狭いので、何か大きい車では入ることが出来ず、小さな大八車にでも積みかえたのだろう。(90) 家号。(91) 山本氏が長持歌を歌って行く。(92) 山本氏の家の家号。前出。(93) 「先になつて」の意。(94) 言いかけ。(95) 嫁入り先の家。(96) 「入るまでに」の意。(97) 口の中にこ

も、た発音。(98)これは「飲ませる」の誤りのようにも思う。  
 (99)こう聞こえるが、意味はは、きりしない。「ヒキヤラ」の「ヒキ」はもしかすると「引き出物」の「ヒキ」か。つまり、長持歌を歌いながら嫁入りの一行が村に入ると、田にいた人達が何か「引き出物」(といっても茶碗酒かするめのようなもの)をもらおうと寄ってくるという意ではと想像する。(100)こう聞こえるが意味はわからず。(101)特に意味はない。(102)[nondε]。  
 (103)長持歌が1つのごちそうだと言うこと。(104)長持歌を歌っている山本氏の後の若が(言えない)。(105)「前へ進む」意。  
 (106)家号。(107)ここで話が急転する。(108)[h<sup>o</sup>ide]。(109)家号。(110)。(109)の家の人の名。(111)家号。前出。(112)道具持ちで行った時に(いた)。(113)ここで少し話が変わるが、ここまでは後の「アンナトッカラ〜」に続く。(114)大虫へ嫁に行ったという人をさすか。(115)[<sup>o</sup>na:]。(116)「随分以前から行ってますよねえ」という気持ち。(117)地名。武生市大虫地区。  
 (118)[noni<sup>o</sup>ɾ̥]。(119)[i:ne]。このあたり、いかにもめきれたという口調。(120)[wtane]。(121)代名詞。(122)同意のことばで言い直す。(123)[ittasakā<sup>o</sup>ɾ̥]。(124)[jaŋa<sup>o</sup>ɾ̥]。(125)[sannin<sup>o</sup>]。(126)特に意味はない。(127)[sade<sup>o</sup>ɾ̥]。(128)[kedono<sup>o</sup>ɾ̥]。(129)。(130)とともに上昇調のイントネーション。  
 (130)[de<sup>o</sup>ɾ̥]。(131)[wtote<sup>o</sup>ɾ̥]。(132)家号。前出。(133)[ne] (134)地名。武生市白崎町。(135)人の名。「ススキ」に近く聞こえる。(136)「嫁入り道具」を受け取って来た。(137)家号であり、かつその家の苗字でもある。(138)言いかけ。(139)屋号でかつ苗字。(140)道具持ちに行った。[ittanja<sup>o</sup>ɾ̥]。  
 (141)[ho<sup>o</sup>ɾ̥keno<sup>o</sup>ɾ̥]。独特のイントネーション。(142)末尾あいまい。(143)[wakaimono<sup>o</sup>ɾ̥]。(144)このあたり早口。(145)[w<sup>o</sup>ɾ̥]。相手に「そうだろう」と同意を求める調子。(146)[ho<sup>o</sup>ɾ̥jano<sup>o</sup>ɾ̥] (147)[hoide<sup>o</sup>ɾ̥]。(148)年寄り達への軽蔑のこもった表現。(149)「あほだら経」とはどういうのと言うのか不明。何か念仏のよう

なものか。(151) [noʔː]。(152) [noʔː]。(153) - 応訳したか、  
 意味は、きりせず。(154) [ju:tɛ]。(155) 「苦情」の意。  
 (156) [ozigiwaʔː]。(157) [arutoʔː]。(158) [nō]。(159) 自己  
 のうたずき。(160) 地名。武生市本保町。(161) [honboisa]。  
 (162) [jattʰa]。(163) 発音あいまい。(164) [korja:]。(165) [ha  
 rwjaroʔː]。独特のイントネーション。(166) 地名。武生市粟野  
 町。(167) [nō]。加藤氏に尋ねるよう。(168) 考えながら、  
 小さい声で言う。(169) 地名。武生市牧町。上の粟野町と同じ白  
 山地区にある。(170) [nɛnʔːke]。(171) 地名。武生市勾当原町。  
 坂口地区内。前出。

## II. 京都府<sup>あや</sup>綾部<sup>べ</sup>市<sup>たか</sup>高槻<sup>つき</sup>町<sup>ちやう</sup>字<sup>かん</sup>観音<sup>のん</sup>堂<sup>どう</sup>・桜<sup>きくら</sup>

収録・文字化担当者 佐 藤 虎 男



## A 収録地点とその方言について

### 1 地点名

京都府綾部市高槻町字観音堂・桜

### 2 収録地点の概観

高槻町は、綾部市々街区から北々東へ約12kmのところにある。農村である。交通は不便で、国鉄の舞鶴線の「梅迫」(うめぞこ)駅から車で入る。昭和25年に、綾部市に編入されるまでは、東八田村(ヒガシヤツタムラ、約800戸)に属していた。現在58戸、約240人の集落をなす。今回の収録地点は、この高槻町の桜と観音堂の二つの小字である。一本の道路でつながっていて、両字は言語上なんらの区別を要しないと見られる。

宗教は、真言・禅宗が多く、旧東八田村全体で六か寺ある。産業は農産物、とくに大根が高槻大根の名で通っているという。

### 3 収録した方言の特色

#### (一) 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

奥村三雄氏『近畿方言の統合的研究』によれば、当該方言は、奥丹波言葉とされる。地理上の名が、そのまま方言区画をあらわす名とされている。概略は、やはりそのとおりであろう。奥丹後方言に直接してはいないものの、汎称丹後弁に間近な地の方言だけに、丹後弁によく続くような、合自然と思われる方言状態を呈している。その具体相は、以下に述べる当該方言要記のうえにうかがうことができよう。

#### (二) 音韻上の特色

##### 《モーラ表》

|     |     |     |     |     |      |      |       |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|-------|
| ア   | イ   | ウ   | エ   | オ   | ヤ    | ユ    | ヨ     |
| /a  | /i  | /u  | /e  | /o  | /ja  | /ju  | /jo/  |
| カ   | キ   | ク   | ケ   | コ   | キャ   | キュ   | キョ    |
| /ka | /ki | /ku | /ke | /ko | /kja | /kju | /kjo/ |
| ガ   | ギ   | グ   | ゲ   | ゴ   | ギャ   | ギュ   | ギョ    |
| /ga | /gi | /gu | /ge | /go | /gja | /gju | /gjo/ |

サ シ ス セ ソ シャ シュ ショ  
/sa si su se so sja sju sjo /

ザ ジ ズ ゼ ゾ ジャ ジュ ジョ  
/za zi zu ze zo zja zju zjo /

ツァ チ ツ ヅァ ヅァ ヅァ ヅァ ヅァ  
/ca ci cu ce co cja cju cjo cje /

タ テ ト  
/ta te to /

ダ デ ド  
/da de do /

ナ ニ ヌ ネ ノ ニャ ニュ ニョ  
/na ni nu ne no nja nju njo /

ハ ヒ フ ヘ ホ ヒャ ヒュ ヒョ  
/ha hi hu he ho hja hju hjo /

バ ビ ブ ベ ボ バャ バュ バョ  
/ba bi bu be bo bja bju bjo /

パ ピ プ ペ ポ パャ パュ パョ  
/pa pi pu pe po pja pju pjo /

マ ミ ム メ モ ミャ ミュ ミョ  
/ma mi mu me mo mja mju mjo /

ラ リ ル レ ロ リャ リュ リョ  
/ra ri ru re ro rja rju rjo /

ワ  
/wa /

ン  
/N /

ッ  
/Q /

ー  
/R /

## 《発音上の特色》

### ① [g] と [ŋ]

前接音節に連続して現われる /gV/ は、主に老年層において、[ŋ-] となることが多い。人によって、また場合によって、[ŋ-] が現われないこともあり、どういう場合というのを明確に言うことが困難でもある。要するに法則的でない。であるから、[ŋ] の音価も、文字通りの [ŋ] から [g] にむしろ近いかと思われるものまで幅広く認められるように思う。

### ② [r] < [d]

○…… コドモア モロッタラ……(子供が戻ったら)

のようなのが開かれたが、多くはないようである。

### ③ [d] < [z]

これも多くはないが、スガワラノ ミチダネヤ ナイ……」のようなのが開かれた。

### ④ [h] < [s]

「ヒサカハン」(久子さん)と言い、「アラヘソ」(ありほしない)と言い、「ホイテ」(そして)と言うなど、これらはかなり盛んであるが、特定語句のうえにのみ現われ、一般法則的ではない。なお、「ス」を「フ」に言うことはまずないし、「シ」が「ヒ」となることも少ない。「シヤナイトモタンデヒョカイテ。」(しやうがないと思ったんでしやうかほ。)のようにある一方で、「シト」(人)、「シトツ」(一つ)のように言うことが通常とされる。

### ⑤ 母音

無声化とは対立的な発音傾向にある。

「メーヂデス カ。(明治ですか。)」における「ス」の母音は、明瞭な丸口の [u] であって、「ス」は前後の音節と完全に張りあう一音節であった。

### ⑥ (ai) 連母音

相互同化しない。一般に [i] 母音は変化しにくいようである。ただし、たとえば下例のように、[æ] のような発音が、ときどき聞かれ

るのは、注意すべきである。[ogaε](小貝<地名>), [oaesan](おあいさん<人名>), [—sakaεde](～さかいで)

#### ⑦ [oi] 連母音

相互同化しない。「良い」も「ヨイ」である。「エー」もかなりよく聞かれるが、「ヨイ」が落ち着きのよい言い方である。

#### ⑧ 長呼

「チー」(血)、「ミー」(実)、「ケー」(ケ)のように、共通語で一音節に言うのを長呼する。「グーミ」(ぐみ<植物名>)は単純な長呼とはな(が)たいか。

#### ⑨ 短呼

「ワロタ」(笑うた)、「モロタ」(貰うた)のような短呼が優勢である。「ゾリ」(草履)のような短呼は、まれである。  
○カキ(柿)オ ヨー クタ モンジャケード……。 (老男)  
のようなのは、促音の脱落ではあるが、音効果としては、長母音の短呼と似ていよう。

#### 《アクセント》

京阪アクセントとは異なるアクセントが現われて注目される。二音節語のアクセントについてみるのに、たとえば、自然な会話の中に、

チチニ (父に)、カタデ (肩で)、ワラデ (藁で)、ゲタワ (下駄は)、  
コマワ (独楽は)、エキエ (駅へ)

カフミタイニ (皮)、ヒルモ (蛭も)、タビハイテ (足袋)、イマ (今)  
アル (有る)、ナル (成る)、ギル (切る)、マク (描く)、

のようなのが聞かれる。奥村代が「垂井式」とされるのは、このような事象をおさえてのことと思われる。

ところで、このようなアクセントの行なわれる反面、たとえば、

イマノワ (今のほ)、アッタンジャ、

のようなのが、現実形として現われもするのである。ここには、当六言のアクセントの単純でない事情がうかがわれる。

当該方言を特色づける有力な一面は、アクセントであろう。そして、それは、語のアクセントのみならず、文アクセントにも言いうること

である。文アクセント上の特色傾向として、さしあたり次の三項があげられよう。

① 後上がり調その一（上昇調子）

たとえば

○ソーデス。 (そうですよ。)

○ジョーズニ シタ アリマシター。 (上手に（して）ありましたよ。)

○ボーシ カブリヨッタ。キモノ キテ。 (帽子かぶってた。～着ては。)

のように、文末を尻上がりに言い収める。この上昇調子は、あたかも、文末詞を用いて訴えたかのような表現効果を発揮する。頻用される。

これが、文末詞の上にも実現して、（さらに

○----- ハクセンカ° ハイッテ ナー。 (白線がはいってねえ。)

○イソカシーラシーデ ナーア。 (忙しいらしいからねえ。)

のような訴え方を見せる。

② 後上がり調その二（後オ卓立）

多く文末詞「ナ」でしめくくる文において、たとえば、

○タカツキデス カナ。 (ほう、高槻じゃないですか。ね。)

○マイニチ オロシテ モロテンデスンヤ ナ。 (毎日下ろしてもらわれるんですよ。)

○ソメモンヤカ° アッタンニヤ ナ。 (染物屋があっただよね。)

のように、「ナ」の直前の一音節だけが卓立する、有力な型がある。

○ソエダケ ノコリマス ワナ。 (それだけ記憶に残りますわ。)

○オジゾーサンイ ツレテ マイッテ モライマシタ ナ。

こういうのもまた、問題のところで卓立して急下降する型とされる。

あいさつంటばに、

○コンニチワ。 (初老女→中男) <中男にこたえて>

とあるのも、同じ文アクセント傾向にのっとったものとみなされよう。

○ワタシノ ショーカッコーワ アッチデス ワナ。

では、この後オ卓立の型が一文中に二回おこなっている。

③ 連続高平調

上記例「オジゾーサンイ 〜」のような 高音の平らに連続する文アクセント傾向もまたつよい。

○ ゴムノ ナカクツカ アル ワナー。

○ ナー。 オーイニ アルヤロ。

○ …… チョード ノーカッコーエ イットル ……。

など、随所に現われる。語の上に認められた注目型○○は、この文アクセント連続高平調と なんらかの関連を有するのであろう。

### (三) 文法上の特色

#### ① 文末詞法

感声的文末詞としては、「ナー」「ノー」「ヤ」「エー」、非感 的文末詞には、「カ」「カイ」「コ」、転成文末詞としては、「ワ」「ワナ」「カナ」「ン」「デ」「モン」その他がある。

「ナー」は、なかでも、当方言生活の柱ともみられる、要の文末詞である。これを使っているかぎり安んじて物が言えるといった風の、程のよい品位を保持する。「ナー」「ナー」「ナーア」および「……ナ」の四種の声調が認められる。

「ノー」は、外来者に対するような公的な物言いに使う。

「ヤ」は、「イケヤ。」のような勧励の表現にあらわれた。

「エ」は、たとえば次のように用いられる。

○ ジョーブカ シランカ エー。(又天かしらないがねえ。)

○ …… コレオ キトリマス カ。(これを着ていますがね。)

助詞「カ」のあとに立つのを常とする。

「カ」「カイ」「コ」

問いかたに諸相がある。「カ」の対応品位は幅広い。親しい問いにもていねいな問いにも「カ」を働かせる。「カイ」は、親愛の情をもって問う文末詞である。「カイノー」という複合形も多用される。「コ」は、夫が妻に、姑が嫁に、というような、身内の目下に対する、ごくくだけた問いこたばになっている。

○ ホンデモ ニカツーノ オワリー ゴロヤッタ コ。(老男→妻)

「ワ」も盛んに用いられるものである。男よりも女に多い。「ワナ」複

合形も多用される。

「デ」もまた優勢な文末詞である。告知の文表現をつくる。

○ハヤカッタ デ。(早かったよ。)

## ② 敬譲法

もっとも注目されるのは、「て」敬語法である。

○ホンマー ソー ユーチャッタラ ソーカモ シレン。

ほんとに そう おっしゃれば そうかも しれない。

○ヒトツキヤ ソコラデ イッテ シト アレヘン。

一月程度(の交際で嫁に)行かれる人ってありゃしない。

助詞「て」を「じゃ」「や」「です」「の」などで受けて成りたつ敬語法であって、敬と親とを兼ねてあらわす日常的敬譲法である。対看をも他看をもこれで対遇する。共通語の「れる・られる」に言いかえては大げす過ぎるが、常態では決してないという、独得の待遇感情をよく表現するのである。男女ともよく用いる。

命令・勸奨の表現には、下記のような「～ナハレ。」「～ナハイ」がある。

○コエ ムイドクナハレ。(これむいて食べて下さい。)

○モット ザックバラシニ カンガエテ ミタイ ト。

## ③ 係結法

係結法の固定化したすがたが、なお次のように認められる。

○ジョーズヤ ナシニ <sup>↑</sup>ネ。ソレヤッタラ コサレデス。

お世辞じゃなしにねえ。それ(まじめ)だったればこそですわ。

○コッチワ シランデ コソアレ-----。

こちらは 知らずにいるけれど-----。

## ④ サ行イ音便法

○ナカグツ ホカ<sup>↑</sup>イテ ハイタ -----。

○スズメノ スーヲ サガ<sup>↑</sup>イタリ -----。

## ⑤ 断定表現法

「ジャ」がかなりよく聞かれる。同じ人の発言中に、ジャ とヤ とが並び用いられることもある。

○ヨイ ウチ<sup>↑</sup>ジャ。(いいお家なんだよ。)

○ソー<sup>ニ</sup>ジャ　ナ。 (そうだよな。)

④ 接続表現法 (接続助詞法)

a. 第一に、「ナリ」が注目される。

○ケド　マ<sup>ニ</sup>　センソー<sup>ニ</sup>チュ<sup>ニ</sup>ー<sup>ニ</sup>ナリ　アノ<sup>ニ</sup>　ドエライ　オマエト  
フタリデ　アッ<sup>ニ</sup>チ<sup>ニ</sup>ー　イキ　コッ<sup>ニ</sup>チ<sup>ニ</sup>ー　イキ<sup>ニ</sup>　シタ　コトモ  
ナ<sup>ニ</sup>カッタ　ノ<sup>ニ</sup>。ホンデモ　アッ<sup>ニ</sup>チ<sup>ニ</sup>エ　イコ<sup>ニ</sup>ニモ　ギシャノ  
ギッ<sup>ニ</sup>プモ　カエン<sup>ニ</sup>ナリ　-----。 (老男→妻)

もともとが断定助動詞「ナリ」の中止形であろう。それが、ここでは、「であり、したがって」のような接続機能を果たしている。並立助詞風の。

○----　オナゴ<sup>ニ</sup>ワ　オナゴ<sup>ニ</sup>ラシ<sup>ニ</sup>ー　ハカ<sup>ニ</sup>マ<sup>ニ</sup>ナリ　オトコ<sup>ニ</sup>ワ　ラク<sup>ニ</sup>ナリ  
デ　シタンマ。

のようなものもあるが、これとて、なみの並立表現とは趣を異にしている。(一般の並立助詞「ナリ」には、いずれかを選択するの余意があると言われている。)

b. 「デ」

これがかなりよく聞かれる。「スクナイ<sup>ニ</sup>デ」(少ないから)、「アル<sup>ニ</sup>デ」(あるから)など、その例は多い。

c. 「サカイ<sup>ニ</sup>デ」「サカエ<sup>ニ</sup>デ」「サカイ」「ハカエ」

○　マエ<sup>ニ</sup>ワ　カタ<sup>ニ</sup>デ　モチヨッ<sup>ニ</sup>タ<sup>ニ</sup>サカエ<sup>ニ</sup>デ　イネモチスルン<sup>ニ</sup>デモ  
ナニ　スルン<sup>ニ</sup>デモ<sup>ニ</sup>ヤッ<sup>ニ</sup>タリ　-----。

のように、「サカイ<sup>ニ</sup>デ」「サカエ<sup>ニ</sup>デ」がよく行なわれる。

d. 「ケード」「ケン」

逆接接続法には、「ケード」が多い。もっとも、文中に立つよりも、これが文末に立って、それで文が中止する場合が多い。

○----　ハデ<sup>ニ</sup>ナ　シナ<sup>ニ</sup>フク　ギタリ<sup>ニ</sup>ナン<sup>ニ</sup>カイ　スル<sup>ニ</sup>ケード。

文末詞「ナ<sup>ニ</sup>」の下接するときには、

○----　ソ<sup>ニ</sup>ラ　ユ<sup>ニ</sup>ワン　ナン<sup>ニ</sup>ケン　ナ<sup>ニ</sup>。 (そりゃ言わねえやうん  
けどな。)

のように言うことが多い。



## ⑦ 叙述態の表現法

継続態に「～トル」が用いられる。

「～ヨル」は、回想継続態とも言うべき表現法である。

○クツ ハキヨッチャッタヤロ。(靴をはいておいでだ。たでしよ)

## ⑧ 禁止の表現法

一段活用動詞を活用して禁止の表現をすると、たとえば

○---- クチナワン ナルデ タベテ ヨ ユーテ ----。

のように言う。「タベルテ」でない点に注目される。

## ⑨ 形容動詞活用

○ジブンワ ケンコーナシ。(自分は健康だし。)

連体形と同じ形が終止形になっている点に注目される。

## ⑩ あいさつとぼ

「今日は。」を「コンニチワ。」(女はよく「コンチモ。」)という。

「今晚は。」は「バンテリマシタ。」「コンバンワ。」である。

○キゲンヨー モーッタ カイ。ヨイ ヨイ。

これは、息子夫婦が戻ったのを迎えての、老母の「おかえり。」のあいさつである。「ヨイ ヨイ。」は、「よかったよかった。」の意。)

## (四) その他

《地点選定の理由、協力者について》

京都府の方言を考えると、その代表をといえば、京都市の方言がまず考えられる。50年度の報告は、京都市郊外の一地点の方言をとりあげたものであった。京都市については、奥丹後の方言をとりあげたいし、またその中間の丹波をもとりあげたい。そしてあたり51年度には丹波を、52年度には奥丹後を調査報告しようと考えた。ちょうど綾部市生まれで当市に現住する知人がいるので、丹波方言調査には便宜を与えられるであろう。

その知人とは、現綾部高校教頭、渋谷計二氏である。事前準備から事後の聞き取りに至るまで、誠実親切な協力をいただいた。また、観音堂での調査では、収録話者でもある山室二郎氏に、格別のお世話になった。幾度も事後の質問に、懇ろに指導下さった。ジ家族あげ

てのジ親切をいただき、帰りにほジ息子に車で送っていただくなどした。

桜での話者渡辺信一代は、篤実の人であって、多忙の中、長時間積極的にお話し下さった。帰りにほりっぽな生椎茸をたくさんいただいて恐縮した。

## B 表記について

研究所指定の符号以外に、本報告書には、次のような符号を用いた。

(例)  $\overset{\textcircled{2}}{\text{—}} \overset{\textcircled{1}}{\text{—}} \overset{\textcircled{2}}{\text{—}} \overset{\textcircled{2}}{\text{—}}$   
○ドコイ イコトモ オモタ コト -----

○マ  $\overset{\textcircled{2}}{\text{—}}$  ハシリ、 $\overset{\textcircled{4}}{\text{—}}$  ハシルノカ $\overset{\textcircled{3}}{\text{V}}$  アー -----

○-----  $\overset{\textcircled{4}}{\text{—}}$  テーニモ  $\overset{\textcircled{4}}{\text{—}}$  ヒツツクシ -----

○-----  $\overset{\textcircled{5}}{\text{—}}$  シラセルヨーナー コトヤ -----

上例を用いて以下説明する。①～⑤は、説明のための指示か所。

### a. アクセント表記

アクセント記号を施した。自然な現実形を、簡約な高低二段の抑揚相として表示したのである。施線部が高音である。

なお、上例の①のように、施線が途切れているのは、後方の高音部位(「ト」)が、前の高音部位(「～コ」)よりも、さらに一段高いことを表わす。(この点からすれば、結果として三段階を表記し分けていることになる。)

### b. 呼吸段落の表示

呼吸段落——「音声のとざれによってその前後を限られ、その中間にはとざれを含まない音声連続を呼吸段落という。」(服部四郎氏『音声学』)——は、必ずしも文法構造に即応するとは限らない。むしろ構造を越えて自在奔放でさえある。観察的立場からは、その呼吸段落の判定に困難をおぼえることがしばしばである。(しかしながら、全体として見た場合、一気に発音された部分、いくらか区切りかげんに発音された部分、あるいは、思考を整理するためにしばらく休止する部分などの、おおよその判断はできる。それがそのような状態を呈するのであるから、その状態をできるだけ表示することが望ましかろう。

そこで、話部(文節相当)と話部との間(ま)の長短を判断し、比較

的短い場合、すなわちほとんど間を置かずに一息に言い続けられている場合に「へ」印で連結し（㊤のところがそれ）、比較的間の長い場合、すなわち明らかに声を切って休みしていると認められる場合に「V」印を記入（㊤のところがそれ）した。そして両者のほぼ中間と認められる場合には無記号（㊤のところがそれ）とした。

これによれば、明らかな呼吸段落は、無記号ないし「V」印で区切られる一個ないし二個以上の話部連続（二個以上の場合は「へ」印で連結されている）ということになる。

### c. 母音の長呼・半長呼の表記

長呼一拍分（一の記号）には及ばないやや長めの発音は音韻論的には重要な意味を持たないと考えられるが、現実形尊重の精神を貫いて、これをまた、できるだけ表記したい。長音符号の半分の線分でこれを示した。（㊤のところがそれ）

### d. 応答文などの表記

「アー」「エー」「エン」「ウン」「フン」「ホン」「ウー」「ヘー」などの発音は微妙で表記がむづかしい。これらを精密な音声記号に表記し分けることには、さほど重要な意味はなからうと考え、いちいち注記していない。類型化し典型化したのカタ表記だけに止めた。

## C 収録内容の概説

1. タイトル      1. 黒谷の紙すき
2. 録音年月日      1976年(昭和51年)2月22日
3. 録音場所      綾部市高槻町字観音堂 山室二郎氏宅
4. 話し手      A 山室二郎氏 男 明治31年生まれ 農業  
長く村役場に勤め、助役を勤めた。  
B 山室富江氏 女 明治41年生まれ 農業  
二郎氏の妻。隣接上杉町から嫁入り。  
C 坂本アイ氏 女 明治27年生まれ 農業  
D 坂本ヨシノ氏 女 明治36年生まれ 農業  
アイさん宅と親戚関係。

### 5. 録音環境、録音状況

同席者佐藤。録音環境良好。土地人同士の会話をと願いつつ、結果は佐藤がしゃべりすぎた。富江さんは話好きで、話しぶりも魅力的。声も若々しい。坂本アイさんは、歯が抜けて、発音しにくそうなところがある。最年長のおばあさんである。ヨシノさんは、発言が比較的少なかった。声もどちらかといえば低くつましい。山室二郎氏は、一座のとりまわしを念頭に、外来者である佐藤への解説者的役割を果たされた。

1. タイトル      2. こどものころの衣服
- 2, 3, 4, 5 は 「1. 黒谷の紙すき」に同じ

1. タイトル      3. 小学校とこどもの遊び
- 2, 3, 4 は      1, 2に同じ
- 5 録音環境

途中、B氏が、孫が泣いているのに気付いて退席。他は変わらない。

1. タイトル      4. こどものおやつ

2, 3, 4 は      1, 2, 3 に同じ

5. 録音環境

B 代は、孫を抱いて話している。途中に、外出から帰った嫁の梢さんがお茶を運んで来る。F とする。F 代は舞鶴出身である。

-----

1. タイトル      5. こどものころ

2. 録音年月日      1976 年（昭和51年）2月20日

3. 録音場所      綾部市高槻町字桜 渡辺信一代宅

4. 話し手      A 渡辺信一代 男、明治43年生まれ、農業兼大工

B 渡辺久子代 女 大正7年生まれ 農業

渡辺信一代は、軍隊は別として外住歴なく純粋の土地人。

渡辺久子代は、信一代の夫人。ただし、福知山から嫁がれた方で、純粋の土地人ではない。早口で聞きとりにくいところが多い。

司会者渋谷計二代は、土地人であるが、年齢が48才。信一代と従兄弟の間柄

上記のジとくであるから、純粋の土地っ子で老年層といえは信一代だけであるが、上記のような夫婦の対話もまた、具体的な農村家庭の言語生活の一相として貴重と考えられるので、ここに収録文字化することとした。

5. 録音環境・録音状況

同席者佐藤は、できるだけうなずいて聞くだけにした。司会者の努力で、かなりうちとけた話になったと思うが、それでも同席者がいなければもっと自由になろうかとも思われた。久子夫人は、お孫さんを守りしなから時々移動されるので、声が遠くて聞きとりにくい部分がある。お孫さんのアーアーという声で話声が消されるところもある。

1. タイトル      6. 家族のこと  
2, 3, 4, 5 は 「5. こどものころ」に同じ

1. タイトル      7. 結婚当時のこと  
2, 3, 4, 5 は      5, 6 に同じ

1. タイトル      8. 祭りの日のこと  
2, 3, 4 は      5, 6, 7 に同じ  
5. 録音還境

担当者佐藤は退席し、渡辺氏夫妻と渋谷氏だけで話してもらった。  
その他の状況は、前に同じ。

1. タイトル      9. 農家の主婦の苦しみ楽しみ  
2, 3, 4, 5 は 「8. 祭りの日のこと」に同じ

# 1. 黒谷の紙すき

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)            |
|------|-------|-----|-----------------|
| A    | 山室二郎  | 男   | 明治31年生まれ〈司会役〉   |
| B    | 山室富江  | 女   | 明治41年生まれ        |
| C    | 坂本アイ  | 女   | 明治27年生まれ        |
| D    | 坂本ヨシノ | 女   | 明治36年生まれ        |
| (E)  | 佐藤虎男  | 男   | 大正15年生まれ〈同席担当者〉 |

A ソーユー コト ユヨータ デ。

そういう こと 言っていたよ。

B セヤケドー アノ オヨギワ トモカク アノー クロタニット  
 だけど あの 於与岐は とにかく あの 黒谷と

ユー トコワ エ アノ チカイ シンルイガ ナー。ヨケ アル  
 いう 所は あの 近い 親類が ねえ。たくさんある

デ チートワ ソノ ケーコーガ アル デ。

から すこしは その 傾向が あるよ。

C ソーデス。

そうですね。

B ナーア。ナー。

ねえ。ねえ。

C ヘー。ソラ アリマス。

はい。そりゃ ありますよ。



B ナー。オーイニ アルヤロ。  
ねえ。おいしい。あるでしょ。

C ハー。アリマスデ。  
ほあ。ありますから。

A ソラー チカイー (B ハー。) ナニヤラヤデヤナイ、ソノ ヨソ  
それは、近い (ほあ。) 親類だからではない。その、他所  
トノ ツケヤイガ スクナイデ ソーユー コトバガ ソノ ママ  
との つきあいが すぐないから、そういう ンとばが その まま  
ノコルンノヤ。  
残るんだ。

B ラン ソレモヤシ-----。  
ふん。それもちい-----。

A ハイ。ヨソト ツケヤイ スルト ドーシテモ ヨソノ コトバオ  
はい。よそと つきあい すると どうしても よその ことばを  
ナロテ クデ ヨソノ コトバト イッショニ アッテ シマウ  
なラッて くるから よその ことばと いっしょに なって しまう  
ケードモ (C アー、ソーデス。) クロタニ ヤシロワ ソレガ  
けれども (ああ、そうですね。) 黒谷 ハ代は それが  
スクナイデー ドーシテモ ソノー  
すぐないから どうしても そのー

C アノー キンシンケツコンカ オーイサカイ ナー。 (A エー エー)  
あもう 近親結婚が 多いから ねえ。 (ええ、ええ。)  
ホンデ<sup>(1)</sup>  
それで

B アーエ ワタシラ コドモン トッカラ ネー。(2) エンソクガテラ  
あれ。わたしら 子どもの 時から ねえ。遠足ついでに

イッテ、<sup>(E)</sup> へー。 <sup>(3)</sup> ミナ ココニ、コノ オバサン <sup>(4)</sup> ウマ  
 行って はい。 みな ニンニ、この おばさん 生ま  
レタ シト、コノ オカタモ。 <sup>(5)</sup> ワタシモ、ワタシワ マー コ  
れ れた 人、この おかたも。 わたしも、わたしは まあ  
ノ ココニ ウマレタ ンヤ ナイ、ソコカラ <sup>(6)</sup> キタンデス ケド ミ  
<sup>xxx</sup> ニンニ 生まれたん じゃ ない、ソ ン から 来たん です けど ミ  
ナ ココニ ウマレタ モンヤデ クロタニ エンソクニ イッ  
な ニンニ 生まれた もの だから 黒谷へ 遠足に 行っ  
テ コーシテ シターワ、デ <sup>(7)</sup> シャンシャント コー シテ <sup>(8)</sup> ナー。  
て、この ように して は、で、しゃんしゃんと こう して は え。  
<sup>(D)</sup> アー、ソヤ ナー。<sup>(9)</sup> ンナ ハッ テ ユッ テ テ シュッ シュッ  
あ あ、そう です は え。それは もう、ほっちゃん という わけ で、しゃっ しゃっ  
シュット ティントイデ ナー。<sup>(C)</sup> ラン。ヘーン、ワタシラ  
しゃっ と は ぶん。はい。 わたし らは  
イケヘンデ ナー、ンナイケード ナー。(笑)

(そのように) いかざいからねえ。それは ないけれど ねえ。

A ンデ スーツ テユユ モンデ ソノ トロトロノ アノ ザイ  
それで 簞 という 物 で その ところ の あの 材  
リョー、ゲンリョーノ トロケター ナカエ ツケテ ホシテ コー  
料、原料 の ところ けた 中へ 漬けて そして この  
シテ アノ スキアケル ンデス ワ、ソレオ スイタ カミガ  
ように あのう すき あげる んです よ。 それを すいた 紙 が  
スト マトモナ オンナジ チョーシデ アカッテ クル -----  
おともな 同じ 調子 で あが って くる

E ソラ ムツカシ ーデ ショー ナー。  
それは むっかしい でしょう ねえ。

A ホデー テーノー コツダケナンデス<sup>↑</sup>ナー。  
それで 今の ンツだけなんです ねえ。

E ナルホドー。オンナノ シゴトデショー。  
なるほど。 女の 仕事でしょう。

A ウン、オンナノ シゴトデス。ソレガ ソノー ジューニサンカラ  
うん、 女の 仕事ですよ。それが そのう ナニ、ニから  
ソレオ オボエナンダラー エー トシガ モー ハタチニモ<sup>↑</sup>  
それを おぼえなかったら ああ 年が もう ニナにも  
ナツテカラ ヨメニ キテカラ オボエルッ チュー コトワ デ<sup>↑</sup>  
なつてから 嫁に 来てから おぼえる という ンとは デ  
キシチ ユーヨナ トコデ ムカシカラ キンシンケツコンガ オ<sup>↑</sup>  
きないと いうような ところで、昔から 近親 結婚が 多  
ーインデス<sup>↑</sup>ナー。ンデ ソノ (E アー。) トコニ ウマレタ<sup>↑</sup>  
いんです ねえ。それで その ああなるほど) ところに 生まれた  
シトガ ソノ ブラクエ ケツコンスルッテ ユーヨナ (E ナル<sup>↑</sup>  
人が その 部落へ 結婚すると いうような なる  
ホドー。 ) ジョータイニ ナットル トコナンデ タショー ソノー<sup>↑</sup>  
ほど) 状態に なっている 所なので 多少 その  
ホーゲンテキニ ソーユー トコガ ノコットルンデスケン<sup>↑</sup>ナー。  
方言的に そういう ところが 残っているんですけど ねえ。

E アー ソーデス<sup>↑</sup>ネー。  
ああ、そうですね。

A ヨソトノ ツケヤイガ スクナイモンヤデ<sup>↑</sup>。  
よそとの つきあいが すくないものだからね。

E スクナイカラ。 (A エー。) チョード イー トコロエ。 ソー<sup>↑</sup>  
すくないから(ですか)。 ええ。 ちょうど いい 所へ(来た)。)

ユー トコロカ イー。(笑)

そういう 所が いいです。

C ホンマニ。(A ホイデ アノー---) ワタシモ ソンナ オモトッ  
ほんとに。 それで あのう--- わたしも そのように 思って

タンデス。チョード アソコヤッタラ ヨイヤロケードッ チュー  
いたんですよ。 ちょうど あそこだったら よいだろうけれどと いって

テ (E ハー。) ユートッタンデスケン ナー。  
はあ。 言っていたんですけど ねえ。

E アッ、ソレワ クロタニテ ユー トコロデ。  
ああ、それは 黒谷と いう 所 なんですわね。

A ヘー。ソーデス。  
はい。 そうです。

E ココジャ ナイ ワケ。  
ンジャ ない わけ(ですか)。

A エー。ココヤ ナイデス。  
ええ。 ンジャ ないですよ。

E ドレクライ ハナレトルンデス。  
どれくらい 離れているんですか。

B エー、チョットデス ワ。  
ええ。 ちょっとです わ。

A ソース ネー。ジューヒチハッ チョー ハナレトリマスデス。  
そうですねえ。 十七、ハ丁 離れておりますですよ。

E ハー。  
はあ。

A オナジ コノ ヒガシヤタノ ムラウチナンデスケン ナー。  
同じ この 東八田の 村内 なんですけど ねえ。

E ホー。 ココワ サクラテ ユーンデシヨ。  
ほう。 ンは 「桜」と 言うんでしょ。

A イーエ。 ココワー タカツキ。  
いいえ。 ンは 「高槻」。

B タカツキ。  
高槻

E アッ。 ココワ タカツキデス カ。  
あ。 ンは 高槻です か。

B タカツキデス カナ。 コノ キヘンノ。  
「高槻」なんですよ。 この 木扁の。

E キヘンノ ツキ。  
木扁の 槻。

B エー。 アノ タカツキシカ アリマシヤロ。 オーサカニ。 (E エー。  
ええ。 あの 高槻市が ありますでしょう。 大阪に。 ええ。  
エー。) アレト オンナシ タカツキチョーデス ン。  
ええ。 あれと 同じ 高槻町です の。

E ナルホドー。 (B ハー。) エー。 ソーデス カー。  
なるほど。 そうですか。 そうですか。

B アンタ。 オチャカ サメル。 ヨバレテー。  
あんた。 お茶が さめるわ。 召しあがって (ちょうだい)。

C エー。 ヨバレマス ワ。  
はい。 いただきますわ。

## 注記

- (1) Cの発言、重複して聞かれず。
- (2) Bは、外来者に対して、ときどき、この「ネー」を使う。
- (3) 言いつし。
- (4) Cを指してこう言った。
- (5) Dを指してこう言った。このあたり、言い急いで文辞整わず。
- (6) 上杉町は高槻町の東方にある。その方を指して。
- (7) 「それで」というほどの意。
- (8) 手振りをしてながら。
- (9) 「ティントイデ」の意味詳。「ちゃんと置いて」か？

## 2. こどものころの衣服

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)            |
|------|-------|-----|-----------------|
| A    | 山室二郎  | 男   | 明治31年生まれ〈司会役〉   |
| B    | 山室富江  | 女   | 明治41年生まれ        |
| C    | 坂本アイ  | 女   | 明治27年生まれ        |
| D    | 坂本ヨシノ | 女   | 明治36年生まれ        |
| (E)  | 佐藤虎男  | 男   | 大正15年生まれ〈同席担当者〉 |

A キモノーデ ソノ<sup>ハ</sup>ハカマモ<sup>ナ</sup>ナンニモ<sup>ツ</sup>ツケズニ キモノダケデ  
着物で その 袴も なんにも つけずに 着物だけで  
ス。

す。

E ハー。オ<sup>バ</sup>バーチャンモ<sup>ソ</sup>ソー ナンデ<sup>ショ</sup>。ミナ。  
はあ。おばあちゃんも そう なんでしょ。みな。

C ソーデ<sup>ス</sup>。

そうですよ。

D ソーデ<sup>ス</sup>。<sup>(1)</sup>

そうですよ。

E ハー。オトコモ オンナモ。

はあ。男も 女もね？

C オトコノコーワ ホンデモ<sup>ド</sup>ヤロ。ソ<sup>xx</sup> ドコヤラ ホドカラ<sup>オ</sup>  
男の子は それでも どうでしょ。 どのあたりほどから

トコノ<sup>ハ</sup> コーワ フクキ、フクヤ ナイ<sup>ハ</sup> フ。アノ、ハカマ ハ  
 男の 子は 服を着、服じゃ ない ね。あの、袴 は  
 キダシタノデ オナゴノコーワ- アノー ナニ ソリャー マー  
 き始めたので 女の子は あのう なに それは まあ  
フクヤ ナイ、ハカマヤケードー ウ ウンナシ フクデワ ド  
 服では ない。 袴だけれど 同じ 服では フジ  
 モナラン、ハ ハカマデワ ド モナランデ オナゴワ オナゴラシ  
 うがわるい、 袴では フジウが悪いから 女は 女らしい  
ハカマナリ ( <sup>E</sup> ヘー。 ) オトコワ フクナリ デシタンヤ。  
 袴だし ええ。 男は 服だし、だったんですよ。

E ハ ヘー。 ( <sup>C</sup> ヘー。 )  
 はあ(そうですね)。 はい。

D アレカ モー シキカ コートー イケヘナ ダラ ( <sup>C</sup> シキカ ...  
 あれが もう 式か 高等(小学校)へ行かなかったら 式か...  
 ... ) ハカマジャ ナイ ン。 ジンジョー ジブンワ キモノバーッ  
 ... 袴では ないのね。 尋常(小学校)時分は 着物ばかり  
 カリ----(笑)

A ソラ キモノバツカリ イス。 ウン。  
 そりゃ 着物ばかりですよ。 うん。

B ウン、パンツナー ハケヘナ ダデ ナー。 アンタ。 オコシデ  
 うん、パンツなど はきもしなかったからねえ。 あんた、おこして  
ナー。 デルモンデ (笑)  
 ねえ。 出るもんだから

D コナイダモ ウンドー カイニ ~~~~~。  
 こないだも 運動会に



C モー<sup>（</sup>ダン<sup>）</sup>ダン<sup>（</sup>トシ<sup>）</sup>ガ<sup>（</sup>ヨル<sup>）</sup>チュート<sup>（</sup>ミン<sup>）</sup>ナー オマイラー  
 もう だんだん 年が 経る というと みんなが 「おまえら  
<sup>（</sup>ガッ<sup>）</sup>コー<sup>（</sup>ドナ<sup>）</sup>イ<sup>（</sup>シテ<sup>）</sup> イッ<sup>（</sup>チャッ<sup>）</sup>タン<sup>（</sup>ジャ<sup>）</sup> イナー<sup>（</sup>ユー<sup>）</sup>テ  
 学校へ どのようにして 行ったんだい、(いったい)」 と言って  
<sup>（</sup>ユー<sup>）</sup>グ<sup>（</sup>ライ<sup>）</sup> ナリ<sup>（</sup>マシ<sup>）</sup>タ<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。 (E<sup>（</sup>ハー<sup>）</sup>。 ) エー。  
 言うぐらいに なりました ねえ。 はあ。 ええ。

B ワタシ<sup>（</sup>ノ<sup>）</sup> シト<sup>（</sup>ツオ<sup>）</sup>ボ<sup>（</sup>エ<sup>）</sup>ワ<sup>（</sup>ネ<sup>）</sup>ー。 (E<sup>（</sup>ハー<sup>）</sup>。 ) ワタシ<sup>（</sup>イ<sup>）</sup>マ<sup>（</sup>  
 わたしの ーつおぼえは ねえ。 わたし 今  
 コナ<sup>（</sup>ア<sup>）</sup>ノ<sup>（</sup>シ<sup>）</sup>マ<sup>（</sup>ノ<sup>）</sup> キ<sup>（</sup>モ<sup>）</sup>ノ<sup>（</sup>キ<sup>）</sup>トル<sup>（</sup>ケ<sup>）</sup>ード<sup>（</sup>。 <sup>(2)</sup>  
 こんな あのう 縞の 着物を 着てるけど。

C テー<sup>（</sup>デ<sup>）</sup> オッ<sup>（</sup>タ<sup>）</sup>バ<sup>（</sup>ッ<sup>）</sup>カ<sup>（</sup>シ<sup>）</sup>ヤ<sup>（</sup>ユ<sup>）</sup>テ (笑)  
 手で 織ったばかりだと 言って

B ヘー。 コレ<sup>（</sup>ム<sup>）</sup>ス<sup>（</sup>メ<sup>）</sup>ガ<sup>（</sup>ア<sup>）</sup>ノ<sup>（</sup>ツ<sup>）</sup>ネ<sup>（</sup>ニ<sup>）</sup> キー<sup>（</sup>ユー<sup>）</sup>テ モ<sup>（</sup>テ<sup>）</sup> キ<sup>（</sup>テ<sup>）</sup>  
 はい。 どれ 娘が 不断着に 着よ と言って 持って 来い  
 ホシ<sup>（</sup>テ<sup>）</sup> コレ<sup>（</sup>オ<sup>）</sup> キ<sup>（</sup>トリ<sup>（</sup>マス<sup>）</sup>カ<sup>（</sup>エ<sup>）</sup>。 コノ<sup>（</sup>コ<sup>）</sup>ナ<sup>（</sup>シ<sup>）</sup>マ<sup>（</sup>オ<sup>）</sup>。  
 そして これを 着ていますが ね。 この こんな 縞を。

(E<sup>（</sup>ハー<sup>）</sup>。 ) コノ<sup>（</sup>シ<sup>）</sup>マ<sup>（</sup>ノ<sup>）</sup> ネー。 コノ<sup>（</sup>アイ<sup>）</sup>タ<sup>（</sup>ト<sup>）</sup>コ<sup>（</sup>ナイ<sup>）</sup>  
 はあ。 この 縞の ねえ。 この 空いた 所 ない

ヤッ<sup>（</sup>デ<sup>）</sup>ス<sup>（</sup>ワ<sup>）</sup>ナ。 (E<sup>（</sup>ハー<sup>）</sup>。 ) コー<sup>（</sup>ン<sup>）</sup>ナ<sup>（</sup>ン<sup>）</sup>ノ<sup>（</sup>ヒ<sup>）</sup>ツ<sup>（</sup>ツ<sup>）</sup>ケ<sup>（</sup> ツ<sup>（</sup>ツ<sup>）</sup>イ<sup>（</sup>  
 分です わよ。 はあ。 こんなものの ひっかけ 続い

タ<sup>（</sup>ヤ<sup>）</sup>ツ<sup>（</sup>ノ<sup>）</sup> コレ<sup>（</sup>ワ<sup>）</sup> マー<sup>（</sup>ウ<sup>）</sup>ール<sup>（</sup>ヤ<sup>）</sup>ケ<sup>（</sup>ード<sup>（</sup> ア<sup>（</sup>ノ<sup>）</sup> モ<sup>（</sup>メ<sup>）</sup>ン<sup>（</sup>デ<sup>）</sup>  
 た ものの これは まあ ウールだけれど あのう 木綿で

ネー。 (E<sup>（</sup>ハー<sup>）</sup>。 ) コン<sup>（</sup>ナ<sup>）</sup>ン<sup>（</sup>オ<sup>）</sup> イッ<sup>（</sup>タ<sup>）</sup>ン<sup>（</sup> カ<sup>（</sup>イ<sup>）</sup>マ<sup>（</sup>シ<sup>（</sup>テ<sup>）</sup> ネ<sup>（</sup>ア<sup>）</sup>ー。 <sup>(3)</sup>  
 ねえ。 はあ。 こんなのを 一反 買ひまして ねえ。

ハ<sup>（</sup>ア<sup>）</sup>ノ<sup>（</sup>ア<sup>）</sup>ノ<sup>（</sup>ハ<sup>）</sup>ハ<sup>（</sup>ガ<sup>）</sup>。 ホシ<sup>（</sup>テ<sup>）</sup> ア<sup>（</sup>ノ<sup>）</sup> ナ<sup>（</sup>ン<sup>）</sup>デ<sup>（</sup>ス<sup>（</sup>ワ<sup>）</sup>ナ。 キ<sup>（</sup>モ<sup>）</sup>ノ<sup>（</sup>ワ<sup>）</sup>  
 あのう 母がね。 そして あの なんです わよ。 着物は

マー ヨツミヤデ<sup>(4)</sup> デキルケド ソレカラ カバンモ ソレデ シ  
 まあ 四ッ身だから できるけど それから かばんも それで 作ッ  
 テ<sup>(5)</sup> ネー。カバン ユーヤカ ザツノー ユーヨッテ<sup>(6)</sup> テー。チー  
 て ねえ。かばんと言うのか 雑嚢 と言っていて ねえ。ねえ。  
 ア。ヘー。

はい。

- D フルシキ ツカイヨッタ<sup>(7)</sup> デ。ウチラ。  
 風呂敷を 使っていたよ。 わたしたち。
- A フルシキヤ。モトワ。  
 風呂敷だ。もとは。
- C モトワ イチバン<sup>(8)</sup> モトワ フルシキヤ。<sup>(A)</sup> フルシキ バッカリ  
 もとは いちばん もとは 風呂敷だよ。 風呂敷 ばかり
- B ウチラワー ラクロオ<sup>(9)</sup> テー。コーシテ モーテ……  
 わたしたちは 袋を ねえ。 こうして もらって……
- D フルシキ コー オーテ カサオ コー サゲテ。  
 風呂敷を こう 負ッテ 傘を こう さげて。
- B ホテ マタ ゴーリ<sup>(10)</sup> イレル フクロモ ソノ ノコリデ<sup>(11)</sup> シテ  
 して また 草履を 入れる 袋も その 残りで して  
 モロテ マンダ<sup>(12)</sup> アノー モシモ アノ ナンドー<sup>(13)</sup> モッテカン  
 もらって まだ あのう もしも あの。 なんか 持って行かぬ  
 ナン トキカ<sup>(14)</sup> アッタア<sup>(15)</sup> ゴリカ<sup>(16)</sup> ヤブレル ユーデ モッテ イッ  
 ばならない時が あったら 草履が 破れる 言うから 持って 行  
 テン コーモ アリヨッタケド<sup>(17)</sup> ワタシトコワ<sup>(18)</sup> ヨー ツクッテ<sup>(19)</sup>  
 く 子も あったものだけど わたしとこは よう 作られ  
 ナカッタサカイデ<sup>(20)</sup> ホンデ<sup>(21)</sup> アノー ヘラゴヤッタケド<sup>(22)</sup> ソノ  
 なかったから それで あのう ヘラン だったけれど その

ヘラコー アシタ<sup>↑</sup> テンキガ<sup>↑</sup> ミン<sup>↑</sup> ナンサカイ<sup>↑</sup> ヒックリカヤス  
 ヘラン、 あした 天気が 見ねばならないから、 ひっくりかえす  
 ト ワレル トキガ<sup>↑</sup> アリヨリマシテ<sup>↑</sup> ナー。 ホンデ<sup>↑</sup> ゾリモ (笑)  
 と 破れる 時が あったりまして ねえ。 それで 草履モ  
 トチューノ<sup>↑</sup> オバハンニ<sup>↑</sup> モロタ<sup>↑</sup> コトガ<sup>↑</sup> ワタシ<sup>↑</sup> アリマスガ<sup>↑</sup>  
 途中の おばさんに もらった ことが わたし ありますが  
 エー。 クボ トーッテ。 ホンマニ、 ヨー<sup>↑</sup> アンナ<sup>↑</sup> コト<sup>↑</sup> シテ イッ  
 ねえ。 久保を 通って。 ほんとに ようこそ あんな ことを して 行ッ  
 ター<sup>↑</sup> オモイマス。 (E アー。) ワタシガ<sup>↑</sup> ゴネンノ<sup>↑</sup> トキニ<sup>↑</sup>  
 たし と思います。 (ああ。) わたしが 五年の 時に  
 ハジメテ コンニャクノ クツガ<sup>↑</sup> デキタンデス<sup>↑</sup> デ。  
 はじめて こんにゃくの 靴が できたんです よ。

E ナンデス<sup>↑</sup> カ。 コンニャクノ<sup>↑</sup> クツ<sup>↑</sup> ユーノ<sup>↑</sup>。

なんです か。 こんにゃくの 靴 というのは。

B コンニャクノ<sup>↑</sup> ヨーナー<sup>↑</sup> ナーア<sup>↑</sup>。 アメイロノ<sup>↑</sup> シター<sup>↑</sup>。

こんにゃくの ような ねえ。 飴色を した (靴)。

A ナマゴム<sup>↑</sup> チュー<sup>↑</sup> ゴムノ<sup>↑</sup> イマー<sup>↑</sup> ゴムグツ<sup>↑</sup> ユーノ<sup>↑</sup>ワ

生ゴム という ゴムの。 今 ゴム靴と いうのは

C イマノワ<sup>↑</sup> カワミタイニ<sup>↑</sup> ミエルケード<sup>↑</sup>。

今のは 皮のように 見えるけれど。

A ミナ<sup>↑</sup> キレーニ<sup>↑</sup> サイセーシタ<sup>↑</sup>、ア、 ゴムデスケン<sup>↑</sup> ナー。 (E

みな きれいに 再製した。 あー。 ゴムですけど ねえ。

ハー、 ソーソーソー。 ハー、 ソーデス<sup>↑</sup> カ。 ) ソノ<sup>↑</sup> イチバン<sup>↑</sup>

はあ。 そうそうそう。 はあ。 そうですか。 ) その いちばん

ハジメニ<sup>↑</sup> ゴムグツガ<sup>↑</sup> デキタ<sup>↑</sup> ジブソニワ<sup>↑</sup> エー、 ナマゴムデ<sup>↑</sup>

はじめに ゴム靴が できた ころには。 ええ。 生ゴムで

ンデー ケッ キョ クー イロノ アノ クロインジャ ナシニー  
で、 結局 色の あの 黒いのは なしに

チョット アメイロミタイナ イロノー クッオ ハイタンデス。  
ちょっと 飴色のような 色の 靴を はいたんです。

E ハーア。ソーデス カー。

はあ。 そうですね。

A ソレガ イチバン ハジメデス ワ。 ゴムグツノ。 ホイデ ワタシ  
それが いちばん はじめなんです。 ゴム靴の。 それで わたし

ドモノー イク ジブンニワ ミナ ソーソデス ワ。 (E ハー) <sup>↑</sup>  
どもの (小学校へ) 行く ころには みな 草履なんです。 (はあ。)

ハキモンワ。

はきものは。

E アー。ソーデス カ。 ソノ ゴーリ チュノワ ナンス カ。 ソノ  
ああ。 そうですね。 その 草履 というのは なんです か。 その

イエデ ユー ~~~~~  
家で ンう (作ったものですか。)

A エー。ツクッタ。エー。

ええ。 作った (もの)。ええ。

B ヘー。ワラ ウッテ。

はい。 藁を 打ってね。

E ワラ ウッテ。

藁を 打って (ですか) !

A エー。ミナ ツクッタ モンデス。

ええ。 みな 作った ものですよ。

E アー。ソーデス カ。

ああ。 そうですね。

B ソレガ<sup>①</sup> ネー。ワタシトコノ<sup>②</sup> イエノ<sup>③</sup> シタナシワ<sup>④</sup> オジーサンガ  
 それが ねえ。わたしとこの 家の 下の(家)は おじいさんが  
 アッテ<sup>⑤</sup> マイニチ<sup>⑥</sup> コー<sup>⑦</sup> シゴトニ<sup>⑧</sup> ゴーリ<sup>⑨</sup> ツクッテデ<sup>⑩</sup> マイ  
 あって 毎日 ンう 仕事に 草履を 作られるから 毎  
 ニチ<sup>⑪</sup> オロシテ<sup>⑫</sup> モロテンデスンヤ<sup>⑬</sup> ナ。ケナリテ<sup>⑭</sup> ケナリテ<sup>⑮</sup> ワ  
 日(新しいのを) おろしてもらうんですのよ。 羨しくて 羨しくて わ  
 タシ<sup>⑯</sup> ソレワ<sup>⑰</sup> ケナリカッタ<sup>⑱</sup>。イマデモ<sup>⑲</sup> オモイマス<sup>⑳</sup> デ<sup>㉑</sup>。ンデ<sup>㉒</sup>  
 だし それは 羨しかった。 今でも 思いますよ。 それで  
 コナイダ<sup>㉓</sup> キョネン<sup>㉔</sup> ハジメテ<sup>㉕</sup> ワタシラーノ<sup>㉖</sup> ツレガ<sup>㉗</sup> ヨリマシ  
 せんだって、去年 はじめて わたしたちの 同僚が 寄りまし  
 テ<sup>㉘</sup> ナー。アノ<sup>㉙</sup> ソノ<sup>㉚</sup> セーフクジノ<sup>㉛</sup>。ホッテ<sup>㉜</sup> ワタシガ<sup>㉝</sup> ユーモ  
 て ねえ。 あの その 施福寺の。そして わたしが 言うも  
 ンヤデ<sup>㉞</sup>、ホンマニ<sup>㉟</sup> トミエサン、ソノ<sup>㊱</sup> ゴーリノ<sup>㊲</sup> コトワー<sup>㊳</sup> ケナ  
 んだから、「ほんとに 富江さん、 その 草履の ンとは 羨し  
 リカッチャッタ<sup>㊴</sup> ナー ユーテワ<sup>㊵</sup> ユーテーヤッタカ<sup>㊶</sup>。  
 がうれました ねえ。」 と言っは (みなさんが) 言っておられたけど。

E イヤ。ジツニ<sup>㊷</sup> イマノ<sup>㊸</sup> ----。  
 いやあ。じつに 今の ----。

C ユキー<sup>㊹</sup> フルト<sup>㊺</sup> フカグツ<sup>㊻</sup> ユーテ<sup>㊼</sup> ナー。 |<sup>E</sup> ハー。ハイ。|  
 雪が 降ると 深靴と 言っ ねえ。 | はあ。はい。|  
 コレクライノ<sup>㊽</sup> セーノ<sup>㊾</sup> アノー<sup>㊿</sup> ワラデ<sup>㋀</sup> コシラエタ<sup>㋁</sup> モンオ<sup>㋂</sup>  
 これくらいの 背丈の あう、 藁で 作った ものを  
 ナー。 |<sup>E</sup> ハー。| アノ<sup>㋃</sup> ハキヨッタ<sup>㋄</sup> シンデス<sup>㋅</sup> ワ。  
 ねえ。 | はあ。| はいていたものですね。

B ジョーズニ<sup>㋆</sup> シタ<sup>㋇</sup> アッタ<sup>㋈</sup> デー。アレ。<sup>㋉</sup>  
 上手に して あったよ。 あれ。

C ジョーズニ<sup>へ</sup>シタ<sup>へ</sup>アリヨリマシター。

上手に して ありましたよね。

E コノ<sup>へ</sup>ヘンワ<sup>へ</sup>ユキガ<sup>へ</sup>フカインデショ<sup>へ</sup>ー<sup>へ</sup>ネー。

この へんは 雪が 深いんでしょう ねえ。

C エー。

ええ。

A エー。サンジャクグライワ<sup>へ</sup>フリマシタ<sup>へ</sup>。

ええ。 三尺ぐらいは 降りましたよ。

E コトシモ。

今年も(ですか)。

A イヤ。アノー マエニ<sup>へ</sup>。

いや。あのう 前にてす。

E マエニ。(A エー。) ハー<sup>へ</sup>。

前に(ですか)。

はあ。

C ワタシノ<sup>へ</sup>アニラーモ<sup>へ</sup>アヤベエ<sup>へ</sup>カヨタンデス<sup>へ</sup>カナー。アヤベ  
わたしの 兄たちも 綾部へ 通ったんです がねえ。綾部

ノ<sup>へ</sup>ショーガッコーエ。ホンマ<sup>へ</sup>カワイソー デシタ<sup>へ</sup>ウチノ<sup>へ</sup>コ  
の 小学校へ。ほんと かわいそう でした。うちの ン

ノ<sup>へ</sup>シタノ<sup>へ</sup>ホーデスケード。カヨタンデス<sup>へ</sup>。

の 下の ほうですけど。通ったんです。(その雪の中を)。

B ウチノ<sup>へ</sup>シタノ<sup>へ</sup>シタデス<sup>へ</sup>。

うちの 下の 下ですよ。

A ソエ。コートーショーガク<sup>へ</sup>チューノアー<sup>へ</sup>アヤベニシカ<sup>へ</sup>ナカッ  
そう 高等小学 というのは 綾部にしか なかっ

タンデス。<sup>\*</sup>ホエデー ジンジョーショーガッコーワ ココデ

たんです。それで 尋常小学校は ココで

オワッタンダ<sup>(9)</sup>ケードモ アノー コートーショーガク<sup>^</sup> チューノワ  
終わったのだけれども あいう、 高等小学 というのは

モー<sup>^</sup> チョーソンガッペーノヨナー チョーソンリツ ~~ガ~~<sup>xxx</sup>  
もう 町村合併の ような 町村立

リツデ アノー モー ゴカソンモ<sup>^</sup> ロッカソンモ<sup>^</sup> デ<sup>^</sup> <sup>√(10)</sup> コートー  
立で あいう、 もう 五か村も 六か村もで 高等

ショーガク<sup>^</sup> チュー<sup>^</sup> モノオ<sup>^</sup> モッタ<sup>^</sup> モンデス。 ( <sup>E</sup> ネー。ヤリ  
小学 という ものを 持った ものです。 ねえ。やリ

マシタカラ<sup>^</sup> ネー。 ) ホイデ<sup>^</sup> ソコエ<sup>^</sup> ミナ<sup>^</sup> カヨータンデス。  
ましたから ねえ。 ) それで へへ みぎ 通ったんですよ。

E ハーア。

はあ。

B ホシテ アノ<sup>^</sup> ワタシラーノ<sup>^</sup> ゴネンノ<sup>^</sup> トキ<sup>^</sup> カイナー。トメハ  
そして ああ、 わたしたちの 五年の 時 かねえ。 とめさ

ンガ<sup>^</sup> ~~タ~~<sup>xxx</sup> アノー ~~ウン~~<sup>xxxx</sup> ウンドーカイニ<sup>^</sup> クル フクオ<sup>^</sup> ナー。  
んが あいう、 運動会に 来る 服を ねえ。

アノ ドーヤ<sup>^</sup> イナー。アノー<sup>^</sup> <sup>√</sup> スカワラノ<sup>^</sup> ミチダネヤ<sup>^</sup> ナイ。  
ああ、 どうかいねえ。 あいう、 菅原の 道真<sup>^</sup> じゃ ない

ショートクタイシノヨーニ アノー コー <sup>(12)</sup> ココデ<sup>^</sup> ククッテ フ  
聖徳太子の ような あいう、 ふう にて 括って ふ

アット<sup>^</sup> コーシテヨーナンオ<sup>^</sup> ナー。 ( <sup>D</sup> フナー。 ) トメハンガ。  
わっと ふうした ようなのを ねえ。 ふんふん。 とめさんが

オボエトッテ<sup>^</sup> ナイ カ。

おぼえて いない？

D オボエトラ<sup>^</sup>ン ナー。

おぼえてないわねえ。

B ラクオ<sup>↑</sup>ナー。 ( <sup>D</sup> ウン。 ) ラク<sup>↑</sup>ユー<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>カッ<sup>↑</sup>---- ( <sup>D</sup> ~~~~~ )  
服を ねえ。 うん。 服と 言っちゃって

ユー<sup>↑</sup>ン<sup>↑</sup>カイ。 ) ヘー。 ラク<sup>↑</sup>ユー<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>カッ<sup>↑</sup>テ<sup>↑</sup>ナー。 ( <sup>D</sup> ヘン。 )  
いうの？ はい。 服と いったって ねえ。 はあ。

アノー ジ~~xx~~ジ~~xx~~ツワ<sup>↑</sup>ナー。 テンジクモメ<sup>↑</sup>ンヤ。 オボエトッ  
あいう。 地質は ねえ。 天竺木綿です。 おぼえてお  
テ<sup>↑</sup>ナイ<sup>↑</sup>ン。 ウチラー<sup>↑</sup>ヤ<sup>↑</sup>ハ<sup>↑</sup>リ イチバン<sup>↑</sup>ハジメニ<sup>↑</sup> コーテ<sup>↑</sup>  
られないの。 ちらは やはり いちばん はじめに 買って  
クレチャッタ<sup>↑</sup>デ。 ソノ<sup>↑</sup>コンニャクノ<sup>↑</sup>クツモ<sup>↑</sup>ー イチバン<sup>↑</sup>ハ  
くれた わよ。 その こんにゃくの 靴も いちばん は  
ジメ<sup>↑</sup>コートクレタシ<sup>↑</sup> ミンナー<sup>↑</sup> ケナリカッチャッタ<sup>↑</sup>モン。  
じめに 買ってくださったし みんな 羨しがりなすった もの。

C ヨイ<sup>↑</sup>ウチニ<sup>↑</sup> イヤハン<sup>↑</sup>ノ。 ソレヤッタラ。  
良家に おいでなのよ。 それだったら。

B エー。  
ええ？

C ヨイ<sup>↑</sup>ウチジャ。  
よい お家なんだよ。

B セヤケド<sup>↑</sup>ウチワ<sup>↑</sup>ー ラダン<sup>↑</sup> ゴーリガ<sup>↑</sup>ナイデ<sup>↑</sup> ショナイ<sup>↑</sup>ワー。  
だけど ちらは 不断 草履が ないから しかたがないわよ。  
ホンデモ。サキエ<sup>↑</sup>カワント<sup>↑</sup>ナー。 (笑)  
だけど。 先に 買わないと ねえ。

C ホンマニ<sup>↑</sup>。  
ほんとにねえ。

B オボエトッテ<sup>↑</sup>ナイ<sup>↑</sup>ンナ。 アンター。 コーシテ<sup>↑</sup> ココオ<sup>↑</sup>ナー。  
おぼえておいでじゃないの？ あまた。 ンのように ココを ねえ。



タブント<sup>ハ</sup> コー コレカ<sup>ハ</sup> フクヤロ。 コーシ----

たぶんと こう これが 服でしょ。 こうし……

D アンタラワ<sup>ハ</sup> マンダ<sup>ハ</sup> ワカイデヤケド<sup>ハ</sup> ワタシラワ<sup>ハ</sup> ソンナー

あんたたちは まだ 若いからだけれど わたしなんかは そんな

コレオ<sup>ハ</sup> コー オ<sup>xx</sup>シ オロシテ<sup>ハ</sup> シマワント<sup>ハ</sup> ナー。 オバハン エ。

これを こう おろして しまれないで ねえ。 おばさん。 ね!

(<sup>C</sup> ラン。) ココオ (<sup>D</sup> カキアウス<sup>ハ</sup> ジバンダケシカ  
ふん。 こを かきあわす 襦袢だけしか

(笑)) ココオ<sup>ハ</sup> コー ククッテ アノ シタ<sup>xx</sup> ウラカラ<sup>ハ</sup> キテ<sup>ハ</sup>  
こを こう 括って あの、 裏から 着て。

ココ<sup>ハ</sup> ククッテ<sup>ハ</sup> ホィテ<sup>ハ</sup> コレオ<sup>ハ</sup> コー オロシヨッタ<sup>ハ</sup>ンヤ。 ソレ  
こを 括って そして これを こう おろしていたんです。 それ  
が<sup>ハ</sup> イチバン<sup>ハ</sup> ハジメフク。

が いちばん はじめの服。

C モー<sup>ハ</sup> ノーカッ<sup>ハ</sup> コーイ<sup>ハ</sup> イクヨーン<sup>ハ</sup> ナッタラ<sup>ハ</sup> ナー。 オナゴノ<sup>ハ</sup>

もう 農学校へ 行くように なったら ねえ。 女の

コーラ<sup>ハ</sup> アノ<sup>ハ</sup> アカイ<sup>ハ</sup> ケットー<sup>(13)</sup>キシカ<sup>ハ</sup> アノ<sup>ハ</sup> コー キヨッタ<sup>ハ</sup>ン

子らは あの 赤い 毛套 あの、 こう、 着ていたん

デス<sup>ハ</sup> ワ。

ですの。

D ハー。 アタシラモ<sup>ハ</sup> ケットーヤ。 (<sup>C</sup> ケットーヤラ----。)

はあ。 わたしたちも 毛套です。 毛套やら----。

B ハー。 (<sup>C</sup> アノ----) ワタシラー<sup>ハ</sup> ワー<sup>ハ</sup> イチ<sup>xx</sup> チサイ<sup>ハ</sup> トキワ<sup>ハ</sup>  
あの--- わたしたちは 小さい 時は

<sup>xx</sup>イチ<sup>ハ</sup> イチネンセー<sup>ハ</sup> ノ<sup>ハ</sup> トキワ<sup>ハ</sup> ニーチャンラー<sup>ハ</sup> ノ<sup>ハ</sup> フルノ<sup>ハ</sup>  
一年生の 時は 兄ちゃんらの 古いの

ナ<sup>↑</sup>。ケーサツノ<sup>↑</sup> シトノ<sup>↑</sup> ショーコーマントカ、コレグライノ<sup>↑</sup>  
 ねえ。警察の 人の 将校マントカ、 これぐらいの  
 ミジカインオ キテ イキヨッタケドモー アレ<sup>↑</sup> ナンネンセーヤッ  
 短いのを 着て 行ってたけれども あれ 何年生だっ  
 タヤロ。ヨネングライヤッタ<sup>↑</sup> カ。ウ<sup>xxx</sup> ウチダッテ アノ<sup>↑</sup> シ<sup>xxx</sup>  
 たでしよ。四年ぐらいだったか。 わたしだけ あの  
 シマノ<sup>↑</sup> ナー<sup>↑</sup> マントノ<sup>↑</sup> テーカ<sup>↑</sup> デル トコノ<sup>↑</sup> オ コーテ モ  
 縞の ねえ。マントの 手が出る ところの(あるの)を買って  
 ロタラ<sup>↑</sup> ハイカラヤ<sup>↑</sup> ハイカラヤ<sup>↑</sup> ユワレタ<sup>↑</sup> ナー。ソーユー<sup>↑</sup> コ  
 もらったら ハイカラだ ハイカラだと言われたねえ。そういう<sup>↑</sup> ン  
 ト<sup>↑</sup> ヨー<sup>↑</sup> オボエトル。ワタシ。  
 とを よく おぼえてる。わたし。

D ワタシラ アマエタヤッタハカイ<sup>(14)</sup> ロクネンマデ ユキャ フッタ  
 わたしらは 甘えていたから 六年まで 雪が 降った  
 ラ オクリムカエ (笑)  
 う 送り迎え

B ワタシラモヤ。  
 わたしもです。

D オーテ モロテ。 ミンナニ ワラワレモッテ。 ヘッヘ。  
 (背に) 負ってもらって。みんなに 笑われ笑われて。ほほ。

B ワタシモ オクリムカエ<sup>(15)</sup> ハラシチャッタ ンヤ デ。 ニーチャン  
 わたしも 送り迎えを たんですよ。 兄ちゃん  
 ト ア、 エーチャント。 アサ オクッテ イッタ モノワ  
 と、 あ、 栄ちゃんと。 朝 送って 行った ものは

A ガッコ ーイク アノー ユキカキデモ アノー ムラデー カキ  
 学校へ 行く あいう。 雪かきでも あいう。 村で 掻い

ヨッタンデスケン<sup>（</sup>ナー。イマワー<sup>（</sup>コー<sup>（</sup>ミチ<sup>（</sup>イッパイ<sup>（</sup>キレ  
 ていたものですけど ねえ。今は こう 道 いっぱい きれ  
 ニニ<sup>（</sup>ジドーシャカ<sup>（</sup>トールヨーニ<sup>（</sup>ユキハネ<sup>（</sup>シマスケン<sup>（</sup>ナー。  
 いに 自動車 が 通るように 雪はね しますけど ねえ。  
 モ<sup>（</sup>マエニワー<sup>（</sup>ユッカキニ<sup>（</sup>イッテモ<sup>（</sup>アン<sup>（</sup>トールダケシカ<sup>（</sup>  
 もう 以前には 雪掻きに 行っても あの、通るだけしか  
 カカナンダス<sup>（</sup>ワナ。  
 掻かなかったですよ。

E アー<sup>（</sup>ソーデス<sup>（</sup>カ。  
 ああ、そうですか。

A ホデ<sup>（</sup>ソコー<sup>（</sup>モー<sup>（</sup>クツナンツ<sup>（</sup>モノア<sup>（</sup>アレヘンシ<sup>（</sup>ゾー  
 それで ソンを もう 靴などという ものは ありません 草  
 ソ<sup>（</sup>ハイツ<sup>（</sup>エー<sup>（</sup>タビノー<sup>（</sup>ウエニ<sup>（</sup>ゾーリ<sup>（</sup>ハイツ<sup>（</sup>ホシテ<sup>（</sup>  
 履を はいて 足袋の 上に 草履を はいて して  
 ソノ<sup>（</sup>ヘンデ<sup>（</sup>ハシッテ<sup>（</sup>イキヨッタ<sup>（</sup>モンデス<sup>（</sup>ワ。  
 その ヘンデ 走って 行ったの ですよ。

B イゴキモ<sup>（</sup>ドーモ<sup>（</sup>セン。  
 動きも どうせ しない。

D スソカ<sup>（</sup>ア<sup>（</sup>ユキニ<sup>（</sup>ツイテ<sup>（</sup>（笑）  
 裾が、あ 雪に ついて

E <sup>V</sup>ネー。キモノデー ~~~~~  
 ねえ。着物で

D ~~~~~ ユキガ<sup>（</sup> コナイモンデー<sup>（</sup> コノ<sup>（</sup> スソカ<sup>（</sup> キモ<sup>（</sup> ユキニ<sup>（</sup>  
 雪が こんなだもんだから この 裾が 雪に  
 ツカエテ。  
 つかえてね。

- C ワタシラー<sup>（</sup>モー<sup>）</sup>シモヤケノ<sup>（</sup>ショ<sup>）</sup>ーデシタサカイデ ナンデシ  
 わたしなどは もう 霜やけの 性 でしたから なんで<sup>（</sup>  
 タ<sup>（</sup>モ タビ<sup>（</sup>ハイテ<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。クツカ<sup>（</sup>ナイモンジャデ。 <sup>（</sup>E<sup>）</sup>ハー。）  
 た、もう、足袋を はいて ねえ。 靴が ないもんですから。 <sup>（</sup>E<sup>）</sup>ハー。）  
 ホイテ<sup>（</sup>アノー アレデシタ<sup>（</sup>ガッコ<sup>（</sup>イクンデシタカ<sup>（</sup>ホシタ<sup>（</sup>  
 そして あのう、 なんてした、 学校へ 行くんですけど。 そしたら  
 シモヤケカ<sup>（</sup>モー ヒドイ<sup>（</sup>コト<sup>（</sup>タダレテ<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。イタイデシタ  
 霜やけが もう ひどく ただれて ねえ。 痛いでした  
 フ<sup>（</sup>。ソノ。ヘンデ<sup>（</sup>モー アノ タライン<sup>（</sup>ナカイ<sup>（</sup>アシ<sup>（</sup>ツッ  
 れ。 その、 それで もう あの、 たらいの 中に 足、 つ  
 コンデ<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。 <sup>（</sup>E<sup>）</sup>エー。） アシオ<sup>（</sup>ヌクメナ<sup>（</sup>シアナイモンジ  
 こんで ねえ。 ええ。 足を あたためねば しょうがないも  
 ヤデ <sup>（</sup>E<sup>）</sup>ハー。） ホンマニ<sup>（</sup>イマノ<sup>（</sup>コトオ<sup>（</sup>オモッタラ<sup>（</sup>ナン  
 のだから <sup>（</sup>E<sup>）</sup>ハー。） ほんとに 今の ことを 思ったら 難  
 ギシマシタ<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。  
 儀しました ねえ。
- E ソーデショー<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。  
 そうでしょう ねえ。
- C へー。イマデワ<sup>（</sup>アンマイ<sup>（</sup>モンデスケン<sup>（</sup>ナーア<sup>（</sup>。笑） イマデ  
 はい。 今では 甘い ものですけど ねえ。 今で  
 ワ<sup>（</sup>ホンマニ<sup>（</sup>ウマイ<sup>（</sup>モンジャケード<sup>（</sup>ナングシトリマス<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。  
 は ほんとに 甘い ものだけれど 難儀しています ねえ。  
 ショーカッコージダイワ。 <sup>（</sup>E<sup>）</sup>ネー。） モー<sup>（</sup>ハチジューサンネ  
 小 学校時代は。 <sup>（</sup>E<sup>）</sup>ネー。） もう ハチ三年  
 シンモ<sup>（</sup>ナルンジャカ<sup>（</sup>。笑）  
 にも なるんだが。

A ソレカラ トチューニ モンペー チューノカ デケテ コレ  
 それから 途中に もんぺい というのが できて、これ  
 モンペー チューノワ アーノー コノ ヒカシヤタデモ オヨギ  
 もんぺい というのは あう、この 東 八田でも 於手岐  
 ホカラ クロタニノ ホーメンノ シトワ アノー トシノ イ  
 それから 黒谷の 方面の 人は あう、年の い  
 ッタ オンナノ シトモ オトコノ シトモ ミナ ハイトルンデ  
 った 女の 人も 男の 人も みな ばいてるんで  
 スケン ナー。モトカラ ハヨーカラ ハキヨッタンスケードモ  
 すけど ねえ。もとかから 早くから ばいていたんですけれども  
 コノ ヘンデワー モンペー チュモナー ヨッポドー オソー  
 ンの へんでば もんぺい というものは よほど 遅く  
 ナッテカラ ハイッタ モンデス。ソシテ コドモモ モンペー  
 ってから ばいた ものなんです。そして ンどもも もんぺいを  
 ハイテ ガッコ イクヨーニ ナリマシタケン ナー。  
 ばいて 学校へ 行くように なりましたけど ねえ。

E ア、ソーデス カ。 (A、へー。) へー。  
 あ、そうです か。 (はあ。 へえ (そうですか)。

A デ モンペーオ ハイテ イクトー キモノカ スソカ マトマリ  
 で、もんぺいを ばいて 行くと 着物が 裾が まとまり  
 マスデ。 (E、エー。ソーソーソーソー。) ソイデ ユキン ナ  
 ますから。 (ええ。 そう そう そう そう。) それで 雪の 中  
 カーナンデモ タイヘン ツゴーカ エーデスケン ナー。 (E  
 なんがでも たいへん 都合が よいんですけど ねえ  
 アー。) ケド ソンナ モンワー ナカッタエス。コドモノ ジ  
 ねえ。 けど そんな ものは なかったですな。 こどもの こ

ブンニワ。

ろには。

### 注記

- (1) 「デス」の「ス」が「サ」に近く聞こえる。
- (2) こう言いながら、着物の襟元をひっぱって見せる。
- (3) 「ネー」を言おうとして、地ంతぼの「ナー」が出たため、混じってんのふうな ([neə]) 音になったものか。
- (4) 「ソレカラ」以下数話部は笑いながらの発言。
- (5) 「マンダ」を力をこめて一段高い声で。
- (6) 「ヘラコ」は、ほまのない口下駄。
- (7) 「ケナリテ ケナリテ」、力をこめて同情的に。
- (8) 地名。上杉の隣部落。
- (9) この「ダ」、断定助動詞にちがいないが、地ంతぼではない。
- (10) 「ロックソソモ」と言って、改めて「ロックソソデ」と言いなおすところ、それを簡約に助詞だけを言いかえた。
- (11) 「道真」を「ミチダネ」と言っている。
- (12) 手まね。胴のあたりを指示して。
- (13) 「キシカ」の部分意味不詳。
- (14) 「アマエテヨッタハカイ」のつもりであろう。
- (15) この部分も意味不詳。
- (16) 「ウマイ」は、ここでは「楽み」の意。「アンマイ」というのがすぐ前にあったが、これも同じ語。

### 3. 小学校とこどもの遊び

話(手)

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)            |
|------|-------|-----|-----------------|
| A    | 山室二郎  | 男   | 明治31年生まれ<司会役>   |
| B    | 山室富江  | 女   | 明治41年生まれ        |
| C    | 坂本アイ  | 女   | 明治27年生まれ        |
| D    | 坂本ヨシノ | 女   | 明治36年生まれ        |
| (E)  | 佐藤虎男  | 男   | 大正15年生まれ<同席担当者> |

E オヨギ<sup>〳</sup>チュタラ<sup>〳</sup>チカ<sup>〳</sup>チカインデショ<sup>〳</sup>。

於与岐 といったら 近いんでしょ。

A ヘー。<sup>(C)</sup> オヨギー<sup>〳</sup>... コッカラ<sup>〳</sup>イチリホド<sup>〳</sup>アリマス。ヘイ。  
はい。 於与岐 ... ここから 一里ほど ありますよ。はい。

ソコエ<sup>〳</sup>ヤマノー アノー ナカデスデ<sup>〳</sup>ナー。

そこへ 山の あの方。 中ですから ねえ。

B ナンセー<sup>〳</sup>アノー コノ<sup>〳</sup>ヒカシヤダ<sup>〳</sup>チューンワ<sup>〳</sup>ナカヤマカ<sup>(2)</sup>  
なにせ あの方。 今の 東八田 というのは 中山か

ラ<sup>〳</sup>コー<sup>〳</sup>ハイリマシテ<sup>〳</sup>ネー<sup>〳</sup>。コー<sup>〳</sup>ニホンレットーノヨーナ<sup>〳</sup>  
ら こう はいりまして ねえ。 こう 日本列島のような

カタチデ<sup>〳</sup>コー<sup>〳</sup>チカインデスンヤ<sup>〳</sup>デ<sup>〳</sup>。ンデ<sup>〳</sup>オーマタデワ<sup>〳</sup>ダ<sup>(3)</sup>  
形で こう 長いんですよ。 それで 大又までは 丁

イブ<sup>〳</sup>アリマスヤロ<sup>〳</sup>デ<sup>〳</sup>。

いぶん ありますでしょうよ。

A ソラ<sup>↑</sup> ニリグライ<sup>↑</sup> アル<sup>↑</sup> ナ<sup>↑</sup>.

それは ニ里ぐらい ある ね。

B ナーア<sup>↑</sup>。ニリ<sup>xxx</sup> ニリワ<sup>↑</sup> シッカリ<sup>↑</sup> アルヤロ<sup>↑</sup>。

ねえ。 ニ里は じゃうぶん あるでしょ。

C アルヤロ<sup>↑</sup>。モー<sup>↑</sup> イマー<sup>↑</sup> ヨー<sup>↑</sup> アルカンケド<sup>↑</sup> ニリグライ<sup>↑</sup>

あるでしょ。 もう 今ほ よう 歩かないけど ニ里ぐらい

B ホデ<sup>↑</sup> オクノ<sup>↑</sup> シトト<sup>↑</sup> ダイブ<sup>↑</sup> チカウンデス<sup>↑</sup> デ<sup>↑</sup>。コノ<sup>↑</sup> エキノ<sup>↑</sup>

それで 奥の 人と だいぶん 違うんです よ。 この 駅の

ヘンノ<sup>↑</sup> モントワ<sup>↑</sup>。 (ア、ソーデス カ。) ヘー。ホデ<sup>↑</sup> ワ  
あたりの ものとは。 あ、そうです か。 ええ。それでわ

タシモ<sup>↑</sup> ソー<sup>↑</sup> オモイヨリマシタ<sup>↑</sup> モン。ヨメニ<sup>↑</sup> イクンヤッタラ

たしも そう 思っていました もの。 嫁に 行くんだったら

コンダケ<sup>↑</sup> ホンマニ<sup>↑</sup> ドッコイ<sup>↑</sup> イチジカンモ<sup>↑</sup> カカッテ<sup>↑</sup> イカ

んだだけ ほんとし どのへ 一時間も かかって 行か

ン<sup>↑</sup> ナランヨナ、エキエ<sup>↑</sup> イチジカン カヨウンニ<sup>↑</sup> カカルヨーナ

はげならないような 駅へ 一時間 通うのに かかるような

トコエ<sup>↑</sup> コドモガ<sup>↑</sup> イネチナイサカイ セメテ<sup>↑</sup> チービットデモ

所へ こんどもが かわいいそうだから せめて すんでも

ヨイデ<sup>↑</sup> アノ<sup>↑</sup> シモノ<sup>↑</sup> ホーエ<sup>↑</sup> デタイ<sup>↑</sup> オモイマシタ<sup>↑</sup> モン。

よいから、あのう。下の ほうへ 出たいと 思いました もの。

マイニチ<sup>↑</sup> アンタ、セーフクジノ オクカラ アノー<sup>↑</sup> エキマデ<sup>↑</sup>

毎日 あんた、施福寺の 奥から あのう、駅まで

テーテーテンテン<sup>↑</sup> ハシラン<sup>↑</sup> ナリマヘンヤロー。ホッテ<sup>↑</sup> ジテン

とっ とっ とっ と 走らねば なりませんでしょう。そして 自転

シャニ<sup>↑</sup> ヨー<sup>↑</sup> ノランモンヤサカイ コワ<sup>xxx</sup> コワショーデ<sup>↑</sup>。ホンマ

車に よう 乗らないものだから こわがりやだね。ほんとし



ニ。 (<sup>E</sup> アー。) ワタシワ<sup>^</sup>モチート<sup>^</sup>シモエ ハンブシ エキエ  
 ああ。 わたしは もすし 下へ 半分(でも) 駅へ  
<sup>^</sup>ハンブーン<sup>^</sup>チカイ<sup>^</sup>トコロエ<sup>^</sup>イカン<sup>^</sup>ナアン オモッ、ソレ  
 半分(でも) 近い 所へ 行かぬばならないと思って、それ  
 ダケワ オモイマシタ。ドコイ<sup>^</sup>イコトモ<sup>^</sup>オモタ<sup>^</sup>コト<sup>^</sup>チカッ  
 だけは 思いました。 どこへ 行こうとも 思った こと なかつ  
 タケド。(笑)

たけど

D アンター<sup>^</sup>リソーノ<sup>^</sup>トコエ<sup>^</sup>キチャッタ。(笑)  
 あんた、理想の 所へ 来られた。

A オアエサンノ<sup>(4)</sup><sup>^</sup>ショーカッコーワ<sup>^</sup>ドコヤ<sup>^</sup>エナ。<sup>(5)</sup>  
 おあいさんの 小学校は どうなんです。

C ワタシノ<sup>^</sup>ショーカッコーワ アッチデス<sup>^</sup>ワナ。  
 わたしの 小学校は あちらです わよ。

A ンメザコ<sup>(6)</sup><sup>^</sup>カ。  
 梅迫?

C エー。  
 ええ。

A ヘー。 (<sup>B</sup> アハハ<sup>^</sup>。 ) シナ<sup>^</sup>メザコノー-----  
 へえ。 はああ。 では 梅迫の -----

C メザコッテ<sup>^</sup>アノー -----  
 梅迫って あのう -----

B チョト<sup>^</sup>イッテ<sup>^</sup>コ<sup>^</sup>カ。 (<sup>D</sup> ウ、ウン。 ) ナイトット。<sup>(7)</sup>  
 ちょっと 行って 来ようか。 う? うん。 泣いてるわ。

D ハイ、アーノ<sup>(8)</sup><sup>^</sup>ココイ<sup>^</sup>イッチャッタ<sup>^</sup>ンヤ<sup>^</sup>ナイ<sup>^</sup>ンカ。 (<sup>B</sup> エー。<sup>(9)</sup>)  
 はい。 あの ここの(の学校)へ 行かれたのじゃ ない の? (ええ?)

ココノ<sup>↑</sup>ガッコーエ。

この 学校へ。

C ココノ<sup>↑</sup>ガッコーエ。 (10)

この 学校へ。

A エーッ トー。アレガー -----

ええっと。 あれが -----

C ~~~~~ ロクネン<sup>↑</sup> ロクネン<sup>↑</sup> ワタシワ<sup>↑</sup> イットラン<sup>↑</sup> ワ。

六年 六年(までは) わたしは 行ってないわ。

D アー。ヨネンマデ。

ああ、四年まで(なんですわ)。

C ウン。ヨネンマデ。

うん。四年まで。

A ヨネンマデ。

四年まで(だよ)。

D アー。ソーデス<sup>↑</sup> カ。

ああ、そうです か。

B ナイトッテヤ<sup>↑</sup> ワ。 (11)

泣いてる わ(やっぱり)。

C ソー<sup>↑</sup> カ。 (12)

そう か。

A エーッ トー。イマノ (B ゴメン、ゴメン、~~~~~) (13) アーノーヨ

ええっと。 今の

あのう 幼

チエン<sup>↑</sup> ナットル<sup>↑</sup> トコロニ<sup>↑</sup> アッタ コーシャエス<sup>↑</sup> カイ。 (14)

推園に なってる 所に あった 校舎です かい。

C ソーデス。

そうですよ。

A  $\wedge$   $\overset{\nearrow}{-}$ 。  $\overline{A} \vee \overline{B} \vee \overline{C}$ 。  $\overline{A} \vee \overline{B} \vee \overline{C}$ 。

へえ。 あれは、 えーっと。

D アレ ワー モット コッチニ タッテ <sup>(A)</sup> サンジュー -----  
 あれは. もっと こっちに 建って 三十 ----  
ホッテ コッチノ アノ ジュータクノ ホーニ アッタンヤ ナ  
 そして こっちの あの 住宅の ほうに あったんでほな  
 イ カイター.

いでもうかへえ。

A ウン、アソコニモアッタンニャ。アソコ  
うん、あそこにも あったんだね。あそこ

C ジュータクノ ホーワー モー アレワー ホシューカーノ ホーニ  
 住宅の ほうは もう あれは 補習料の ほうに  
アットタンヤ。  
 あっていたんだよ。

A コッチノ ジュータクー アノー ウンドー ジョーノ シタノ  
 こっちの 住宅、 あのう、 運動場の 下の  
 ジュータクワ アスコワー タイソー ジョー ウテンタイソー ジョー  
 住宅は あそこは 体操場 雨天体操場  
 が アッタ<sup>ン</sup>ジヤ。  
 が あったんだ。

C アッタンジャ・モトワ。  
あったんぢや。もとは。

D エー、ソーデスカ。  
ええ。 そうですね。

A モトワ アソコノ シトムネワー ウテンタイソージョー トー ソ  
 もとは あそこの 一棟は 雨天体操場と ヲ

シテ<sup>へ</sup> ショクインシツト<sup>へ</sup> ( <sup>c</sup>ヘー。 )<sup>(15)</sup> ダケ アッテ ホシテ マ  
 ー 職員室と ( <sup>c</sup>へい。 ) だけ あって、そして ま  
 ンナカニ<sup>へ</sup> ヨンキョーシツ アッテ ソレダケガ<sup>へ</sup> ショーカッ  
 ンなかに 四教室 あって、それだけが 小 学  
 コーノ<sup>へ</sup> コーシャヤッタ<sup>へ</sup>ンヤ。 ( <sup>c</sup>フン。 )<sup>c</sup> ホイテ ムコーガ<sup>へ</sup>  
 校の 校舎だったんです。 ( <sup>c</sup>ふん。 )<sup>c</sup> そして 向こうが  
 フガー<sup>へ</sup> ホシューガッコー、<sup>V</sup>アー<sup>へ</sup> ノーガッコーヤ<sup>へ</sup> ナー。イワユ  
 わが 補習学校。 ああ。農学校だ なあ。いわゆ  
 ル ホシューガッコー<sup>へ</sup> チュー<sup>へ</sup> ヤツヤッタ<sup>へ</sup>ンヤ。  
 る 補習学校 という ものだ、なんだ。

C ヨーザンシツヤ<sup>へ</sup>ラ。  
 養蚕室やらね。

A エン。ヨーザンシツガ<sup>へ</sup>アッ<sup>へ</sup>テ。ソエカラー シトキョーシツ<sup>へ</sup>  
 ええ。養蚕室が あって。それから 一教室  
 アッタ<sup>へ</sup>ンニヤ。アソコニ。アリヤ<sup>へ</sup> ホシューガッコーノ キョーシ  
 あったんだ。あそこは。あれは 補習学校の 教室。  
 ツ。( <sup>c</sup>ホシューガッコー。 )<sup>V</sup> <sup>(16)</sup>キテ、アノ<sup>へ</sup> コーシャガ<sup>へ</sup> サン  
 として、あの校舎が 三  
 ジューニネングライニ<sup>へ</sup> デキトル<sup>へ</sup> ハズヤケード<sup>へ</sup>  
 十一年くらいに できてる はずだけど。

D <sup>(17)</sup>メージデス カ。( <sup>A</sup>フン。 )<sup>c</sup> <sup>c</sup>ヘー。《沈黙ク秒》  
 明治です か。( <sup>c</sup>ふん。 )<sup>c</sup> <sup>c</sup>へえ！

A ホスト オアエサンワ<sup>へ</sup> アノ<sup>へ</sup> キョーシツヤッタ<sup>へ</sup>ン。  
 そうすると おあいさんは あの 教室 だった の。

C ソーデス。ヨネンマデ<sup>へ</sup> ナカッ<sup>へ</sup> ナカッタデ<sup>へ</sup> ナー。  
 そうですよ。四年まで(しか) なかったから ねえ。

A エー。ヨネンマデシカ ナインニャ。エー。

ええ、四年までしか ないんだね。ええ。

C ヴ ヨネン ソツギョーシタラ ホシュエカエ イッテー (A エー。)

四年 卒業 したら 補習科へ 行って

(D フン。) ノーガッコーエ イッタシヤデ テー。

農学校へ 行ったんですからね。

D フン。V イヤ。ヨネンマデデー マタ ニネン ホシュエカ ユーン

ぶん。いや(ちょっと待って!)。四年までで また 二年 補習科 という

ガ アッタ シカ。 (C イチネン。) アー。ホシテ ノーガッコー  
のが あったんですか 一年です。 ああ。そして 農学校

カ。 (C フン。) ア、ソーカ。  
ですか。 ぶん。 あ、そうか。

E V オンナノ シトデモ ヤッパリ ソノー ノーガッコーエ イカレ

女の 人でも やっぱり その、 農学校へ 行かれ

タンデス カ。

たんです か。

A エー。イッタンデス。

ええ。行ったんです。

E ホー。ア、ソーデス カ。

ほう。 あ、そうですか。

A エー モー ショーガッコー ソツギョーシテ (E フン。) カラ

ん、もう 小学校を 卒業して から

トクベツニ イク シトダケ イッタ モンジャハカエデ カズ

特別に 行く 人だけ 行った ものだから、 人数

ワ スクナイスケン テー。 (E ハー。) ノーガッコー イッタ

は すくないですけど ねえ。 (E はあ。) 農学校へ 行った

シトワ スクナイスケードモ。

人は すぐないですけども。

E ハー。デ、ノーガッコーワ ニネンデス カ。

はあ。で 農学校は 二年です か。

A ノーガッコー、ホシューガ イチネント ホレカラ ノーガッコー  
農学校、補習(料)が 一年と、それから 農学校

が ニネン アッタンデショ。 (E ニネンデス ナ。)  
が 二年 あったんでしょう。 二年です ね。

E アー。ソーデス カ。 《沈黙5秒》

ああ。そうですね。

アノー ウンドーカイナンテ ユーノワ ドーユー コト ヤット  
あのう、運動会などというのほ どういう こと やって  
リマシタ カ。

いました か。

A ウンドーカイー チューノワー ケッキョク ショーガッコーノ  
運動会 というのほ けっこう 小学校の

ウンドーカイ チュー .....  
運動会 という

E ウンドーカイワ ドーユー コトオ ヤットツタンデス カ。

運動会ほ どういう ことを やっていたんです か。

A サー。マー ソ ベツニ タイシテ カワッター ウンドーカイ

さあね。まあ、ん、ベツン 特別 かわった 運動会

ーデワ ナカッタケドモ マ ハシリ、ハシルノガ<sup>V</sup> アー アイガ  
では なかったけども 「走り」 走るのが ああ 間

<sup>(18)</sup> デ アトー ソノ ショーガイブツトカ イロイロー アーノ-----  
で そのほか その、障害物(競走)とか いろいろ あの、-----

E オバーサンタチワ<sup>（</sup>ホイデ<sup>）</sup> ソノ<sup>（</sup>ウンドーカイノ<sup>）</sup> トキニワ<sup>（</sup>  
おばあさんたちは それで その 運動会の ときには  
ドーユー<sup>（</sup> カッコ<sup>）</sup> シテ ヤッタンデス。  
どういう かんう して したんです(か)。

C キモノ<sup>（</sup> キーテ -----  
着物 着て-----

A キモノ<sup>（</sup> キタママデ<sup>（</sup> ハシルンデス。(笑)  
着物 着たままで 走るんです。

D ヌイダラ アノー オコシ<sup>（</sup> マイテ。  
脱いだら あのう 腰巻 巻いて。

C ドーシテ<sup>（</sup> ハシッタジャローカ<sup>（</sup> ユーテ。  
どうして 走っただろうかと 言って。

D ハシリヨッタ。<sup>(19)</sup> (笑)  
走ってたもの。

C センドモ<sup>(20)</sup> オーワライデシタンジャ。 ホンマニ。  
大笑いでしたのよ。 ほんとに。

A キモノ<sup>（</sup> キタママ<sup>（</sup> ハシッタンデス。<sup>（</sup> ソリヤ。(笑)  
着物 着たままで 走ったんです。 そりゃ

C パンツガ<sup>（</sup> アッタジャロカトカ<sup>（</sup> ナントカ<sup>（</sup> ユーテ  
パンツが あっただろうかと なんか なんてか 言って

D シーン。 ホイタラ<sup>（</sup> オトコノ<sup>（</sup> シトガ<sup>（</sup> ン。 そしたら 男の 人が ナ  
な

カッター -----  
かッター

A パンツ<sup>（</sup> ナイ。 ソリヤ。  
パンツ (なぞ) ない。 そりゃあ。

C アッ<sup>(21)</sup>タッ<sup>へ</sup> チュー<sup>へ</sup> モント<sup>へ</sup> ナイッ<sup>へ</sup> チュー<sup>へ</sup> モントデ<sup>へ</sup> ナ<sup>へ</sup>。  
 あった という ものと ない という ものとで ねえ。

コレ。

これ。

D エー。アンナ<sup>へ</sup> モナー<sup>へ</sup> ワタシラ<sup>へ</sup> オボエテカラ<sup>へ</sup> デケタ<sup>へ</sup> モン。(笑)  
 ええ。 あんな ものは わたしなどが ものジンろ ついてから できたもので。

C オー<sup>へ</sup> フライデシタ<sup>へ</sup>。

大笑いでしたよ。

E アー、ソー<sup>へ</sup> デス<sup>へ</sup> カ。(笑)

ああ、そうです か。

C ソノ<sup>へ</sup> コト<sup>へ</sup> オモタラ<sup>へ</sup> イマー<sup>へ</sup> ヤット<sup>へ</sup> チガイマス<sup>へ</sup> ワナー<sup>へ</sup> ナ  
 その ことを 考えたら 今ほ ずいぶん 違います わねえ。 な  
 ソニ<sup>へ</sup> モー。(笑)

にもかも。

E ナー。ホントニ<sup>へ</sup> ナー。<sup>V</sup>アノー アレデス<sup>へ</sup> カー。<sup>V</sup>ソノ、ムラノ<sup>へ</sup>  
 ねえ。 ほんとに ねえ。 あいう なんです か。 その、 村の  
 シトー ソノ<sup>へ</sup> オトーサンヤ<sup>へ</sup> オカーサンタチワ<sup>へ</sup> ソユー<sup>へ</sup> ウシ  
 人、 その、 お父さんや お母さんたちは そういう 運  
 ドーカイノ<sup>へ</sup> トキニワ<sup>へ</sup> ド<sup>へ</sup> シタンデス<sup>へ</sup> カ。

勤会の ときには どうしたんです か。

A イマホド<sup>へ</sup> イットリマヘン。<sup>E</sup>ア、ソー<sup>へ</sup> デス<sup>へ</sup> カ。 ) イマー<sup>へ</sup>  
 今ほど 行ってません(昔はね)。 あ、そうです か。 今ほ

モー コドモノ<sup>へ</sup> ウンドーカイ<sup>へ</sup> チュータラ<sup>へ</sup> コドモヨソワ<sup>へ</sup> オヤ  
 もう こどもの 運動会 といったら ンどもよりは 親  
 ノ<sup>へ</sup> ホーガ<sup>へ</sup> アノー ウンドーカイ<sup>へ</sup> タノシミニ<sup>へ</sup> シテ<sup>へ</sup> イクン  
 の ほうが あいう。 運動会を 楽しみに して 行くん



デスケン<sup>ハ</sup>ナー。マエニワー \*

ですけど ねえ。以前には

E デ、アノー、タトエバ<sup>ハ</sup>テマリウタ<sup>ハ</sup>ネ。(D<sup>ハ</sup>ヘー。) アレワー<sup>ハ</sup>ドー  
で、あのう、たとえば 手まり歌 ね。 あれは どう  
ユー<sup>ハ</sup>フーニ<sup>ハ</sup>ウタッテ<sup>ハ</sup>イマシタ。オーバーサン<sup>ハ</sup>オボエトラレマ  
いう ふうに 歌って いました？ おばあさん おぼえておられ  
ス<sup>ハ</sup>カ。

ますか。

D アノ<sup>ハ</sup>オーバーサンラー<sup>ハ</sup>ヨー<sup>ハ</sup>シットッテヤロ。テマリウタ。  
この おばあさんなどは よく 知っておいででしょ。手まり歌を。

C テマリウター。(E<sup>ハ</sup>エー。)(D<sup>ハ</sup>ウン。)<sup>(22)</sup> テマリウタモ<sup>ハ</sup>シツツア  
手まり歌？ ええ。 うん。 手まり歌も  
ー<sup>ハ</sup>シラン<sup>ハ</sup>ガエナー。

知らないよねえ。

E アレ<sup>ハ</sup>ナンテ<sup>ハ</sup>ユーンデス<sup>ハ</sup>カ。コノ コー ナンカ ナカニー  
あれ なんと 言うんですか。この、こう なんか 中に  
アズキカ<sup>ハ</sup>ナンカオ<sup>ハ</sup>イレタ<sup>ハ</sup>コー<sup>ハ</sup>フクロー<sup>ハ</sup>コー  
小豆か なんかを 入れた、こう 袋を こう

D アー。オジャミ -----

ああ。おじゃみ ----

A オジャミ<sup>ハ</sup>チュー (D<sup>ハ</sup>ウン。)  
おじゃみ という うん。

C アーアー。アリヤ<sup>ハ</sup>オジャミデス<sup>ハ</sup>ネ。オジャミデス<sup>ハ</sup>ワナ。コー  
ああ、ああ。あれは おじゃみです ね。おじゃみです れよ。こう  
シテ<sup>ハ</sup>ウエ<sup>ハ</sup>ホリャゲテ。  
して 上に 投げ上げて。

E オジャミ ユンデス カ。 (A.D エー。) ハー。アレオ コー  
おじゃみ と言うんです か。 ええ。 はあ。 あれを こう

ヤル トキニ ウタ ウタウデシヨ。

する 時に 歌 歌うでしょ。

A エー。ウタ ウトテフ。

ええ。 歌を 歌っては (したものです)。

C ウトタンデス。

歌ったんです。

E ソノ ウター オバーサン キカシテ クダサイ。

その 歌 おばあさん 聞かして ください。

C オジャミー チュンヤ ナイー

「おじゃみー」 っていうんじゃない

D エド ドッコイ ユーテ ショッチャッタニヤ ナイ。エド ドッコ

「えど どっい」と言って しておいででなかったの。 「えど どっ

イ エドシマ フユカラ フユカタラ ナンタラ ユーテフ。

い

」とやら なんとやら 言っては。

C ウン。ホンマニ。ホンナ コト イーヨッタ ナー。

うん。ほんとにね。 そんな こと 言っていた ねえ。

E ハー。ドーデー。コー テマリーノ ホーモー ウタカ アリ ア

はあ。 どうぞ。 こう 手まりの ほうも 歌が あ

リマスンデショー カ。

リますんでしょう か。

A エー。アリマス ナー。 エー。

ええ。 あります ねえ。 ええ。

C アリマス ナー。 (A エー。)

あります ねえ。 ええ。

- E ホー。 モー オボエトラレマセン カ。 オーバーサン。  
ほう。 もう おぼえておられません か。 おぼあさん。
- C アリヤ ヒーファーミーヨーイツヨ ユテ スルヤロ。 ( <sup>D</sup> ヘーン )  
あれは 「ひい ふう みい よう いっ よう」 と言ってするんでしょ。 へい。  
ソレワ スルヤケード。  
それは するのだけれど
- E ソレ オンナノ アソビッテ ユーノア ホイジャ ホ  
それ、 女の 遊びって いうのは それじゃ ほ  
カニ ソーユー オジャミガ アッテ テンマリガ アッテ。  
かに とういう おじゃみが あって 手まりが あって。
- A ソレカラ メンコ チュー -----  
それから めんこ という -----。
- D エー。 アノ イシノ コンナ マルコイ。 ( <sup>C</sup> ヘー )  
ええ。 あの 石の こんな 丸い。 へい。
- E ア。 コレ イシノ  
あ、 これ 石の
- C ハジキ チュンカ ( <sup>A</sup> ウン ハジキ ) ~~~~~ コー シトイ  
はじき というのか うん。 はじきた。 こう しておい
- テワ コーヒテ トリヨッチャッタ。 ( <sup>C</sup> エー )  
ては こうして 取ったりしていた。 ええ。
- E ハーハー。 コノ ヒラベッタ イ。 ( <sup>A.C</sup> エー ) ( <sup>D</sup> ヘー ) アー  
はあはあ。 この 平らな。 ええ。 へい。 ああ
- アレ メンコ チューンデス カ。 ( <sup>A.C.D</sup> エー ) アー コー チ  
あれ めんこ というんです か。 ええ。 ああ、 こう ち
- ント ハジクンデシヨ。 ( <sup>A</sup> ヘー ) ( <sup>D</sup> ソーヤ ) アーア。 ア ヘ  
んと はじくんでしょ。 へい。 そうそう。 ああ。 あ。

ソーデス<sup>カ</sup>。

そうです か。

A オハジキ<sup>チュー</sup>。

おはじき という。

D ウン。オハジキヤ。

うん。 おはじきだ。

E ア。ナルホド<sup>ネー</sup>。ア<sup>ソーユ</sup>ー<sup>モノトカ</sup>ネー。マ<sup>マ</sup>

ああ。 なるほど ねえ。 ああ。 そういう ものとか ねえ。 ま

コレ アノ キセツニ<sup>ヨリマス</sup> ヨネ。 タトエバ ショー

これ あのう 季節に よります よねえ。 たとえば、 正

カツダッ タラ アノ ハネ-----

日 ごとたら あのう はね-----

A.D ハネツキ。

D ソンナ モンモ ネッカラ ヒドー (笑)

そんな ものも ねっから ひどく

A エ。 ソリャ ハネツキモ マエニワ ナカッタデス。

ええ。 それほ 羽根つきも 前には なかったですよ。

E ア。 ココン ナカッタデス カ。

あ。 こんに なかったです か。

A エ。 タコワ アリマシタケン ナー。 ワリアイ ハヨー<sup>カラ</sup>。

ええ。 飛 は ありましたけど ねえ。 わりあい 早くから。

C イマデモ モ ヒドー ナイデス ナー。 ハネモ ハネツキモ。

今でも もう ひどく ないです ねえ。 羽根も 羽根つきも。

E ア。 ソーデス カ。

あ。 そうです か。

A ヘー。イマ<sup>ー</sup>ワ<sup>ー</sup> アノ<sup>ー</sup> ハゴイタワ ( チットァ アルケー  
 はい。 今ほ あのう 羽子板は すこしほ あるけ  
ド。 ) ナカナカ<sup>ー</sup> ヨーケ<sup>ー</sup> デトルシー ソノ<sup>ー</sup>、ハネツキーワ<sup>ー</sup>  
 じ。 ) なかなか たくさん 出てるし、 その、 羽根つきは  
ヤラナシタ。

やらなかった(昔ほ)。

E ホタ オトコノ コ コノ コンダ コママアシワ ドーデス カ。  
 そしたら、 男の 子の こんどは 独楽まわしほ どうですか。

A ホ コマワ ヤリマシタ。  
 独楽(まわし)ほ やりましたね。

C アレア ヨー チョッ チョット キーノ キーデ コンナー コシ  
 あれほ よく ちょっ ちょっと 木の 木で こんなの ン  
ラエテ シヨッテデシタ ナー。  
 らえて しておいででした ねえ。

A ミナ コシラエーヨッタ ンデス。 ジブンデー。  
 みな 作っていたものなんです。 自分で。

E ジブンデー。  
 自分でねえ!

A-D ヘー。  
 はい。

C コノ ゴロワ マタ オーキナ ハネカ アノ ナニヤ シタ  
 ンの ころほ また 大きな 羽根が あの、 なんです  
ゴイタイト オーキナ ナー、 ( エー。 ) セシエンモ ダスヨ  
 大きな、 ねえ ( ええ、 ) 千円も 出すよ  
ーナンオ コーテ シトリマス ナー。  
 うなのを 買って します ねえ。

A イマ<sup>（</sup>セーヨーダコ<sup>）</sup> チューノヤカ<sup>（</sup>アーノ<sup>）</sup>、<sup>（</sup><sup>C</sup>セーヨーダコカ  
今、西洋風 というのだが、あの、<sup>（</sup><sup>C</sup>西洋風か  
<sup>（</sup>シラン<sup>）</sup>。） ナニヤラガ、カミカ<sup>（</sup>カワッテ<sup>）</sup> キテ。  
しらん。 あれが。 紙が かわって きてね。

E ホントー。

ほんとに。

D ナイロン<sup>（</sup>ナッタ<sup>）</sup>。

ナイロンに なった。

A ウン。ナイロン<sup>（</sup>ナッタケド<sup>）</sup>。マエワ<sup>（</sup>カンバッカデシタ<sup>）</sup>。ヤッコ  
うん。ナイロンに なったけど。以前は 紙ばかりでした。ヌ  
ダコ。タコモ<sup>（</sup>コシラエヨッタ<sup>）</sup>ンエス。<sup>（</sup><sup>E</sup>ジブンデ<sup>（</sup>ネー<sup>）</sup>。）  
風。 風も 作っていたんです。 自分で ねえ。

エー。

ええ。

E ソーソーソーソー。ムカシワ<sup>（</sup>ソーデシタ<sup>（</sup>ネー<sup>）</sup>。

そう そう そう そう。昔は そうでした ねえ。

A コマ<sup>xxxx</sup> コママーシ<sup>（</sup>チューナー<sup>（</sup>アレデ<sup>（</sup>カッツケゴマ<sup>（</sup>ユテー<sup>）</sup>  
独楽まわし というのは、あれで かっつけごま と言って

<sup>（</sup><sup>C</sup>ホーマニ<sup>）</sup>。） ムコーニ <sup>（</sup><sup>C</sup>エー<sup>）</sup>。） コマニ コ カッツケテ  
<sup>（</sup>ほんとに<sup>）</sup> 向こうに <sup>（</sup>ええ<sup>）</sup>。 独楽に こう かっつけ

ワ ソシテ ショーブ<sup>（</sup>シヨッタンス<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。 アレ。(笑) マー<sup>（</sup>  
は そして 勝負 していたんです ねえ。 あれ。 まあ

カクレンボニ<sup>（</sup>オニゴト<sup>）</sup>。ソーユー マ、アソビデス<sup>（</sup>ナー<sup>）</sup>。アソ  
かくれんぼに 鬼ジーン。 そういう まあ、遊びです ねえ。 遊  
ビ<sup>（</sup>チュータラ<sup>）</sup>。

べと いったら。

E アー。

ああ。

D ン、ナフトビワ アリヨリマシタ ナー。

ん、縄飛びは ありました ねえ。

E ア、オンナノ コワ ナフトビ ナ。 (D ウン。) オンナノ コデ

あ、女の 子は 縄飛び ね。 うん。 女の 子

シヨ。

でしょ。

D エー。オンナノ コ。 \*

はい。 女の 子。

C モー ホンマニ ウンドーカイワー タイシタ モンデス ワ。

もう ほんとに 運動会 は (それはそれは) すごい ものです れ。

モー フジンカイノ ナニモ モー ミンナー スルヨー ナッテ。

もう 婦人会の 人たちも もう みんなが するように なって。

E イマワ ネ。

今は ね。

C ヘー。イマワ。

はい。 今はね。

E ムカシワ ソーヤ ナカッタ ワケ。 (D ヘー。) アー、ソーデス

昔は そうでは なかった。 わけで。 はい。 ああ、そうです

カ。

か。

D ボシカイ ユンガ アルンデモ メッタニ ソノイ ミンナー

母子会 というのが あるのでも (あっても) めったに そのように みんな

キヨッチャー シマヘナンナ。 (E アー、ソーデショー ネー。)

来られたりは しませんでしたね。 ああ、そうでしょう ねえ。

C ドエライ コッテス。

(今は) たいへんなんです。

A コエ ムイドクンナハレ。

これ むいて下さい。(どうぞ)。

E ハー。 アリガト ゴザイマス。

はあ。 ありがとう ございます。



## 注記

- (1) 旧村名。
- (2) 地名。
- (3) 地名。於与木の北、舞鶴に最も近い。
- (4) 名はアイである。それがこう聞かれる。
- (5) 小学校時代を語るという主題がA氏の念頭に生きていて、ここで話を元に戻した。
- (6) 「ウメザコ」がほとんど「メザコ」に近く聞こえる。すぐ次には、「メザコ」とある。
- (7) この発話は、離れの方で孫の泣き声がするのに気づき、隣に座っているD氏に声をかけたもので、上巻の話の展開とは無関係である。
- (8) この応答は、直前のB氏の声に対するもの。こう答えておいて、すぐにこの場の話にたちもどっている。
- (9) D氏の問いかけが自分に対するものと思い、立ち上がりながらこう聞き返した。
- (10) ここで、ドアを開める音。B氏退室。
- (11) これは、室外に出たB氏が室内のD氏に対して(と思われる)言ったことば。
- (12) B氏のことばに室内から応答した。ドアをへだてて。
- (13) B氏遠ざかりつつ言うことば。孫に対して。
- (14) 「デス」が「エス」に聞こえる。A氏の発音に多い。
- (15) 文法的には「ショクインシット」に付属すべきものであるが、音声的には大きく切れた。あたかも、「ダケ」が自立語であるかのよう。本来接続助詞である「が」が、文頭に接続詞として自立するのにも似たものと考え、ここには分かち書きをした。
- (16) 「ホシテ」であろうが、どうしてもこう聞こえる。
- (17) 「デス」の「ス」の母音、丸口の明確な[u]。
- (18) 「アイカデ」の意不詳。A氏も首をかしげられる。文脈から、「間で」と解しておく。
- (19) この短文、内容的には、前の「----- マイテ。」に続く。

(20) ついに未詳。

(21) これも、前の自分の発話に続く。このあたり、話がはずんで輻輳している。

(22) 未詳。「そいつは」か？

(23) この歌、記憶よみがえらず。

(24) 未詳。

## 4. こどものおやつ

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)             |
|------|-------|-----|------------------|
| A    | 山室二郎  | 男   | 明治31年生まれ<司会役>    |
| B    | 山室富江  | 女   | 明治41年生まれ         |
| C    | 坂本アイ  | 女   | 明治27年生まれ         |
| D    | 坂本ヨシノ | 女   | 明治36年生まれ         |
| (E   | 佐藤虎男  | 男   | 大正15年生まれ<同席担当者>) |
| F    | 山室 梢  | 女   | 昭和18年生まれ<山室家の嫁>  |

E ダイイチ<sup>△</sup>ソノー<sup>△</sup>コドモノ<sup>△</sup>アレデ<sup>△</sup>コノー<sup>△</sup>オヤツカラシテ  
 だいいち その、 こどもの あれで この、 おやつからして  
<sup>△</sup>コーユー ----- (笑)

こういう -----

B ナニカ<sup>△</sup>モーア<sup>△</sup>ヤラン<sup>△</sup>ナランデ<sup>△</sup>カイマスデ<sup>△</sup>ナー。ヒャクエ  
 なにか もう やらなくてはならないから 買いますからねえ。百  
 シングライデモ<sup>△</sup>カイ<sup>△</sup>シマヘンヤロ<sup>△</sup>カナー。 (<sup>E</sup> ナー。)  
 田ぐらいでも 買いは しませんでしようかねえ。 (ねえ (ほんとに))

ソレガ<sup>△</sup>ワタシラーノ<sup>△</sup>コドモノ<sup>△</sup>トキワ<sup>△</sup>アノー<sup>△</sup>サツマイモオ  
 それが わたしなどの こどもの 時は あのう、 さつまいもを  
<sup>△</sup>ゴンゴロクルマデ<sup>△</sup>モッテ<sup>△</sup>イッテ<sup>△</sup>ネー。アノー<sup>△</sup>オテラノ<sup>△</sup>  
 こんごろ車で 持って 行って ねえ。 あのう お寺の  
 シタマデー。ホシテ<sup>△</sup>アノー<sup>△</sup>イモセンベーオ<sup>△</sup>シテ<sup>△</sup>モロテ<sup>△</sup>コ  
 下まで。 そして あのう、 いもせんべいを して もらって ニ

ドモア<sup>△</sup>モロツタラ<sup>△</sup>ネー。ホイテ<sup>△</sup>ヤ<sup>△</sup>アノ<sup>△</sup>タベサスナリ、ア  
 どもがモどつたら<sup>△</sup>はえ。そして<sup>△</sup>あの、食べさせるし、あ  
 ノー<sup>△</sup>ワタシラー<sup>△</sup>アノー<sup>△</sup>シュジンガ<sup>△</sup>ツトメトリマシタモンジ  
 のう、わたしなど<sup>△</sup>あのう、<sup>△</sup>主人が<sup>△</sup>勤めておりましたものだ  
 ャデ<sup>△</sup>デ<sup>△</sup>ワタシア<sup>△</sup>キバツテ<sup>△</sup>シトリデ<sup>△</sup>シゴトセン<sup>△</sup>ナンモヤ  
 から、で、わたしは<sup>△</sup>かんぽって<sup>△</sup>一人で<sup>△</sup>仕事しなければならな  
 ーデ<sup>△</sup>ガッコーカラ<sup>△</sup>モドツタラ<sup>△</sup>フロタキサセルンニ<sup>△</sup>ネー。  
 ものだから、学校からモどつたら、風呂たきさせるのに<sup>△</sup>はえ。  
 ソノー<sup>△</sup>ウラ<sup>△</sup>イッテ<sup>△</sup>ホッテ<sup>△</sup>イエタル<sup>△</sup>オイモサン<sup>△</sup>トッテ<sup>△</sup>  
 そのう、裏へ<sup>△</sup>行って<sup>△</sup>掘って、<sup>△</sup>植えてある<sup>△</sup>おいもさんを取って  
 キテワ<sup>△</sup>ヤイテ<sup>△</sup>ホイテ<sup>△</sup>ミンナ、ア、<sup>△</sup>ココラヘンワ<sup>△</sup>イマコソ<sup>△</sup>  
 オフは<sup>△</sup>焼いて<sup>△</sup>そして<sup>△</sup>みんな、あ、<sup>△</sup>こちらあたりは<sup>△</sup>今日ンヤ  
 コノ、<sup>△</sup>オンナノ<sup>△</sup>コヤケド<sup>△</sup>オトコノ<sup>△</sup>コバッカシデシタガ<sup>△</sup>オト  
 ンの、<sup>△</sup>女の子(が多い)けど、<sup>△</sup>男の子ばかりでしたが、<sup>△</sup>男  
 コノ<sup>△</sup>ナー。<sup>(D</sup>ウン。<sup>)</sup><sup>△</sup>シタノ<sup>△</sup>カズオチャンヤラ<sup>△</sup>オカメチ  
 の<sup>△</sup>はえ。<sup>△</sup>うん。<sup>△</sup>下の<sup>△</sup>和夫ちゃんやら<sup>△</sup>お亀ちゃ  
 ャントコノモ<sup>△</sup>ミンナ<sup>△</sup>オトコノ<sup>△</sup>コーデ。<sup>△</sup>アンタトコノモ<sup>△</sup>ナー  
 ンとこのも<sup>△</sup>みな<sup>△</sup>男の子で。<sup>△</sup>あんたとこのも<sup>△</sup>はえ。  
 ア。<sup>△</sup>マサシチャンモ<sup>△</sup>オトコバッカシデ<sup>△</sup>~~~~~<sup>△</sup>アノ<sup>△</sup>ア  
 まさしちゃんも<sup>△</sup>男ばかりで<sup>△</sup>あの、  
 スンデ、<sup>△</sup>アソブ<sup>△</sup>ユータカッテ<sup>△</sup>ヤネオ<sup>△</sup>ハシッテ<sup>△</sup>アルイテ<sup>△</sup>  
 遊んで、<sup>△</sup>遊ぶと<sup>△</sup>言ったら<sup>△</sup>屋根を<sup>△</sup>走って<sup>△</sup>歩いて  
 ネズ<sup>△</sup>アノ<sup>△</sup>スズメノ<sup>△</sup>スーヲ<sup>△</sup>サカイタリ<sup>△</sup>ソナ<sup>△</sup>コトバッカ  
 あの、<sup>△</sup>雀の<sup>△</sup>巣を<sup>△</sup>探したり、<sup>△</sup>そんな<sup>△</sup>ことばか  
 シ<sup>△</sup>シテ<sup>△</sup>アソンデ<sup>△</sup>モ<sup>△</sup>イマワ<sup>△</sup>ボールナゲヤラ<sup>△</sup>シテヤケド<sup>△</sup>  
 リ<sup>△</sup>して<sup>△</sup>遊んで、<sup>△</sup>今は<sup>△</sup>ボール投げやら<sup>△</sup>してるけど

チーア。ムカシト チカウシ ヤ。  
ねえ。 昔と 違うん です。

A ムカシノ オヤツワー ソラマメノ イッタンカ ソレシカ ナ  
昔の おやつは そら豆の 煎ったのか。 それしか な  
カッタ モンス ワ。(笑) ヒャクショーヤノ コドモア モー……  
かった ものですよ。 百姓屋の ンどもは もう……。

C ナニカ スキジャ シランカ オマメサン タベト  
好きなのか しらないが お豆さんを 食べ  
ッテヤ ナ。  
いますよね。

A ソラマメノ イッタン<sup>V</sup>プライカ モー オヤツヤッタンデス。 (E  
そら豆の 煎ったのぐらいが もう おやつだったんです。  
チー。) イマ ミナ オカシオ オヤツニ モロトルケードモ。  
ねえ。 今 みな お菓子を おやつに もらっているけれども。

E アノー ボクノ ネー。 チーサイ トキニワ コノ ナンテ ユー  
あのう。 ぼくの ねえ。 小さい 時には この なんと 言う  
カ、アレアー ナツプロデス カナー。 ムギワラデー コー ナ  
か、あれは 夏ごろです かねえ。 麦わらで ンう な  
ンカ カゴオ ツクリマシテ ナー。  
んか 籠を 作りまして ねえ。

D <sup>(4)</sup>  
ギスカゴッ。  
ぎすかじだね。

B フン。  
ふん？

E <sup>(5)</sup>  
ネー。  
ねえ。

B ギスカコイ <sup>(b)</sup>デ。

ぎすかじに か。

E ホテ ナシカ コー アカイ ミオー ソン ナカエ イレマシテ  
そして なんか こう 赤い 実を その 中へ 入れまして  
ネ。 (<sup>D</sup> ランラン。) ソレオ タベタ。 アレワ イスラウメト  
ね。 (ふん ぶん。) それを 食べた。 あれは いすら梅と

ボクワ イッタト ~~~~~  
ぼくは 言ったと

A アー。 イスラウメ チュノワ アリマス。

ああ。 いすら梅 というのは ありますよ。

C アー。 イスラウメ カ。 (<sup>D</sup> ウン。) アー。 ソーソー。 イスラウ  
ああ。 いすらうめ か。 (うん。) あ、 そうそう。 いすら

メンテ アリマス ナー。  
梅って あります ね。

E アリマシタ ナー。

ありました ねえ。

D エー。 アリマシタ。

ええ。 ありました。

E ナシカ コノ ヘンデモ ヤハ ソーユーノワ.....

なんか この へんでも やはり そうなのは.....

A エー。 アリマス。

え。 あります。

C アリマス。

あります。

B アリマス デ。 ウチニ。

あります よ。 うちに。

E ジャー アノ ホイデ アノ コー カゴモ ヤッパイ アイマ  
 じゃ あの それで あの こう 籠も やっぱり

アミマス カ。

編みます か。

A カゴワ ヤリマヘンデス ナー。

籠は しませんです ねえ。  
 (7)

B リスオ イレルンノニ アーノ (A アノ ギス...) キョーナ シ  
 きりぎりすを 入れるのに あの あの きりぎり... 器用な 人

トワ ネー。アミヨッテシタ。  
 (8)

は ねえ。編んでおられました。

A ア ムシオ ネー。アー ギス ユー、アレァ ギリギリスッ

あ、虫を ね。あ、「ぎす」という、あれは きりぎりす

チュンカ シランカ ムシオ トッテ キテ ソノ カゴ イレテ  
 というのか 知らないが 虫を取って 来て その 籠に入れて。

デ アノー ナカシテ ミヨリマシタケン ナー。

で、あいう 泣かして 見ましたけど ねえ。

E アー、ソーデス カー。V コノ ヘンデスカラ ソノー (B マエデ  
 ああ、そうです か。この へんですから その 前で

(9) ゴメンクダシャイ イー。) オカシオ ウル ベツニ オミセカ  
 じめん下さい と言いなさい。お菓子を 売る、別に お店が

アル ワケジャ ナシ ネー。ムカシワ。オソラク。

ある わけでは なし ねえ。昔は。おそらく。

D ハー。

はあ。

A ヘエー。ソーデス。

はい。そうですよ。

B オナミサンワ<sup>↑</sup> ワタシカ<sup>↑</sup> キタ<sup>↑</sup> トキワ<sup>↑</sup> シトッチャッタ<sup>↑</sup> デ。  
おなみさんは わたしが (嫁に) 来た 時は (店を) しておられた よ。

C ナニオ<sup>↑</sup>。  
なにを ?

B オナミサンカ<sup>↑</sup> センベ<sup>↑</sup> ウットッチャッタ<sup>↑(10)</sup>。  
おなみさんが 煎餅 売っておいでだったというのよ

C ウットッチャッタ<sup>↑</sup> テカ<sup>↑</sup>。  
売って おいでだったって ?

B ヘーイ。  
はい。

A マー<sup>↑</sup> マメイリ。ソレカラ アーノ<sup>↑</sup> グミッチ<sup>↑</sup> ユー チョード  
まあ 豆煎り。それから あのう。 ぐみと いう。 ちょうど  
アカイ<sup>↑</sup> ミーガ ロクカツコロニ ~~~~~。  
赤い 実が 六月ごろし

E グミカ<sup>↑</sup> アリマシタ<sup>↑</sup> ナー。 ( <sup>A</sup>ヘー。 ) グミッテ<sup>↑</sup> イーマス<sup>↑</sup>。  
ぐみが ありました ねえ。 ( はい。 ) ぐみと 言いますか。  
ヤッパリ。 ( <sup>A</sup>ヘー。 ) アレワ<sup>↑</sup> ヒョーメン ツルツル<sup>↑</sup> シタ。  
やっぱり。 ( はい。 ) あれは 表面が つるつる したね。  
( <sup>A</sup>ヘイ。 ) ア、ソーソーソー。 \*  
( はい。 ) あ、そうそうそう。

A ソレカラ ソーユー<sup>↑</sup> ミーガ<sup>↑</sup> アル<sup>↑</sup> トキワ グーミ。ソレカラ<sup>↑</sup>  
それから そういう 実が ある ときは ぐみ。それから  
カキ。  
柿

B ツルシカキ<sup>↑</sup> ヨ<sup>↑</sup>。  
つるし柿 よ。



A ツルシカ<sup>カ</sup>キジャラ<sup>ラ</sup> アマカ<sup>カ</sup>キヤラ。  
つるし柿やら 甘柿やら。

B クシカ<sup>カ</sup>キ。  
串柿。

A イマー アノー アマイ<sup>イ</sup> カキデモ<sup>モ</sup> コー<sup>コ</sup> チサイ<sup>サイ</sup> カキヤナンカ  
今ほ あのう あまい 柿でも ough 小さい 柿なんぞほ  
ワ<sup>ワ</sup> ホトンド<sup>ド</sup> クーマヘン<sup>ン</sup> ナー。 コドモワ。  
ほとんど 食べません ねえ。 ンどもほ。

D アッちゃんラ<sup>ラ</sup> ナー。 アノ クカツノ<sup>ノ</sup> ツイタチニ  
あっちゃんら ねえ。 あの、九月の 一日に  
チャッタ。  
ておいでだったよ。

B エー。<sup>→(11)</sup>  
ええ？

D ツイタチカ<sup>カ</sup> コンサキニ<sup>ニ</sup> タベヨッチャッタ。  
一日が 来ないうちに 食べておいでだった。

B ホンマニ<sup>ニ</sup>。  
ほんとに ねえ！

A カキオ<sup>オ</sup> ヨー<sup>ー</sup> クタ<sup>タ</sup> <sup>(12)</sup>モンジャケード イマ<sup>マ</sup> カキモ<sup>モ</sup> クイマヘン<sup>ン</sup>。  
柿を よく 食べた ものだけれども 今ほ 柿も 食べませんね。  
イマノ<sup>ノ</sup> コドモワ。  
今の ンどもほ。

B ヘー。 ナッテモ<sup>モ</sup> ナー。 ワタシトコノ<sup>ノ</sup> ココニ<sup>ニ</sup> イシクボ<sup>ボ</sup> ユー<sup>ー</sup>  
はい。(柿が) なくても ねえ。 わたし<sup>(13)</sup>の家<sup>(13)</sup>の ニンに い(くぼ) という  
カキデモ ダーレモ<sup>モ</sup> フレートモ<sup>モ</sup> ユーテ<sup>テ</sup> ナイ<sup>イ</sup> ワー。(笑)  
柿でも だれ一人 くれとも 言われないう。

ジューネンモ マ ノボレヘン ナー。ダレモ。(D・E ハー。)  
十年も ま (柿の木に) のほりませんねえ。だれも。 はあ。

アンナンナラ キッタラ エー ワ。  
あんな木なら 切ったら いい れ。

E アー、ソーデス カ。シゼンニ デキタ モノオ タベテマシタン  
ああ、そうです か。自然に できた ものを 食べていましたん  
ヤ ナ。  
ですね。

A ソーデス ナー。  
そうです ねえ。

B ヘー。ソーデス デー。ソラ アノー オカシー ハナシヤケード  
はい。そうです よ。 そりゃ あもう、おかしな 話だけれど  
フタシガ<sup>×××××</sup> フタシノ オヤモト、フタシノ ムマレタ イエワー  
わたしが わたしの 親元、わたしの 生まれた 家は  
カキノ キガ ヤット ナカッタデスンヤ ナ。ホンデ ワタ  
柿の 木が たくさんほ ずかっただすのよ ね。それで わた  
シャ ヨメサンニ イクンヤッタラ カキノ キノ ヤット アル  
いは 嫁さんに 行くんだったら 柿の 木の たくさん ある  
イエー (E ハー。) イカソ ナン オモテ。(笑)  
家へ (はあ。) 行かしゃない と思って。

E ナカナカ オクサン オモシロイ。(笑) チャント カキノ キガ  
なかなか おくさん おもしろい。 ちゃんと 柿の 木が  
アリマシタ。(笑)  
ありました。

B ヘー。コノ イエヤッタラ モー ヤット ヤット ナンボデモ  
はい。この 家だったら もう たくさん たくさん いくらでも

アノ<sup>ハタ</sup> イッテモ<sup>イマデモ</sup> ナンボデモ<sup>オジーサン、ドコ</sup>  
 あの、畑へ 行っても 今でも いくらでも 「おじいさん、どん  
 ノン<sup>カキ</sup> モッテ<sup>キタテ</sup> ユーたら<sup>アソコノヤー</sup>。ソー<sup>カ</sup>  
 のを 柿を 持って きた。」と言ったら 「あそこのだ。」 「そうか。」  
 マタ モー<sup>アカナンダケド</sup> メーガ<sup>デテ</sup> イッパイ<sup>ナットル</sup>  
 「また もう だめだったけど 芽が 出て いっぱい なる。」  
 ユーテ、ユーテ<sup>ヤットー</sup> ウチア<sup>アッテ</sup> ホテ モー<sup>シト</sup>  
 と言って、言って、たくさん うちほ (柿が) あって。そして もう 一つ  
 ツワ アノ<sup>コー</sup> カエル<sup>トキニ</sup> アノー<sup>カクマチャン</sup> ユー  
 は あの、こう、(学校から) 帰る 時に あのう、かくまちゃん という  
 テ ワタシヨソ<sup>シトツ</sup> オーキー<sup>イエノニ</sup> コー ナニヤラガ<sup>テ</sup>  
 わたしより 一つ 大きい (人の) 家に こう、なにやらが  
 アッタンデス<sup>ワナ</sup> ナツメノキガ<sup>ハイ</sup>。ホシタラ<sup>ハイ</sup>  
 あったんです ね。 なつめの木がね。 はい。 そしたら  
 ナー。ソレガ<sup>ミチエ</sup> オチトルサカイ<sup>キタナイデ</sup> ヒロテ<sup>タ</sup>  
 ねえ。それが 道に 落ちてるから またないから 拾って 食  
 ベラレン<sup>ユーテ</sup> ワタシノ<sup>テテオヤデ</sup> キビシー<sup>シトヤッタ</sup>  
 ベてはいけな い と言って わたしの 父親で きびしい 人だった  
 デ ソンナ<sup>モン</sup> タベたら<sup>モ</sup> クチナワン<sup>ナルデ</sup> タベナ  
 から そんな もの 食べたら もう 蛇に なるから 食べるな  
 ヨ<sup>ユーテ</sup> ホイテ<sup>シカラレヨッタデ</sup> ホンデ<sup>マー</sup> ワタシ  
 よって 言って、そして 叱られたりしたから それで まあ わたし  
 モ ヨメサンニ<sup>イクンマッタラ</sup> ナツメノキガ<sup>アル</sup> イエー(笑)  
 も 嫁さんに 行くんだったら なつめの木が ある 家へ  
 D ソレワ<sup>ナカッタ</sup> カイノー<sup>(15)</sup>  
 それは なかった かねえ。

B ギテ ウエタンヤノニ。 ホンデ ワタシカ。 ナエ モロテ ギテ。  
 来て 植えたんですよ。それでわたしが。苗を もらって 来て。  
アー オッカ。 ホタ イマ ダーレモ タベヘン。 ヒトツツモ。 ホ  
 ああ。 おもしろ。 そしたら 今 どれも 食べやしない。 ちっとも。 ほ  
ンマニ オモシロイ。

んとい おもしろい。

A モー コドモワ ソーユー モノオ タベンヨン ナリマシタ。  
 もう 子どもは そういう ものを 食べないように なりましたよ。

E ソーデス ネー。  
 そうですね。

B シトツツモ タベシマヘン ナー。 モー シヤナイデ オジーサン  
 ちっとも 食べやしません ねえ。 もう しょうがないから、おじい  
モ ダンネンシマスデ キッテ クダサイ ユーテ キッテ  
 さん、もう 断念しますから 切って 下さい と言って、 切って  
モータンデスガ ナー。(笑) ハー。  
 もらったんですが ねえ。 ほうい。

A ムカシワー ヤマ イッテ イタドリ チュー ---- ( <sup>B</sup> エー。 )  
 昔は 山へ 行って いたドリ という ---- ( ええ。 )

E アレ イタドリテ イーマス カ。 ( <sup>A</sup> ヘー。 ) ナンテ ユーン  
 あれ いたドリと 言います か。 ( ほうい。 ) なんと 言うん  
デス カ。  
 ですか。

A イタドリ チュー。  
 いたドリ と言う。

E イタドリ チーマス カ。 ( <sup>A</sup> エー。 ) アー ソーデス カ。  
 いたドリ と言います か。 ( ええ。 ) ああ。 そうですね。

アレ コー ナンカ スポット コー キッテ (A ハエ。) スッパ  
 あれ こう なんか すぽっと こう 切って (はい。) すっぱ  
 イ (A ハエ。) ネ。ソーソーソー。  
 い (はい。) ね。そう そう そう。

A アレオ トッテ ヨー クイマシタシ ナー。(笑)  
 あれを 採って よく 食べましたし ねえ。

B ホイテ アノー カエリニデモ ジノトデモ<sup>(16)</sup> トリヨッター。(笑)  
 そして あいう、帰りにでも 「じのと」でも 採ってたものです。  
 ジノトノ トーオ ナーア。  
 「じのと」の とうを ねえ。

A イマワ ソンナ モンワ ゼンゼン クワンヨーニ ナッシモタン  
 今は そんな ものは ぜんぜん 食べないように なってしまったん  
 ヤデ (E ナー。)   
 だから。 ねえ。

B モー アンタ、アー シテ オカヤサンイ キテ ミ ダ ドコノ  
 もう あなた、ああして 岡屋さんが 来て どの  
 コーデモ コーテ モラウンニ シトリマスデ ナーア。オヤモ  
 子でも 買って もらうんとい していますから ねえ。 親も  
 コーテ ヤルンニ シトッテヤ シー  
 買って やるんとい しておられる し。

E ソーデス ヨネー。  
 そうですね。

A マー アーノ サンサイーデ フキトカ ワラビトカ ユー モノ  
 まあ、あいう、山菜で。 露とか わらびとか いう もの  
 ワ ミナ トッテ タベマスケン ナー。ソレワ モー ショクリ  
 は みな とって 食べますけど ねえ。それは もう 食料

ヨーニ スル ワケデスシ。

に する わけですし。

E ソーデス、ソーデス。アノー ショーカツーニ アノ オモチオ  
そうです。そうです。あのう、正月に あの お餅を  
ツイ、イナカ ヨク オモチ ツキマス ヨネ。 (<sup>A</sup>ハエ。)  
つい、田舎は よく お餅を つきます よね。 (はい。)  
デ ソノー オモチオ ツイタ トキニ カキモチオー ツクッタ  
で、その、お餅を ついた 時に かきもちを 作っ  
り、 (<sup>D</sup>アー、ソーデス ナー。) ネッ。アラレオ ツクッタリ、  
リ (ああ、そうです ねえ。) ねえ。あうれを 作っ  
ソレワー ヤッパリ。

それは、やっぱり。

A ヘー。ヤリマス。ケド ダイブ スクノ ナリマシタ。

はい。やりますよ。けど、だいぶ ずくなく なりましたよ。

B ソレデモ タベシマセン ワナー。ワタシトコノ キョネン アレ  
それでも 食べやしませんわよ。わたしのとこの(家では) 去年 あれ  
フタウス シタンカ シランガ コトシモ ツイトキマヒョ カッ  
ニ 臼 (たのか しらないが 今年も ついておきましょうか  
チュテ アノ ヨメニ トータラ マンダ  
と言って、あの 嫁に 問うたら まだ

注記

- (1) 大八車の小さいもの。輪金のほまつた荷車。
- (2) 隣に座っているD氏に対して。
- (3) [su:wo]
- (4) 声をひそめてB氏に。「ギスカゴ」は、チリチリすを入れる籠。  
当地では麦わらで作ったという。直前のEの発言は、麦わらで編んだ籠に、ぐみ・いすう梅の実を入れた昔のンどものおやつにまつれる話である。
- (5) 「ギスカゴ」の意味がわからないうまま、自分の説明が理解されていると思いこんで、念を押している。
- (6) 「ギスカゴイケ」の「イ」はよくわからない。いちおう助詞の「に」と解した。「ケ」は問いの文末詞にちがいないが、当方言では、「ケ」は言わないという。
- (7) 「ギス」が「リス」と聞こえる。チリチリすを「ギス」という。
- (8) 「アミヨッテデシタ」の熟した言い方。
- (9) 孫さんが立ち上がって歩くので、こう言った。
- (10) C氏の耳元で、声をひそめて。
- (11) D氏に対する聞き返し。すんし耳が遠い。
- (12) 明かな短呼である。
- (13) 「ダーレモ クレートモ」の話部頭、ダとクに強勢。
- (14) 「ソンナ」の「ソ」、「クチナワン」の「ク」に強勢。
- (15) 老女間にも「カイノー」文末詞が使われる。
- (16) 「じのと」は草の名。いたどりに似た植物。

## 5. こどものころ

話（手）

| (略号) | (代名)  | (性) | (生年)           |
|------|-------|-----|----------------|
| A    | 渡辺 信一 | 男   | 明治43年生まれ       |
| B    | 渡辺 久子 | 女   | 大正7年生まれ        |
| C    | 渋谷 計二 | 男   | 昭和2年生まれ <司会役>  |
| D    | 佐藤 虎男 | 男   | 大正15年生まれ <司席者> |

- C シカシ<sup>（1）</sup>アレヤ<sup>（1）</sup>ナー。アノ<sup>（1）</sup>ワカイ<sup>（1）</sup>トキカラ<sup>（1）</sup>デオトルケドモ  
 しかし なんだねえ。あの 若い 時から 出合ってるけれども  
 チットモ<sup>（1）</sup>カワレヘン<sup>（1）</sup>ナー。オタガイニ。  
 ちっとも 変わらないねえ。おたがい。
- A カワラン<sup>（1）</sup>ナー。  
 変わらないねえ。
- C チョット<sup>（1）</sup>コー<sup>（1）</sup>シロイ<sup>（1）</sup>モンガ<sup>（1）</sup>フエルグライデ<sup>（1）</sup>ナー。  
 ちょっと こう(頭)に 白いものが ぶえるぐらいでねえ。
- A ソージャー。ワシガ<sup>（1）</sup>アノ<sup>（1）</sup>ヒガシマイズルエ<sup>（1）</sup>カヨトル<sup>（1）</sup>ジブン  
 そうだよ。わしが あの 東 舞 鶴 へ 通ってる 時分  
 マンダ<sup>（1）</sup>アンタ<sup>（1）</sup>チューガッコーノ<sup>（1）</sup>セートヤッタンジャカラ。  
 まだ あんたは 中学校の 生徒だったんだから。
- C ソーヤ。フン。アレ<sup>（1）</sup>ドーヤ<sup>（1）</sup>イナー。ソノー<sup>（1）</sup>ホンナンヤッタ  
 そうそう。ふん。(とこうで) あれ どうなんだろうね。その、そうすると  
 ラ<sup>（1）</sup>ボクトワ<sup>（1）</sup>ダイブ<sup>（1）</sup>チガウ<sup>（1）</sup>ワケデ<sup>（1）</sup>ヒトマワリイジョー<sup>（1）</sup>チ  
 ぼくとほ だいぶん 違う わけで、一回り以上



ｶﾞｳ ｳｹﾔｹﾝ ｴｰ。 ｴｶﾞｳ ｳｹﾔｹﾄﾞﾓ。 ﾏｰ ｵｸﾞ ｳ  
 違ｳ わｹﾀﾞｹﾄﾞ ｴえ。 違ｳ わｹﾀﾞｹﾄﾞﾓ。 ﾏあ ｵくは  
 ｵｸ/ ﾎﾄﾓｼﾀﾞｲﾆ ﾏｰ ｴｵｯﾄ ｱﾙ ｴｰﾄﾞ ｵｵｴ  
 ｵくの ｴﾄﾞﾓ時代(に) (ｴｲﾏ) ﾏあ ｴｯﾄ ｵる ｴ度 ｴえ  
 ﾄﾙ ｳｹﾔｹﾄﾞ ﾏ ｵｸ/ ﾎﾄﾓｼﾀﾞｲﾄ ｼﾝﾴﾝ/ <sup>(2)</sup>  
 いる わｹﾀﾞｹﾄﾞ。 ﾏ。 ｵくの ｴﾄﾞﾓ時代 と ｼﾝ ｴんの  
 ﾎﾄﾓｼﾀﾞｲﾄ ｳ ｺｰ ｴｲﾌﾞ ｴｶﾞｳ ｵﾓｳﾝﾔｹﾝ ｴｰ。  
 ｴﾄﾞﾓ時代 と ｵ ｴ ｴいﾌﾝ 違ｳ と ｴうﾝﾀﾞｹﾄﾞ ｴえ。

A ｴｰﾔ ｴｰ。 ｴｲﾌﾞ ｴｼｹﾞ ｴﾝｶﾗ ｴｶﾞｳﾝﾴﾛﾄﾞ。  
 ｴうﾀﾞ ｴえ。 ｴいﾌﾝ ｴ十年 ｴ上ﾓ 違ｳ

C ｵｸｼｹﾞ。 ｴｰ ｴｰ。 ｵｰｶﾀ ｴｼｹﾞ  
 ｴ十。 ｴうﾀﾞ ｴ。 ｴい ｴい ｴ十。

A ｴ ｴｰ ｴﾝ ｴｰ ｴﾝﾄｰ ｴｵｰﾄﾞ ｴﾄﾏﾜﾘ ｴｶﾞｳ  
 (あんたの) 姉 ｴんと ｴうﾄﾞ 一 回 ｴ 違ｳ  
 ｴ ｴﾝｶﾀ。  
 ｴんか ｴ。

C ｱｴｶ ｴｰﾔ ｴｰ。 ｱれ。  
 姉が ｴうﾀﾞらうか ｴあ。 あれ。

A ｴﾀﾏﾜﾘ ｴｶﾞｳ ｴﾝｶｲﾄｰ。  
 二 回 ｴ 違ｳ ｴんか ｴえ。

C ｴﾄﾏﾜﾘ ｴｰﾀﾗ ｼｹﾞ ｴｰﾔ ｴｰ。  
 一 回 ｴ と ｴｯﾀﾗ 十 二 ｴ ｴえ。

A ｼｹﾞ ｴｰ。  
 十 二 ｴ。

C ｴｰ ｴﾝﾄ ｴﾄﾏﾜﾘ ｸﾗｲﾔ ｴｰ。 ｱれが ｴﾏ ｺｼｹﾞ  
 姉 ｴんと 一 回 ｴ ぐらゐ ｴ ｴあ。 あれ (姉) が 今 五 十

ーシー<sup>V</sup>カ。ゴジューシーヤカラ<sup>〓</sup>ヒトマ<sup>〓</sup>……  
 四 か。五十四 丁から 一回リ

A ウン。チョード ロクジューロクヤデ。  
 うん。ちょうど 六十 丁から。

C ヒトマワリヤ<sup>〓</sup>十。  
 一回リだ ね。

A ヒトマワリヤ<sup>〓</sup>十<sup>(3)</sup>。  
 一回リだ ね。

C ヒトマワリヤ<sup>〓</sup>十<sup>〓</sup>。ハ<sup>〓</sup>ー。<sup>A</sup>ハ<sup>〓</sup>ー。<sup>V</sup>ソヤ<sup>〓</sup>十<sup>〓</sup>。シンチャ  
 一回リだ ねえ。はあ。(はあ。) そうだ ねえ。信ちゃ  
ンラノ コドモジダイ チュノワ ドーナヤ 十。モ<sup>〓</sup>ー コン ア  
 んらの ンども時代 というのは どうなんだ ね。もう ンん  
ヨー フク テノ ア アッタ ン カ。  
 洋服というの は あったのか ね。

A トテモ トテモ ソンナー ヨー フク ワ ナ カッタ ナ。  
 とても とても そんな 洋服 は なかった ねえ。

C アー、ソー<sup>〓</sup>カ。  
 ああ そうか ね。

A ハ<sup>〓</sup>ー。ワシラン コドモジブン ワ アノ ー ソレ コソ アノ ー  
 はあ。わしらの ンども時分は あう それんや あ  
イト オ ツム イデ ナ ー。ワタ<sup>〓</sup> ツクッ テ。  
 糸を 紡いで ねえ。綿を 作って ね。

C ジブント コノ イエ デ。<sup>A</sup> イエ デ。<sup>〓</sup> ハ<sup>〓</sup>ー。  
 自分ちの 家で? (そう。家で。) あ。そう。

A イト<sup>〓</sup> ツム イデ。<sup>C</sup> ハ<sup>〓</sup>ー。<sup>〓</sup> ホイ デ ソノ ー イト<sup>〓</sup> ー オ  
 糸を 紡いで。(はあ。) そして その 糸を

ケツキョク<sup>ー</sup> アノ<sup>ー</sup> ハターニ<sup>ニ</sup> シタテテ ( <sup>〇</sup> フン。 )  
結 局 あのう 機 に 仕立て ( ふん。 )

ソレオー アノ<sup>ー</sup> チャンコラコン<sup>ン</sup> チャンコラコン<sup>ン</sup> オッテッ。  
それを あのう ちゃんらん<sup>ン</sup> ちゃんらん<sup>ン</sup>と 織ってね。

C イエデ<sup>ニ</sup> オル<sup>ニ</sup> ワケ<sup>ニ</sup> カ。  
自宅で 織る わけ か。

A イエデ<sup>ニ</sup> オッテ<sup>ニ</sup> ホイデ<sup>ニ</sup> コーヤイ<sup>ニ</sup> モッテ<sup>ニ</sup> イッテ<sup>ニ</sup>。  
自宅で 織って、そして 紺屋へ 持って 行って。

C ドコエ。  
どこへ？

A コーヤ<sup>ニ</sup> コーヤ<sup>ニ</sup> ユテ<sup>ニ</sup> ソメモンヤカ<sup>ニ</sup> アッタンニヤ<sup>ニ</sup> ず。  
紺屋。紺屋と いうて 染物屋が あったんだよね。

C アー<sup>ニ</sup> ナルホド<sup>ニ</sup>。 ( <sup>A</sup> ヘー<sup>ニ</sup>。 ) フー。  
ああ、なるほど。 ( はあ。 ) ふん。

A ンデ<sup>ニ</sup> チョード<sup>ニ</sup> アンコクジト ( <sup>〇</sup> フン。 ) ホエカラー ア  
で ちょうど 安国寺と ( ふん。 ) それから あ

ノ マキ<sup>ニ</sup> セーゴハン<sup>ニ</sup> ず。 ( <sup>〇</sup> ウン。 マキ<sup>ニ</sup> セーゴハン<sup>ニ</sup> ハ  
の 牧 整吾さん ね。 ( うん。 牧 整吾さん。 ( は

ーハーハーハー。 ) アソコーカ<sup>ニ</sup> コーヤデ<sup>ニ</sup> ナー。 ( <sup>〇</sup> ホー。 )  
あ、はあ、はあ、はあ。 ( あそんが 紺屋で ねえ。 ( ふん。 )

アソコ<sup>ニ</sup> イッテ ( <sup>〇</sup> ホン。 ) ソメテ<sup>ニ</sup> モロトイテ ( <sup>〇</sup> ホン。 )  
あそんへ 行って ( ほう。 ) 染めて もらっておいで ( ほう。 )

ホイテ<sup>ニ</sup> ソマッタラ<sup>ニ</sup> モッテ<sup>ニ</sup> カイッテ ( <sup>〇</sup> ホー。 ) ホテ<sup>ニ</sup> ソ  
そして 染まったら 持って 帰って ( ほう。 ) そして

レオー<sup>ニ</sup> ハハオヤカ<sup>ニ</sup> ヌーテ<sup>ニ</sup> ( <sup>〇</sup> フン。 ) ( ~~キモノ~~ キモノ  
それを 母親が 縫って ( ふん。 ) 着物に 着物

オ コー ナンヤラ<sup>(4)</sup> シテ モーテ ナー。ヌーテ (ウん。  
 を ンう なんか 仕立てて もらって ねえ。縫って うん。  
 ソレオ キタ<sup>ン</sup>。  
 それを 着たんた。

C アー、キモノバツカリ カ。  
 ああ、着物ばかり か。

A キモノバツカリ。  
 着物 ばかりだよ。

C ハハ。 (A ヘン。) ボクラノ トキワ モー ゼンブ フ  
 ははあ。 そう。 ぼくらの 時は もう 全部 服  
 クヤッタ デ。  
 だった よ。

A ソージャ ナ。ホンデ ワシラカー チョード ノーカッコーエ  
 そうだ ね。それで わしらガ ちょうど 農学校 へ  
 イットル ジブンニモ マンダ アノ ノー チョード ハカマ  
 行ってる 時分にも まだ あの ちょうど 袴を  
 シキヤラ ナンヤカイニ ハカマ ハキヨッタヤロ。 (ウー。  
 式とか なんか(の所)に 袴を はいていただろ。 うん。  
 フーフーフーフー。) アノ ハカマオ ツケルンデ ナー。ウレ  
 うん。うん うん うん。 あの 袴を つけるので ねえ。うれ  
 シテ。  
 しくて。

C シキノ トキワ ソノ コドモ (A ソノ) モ ハカマ ツケヨッ  
 式の 時は その こども も 袴を つけて  
 タンカ。  
 タのかい。

A ツケヨッタ。ラン。 ( <sup>c</sup> ハバーン。 ) <sup>v</sup> ホシテ ソレオー アノ  
 つけてた。 うん。 ふーん。 そして それを あの  
 ー ノーカッコー イッタラ マー イチダン ウエン ナルサカ  
 農学校へ 行ったら まあ 一段 上に なるから  
 エデ ンデ モー ツーカクフクガ カスリノ キモノニ ( <sup>c</sup> ア。  
 それで もう 通学服 が 紺の 着物に あ。  
 カスリヤ ( ナー。 ) カスリヤ。 ~~~~~ ( <sup>c</sup> ア。 ソヤソヤソヤソヤ。 )  
 紺だ ねえ。 紺なの ず。 あ、 そうだ、そうだ、そうだ、そうだ。  
 ソエカラー シマヤラ ナー。 ( <sup>c</sup> ウーブン。 ) ソレーデ アノ  
 それから、 縞とか ねえ。 うん。 それで あの  
 ハカマー モー セーフクニ ナットッタ ワケヤ ナ。 セーフ  
 袴は もう 制服に なっていた わけだね。 制服  
 ク チュンカ、 マー セーソーニ。  
 というのか、 まあ 正装に。

C アー。 キモノ ( <sup>A</sup> ツーカクノ。 ) アー ( <sup>A</sup> ラン ) ソー カ。 ハー  
 ああ。 着物 ( 通学のね、 ) ああ。 そうか。 はあ、  
 ハーハー。  
 はあ はあ。

A ホイデ ボーシカー アノ ハクセンカ ハイッテ ナー。  
 そして 帽子が あの 白線が はいって ねえ。

C ア、 ボーシモ カブリヨッタ。  
 あ、 帽子も かぶってたの。

A ボーシ カブリヨッタ。 ( <sup>c</sup> キモノ キテ。 ) キモノ キテ。  
 帽子を かぶってた。 着物を 着てか。 着物を 着て了。  
 ( <sup>c</sup> アッハハ (笑)。 ) ボーシ カブッテ。  
 あっはっは。 帽子を かぶってさ。

- C ハハー。ハキモンワ ドンテンヤ。  
ははあ。履物は どんなのだい。
- A ハキモンワ アノー オヤカ ツクッテ クレタ フラゾーリ。  
履物は あいう 親が 作って くれた 葉草履。
- C フラゾーリ。(A ヘン。) ハハー。  
葉草履か。 うん。 ははあ。
- A フラゾーリオ ハイテ (C ハーハー。) ホシテー ナニ<sup>(5)</sup> シチ  
葉草履を はいて はあはあ。 そして あれ した  
マッタンヤナ。 ツーカクシチャッタンヤ。  
んだね。 通学したんだ。
- C ハハー。ホンナヤッタラ ドーヤイト。ホノ フク~~xxxx~~ フクオ ハ  
ははあ。 そんなら、 どうなんだい。 その 服を は  
ジメテ キチャッタ ユータラ イツゴロヤ。  
じめて 着なすったというのは いづろなの。
- A ワシカ フク キタソーワ<sup>V</sup> サー<sup>(6)</sup> タイショー<sup>V</sup> サンネンゴロヤ  
わしが 服を 着たのは さあ 大正 三年頃では  
ナイ カナ。  
ない かな。
- C タイショー サン……。ア、ヨー オボエトッチャ ナー。ハー。  
大正 三……。 あ、よく 覚えておいでだねえ。 はあ、  
フーン。  
ふーん。
- A ソイデ ソレマデワ ナンヤラ シテ、ソーヤ ナー<sup>(7)</sup>。フク キタ  
それで それまでは なんやら して そうだ なあ。 服を 着た  
ッ チュンワ ソレグライヤ ナー。  
と というのは それぐらい(のころ)だねえ。

C タイショー サンネンゴロ。 (A エー。) ホタ ソノ フク フ  
 大正 三年 じろ。 ええ。 そしたら その 服を  
 ク キタラー ホ トーゼン クツ ハク ワケヤケド (A ン。  
 服を着たら それ 当然 靴を はく わけだけど ン。  
 ソノ ジブン ン...) マー ソノ ジブン カ。  
 その 時分 ま。 その 時分 か。

A ソレワ ナー。 モット ハヨー、 サ、 タイショーノ ハジメゴ  
 それは ねえ。 もっと 早く、 であて 大正の はじめゴ  
 ロニ アノー ゴムクツ ユーテ ナー。 (C フン。) アノ ゴ  
 ろに あのう ゴム靴と いうて ねえ。 うん。 あの ゴ  
 ムバツカリデ コシラエタ (C ハン。) コン シート、 アレ  
 ムばかりで ころえた はあ。 ええーと あれは  
 コンニャククツ ユーテ アカイノ イマ アノ ペンペラノ ク  
 ンにゃく靴と いうて 赤い靴、 今 あの 薄手の  
 ツガ アルンヤ ナ。 ハヤリダチノ カ。 フツノ イマノ カワク  
 靴が あるんだよね。 はやりはじめのが。 普通の 今の 革靴  
 ツシキノ (C フン。) アノー ソレオ (C カッコ----)  
 式の ふん。 あの それを かっこう---  
 ゴムデ コシラエテ。  
 ゴムで ころえてね。

C カッコワ カワクツデー。  
 形 は 革靴で。

A ウ。 ウん。 イヤイヤ。 カッコワ カワクツシキノ。 (C シキノ  
 う。 うん。 形 は 革靴 式のね。 (革靴の式の  
 ヤツデ。) イマ アノ ゴムノ ナガクツガ アル ワナー。  
 やつで。 今 あの ゴムの 長靴が ある よねえ。

アレオ<sup>△</sup>ミジコー シタヨーナ<sup>△</sup>モンデ

あれを 短く したような もので。

C ハー。 (Aヘン。) ア<sup>△</sup>ソー<sup>△</sup>カ。ウン。  
ははあ。 ええ。 あ、そうか。 うん。

A ソレカ<sup>△</sup> アノー ウメダ<sup>(9)</sup>コニ ニケン<sup>△</sup> クツヤハンカ<sup>△</sup> アッテ  
それが あの 梅垣に ニ軒 靴屋さんが あって

ハジメテ<sup>△</sup> ソレオ<sup>△</sup> ハカシテ<sup>△</sup> モロテ<sup>△</sup> ナー。 (Cハー。)

はじめて それを はかして もらって ねえ。

ゴムグツオ。 (Cハー。) ホデー チョード<sup>△</sup> イマノ<sup>△</sup> カワグツ  
ゴム靴と。 それで ちょうど 今の 革靴

シキノ<sup>△</sup> モンデー (Cラン。) アノー ソレカ<sup>△</sup> ゴム<sup>xxxx</sup> ゴムセー  
式の もので (ふん。) あのう、それが ゴム製

ヒンデ<sup>△</sup> サイショワ<sup>△</sup> アノー アンタラーノ<sup>△</sup> ホン<sup>(10)</sup> ガッコー<sup>△</sup> イ  
品で 最初は あのう あんたらの ちょうど 学校へ

キーヨッタ<sup>△</sup> ジブンニ<sup>△</sup> アノー<sup>△</sup> ガッコーノ<sup>△</sup> センセーラカ<sup>△</sup>  
行っていた ころに あのう 学校の 先生達が

シキノ<sup>△</sup> オリニ (Cラン。) ヒモノ<sup>△</sup> ツカン<sup>△</sup> クツ<sup>△</sup> ハキヨッ  
式の 時に (ふん。) 紐の 付かない 靴を はいて

チャッタヤロ。

なすっただろ。

C ワシャー ソソヤ オボエトラン<sup>△</sup> ナー。 (笑)

わしは。 それは 覚えていないなあ。

A リョーフキニ<sup>△</sup> コー<sup>△</sup> ゴムカ<sup>△</sup> ツイテ<sup>△</sup> ナー。 ホイテ<sup>△</sup> コー マエ  
両側に こう ゴムが 付いて ねえ。 そして こう 前

ト ウラトワ<sup>△</sup> チョット<sup>△</sup> タカイナリ<sup>(11)</sup>。 イマノ<sup>△</sup>

と 裏とは ちょっと 高いし。 今の



C ソー<sup>ハ</sup>カイナー。

そうかねえ。

A ウン。 (<sup>C</sup>フー<sup>シ</sup>。) ソーユー<sup>ハ</sup>シキノ<sup>ハ</sup>モンデ。 (<sup>C</sup>ラン。)  
うん。 ふん。 そういう 式の もので。

ソレオ<sup>ハ</sup>ハイテ イキヨッタ<sup>ハ</sup>ンヤ<sup>ハ</sup>ナ。

それを 歩いて 行ってたんだね。

C ホッタラ<sup>ハ</sup>ドーナヤ<sup>ハ</sup>ナ。 ホノ<sup>ハ</sup>ラクヨリモ ソノー、ゴムグツ  
そしたら どうなんだね。 その 服よりも そのう ゴム靴  
ノ<sup>ハ</sup>ホーガ<sup>ハ</sup>ハヨー<sup>ハ</sup>デケタッ<sup>ハ</sup>チュー<sup>ハ</sup>ワケ<sup>ハ</sup>カ。 ソンナ コト  
の 方が 早く できたという わけか。 そんな こと  
ワ<sup>ハ</sup>ナイ。

はないか。

A マー イットキクライヤ<sup>ハ</sup>ナ。

まあ 同時 ぐらいだねえ。

C イットキグライ。 (<sup>A</sup>ヘー。) アー<sup>ハ</sup>ソー<sup>ハ</sup>カ。  
同時 ぐらい はあ。 ああ、そうか。

A イットキグライニ<sup>ハ</sup>デケテ。

だいたい 同時に できて。

C フー。 フー<sup>→</sup>ン。

ふん。 ふん。

A ベンリナ<sup>ハ</sup>モンカ<sup>ハ</sup>デキタ<sup>ハ</sup>ユーテ コドモゴコロニ<sup>ハ</sup>ホシテ ソ  
便利な 物が できたと言って、子ども 心に ほしくて、そ

レモ<sup>ハ</sup>ナカナカ コーテ モラエンナリ、ソレマデ<sup>ハ</sup>アノー チョ  
れも なかなか 買って もらえない。 それまで あのう ちょ

ード ガッコー イク ジブンニ<sup>ハ</sup>ワー アノー、<sup>V</sup>ワラゾーリニ  
うじ 学校へ 行く ころには あのう 葉草履に

ユキガ<sup>ハ</sup>フルト<sup>ハ</sup>アノー フカグツ<sup>ハ</sup>ユーテ<sup>ハ</sup>ワラデ<sup>ハ</sup>コシラエタ。  
 雪が 降ると あのう 深くつと 言って、 藁で ニラえた。  
 イマノ<sup>ハ</sup>ナカグツシキノ<sup>ハ</sup>モノ<sup>ハ</sup>ナ。

今の 長靴 式の 物 ね。

C アー、イマデモ<sup>ハ</sup>ヤットルヤロ。アレ。マシタ。 (A エー。)  
 ああ、今でも 使ってるだろう。あれ。まだ。 ええ。  
 ナーア。

ねえ。

A アノ<sup>ハ</sup>シキノ<sup>ハ</sup>モンオ<sup>ハ</sup>ナ。 (C ラーフー。 ) アノー ハイテ  
 あの 式の 物を ねえ。 ふんふん。 あのう はいて  
 イキヨツタンヤ。 ホンデ ホン<sup>(12)</sup> オヨギカラー オヨギノ ア  
 行ってたもんだ。それで、 つい 於手岐から 於手岐のあ  
 ノ タニニ<sup>ハ</sup>ナ。 アソコカラ<sup>ハ</sup>クル<sup>ハ</sup>ヒトラワー<sup>ハ</sup>ワラジガ  
 の 谷に ねえ。 あそこから 来る 人たちは わういが  
 ケデー キタ<sup>ハ</sup>コトガ<sup>ハ</sup>アルンヤ<sup>ハ</sup>デ。  
 けど 来た ことが あるんだよ。

C アー、ソー<sup>ハ</sup>カ。  
 ああ、そうか。

A コドモノ<sup>(13)</sup>トキニ<sup>ハ</sup> ホン (C ハー。 ) アノー コドモジ  
 ほんまの (はあ。 ) あのう、 子どもの  
 ブンワ<sup>ハ</sup>タイショーノー ログネン<sup>ハ</sup>ヒチネンゴロヤ<sup>ハ</sup>ナ。  
 ころは 大正の 六年 七年ごろだねえ。

C ナルホド<sup>ハ</sup>ナ。 フー<sup>ハ</sup>ウ。 ホタ<sup>ハ</sup>マイニチ<sup>ハ</sup>ソノ<sup>ハ</sup>ワラゾーリ<sup>ハ</sup>  
 なるほど ねえ。 ふん。 そしたら 毎日 その 藁草履を  
 ハイテ<sup>ハ</sup>キモノ<sup>ハ</sup>キテ<sup>ハ</sup>ガッコ<sup>ハ</sup>イキヨツチャッター。  
 はいて 着物を 着て 学校へ 行っていたの。

A ソーヤ<sup>ナ</sup>。(笑) エー。ホンデ<sup>オ</sup>デンキ<sup>ノ</sup>オリガ<sup>ソー</sup>  
 そうだよ。 ええ。それで お天氣の ときが そう  
 スルナリ、アメガ<sup>フ</sup>ツタリナ<sup>ン</sup>カ<sup>スル</sup>トキニワ<sup>ア</sup>ノー。  
 するし、 雨が 降ったリなんか する ときには あ  
 ゲタ<sup>ユ</sup>ーテ<sup>ナ</sup>。 (フン。) イマ<sup>ア</sup>ル<sup>ゲ</sup>タ、アレオ  
 下駄<sup>ト</sup>といって ねえ。 ふん。 今 ある 下駄、あれを  
 ハイテ (フン。) ホイテ<sup>カ</sup>ヨイヨ<sup>ツ</sup>タヤ。  
 はいて (ふん。) そして 通っていたんだよ。

C アー、ゲタ<sup>ハ</sup>イテ、アメフリ<sup>ワ</sup>。(ハエ。) アー、ソー<sup>カ</sup>。  
 ああ、下駄を はいて。雨降り(の日)は。 ああ、そうか。

A ホイデ<sup>タ</sup>カ<sup>ゲ</sup>タニモ<sup>タ</sup>カゲ<sup>タ</sup>ト (フン。) チューゲ<sup>タ</sup>ト  
 で。 下駄にも 高下駄と (ふん。) 中下駄と  
 (フン。) ホレ<sup>カ</sup>ラー<sup>ア</sup>ノー ヒク<sup>ラ</sup> ユーテ<sup>ナ</sup>ア。  
 (ふん。) それから ああ ひくらと 言って ねえ。

C ヘコ<sup>ラ</sup>カ。  
 ヘンら か。

A ヒク<sup>ラ</sup> ヒク<sup>ラ</sup> ヒ、ク、ラ。  
 ひくら。

C ヒク<sup>ラ</sup> ヒク<sup>ラ</sup> ユー<sup>ン</sup>カ。ア、ソイツァ<sup>シ</sup>ラン<sup>ナ</sup>ー。 (ボ)  
 ひくらと 言うのか。 あ、そいつは 知らないねえ。 ぼ  
 クア<sup>ー</sup>。  
 くは。

A エン。 ヒク<sup>ラ</sup> ユー<sup>タ</sup>リ ヒキズ<sup>リ</sup> ユー<sup>タ</sup>リ。 (フン。  
 うん。 ひくらと 言ったリ ひきずりと 言ったリ。 (ふん。  
 ヘー。ホン<sup>ヒ</sup>ク<sup>イ</sup> イマー アノー ハイ<sup>ト</sup>ルヤロ。 (フン。  
 はあ。 まったく 低い、今 ああ はいてるだろ。 (ふん、)

ア—ユー<sup>ソノ</sup> ヒクラ<sup>ヒクラ</sup> ユ—テ (ハ—。) ヨイ  
あいう、その、ひくら ひくらと言って はあ、 言って  
ヨッタンヤ<sup>ナ</sup>。

いたんだぜ。

C フ—ン。 <sup>(44)</sup> ヒサカハン<sup>ラノ</sup> トキモ、マ— ヒサカハン<sup>ワ</sup> ナンネ  
ふ—ん。 久子さんらの 時も、まあ 久子さんは 何年  
ンウマレ—。 シツレーヤケド キョ—ワ ユ—テ—ナ。 キョ—ワ。  
生まれ？ 失礼 だサビ 今日は 言って下さいな。 今日は。  
(笑)

B ワタシ<sup>タイショー</sup> <sup>(45)</sup> シチネン<sup>ウマレヤ</sup>。  
私？ 大正 七年 生まれ。

C タイショー<sup>シチネン</sup>。 ハ— <sup>(46)</sup> ダイブ<sup>ホンナラ</sup>、ア— <sup>(47)</sup> ソ—モ  
大正 七年。 はあ だいぶん そんなら、 ああ、 そうでも  
ナイ<sup>カ</sup>。 フン<sup>フン</sup> ウチノ<sup>オーバー</sup> チャン<sup>トー</sup> チカウ<sup>ユ—</sup>  
ないか。 ふん、ふん。 うちの おばあちゃんと十歳 違うといッ  
トツタカラ マ<sup>スクナイ</sup> ホ—ヤノニ。 <sup>(48)</sup> ホイジャー。 (笑)  
ていたから、ま 少ない 方だよ。 そんなら。

マ ヒサカハン<sup>ラノ</sup> <sup>(49)</sup> ソノ<sup>ショー</sup> ガッコー<sup>ジダイノ</sup> トキモ  
ま、 久子さんらの その 小学校時代の 時も  
ヤッパイ ソノ<sup>ゾー</sup> リヤッタ<sup>ン</sup>。  
やっぱリ 草履 だった？

B イエ。 ワタシ<sup>ワ</sup> ワタシ<sup>ノ</sup> <sup>(50)</sup> ガッコー<sup>ガ</sup> チカク<sup>デシテ</sup> ネ—。  
いえ。 私は 私の 学校が 近くでして ねえ。  
ソバヤッタ<sup>デ</sup> <sup>(51)</sup> ネ—。 (フン。) ホッデ<sup>アノ</sup> ゲタバ<sup>ッカリ</sup>。  
すぐ近くだったのねえ。 ふん。 それで あのう 下駄ばかりでした。

C ゲタバッカリ。

下駄ばっかり(か)。

B ハイ。ゾーソワ<sup>ハ</sup>ケヘン<sup>ハ</sup>ゲタバッカリ。クツ<sup>ハ</sup>キタイ<sup>ハ</sup>オモ  
はあ。草履は ほかないで、下駄ばかり。靴をはきたいと思っ  
タ<sup>ハ</sup>コト<sup>ハ</sup>アリマシタ。<sup>(C)</sup>ハー。フナ... ウサギカリヤトカ<sup>ハ</sup>  
た ことが ありましたよ。 はあ。そんなら 兎狩り だとか  
ネーエ。<sup>(C)</sup>ウン。 <sup>(17)</sup>エンソクヤトカノ トキワ<sup>ハ</sup>クツ<sup>ハ</sup>ハキ  
ねえ。 うん。 遠足 だとかの 時は 靴をは  
ヨッタケド<sup>ハ</sup>タイカイ<sup>ハ</sup>ゲタバッカリ。  
いたものだけど たいてい 下駄ばかり。

C ゲタバッカリデ。ハハー。ソエ、シー。

下駄ばかりで。ははあ。それ、ん。

B ワタシカ<sup>ハ</sup>ハジメテ<sup>ハ</sup>ホントニ<sup>ハ</sup>ワタシモ<sup>ハ</sup>キモノバッカリデス。  
私が はじめて ほんとに 私も 着物ばかりです。

ラクワ<sup>ハ</sup>ヒド<sup>ハ</sup>キタ<sup>ハ</sup>コト<sup>ハ</sup>ナカッテ<sup>ハ</sup>ネー。<sup>(C)</sup>ラン。  
服は ひどく 着た こと なかったものではえ。

ハジメテ<sup>ハ</sup>キモノ<sup>ハ</sup>ラク<sup>ハ</sup>ラク<sup>ハ</sup>コーテ<sup>ハ</sup>モーテ<sup>ハ</sup>キタンガ<sup>ハ</sup>  
はじめて 着物、服、服を 買って もらって 着たのが

チュウガク<sup>ハ</sup>アノー シューガクリョコーノ<sup>ハ</sup>トキ。  
中学、あいう、修学旅行の 時。

C イアーン。ドコ<sup>ハ</sup>イッチャッタンヤ<sup>ハ</sup>。<sup>(B)</sup>エー。 シューガ  
やあ。 どんへ おいででしたの。 ええ? 修学  
クリョコーワ。

旅行は。

B キョートノ<sup>ハ</sup>オミヤカ<sup>ハ</sup>ナラカ<sup>ハ</sup>ネーエ。<sup>(C)</sup>ホン。 イッタリ。  
京都の お宮か 奈良か ねえ。 はあ。 行ったり。

(<sup>C</sup>ラン。) ソレダケ ハジメテ。  
ふん。

C ホタ<sup>^</sup>ソノ<sup>^</sup>ゾーリバキッ<sup>^</sup>チュー ケーケンワ<sup>^</sup>モー<sup>^</sup>ゼンゼン  
そしたら その 草履ばかりという 経験は もう 全然  
ナイ ワケ。  
ない わけか。

B イヤ、ホラ モー<sup>^</sup>アノ<sup>^</sup>ハイトリマスケド。ガッコーイキワ。  
いえ。そりゃ もう あの。はいてますけどは。学校行き(の時)はね。

C アー<sup>^</sup>ガッコーイキワ。(<sup>B</sup>ウン。) イエー<sup>^</sup>カエッタラ<sup>^</sup>モー<sup>^</sup>  
ああ。学校行きは。 (そう。) 家へ 帰ったら もう  
ゾーリト。  
草履と(いうわけだね。)

B エー<sup>^</sup>イエデワ<sup>^</sup>モー<sup>^</sup>フラゾーリ<sup>^</sup>ムカシワ<sup>^</sup>フラゾーリバック  
ええ。家では もう 藁草履。昔は 藁草履ばかり  
リデー、ホイテ<sup>^</sup>アノー セキダ<sup>^</sup>ユーテ<sup>^</sup>ネーエ<sup>^</sup>アノ<sup>^</sup>ゴムノ  
で、そして あのう 雪駄と言って ねえ。あのゴムの  
ツイタ ヤツオ ネ。ガッコーノ ウワバキニワ コーテ モー  
付いた ものを ね。学校の 上履きには 買って もら  
タ コトワ アルシ ソレオ ハイタ コトワ アルケド ワタシ  
た ことは あるし、それを 聞いた ことは あるけど 私  
ノ ウチャー ハッキリ ナンネンゴロカラ ハイタ ユー コト  
の 家は、 ばっきりと 何年ごろから 聞いたということは  
ワ オボエトリ シマセン。  
おぼえていませんわ。

## 注記

- (1) 感情をこめて、同感の意をあらわしている。
- (2) Cによれば、「シンイッチャン」と言っているつもりだという。一回りも年上をチャンと呼ぶのは、親しい間柄である。小さい時からの呼びかたを年とってからでも変えずにいるのが注目される。Aさんも、Cの姉を「ネーチャン」と呼んでいる。通常の間柄の場合は、「——ハン」をよく言う。
- (3) 「ネ」か「ナ」かははっきりしない。共通語意識がそうさせたのか。
- (4) Aさんの発言には、「ナンヤラ」が多い。名詞や動詞の代りにこれを使う。聞く方には、話脈上から理解しうるものであるが、臍化の効果もなくはない。
- (5) 話のすじから、菓尊履をばいて通学したのは、自分をもふくめた当時の小学生一般である。自分もその一人である点からすれば、「チャッタ」ことばを用いるのはおかしいけれども、話者の意識では、今は老人になっているあの人の人を頭に思い浮かべて言ったために、「チャッタ」を用いたのであろう。
- (6) [sāː:]
- (7) 「ソーヤ ナー。」全体が、声をひそめて発音されている。
- (8) 「ペンペラ」は、薄くて張りのある感じをいう。
- (9) 「ウメザコ」という地名である。ザをダと発音している。
- (10) 「ホン」は「ホン ハジメ(いちげん初め)」のように使う。ここでは、いくぶん拡張された用法になっている。
- (11) 「ナリ」は、接続助詞と見られる。もと断定助動詞「なり」の中止形であろう。それが、「～だし」に相当する意味機能をもって、いま当方言でよく聞かれるものとなっている。
- (12) 地名。高硯の東5kmほどにある集落。
- (13) 不明。重複して聞きとりにくいから、いちおうこうしておく。
- (14) 「ヒサコハン」と言っただけで、話者は言う。
- (15) 遠くの声で語尾不明係。
- (16) 話者Bは、この「ネー」をかなりよく使う。地ことばではない。

(17) [ɛnsoku]

(18) よく聞きとれない。C氏の聞きとりに従って、こうしておく。



## 6. 家族のこと

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)           |
|------|-------|-----|----------------|
| A    | 渡辺 信一 | 男   | 明治43年生まれ       |
| B    | 渡辺 久子 | 女   | 大正7年生まれ        |
| C    | 渋谷 計二 | 男   | 昭和2年生まれ <司会役>  |
| D    | 佐藤 虎男 | 女   | 大正15年生まれ <同席者> |

C シンチャン<sup>△</sup> ヨー<sup>△</sup> オボエトッチャ<sup>△</sup> ナー<sup>△</sup> アンター<sup>△</sup>。  
信ちゃんは よく おぼえておいでだなあ。 あんた。

A ウン。 マ<sup>△</sup> ダイタイ ナニヤ<sup>△</sup> カナ。 (ハハー。)<sup>C</sup> エン。  
うん。 ま だいたい なんだよね。 ははあ。 ええ。

C ソンダケ<sup>△</sup> オボエトコ<sup>△</sup> オモタラ<sup>△</sup> ホノ ケーモ<sup>△</sup> シロ<sup>△</sup> ナル<sup>△</sup>  
それだけ 覚えておこうと 思ったら その モモ 白く なる  
ワ。(笑) ナーア。 ホンマヤー。  
よね。 ねえ。 ほんとだ。

A ケーワー<sup>△</sup> ショーブンヤデ<sup>△</sup> コレワ。  
毛は 性 分だから。 これは。

C ダイタイ<sup>△</sup> ケートーヤ<sup>△</sup> ナー<sup>△</sup> コレ<sup>△</sup> ボクモ<sup>△</sup> シロイ<sup>△</sup> コレ。  
だいたい 系統だねえ。 これ。 ぼくも 白いよ。 これ。

D ウン。 シロイ<sup>△</sup> ナー<sup>△</sup>。  
うん。 白い ねえ。

C ソメトンヤケン<sup>△</sup> ナー<sup>△</sup>。 (ウンウン。)<sup>D</sup>  
染めてるんだけどねえ。 うんうん。

B アーソーカサ。

ああ、そう かね。

A オマエ オマエ<sup>(1)</sup>ソメトンガ<sup>(1)</sup>ヨーワカルケンチー。

おまえ、おまえは 染めてるのが よく わかるけど ねえ。

C ワカルカイ。 (A ウン。) ワシワカランヨーニ<sup>(1)</sup>イッショウ  
わかる かい。 うん。 わいほ わからないように 一生

ケンメーニヤットッテンヤガアカンカ。

懸命に やってたんすが だめか。

B ワカル<sup>(2)</sup>。

わかるとも。

A アノ オジーサンガ<sup>(3)</sup> マンスケジーサンガ ザーットコーヒゲ

あの おじいさんが 政助 (い)さんが ゴーっと こう 鬚を

ノバシテ モーマッシロヤッタガチー。 (C ラン。)

伸ばして もう まっ白だったか ねえ。 ぶん。

オマエトコノオトーサンワソノドエライ アノーシロイ

おまえとこの お父さんは その ひどく あのう 白い

トワオモエン。

とは 思われなかった。

C アレヘナシダ。ケーガ。ソーソー。(笑) ウーン。 (A ウン。)

ありやしなかった。毛が。そんなに毛。 うーん。 うん。

B ダイブシロナリマシタ。

(主人の頭) だいぶん 白くなりましたね。

C ウン。シロナツチャッタチー。ホンマニ。 ~~ア~~ アンマリ

うん。 白く かなりすった ねえ。 ほんとに。 あまり

A シンパイガーヨケナンカモシレン。(笑)

心配が 多いのかも (れない)。

C ダイジニ シタゲトクンナハエ <sup>(4)</sup> ヤ。  
大事に してあげて下さいよ。

B ハイ。 ダイジニ シトンデスデ <sup>(5)</sup> ー。  
はい。大事に してるんですから。

C ソラ ヨー ワカッテマスケド <sup>→</sup> ー。  
そりゃ よく わかってますけどね。

B ネー ー モ ー コノ ヒト タヨリヤデ ワタシワ。  
ねえ。もう。この人(主人)が頼りだから。わたしは。

C オタガイニ。 <sup>B</sup> ヘー ー ソラ ソーヤ。  
おたがいにね。 <sup>B</sup> ええ。 <sup>B</sup> そりゃ そうで。

B コノ ヒトニ モ ー ハタライテ モラワナ クビツラン ナラン <sup>(6)</sup> ー。  
この 人に もう 働いて もらわなければ首吊らねばならない。  
(笑) オカゲデ ホッデモ ジョーブン ナッテ ネー <sup>(7)</sup> ー ラン。  
おかげで それでも 丈夫に なって ねえ。 <sup>(7)</sup> (ふん)

ウン。  
ええ。

C ソーラシカッタ ナー ー アレ ボク エライ シツレー シトッタ  
そうだったそうだねえ。 あれ ぼく たいへん 失礼 していた  
ンヤケド ホンマニ。  
んだけど。ほんとに

A イヤイヤ ソレホド ドエライ ヒトニ シラセルヨナー コト  
いやいや。それほど おおげさな 人に 知らせるような コト  
ヤ ナイシ ナー ー ソレワ。  
じゃない ね。 それほ。

B シンパイシマシタ。  
ー

C ホヤケド アレワ チョット ユワナ イカン デ。  
たじけど あれは ちょっと 言わにゃ だめだよ。

A イヤ。 ユ ユワナーッテ ナニヤラヤッタモンジャ テ ナー。  
いや。 言わにゃって(あんた言うけど) なんだったもんだからねえ。

アノー ワシモ ツ インスル ツモリデ イッタンヤ ナ。(C  
わしも 通院する つもりで 行ったんだよ。(

ウシ。) ホシタラ アノー ソノ ハヤシセンセー ユーンガ  
うん。 そしたら あの方 その 林先生 というのが

ドエライ タカツキニ ナジミノ アル センセーデ。(C アー)  
たいへん 高槻に なじみの ある 先生で (ほう。)

ホデ カルテ ミテ アー コレワ モー カルテ タカツキ  
それで カルテを見て、「ああ、これは もう カルテ、高槻  
ノ ヒトカト オモタラ アノー ナニガ デケン ト。(C ウフ  
の 人かと 思ったら あの方 なにが できないってさ。(うふ

フフフフ。) ミノガシニ デケンサカイ ソッコク ニューイン  
ふふふふ。) 見逃しに できないから 即刻 入院

セーデ ナー。  
しろ」で ねえ。

C ア ソー カー。  
あ、そうかい。

D ドコガ オワルカッタンデス カ。  
どこが お思かったんですか。

A イカイヨー ヤッタンデス。(D アラアラ ソーデス カー。)  
胃潰瘍を 患ったんです。(あらあら。 そうですか。)

ヘン。  
ええ。

C チョット コレ ヨバレマス デ。

ちょっと これ ご馳走になりますよ。

A ハイ ドーゾ。

はい。どうぞ。

B デモ ヨカッタデス。ハヨー。

でも よかったです。早く。

A センセーモ ハヨー ナンヤラ シテー (フン。) オクレテ  
先生も 早く あれこれ処置して (ふん。) 下さって

ナー。ホンマニ シンミニ ナッテ ナー。 (フン。) アノ  
ねえ。ほんとに 親身に なって ねえ。 (ふん。) あの

シトオクレテ。マー ホンデ センセーニ<sup>(8)</sup> ユーテンヨーニ ナニ  
して下さって。 ま それで 先生が 言われるとおりに養生

(フン。) シトッタンヤケド。  
(ふん。) していたんだけど。

C セヤケド アンタ イトコデヤ ナー シナン アンタ ニューイ  
だけど あんた。従兄弟でだねえ。 そんな あんた。入院

ンシトッテヤ コトモ シラント。ンナ。デオタ トキニ バツガ  
しておいでだというんとも 知らずに、そんな。出会った時に、ぼつが

フルーテ、ホナン カナン ワー。ンナー。(笑)

悪くて、そんなの かなれないよね。 そんな。

B ソイデモ シュジュ ツシタリナンカイ シテンヤッタラ ネー。

でも、手術したらナンか するんでしたら ねえ。

シンパイシマスケド。ソレワ アンタ ヤッパリ。

心配しますけど。 それは あなた。やっぱり。

A シュジュ ツシター (ハー。) ナンヤ スルンジャッタラ ソラ

手術して

なにかと するんだったら

そッヤ

ユワン<sup>ハ</sup> ナンケン<sup>ハ</sup> ナー。 ( <sup>C</sup>ソーヤ。 ) オタガイニ<sup>ハ</sup> ソノー  
 言わにゃ ならないけどねえ。 そうだよ。 おたがいにも そう  
 ゲツカデー<sup>ハ</sup> ドノイ<sup>ハ</sup> ナッテ<sup>ハ</sup> チーオ<sup>ハ</sup> モラワン<sup>ハ</sup> ナン<sup>ハ</sup> ワカラン  
 結果で どのように なって 血液を もらわねばならないか わか  
 シー。

らないし。

C ソーヤ。

そうだよ。

B ウン<sup>ハ</sup> ソーデス<sup>ハ</sup> ヨ。 ソーユー<sup>ハ</sup> トキヤッタラ<sup>ハ</sup> エーケド。

うん、そうですよ。 そういう 時だったら よいけど。

C チーテ<sup>ハ</sup> アンタ<sup>ハ</sup> ケツエキカタ<sup>ハ</sup> ナンヤ<sup>ハ</sup> ナ。 シンチャンワ。

血って あんた、血液型は なんだね。 信ちゃんは。

A ワシ<sup>ハ</sup> カ。 ( <sup>C</sup>ラン。 ) エーカタ。

わしかね。 ( ぶん。 ) A型だ。

C ア、ボクト<sup>ハ</sup> オンデジャ<sup>ハ</sup> ワ。 ボクモ<sup>ハ</sup> エーカタヤ<sup>ハ</sup> ワ。 ( <sup>A</sup>エー。 )

あ、ぼくと 同じだね。 ぼくも A型だよ。 ( ええ。 )

ハー。

はあ。

B ンデモ<sup>ハ</sup> トーカホドワ<sup>ハ</sup> ソラ<sup>ハ</sup> ドッテニ<sup>ハ</sup> ドー<sup>ハ</sup> ナル<sup>ハ</sup> シラン<sup>ハ</sup>

でも 十日ほど そりゃ どちらに どう ころぶかしらんと

ユーテ<sup>ハ</sup> シンパイシマシタケン<sup>ハ</sup> ナー。 チョットデモ<sup>ハ</sup> ヨイカ<sup>ハ</sup>

いって 心配しましたけど ねえ。 すんでよかった。

ドーヤロ<sup>ハ</sup> オモテ。

どうだろうと 思ってね。

C ソア<sup>ハ</sup> ソーデショー<sup>ハ</sup> ナー。

そりゃ そうでしょうねえ。

B エー、ソノ カン シンパイシタケド マー ヨージョーダケデ  
 ええ。その間、バ配でしたけど まあ、養生だけで  
ヨカッタケド。ホンデモ ヨンジューニチ オラン  
 まかったけど。それでも 四十日 いざい  
ト ナルト ネーエ。  
 と なると ねえ。

C ネー、ホンマニ。  
 ねえ ほんとに。

B カナイマセンダ。ホンナ マー オカゲデ ショーイチカ チカク  
 やりきれませんでしたよ。でも まあ おかげで 昭一が 近くに  
ニ オツテクレタデ。  
 いてくれたから。

C ア、ソレワ ヨカッタデス ナー。  
 あ、 まかったです ねえ。

B アー、オカゲデー ヨー キバッテ クレマシタ イナー、アキモ  
 ああ。おかげで よく がんばって くれました よねえ。秋の収穫  
 ー。〔<sup>C</sup> ハー。〕 アリヤー ハヤシセンセイノ アノー コーユ  
 期もね。 あれば、 林 先生の こういう  
コトガ ナカッタラ コーモ キテ クレヘン ワイネ。(笑)  
 ンとが なかったら ンどもモ(もどって) きてくれやしないわよね。

D ア、ムスコサンガ。  
 あ、息子さんが？

C ン、ムスコサン。( <sup>D</sup> アー。 ) シャクショ。  
 ん、息子さん。( ああ。 ) 市役所。

D アー、ソーデス カ。( <sup>C</sup> ウン ) コリャコリャ。  
 ああ、そうですか。 ンれば ンれば。

- A チョード コッチー カエラシテ モーテ ナンヤ シトッタデ  
 ちょうど こちらへ 帰らして もらって なんか(仕事を)してい  
 ヨカッタヤ ナー。  
 たから よかったんだね。
- C ヨカッタ ナー。ソエガ。ホンマヤ。フン。  
 よかった ねえ。それが。ほんとだよ。うん。
- B ソエガ ヨカッタデス。ソヤ ナカッタラ ニシワキカラ ユート  
 それが よかったです。 そうで なかったら 西 脇 から という  
 チョット ナンボー シテヤロト オモテモ カエレシマヘン  
 ちょっと いくら(仕事を)してやろうと 思っても 帰られやしません  
 デ。  
 からね。
- C ソラ ソヤロ ナー。  
 そりゃ そうだろうねえ。
- B エー。ヨナベバツカリ シマシタ デ。イネコキオ。  
 ええ。 よなべばかり しました よ。 箱コキを。
- C ショーイッチャンガ。  
 昭一 ちゃんがね。
- B ヘー。ヨナベバツカリ ヒトリ シマシタ イナー。  
 はい。 よなべばかり 一人で しましたよねえ。
- C フーン。  
 ふーん。
- B ウーン。  
 うん。
- C マー コマメナ コヤカラ。  
 まあ、まめに働く 子だから。



B イヤー。(ソナ)コト(ナイデスケン)ナー。ホンデモ(マー)シヤ  
 いやいや。そんなとは ないですけどねえ。でも まあ ほう  
 ナイトモタンデヒョ(カイツ。~~~~~) (フン。) シテクレマ  
 がないと思ったんでしょうか、ねえ。(きつと) (ふん。) (仕事を)してくれ  
 シタデ。(マー)コノ(チカクニモ)オルシ(ネー。イサチャンガ。  
 まいたから。まあ、この 近くにも いるし ねえ。いさちゃんかね。  
 チカクニ。  
 近くにね。

C フーン。  
 ぶん。

B ホデ(バン)バンバツカリ(ミマイニ)イキヨツタンヤ。オトーサ  
 それで 晩 晩ばかり 見舞に 行ったものでした。お父さん  
 ノ(ミマイワ。ホシテ。~~~~~) (ハー。) ヘー。バン。シモテ。ホシ  
 の 見舞は。そしてね。(まあ) はい。晩に。仕事を仕舞って。  
 テワ(カイツ)キテワ(イネコキシタリ)シテ(ネ。  
 そして 帰って 来ては 箱こぎをしたリ してね。

C フーン。ショーイッチャンノ(ヨメハンノ)ナマエ(ボク)ワス  
 ぶん。 昭一ちゃんの 嫁さんの 名前 ぼく 忘  
 レタケド(ドー)ユーンヤッタ(ナー。  
 れたけど どう いうんだったかねえ。

A ハルコ。  
 春子。

C アッ、ハルコハン。ドコイ(ツトメトツテヤ)ナ。イマ。  
 あっ。春子さん。どこへ 勤めておいでなの。今。

A アノー。オーツキジビカ(ナー。  
 あのう。大概耳鼻科 ねえ。

C ハーア。アノー ミヤシラヤ<sup>(11)</sup> ナイワ。オカノ。  
はあやう。あいう 宮代 じゃ ない な。 岡の。

A エー、マー オカッ チュンカー<sup>(B)</sup> イノクラ。イノクラー……  
ええ。まあ。「岡」と言うのか 井倉……

B ホク~~ク~~ン<sup>(12)</sup> アノ ニットーノ<sup>(12)</sup> マエデス<sup>V</sup> カ。  
保険 あの 日東の 前 ですか。

C ウン。ニットーノ<sup>(12)</sup> マエ。 (A ハー。) イノクラ ユー<sup>(12)</sup> シン。アソ  
うん。 日東の 前。 (はあ。) 井倉 と言うの。 あや  
コ。 (B ハー。) オカヤ<sup>(12)</sup> テイ<sup>(12)</sup> シン。  
こは。 はい。 「岡」では ないの？

B オカデス<sup>(12)</sup> カ。イノクラヤ。  
「岡」ですか。 井倉 だわ。

A アノー<sup>(12)</sup> オカ<sup>(12)</sup> オカト<sup>(12)</sup> イノクラノ<sup>(12)</sup> サカイグライヤ<sup>(12)</sup> テー。  
あいう 岡と 井倉の 境 ぐらいだ ねえ。

C サカイヤ。オーツキジビカ<sup>(12)</sup> イットッテ<sup>(12)</sup> シン。ア。ソラ<sup>(12)</sup> エー<sup>(12)</sup> ワ  
(そう) 境だ。 大概耳鼻科へ 行っただいぞ。 あ。 そりゃ よいよ  
ナー。 へー エ。ホタ<sup>(12)</sup> イキカタ<sup>(12)</sup> ショーイッチャン<sup>(12)</sup> クルマデ<sup>(12)</sup>  
ねえ。 そしたら 行くの時は 昭一 ちゃんが 車で  
オクッテ。  
送って。

A ソーソー。  
そうそう。

C ホデ カ カエソモ<sup>(12)</sup> ショーイッチャンノ<sup>(12)</sup> クルマデ。  
それで 帰しも 昭一 ちゃんの 車で(というわけだね。)

B エー。カエッタリ。  
ええ。(車で) 帰ったリ。

A エー。カエッタリ、アノー ショーイチラガー アノー ツゴーニ  
ええ。(車で) 帰ったり、あのう 昭一らが、あの、都合に  
ヨッテワ ザンギョーシタリ、(らん。) チンカイ スルーツ  
よってば 残業したり、(ふん。) なんか すると  
キシヤデ カイツタリ。  
汽車で 帰ったり

C ア、キシヤデ カイツ  
あ、汽車で 帰。

A ホテ マター ショーイチラー ハヤイ トキニワ (らん。)   
そして また 昭一らが 早い 時には (ふん)   
アノ コーモ チョット ナニヤラ スルモンジャデ ナー。  
あの 子(嫁)も ちょっと あれんれ するものだから ねえ。  
(らん。) アノー ツゴーデー ~~ザン~~ ザンギョーニツチュー   
(ふん。) 都合で 残業 という  
コト ナイデド (ハハハ。) アトデ イノコリ セン ナ  
んと ないけど (ハハハ。) あとで 居残りを せしやな  
ンサカイ (らん。) ソノ トキワー アノー キシヤデ カ  
らないから (ふん。) その 時は あのう 汽車で  
イッテ ウメザコノ エキマデー (らん。) ジドーシャデ   
帰って 梅道の 駅まで (うん。) 自動車で  
ムカエニ クンノヤ ナ。  
迎えに 来るんだよね。

C アー、ソー カー。 (らん。) フーン。ソラ エー ナー。  
ああ、そうか。 うん。 ふん。 そりゃ いいねえ。  
シカシー。ヨイ <sup>(13)</sup> ネットコロモ タッタシ、モー ユーテン コト   
しかし。 いい 離れも 建ったし、もう、おっしゃると

チイワ。

ないわ。

A ソンナ<sup>△</sup>コト<sup>△</sup>ナイ。

そんな こと ないよ。

B アンマリ<sup>△</sup>セバイサカイデ<sup>△</sup>タテタンヤ<sup>△</sup>ナ。 (笑)

あんまり 狭いもんぢから 建てたんですよ。

C アレ<sup>△</sup>シカシ ソッパナ<sup>△</sup>モンヤ<sup>△</sup>ナー。

あれは、しかし、ソッパな ものだねえ。

A ガイソクワ。 (笑)

外側はね。

C イヤイヤ。ソンナ<sup>△</sup>コト<sup>△</sup>ナイケド。ホ——ン。ワカイ<sup>△</sup>オバーチャ

いやいや。 そんな こと、 ないけど。 ほうー。 若い おばあちゃ

ンヤケド<sup>△</sup>ホンナ<sup>△</sup>イッショ—ケンメ—<sup>△</sup>コモリシテ<sup>△</sup>マター

んだけど、 そんなら 一所懸命 子守して また

ホンマニ。 ) アノ<sup>△</sup>ニット—<sup>△</sup>ヤット<sup>△</sup>モロトクンナハレ<sup>△</sup>ヨ。(笑)

ほんとに。 ) あの 日当を たんと もらって下さいませよ。

B ミルクダイカセギニ<sup>△</sup>イットリマスシ。 (笑)

ミルク代かせぎに 行っていますから。(嫁はね。)

C アソコモ<sup>△</sup>ヨー<sup>△</sup>ハヤットルサカイ<sup>△</sup>イソガシーヤロ。 オーツギジ

あそんも よく はやってるから 忙しいだろう？ 大槻耳

ビカモ。

鼻料も。

B イソガシーラシーデ<sup>△</sup>ナーア。

忙しいらしいからねえ。

A ナカナカ イソガシーラシー<sup>△</sup>ナー。

なかなか 忙しいらしいなあ。

B カンシャクモチラシー ナー。 アノ ヒト。 アノ センセー。  
 癪 癪もちらしい ねえ。 あの 人、 あの 先生。

C ア。 ソー ナ。 ( <sup>B</sup> ウン。 ) ボク ア シラン ノエ。  
 あ、 そうか。 うん。 ぼくは 知らないんだよ。

B スグ オコッテ ラシー。  
 すぐ 怒りなするらしい。

C オコッテ ン。  
 怒んなさるの。

B ムツカシ ラシー <sup>↑</sup>。  
 むつかしいらしいよ。

A マー。 ショクギョー テキデ ソー ナルン ジャ イト。  
 まあ 職業的で そう なるんだよね。

C ソヤ ナー。  
 そうだねえ。

A ジブン ワ ケンコー ナシ。  
 自分は 健康だから。

C ソヤ ナー。 ビョーニン バック リヤ カラ <sup>↑</sup>。  
 そうだねえ。 病人ばかりだから。

A クル モンカ ビョーニン ヤデ。  
 来る 者が 病人だから。

C ヘー。 ソラ ソーヤ。  
 はあ。 そりゃ そうだ。

## 注記

- (1) Bの発言、重複し、かつ遠くて聞きとれない。
- (2) これも遠い声。
- (3) 「マサスケ」のつもりという。
- (4) 「ナハレ」と言っ たつもりだという。
- (5) 不明瞭。C氏の聞きとりによってこうしておく。
- (6) 「ナラン」は「ナン」に近く聞こえる。
- (7) [t<sup>s</sup>u:in]
- (8) この「ニ」助詞の使い方はしないと、C氏は言う。受身の言い方をしようとして「ニ」を使いながら、「ユーテンヨーニ」と敬意の表現をした一種の誤用か。
- (9) このところ、Bの発言が重複して聞きとれない。
- (10) この「ホシテ」(そして)は、ずっと前にあるべきことば。それがここに出ている。
- (11) 地名。「ミヤシロ」と言っ たつもりだという。
- (12) 工場名。
- (13) 「ネトコロ」は、いわゆる「離れ」の建物。寝室の意にも使う。

## 7. 結婚当時のこと

話（手）

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)          |
|------|-------|-----|---------------|
| A    | 渡辺 信一 | 男   | 明治43年生まれ      |
| B    | 渡辺 久子 | 女   | 大正7年生まれ       |
| C    | 渋谷 計二 | 男   | 昭和2年生まれ〈司会役〉  |
| D    | 佐藤 虎男 | 男   | 大正15年生まれ〈同席者〉 |

C シンチャンが センソーニ イットッテン アイアー、センソー  
 信一さんが 戦争に 行っちゃった 間、 ああ、 戦争  
 ニ イットッテン アイダワ ヒサカハンワ マダ キトッテ ナ  
 に 行っちゃった 間は 久子さんは まだ(当家の) 采女で  
 インヤ。ホニ。

は なかったんだね。そうそう。

A ソーナンヤデ。  
 そうなんだよ。

C キトッテン… ヒトリヤサカイ。  
 采女では(ない) 一人だからね。

A ウン。ワシャナー。(C ウン、ウン。) カイッテナー。アノー  
 うん。わいほね。 うん、うん。 帰って ねえ。 あのー  
 ……。

B ジューロクネンノ サンガツニ キタンデス。(笑)  
 十六年の 三月に 来たんです。





A ケッキョク オソカッタンヤ<sup>ア</sup>テ。

結局 遅かったんだよね。

C オソカッタンヤ<sup>ア</sup>テ。 ( <sup>B</sup>ハ<sup>ア</sup>。 ) ハ<sup>ア</sup>。テ。

遅かったんだ ねえ。 はあ。 はあ。ねえ。

A モー ニジューハチデ<sup>ニ</sup> ショーシュー<sup>ニ</sup> ナッタデ<sup>ア</sup>テ<sup>ア</sup>。 ( <sup>C</sup>フ<sup>ン</sup> )  
もう ニ十八歳で 召集に なったから ねえ。 ( <sup>C</sup>フ<sup>ン</sup> )

ン。 ) モラワン<sup>ア</sup>ナン<sup>ア</sup>トキニ。 ( <sup>C</sup>フ<sup>ン</sup>。 ) ケドー<sup>ア</sup>テ<sup>ア</sup>。  
ん。 嫁をもらわなきゃならない 時に。 ( <sup>C</sup>フ<sup>ン</sup>。 ) ケド ねえ。

ソエカラ<sup>ア</sup> サンネン<sup>ア</sup> トラレテ<sup>ア</sup> カエッテ<sup>ア</sup> キタラ<sup>ア</sup> モー<sup>ア</sup> カエッ<sup>ア</sup>  
それから 三年 (軍隊に) とられて 帰って 来たから もう 帰っ

テ<sup>ア</sup> キタ<sup>ア</sup> トシニ<sup>ア</sup> モロテ<sup>ア</sup> ( <sup>C</sup>フ<sup>ン</sup>。 ) ヒトツキホドノ<sup>ア</sup> ア<sup>ア</sup>  
って 来た 年に 貰って ( <sup>C</sup>フ<sup>ン</sup>。 ) 一月ほどの

イダニ。

間に。

C フン。 ア<sup>ア</sup> ソンニ<sup>ア</sup> ハヤカッタ<sup>ア</sup> カイ<sup>ア</sup>テ<sup>ア</sup>。

あ、そんなに 早かった かねえ。

A ハヤカッタ<sup>ア</sup>デ。 ( <sup>C</sup>ア<sup>ア</sup> ソ<sup>ア</sup> カ。 ) ヘン。 ( <sup>C</sup>フ<sup>ン</sup>。 )  
早かったよ。 あ、そうか。 ええ。

チョード<sup>ア</sup> トヨオカノ<sup>ア</sup> オッサンガ<sup>ア</sup> ( <sup>C</sup>ウ<sup>ン</sup>。 ) アノー<sup>ア</sup> ナ<sup>ア</sup>  
ちょうど 豊岡の 叔父さんが。 ( <sup>C</sup>ウ<sup>ン</sup>。 ) ああ。 な

ニヤラデ<sup>ニ</sup> アノー<sup>ニ</sup> コノ<sup>ニ</sup> ムスメハンジャガ<sup>ア</sup> ドーヤロ。 キョー<sup>ア</sup>  
んですよ。 (ほら、ああ、この 娘さんだわ) どうだい。 今日

ミニ<sup>ア</sup> イケ<sup>ア</sup> ヤッ<sup>ア</sup> チュヨナ<sup>ア</sup> コトデ。 (笑)

見に行けよ、というふうな ことで。

C ア<sup>ア</sup> トヨオカノ<sup>ア</sup> オ<sup>ニ</sup> オ<sup>ニ</sup> オッサンガ<sup>ア</sup> ソ<sup>ア</sup> ユ<sup>ア</sup> テ<sup>ア</sup> イヤハッタ<sup>ア</sup>  
あ、豊岡の 叔父さんが そう 言って 言われた

ン。(A ウン。) ア、ソーカ。  
 のか。 うん。 あ、そうか。

A ホイデ (ウン。) アノー セワー ダレヤラ オマイ、チョ  
 それで うん。 あのう 世話ほ 子にバカ あんた、ちょ  
 ード コナイダー ノー ナッチャッタ アシダカツミサン (ウン)  
 うど ンないだジ 七くなられた 芦田 勝美さん  
 フン。) ア、アノ イエー イカシテ モーテ ナー。  
 ぶん。 あの 家へ 行かせて もらって ねえ。

C ア、ソーカ。 ミヤイ ユー コトデ。  
 あ、そうか。 見合という ンとでね。

A ウン。 ケツ キョク ミヤイヤッタンヤロ。(ウン) (笑)  
 うん。 結局 見合だったんだろ。 ぶん。

キョードー アノー ワシノ ブンタイニ オッテ クレタンカ  
 ちょうど あのう わしの 分隊に 居て くれた人が

(ウン) コノー ヒサコノー キンジョニ ナー。(ウン)  
 ぶん。 このー 久子の 逆所に ねえ。 ぶん。

オッテ ナー。 アシダトシオハン ユー コーカ。(ウン)  
 居て ねえ。 芦田としおさんという 子がね。 ぶん。

ホイデ ソノ コワー ノトコヘ アノ マンダ ワシカ カイツ  
 それで その 子は... のところへ あの まだ わしが 帰って

テ アノ カイツテクル ソノ アトニ ホジューデ キタモンジャ  
 あの... 帰ってくる その 後に 補充で 来たもんだ

デー (ウン) オッテ (ウン) ンデ ソノ イエ  
 から ぶん。 居て ぶん。 それで その 家へ

コトズケ ユイガテラ マー ミセテ モライニ イッタ ワケナ  
 ンとづけを 言うついでに まあ 見せて もらいに 行った わけな

ンヤ<sup>ハ</sup>デー。

んだねえ。

C アー。ソー<sup>ハ</sup>カ。 ( <sup>A</sup>エー。 ) ハアン。  
ああ。 そうか。 ( ええ。 ) はいはい。

A ホイタラ<sup>ハ</sup>ドエライ<sup>ハ</sup>ヨイ<sup>ハ</sup>ムスメジャ、<sup>ハ</sup>キニイッ<sup>ハ</sup>タ<sup>ハ</sup>カッ ユー<sup>xxxx</sup>  
そしたら「ずいぶん よい 娘だ。 気に入ったか」と  
ユー<sup>ハ</sup>コッテ。 ( <sup>ハ</sup>フン。 ) アノー アシダカツミサンヤラ  
いう ことでね。 ( ふん。 ) あいう。 芦田 勝美 さんや  
( <sup>ハ</sup>フン。 ) トヨオカノ<sup>ハ</sup>オッサンガ<sup>ハ</sup>マー<sup>ハ</sup>アノ<sup>ハ</sup>コレカラ<sup>ハ</sup>  
( ふん。 ) 豊 岡 の 叔父さんが 「これから  
ワシ<sup>ハ</sup>ンナー<sup>ハ</sup>イッテ<sup>ハ</sup>クルサカイ<sup>ハ</sup>ユテ。ミヤイニ<sup>ハ</sup>インダ<sup>ハ</sup>ジ  
わい、それなら 行って くるから」と言って、見合いに 行った すぐ  
キアトデ ( <sup>ハ</sup>フン。 ) アノー ソノ<sup>ハ</sup>ヒーニ<sup>ハ</sup>モー<sup>ハ</sup>ハナシガ<sup>ハ</sup>  
あとで ( ふん。 ) あいう。 その 日に もう 話が  
<sup>ハ</sup>キマッテ<sup>ハ</sup>デーア。 ( <sup>ハ</sup>フン。 ) サー、アレガ<sup>ハ</sup>ドーヤッタ  
決まって ねえ。 ( ふん。 ) さい。 あれが どうだったか  
<sup>ハ</sup>シランジャカ<sup>ハ</sup>ホンデモ<sup>ハ</sup>ニガツノー<sup>ハ</sup>オワリー<sup>ハ</sup>ゴロヤッタ<sup>ハ</sup>コ。  
知らないんだが、それでも 二月の 終りごろだった かい。  
イッタンカ。

行ったのが。

B イヤーネ。ソレ<sup>ハ</sup>ヨー<sup>ハ</sup>オボエトレヘン<sup>ハ</sup>ノ。ソナ<sup>ハ</sup>コッター。  
いやいや。それは よく おぼえていないの。 そんなことは。

C オボエトラナ<sup>ハ</sup>イカン<sup>ハ</sup>ワナ<sup>ハ</sup>ソナ<sup>ハ</sup>コトワ。(笑)  
おぼえていなくちゃ だめだね。 そんなことは。

A サンカツノー<sup>ハ</sup>ジュ<sup>V</sup>ーロクニ<sup>V</sup>デニー アノー キテ<sup>ハ</sup>クレタンヤー。  
三月の 十六日に あいう 来てくれたんだね。

B ジューロクニケニ<sup>セ</sup>ワン<sup>ア</sup>ッタンヤ<sup>デ</sup>。ワタシ。  
十六日に 世話に なったんですよ。わたし。

C ハーハー。ハーア。  
はあはあ。そうですか。

B イマ<sup>ソ</sup>ナ<sup>コ</sup>ト<sup>スル</sup>ヒト<sup>ナ</sup>イ<sup>ワ</sup>ナー。  
今は そんな こと する 人は ないわねえ。

C フンナ<sup>コ</sup>ト<sup>ナ</sup>イ<sup>ワ</sup>。  
そんな こと ないよ。

B ヒトツキヤ<sup>ソ</sup>コラデ<sup>イ</sup>ッテ<sup>シ</sup>ト<sup>ア</sup>レヘン。(笑)  
一月あまりで 嫁にいくような人って ありゃしないわ。

C ソンナ<sup>コ</sup>ト<sup>ナ</sup>イト<sup>オ</sup>モウケド。  
そんな こと ないと 思うけど。

B イマダー<sup>イ</sup>ケネンホド<sup>コ</sup>ーサイセンナンナ。  
いまでは 一年ほど 交際しなければなりませんね。

A コーサイモ<sup>ナ</sup>ニモ<sup>セ</sup>ズヤ。ホンデ。  
交際も 句も せずだ。そんなわけだ。

C シナ<sup>ダ</sup>イタイ<sup>ホ</sup>ンナン<sup>コ</sup>ーサイラ<sup>セ</sup>ヘン<sup>ノ</sup>ニ。ムカシ  
でも、だいたいにも 交際なんかは しないよ。昔な  
ラー。  
んかほ。

A ウン。ムカシ<sup>ワ</sup>。  
うん。昔ほね。

B ムカシ<sup>ワ</sup>。  
昔ほね。

C ウン。ダイタイ<sup>ミ</sup>ヤイヤシー。  
うん。だいたい 見合いたし。

A ムカシワ ソヤッタンヤ。エン。マ<sup>ア</sup> オヤカ キメタラ (ウ  
昔は そうだったんだ。ええ。まあ 親が 決めたら う  
ン。) ナニヤラデ ナーア。 (ウ<sup>ン</sup>。) ホンデ ムコハンノ  
ん。 もうなんざから ねえ。 うん。 それで 婚さんの  
カオモ ミンカチ グライヤッタンヤ。  
顔も 見ないまぐらいたったんだろう。

C アー ソー カ。  
ああ。 そう か。

A ラン。 ドエライ ミヤイモ セズ。マ<sup>ア</sup> オヤカ イケッ チュ<sup>ウ</sup>ヤツ  
ぶん。 ちゃんとした 見合いも セズ。まあ 親が 行けと 言われ  
タラ ヘ<sup>ッ</sup> チュ<sup>ウ</sup>テ イクグライデ (ウ<sup>ン</sup>。) マ<sup>ア</sup> ワシ  
たら はいっと言って 行くぐらいで うん。 まあ わ  
コソ アノ バンケ ミヘテ モータケド ナー。(笑)  
ンそれは あいう 晩 見せて もらったけど ね。

C コレワ ヨイ ムスメヤ ムスメハンヤト オモチャッタヤ。  
(8) これは よい 娘 だ。 娘さんだと 思われたでは。

A イヤ。 ソレ マエニ ユーヨーニ ナー。 ナガイコト シナニ  
いや。 それ 前に 言うように ねえ。 長い間 支那に  
オッテ アノ シナワ ソレコソ クロイ アノ シナフク  
居て あいう。 支那は それこそ 黒い。 あいう 支那服  
ヤデ ナ<sup>ニ</sup> アレ<sup>ニ</sup>。 (フン<sup>フン</sup>フン。) マ<sup>ア</sup> ドエライ ア  
たから ねえ。 あれは。 ぶんぶんぶん。 まあ すいぶん あ  
ノー ヨイ イエノー ヒトラ<sup>ニ</sup>ワー マ<sup>ア</sup> ハデナ シナフク ギ  
のう 良い 家の 人たちは まあ 派手な 支那服を着  
タリナンカイ スルケ<sup>ニ</sup>ド。 (フン<sup>ニ</sup>。) ケ<sup>ニ</sup>ド アノ コッ  
たりなんか するけど。 ぶん。 けれど あいう ニッチ

チーノ マー フツイーカヤッタラー クロイ コー ウワギ キ  
 の まあ、普通以下だったら 黒い こう 上着を着  
 テ ズボン ハイテンヤ 丁。ミ丁。 (ハ。フン。) ホイテ  
 イ ズボン はいてるんだね。 みず。 はあ。 そう。 そして  
 テンソク ユーテ コー アシオ ガーット コーユー フニ  
 まん足と いって こう 足を ガーッと こういう ふうに  
 モー クツー ハカシター ウマレタ ジブンカラ (ウン。)   
 もう 靴をはかせて、 生まれた 時から うん。  
 チーサイ チーサイ アシ シトンカ ベッピンラシカッタ。  
 小さい 小さい 足を してるのが 別嬪うしかったよ。

C アシカ チーサイノカ エーノカ。  
 足が 小さいのが よいのか。

A チーサインカ ヨインヤッ テ。  
 小さいのが よいんだって。

C ハハー。フーン。  
 ははあ。 ふん。

A ホテ アルクンデモ アルキニクソーニ シテ チー。 (フン。)   
 そして 歩くのでも 歩きにくそうに して ねえ。 (ふん。)

チョコチョコチョココ シテ (フン。) チョード コド  
 ちょん ちょん ちょん ちょん して (ふん。) ちょうど ンど

モノ アルクヨーナ カッコヤッタ エー。 (ハ。フン。) ソンナ  
 もの 歩くような かっくうだったよ。 はあ。 そんな

ソ ミトウサカイ ナイチー カイツテ キタラー アノー モン  
 のを 見てるから 内地へ 帰って 来たら あのう モン

ペースガタデ チー。 (フン。) イクー トキニワ アノー  
 ペ姿で ねえ。 (ふん。) 行く 時には あのう

フツ—ノ— アノ コクボーフジンカイトカ<sup>（</sup>ナントカ<sup>（</sup>ユーテ<sup>（</sup>  
 普通の 国防婦人会 とか なんとか 言って  
 カイタ<sup>（</sup>ダスキニ<sup>（</sup>シテ<sup>（</sup> <sup>（</sup>ラン<sup>）</sup> エプロン<sup>（</sup>カケテ<sup>（</sup> <sup>（</sup>  
 書いた 襟に して <sup>（</sup>ふん<sup>）</sup> エプロンを かけて <sup>（</sup>  
 フン<sup>）</sup> ホイテ<sup>（</sup>ミオクリシテ<sup>（</sup>クレタンヤ<sup>（</sup>デ<sup>（</sup>カエッテ<sup>（</sup>キ  
 ふん<sup>）</sup> そして 見送りして くれたんだよ。 帰って 来  
 タラ<sup>（</sup>モー モンパー<sup>（</sup>ハイテ<sup>（</sup>ナー。 <sup>（</sup>笑<sup>）</sup> ソレコソ<sup>（</sup>モー  
 たら もう モンパーを ばいて ねえ。 それんや もう  
 イサマシー<sup>（</sup>カッコーヤ<sup>（</sup>ナ。 <sup>（</sup>アー<sup>（</sup>笑<sup>）</sup> モー<sup>（</sup>ミル<sup>（</sup>ヒト  
 勇ましい かっとうだよ。 ああ。 <sup>（</sup>もう 見る 人  
 カ<sup>（</sup>ベッピンサンニ<sup>（</sup>ミエテ<sup>（</sup>ヒロシマエ<sup>（</sup>アカッタ<sup>（</sup>オリヤ<sup>（</sup>笑<sup>）</sup>  
 が<sup>（</sup>みな<sup>）</sup> 別嬪さんに 見えて。 広島へ 上陸した 時だ。

C ミナ<sup>（</sup>ベッピンサンニ<sup>（</sup>ミエル<sup>（</sup>ンカ。 <sup>（</sup>笑<sup>）</sup>  
 みな 別嬪さんに 見える のか。

B カイカブットッテヤ。 <sup>（</sup>アー<sup>（</sup>ナルホド<sup>）</sup>。  
 かいがぶっておいでなんだわ。 ああ。 なるほど。

A マー アノー カイカブッタカ<sup>（</sup>ナンヤ<sup>（</sup>シヤンケード ナニヤ<sup>（</sup>  
 まあ あのを かいがぶったか どうか 知らないけれど なんだ  
 ナー。  
 ね。

C カイカブリヤ<sup>（</sup>ナイ。 アノー ヨイ-----  
 かいがぶりじゃ ない。 あのを よい-----

A ウン。 マー アノ ワシト<sup>（</sup>シテワ<sup>（</sup>スギタ アノー ナンヤ<sup>（</sup>ラヤ<sup>（</sup>。  
 うん。 まあ あの わしと しては 過分の あのを なんだよ。

C ヨイ<sup>（</sup>ゴフーフヤ。 ウン。  
 よい ジ夫婦だ。 うん。

A ウン。ト<sup>(10)</sup> オモトンヤケド ナ ア。

うん。そう 思っているのだけれど、ねえ。

C ウン。ソノ トーリヤ。

うん。その とおりだよ。

A ケド マー オタカイニ ジョーブデ ナー。 ( ウン。 ) ナニ  
けど まあ おたがいに 丈夫で ねえ。 ( うん。 ) あれ

ヤラ スルンカ イチバンヤサカエデ。

これ するのが いちばんよいから。

C ソーヤ。 ( A フン。 ) V (11) タイヘン ヨイ アノ オクサン ユーテ  
そうだよ。 ( ふん。 ) たいへん よい あの 奥さんだと

ユートッテヤケド ( B アラー。 ) オ オクサンノ ホーワ ド  
言っておられるけど ( あらあ。 ) 奥さんの ほうは い

ナイデス。ナンカ ヒトコト ユーテ モラワント ホイデモ  
かがずす? なんか 一言 言って もらわないと。だって

( B ホントヤ ネーエ。 ) バガ モテンノヤケド。 ( 笑 )  
( ほんとうだねえ。 ) 場が もてないのだけれど。

B ワタシモ ソレコソ ( C ハー。 ) ナンニモ ワタシワー ワカ  
わたしも それんや ( はあ。 ) なんにも わたしは

ワカイ トキヤシ ドンナ ヒトノ トコイ イコトモ オモエ  
若い 時だし どんな 人の 所へ 行こうとも思いは

ヘンヤケド ( C フン。 ) ワタシモ チチニ エランデ モロテ  
しないんだけど ( ふん。 ) わたしも 父に 選んで もらって

ネーエ。 ( C ハーア。 ) コノ ヒトヤッタラー。 オトーサンワ  
ねえ。 ( はい。 ) この 人だったら。 お父さんは

ネーエ。 ( C フン。 ) アノ トニカク アノ アチコチニ ユー  
ねえ。 ( ふん。 ) あの とにかく あの あちこちに 言って



テモロテ。 (フン。) キキアワセニ イッタリ ミーニ  
もらってね。 (ふん。) 聞きあわせに 行ったり 見に

イッタリ ネー。チチガ。 (フン。) ワタシノ チチガ。 (フン)  
行ったり ねえ。父がね。 (ふん。) わたしの 父が。

フン。) ドコヤカイ ミニ イッテ キタケド ドコイ ミーニ  
ふん。) あちこち 見に 行って 来たけど どこへ 見に

イッテ キテモ、サー ユーテワ ネッカラ ヨイ ヘンジオ  
行って来ても「さあ(どうか?)」と言っては いっこうに よい 返事を

シテ シチャ ナカッタ オトーサンガ ネーエ。 (フン。  
なまなまかった お父さんが ねえ。 (ふん。)

ドコヤラ ミーテ キテ ホイテ アー アレヤッタラー タマカ  
どこだか 見て 来て そして「ああ あれだったら まいめで安

ナ モンジャ チュー コトオ (フン。) ユーテ ハジメテ  
なまものぢや」といふ ことを (ふん。) 言って はじめて

アノ ユーチャッタ チューテ ハハガ ユーンデス ワナ。 (フン)  
言われた と言って 母が 言うんですよ。

ホー。) ヤッパー ソコガ エンガ アッタナカ シランガ  
ほう。) やっぱり そんが 縁が あったのか しらないけど

ネーエ。 (フンフン。) ホント ユーテ チチニ エランデ  
ねえ。 (ふん、ふん。) ほんと 言って 父に 選んで

モロテ ソレコソ ホンニンシュギデ。 (フンフン。) ケツキョク  
もらって それこそ 本人主義でね。 (ふん。)

キサシテ モロタンヤ。 (ナルホド。) エー。 ホントニ。  
(当家へ) 来させてもらったんですよ。 なるほど。 ええ。 ほんとに。

C マー ヨイ-----  
まあ よい-----

- B ソレガ イチバンデスケン ネ。 マタ。  
 それが いちばん(大切)ですぞね。また。
- C ソーソーソーソー。 (<sup>B</sup> ラン。) ヨイ ダンセー ツカンデデシタ  
 そう そう そう そう。 よい 男性を つかまえなすった  
 デ。  
 ですから。
- B ヘー。 オカゲデ ホ<sub>xx</sub> マー ホンデモ ホンマニ ホンマノ コ  
 はい。 おかげで まあ でも ほんとに ほんとの  
トー アノー ネーエ。 アノー アレデス。 タマ  
 こと あのう ねえ。 あのう なんですよ。 誠  
カデ ネーエ。 (<sup>C</sup> フン。) ワルイ コト シタ コトモ ナイ  
 笑で ねえ。 うん。 悪い こと した ことも ない  
シ マジメデ。  
 し、 まじめで。
- C ボクト オンナジ コトヤ。 (笑)  
 ぼくと 同じ ことだ。
- B オコッタ コト ナイ。 ホンデ  
 怒った ことが ない。
- C ワルイ コトモ セント マジメデ ホンマニ。  
 悪い ことも せずに まじめで。 ほんとに。
- B ソー。 ホンマノ コト。 (<sup>C</sup> ウン。 ウン。) ネー。 ジョーズヤ  
 そう。 ほんとの こと。 うん。 うん。 ねえ。 お上手(お道従) (バ  
ナシニ ネー。 ソレヤッタラコサレデスー。<sup>(13)</sup>  
 ないに ねえ。 まじめであつたればンぞですわ。
- C ダイタイ マー コノ ヘンノ ケートー チューノワ ソーユー  
 だいたい まあ この へんの 系統(の人々)というのは そういう

コトナンヤ。(笑) フン。  
ことなんだ。 うん。

B ジョーブデ。(<sup>c</sup>フン。) オコル チュー コト ナシニ ホン  
丈夫では。(ふん。) 怒る という こと なしに、ほん  
マニ オコル チュー コト ナカッタデス。  
とに 怒る という ことが なかったんです。

C ナルホド。  
なるほど。

B アタシガ オコトルグライデ。ホンマニ。(笑) マー アノ  
わたしは、怒っているぐらいで。ほんとに。 まあ、あの  
チャワント チャワントヤッタラ カッチンコスルンヤケン ネー  
茶碗と 茶碗とだったら かっちゃんするんだけどねえ。  
エ。(<sup>c</sup>ハー。) ワタシガ チャワンナラ マー ケッキョク  
はあ。 わたしが 茶碗なら まあ 結局  
シュジンワー ワタッ チューーナ モノデ ウケトッテ クレタ  
主人は 綿 というような もので 受けとって くれた  
ンデヒョ カイナ。  
んでしょう かね。

C ハー。ナルホド。  
はあ。なるほど。

B ホンデ マー オカゲデ ケンカ ヒトツ セズニ (<sup>c</sup>フン。  
それで まあ おかげで 喧嘩 ひつつ せずに (ふん。  
イママデ ヤッテ キテ モー イマ イネ チューテモ ヨー  
今まで やって 来て、もう 今 去れ といっても よう  
イナン (笑) インデ コイ ユーテ ユイモ センヨッケド<sup>(15)</sup> ネ。  
去らない。 出て行っちゃえなどと 言いもしないだろうけど。

(笑) ユータラ ソンヤデ。(笑)

言ったら 損だから。

C ユータ ホーガ ソンヤ ユーテ。(笑)

言った ほうが 損だ と言ってね。

B ユータ ホーガ ソンヤデ ユートテ ナイラシーデスケド ナー。

言った ほうが 損だから 言われないうい ですねえ。

A イマ イヌンヤッタラ ヤシナイリョー オイトイテ モラワン

今 出て行くんだったら 養い料を 置いていって もらわにや  
ナラン。(笑)

ならん。

B ソンナ コトデスネヤケド イマ ソー ソーバツカリヤ ナイ。

そんな ことですけど 今は そうばかりじゃ ない。

イマ イネ ユータラ ナンカー モロテ イナン ナン モン

今 出て行くと 言ったら なにか もらって 行かぬば ならないものが  
ヤット アルケド ホンデワ モー イニタ ナイシ ネーエ。(笑)  
たくさん あるけど それでは もう 出て行きたくないし ねえ。

A ヤシナイソローノガ タコ ツクカモ シレン。(笑)

養い料の ほうが 高く つくかも しれない。

B ソンナ コトデ マー オイトエ モーテ イマニ ナッタンデス。

そんな ことで まあ (今の家に) 置いてもらって 今に なったんですよ。

C ナルホド。モー ユーテン コト ナイ ワ。ネーエ。モー マゴ

なるほど。もう 言うこと ないわ。 ねえ。 もう

オマゴサンモ デキタシ。

お孫さんも できたし。

B へー。ソー。オカゲデ。

はい。そうです。おかげでね。

## 注記

- (1) 「話題にならないう」の意。
- (2) いちじるしく強く発音。
- (3) 「の」と言うべきを「は」と言い誤ったので、その助詞のところを言いかえた。
- (4) 問いの文末詞。男がよく言う。目下の者に対することば。女でも、姑が嫁に対して言うことがある。こどももよく使う。
- (5) 気持ちには「しやうがない」の意味。
- (6) 「ミンカチ」は「ともすれば見ることもしない」状態をいう。
- (7) 「チューヤッタラ」の「ヤッ」が未詳。
- (8) 「コレワ」の部分、強勢のある発音。
- (9) この「ナンヤラ」は「嫁」の意。
- (10) この「ト」は、直前のC氏のことばを受けている。
- (11) 急にBさんに向けて言う。
- (12) 「タマカチ」は、誠実で身持ちがよく安心できる人の性向をいう。
- (13) 「コサレ」は、「こそあれ」係結法の名残りの形。
- (14) 「イヌ」は、ここでは離婚して実家にもどる意。
- (15) 「センヤロケド」に聞こえる、とC氏は言う。

## 8. 祭りの日のこと

話（手）

|   | (略号) | (代名)  | (性) | (生年)         |
|---|------|-------|-----|--------------|
| A |      | 渡辺 信一 | 男   | 明治43年生まれ     |
| B |      | 渡辺 文子 | 女   | 大正7年生まれ      |
| C |      | 渋谷 計二 | 男   | 昭和2年生まれ〈司会役〉 |

A ホーヤ。センソーチューワー アー ドコソコノ オミヤサンエ  
 そうす。戦争中は ドンヤンの お宮さんへ  
 ゴシャマイソタラ ナンタラ ユーテ ナンヤラ シヨッテ マー  
 御社詣りとか なんとか 言って お詣りなんかをしたりして まあ  
 マツソワ トクニ ソー シテ アノー シュッセーカゾクノ  
 祭りは 特に そうして あいう 出征家族の  
 マー ブウンチョーキューオ イノルンニ ドコサントモー オミ  
 まあ 武運長久を 祈るために ドンのお家でも お宮  
 ヤサンエ マイッテ キレーニ シテ カミサンワ オガミヨッタ  
 さんへ 詣って きれいに して 神さんは おがんでいた  
 ケン ナーア。イマー ソノー ソーユー コトガ ノー ナッテ  
 けど ねえ。今は その そういう ことが なくなって。  
 シューセンゴッ ノー ナッタナリ。マー セングリ ジダイモ  
 終戦後。 なくなったし。 まあ どんどん 時代も  
 カワッテイクンニヤデ ソラ シヤナイ。ワヤ。ソレワ。  
 変わって行くんだから それは しょうがないよ。 それはね。

B ソーヤ ナー。

そうですねえ。

A エーン。マー ホンデモ ムカシノ オモカゲカ ナー ナッタ  
ええ。 まあ、それでも 昔の 面影が なく なった  
ナー。 マツリノ。 エー。 ソンダケ カミシンジンオ スル ヒトガ  
なあ。 祭りの。 ええ。 それだけ 神 信心を する 人が  
スクノ ナッタ ンカ。 マー ココロデ ソー オモトッテモ  
少なく なったのか(どうか)。 まあ、バデ そう 思っいてモ  
アヤラ シテー マ イエカラー ナンヤ シトッテンカモ シ  
なんか あれんれして ま 家から 拜んで おられるんかも (れ  
レンシ。

ないから。

B ンデー カミサン カミサンノ オマツリオ モー ヒトノ ツ  
それで 神さんの お祭りを もう 人間の 都  
ゴーノ ヨイ ヒーニ キマルヨーニ ナッタヤロ カイナー。  
合の よい 日に 決まるように なったんでしょう かね。

A ア。 ソーヤ。 ソラ ドコトモ ソー ナッテ。

あ。 そうだね。 それは どんもみち そう なる。

B カワッタ ナー。

変わったねえ。

A アー ホント ナー。 マー。

ああ、ほんとだね。 まあ。

B モー ニシヤターデモ トーカヤ ネー。

もう 西八田デモ 十日だねえ。

A ソヤ ナー。 (ソ-----) ダイタイ トーカニ ナットル ナー  
そうですねえ。 十日に なってる ねえ。

ア. ウーン。ココラデモ<sup>△</sup>コンダ アノー トーカン<sup>△</sup>ナッテ ソ  
 うん。 ニンラデモ ニンどほ あかう 十日に なって そ  
 レカ<sup>△</sup>タイイクノヒートモ<sup>△</sup>カネテ ナニヤ<sup>△</sup>スルナリ、オキヤク  
 れが 体育の日とも 兼ねて おこなわれるし、 お客  
 サンモ<sup>△</sup>キーヘンナリシテ ホンマニ<sup>△</sup>サミシー、マー<sup>△</sup>マエノ  
 さんも 来やしないして、 ほんとに すごい、 まあ 前日の  
 ヨミヤダケ オチョーチンオ ソナエニ、オヒカリッ<sup>△</sup>チュンカ ソ  
 宵宮だけ お提燈を 供えに、 おひかり というのか  
 ナエニ<sup>△</sup>イクヨーン<sup>△</sup>ナッテ<sup>△</sup>ナニヤ<sup>△</sup>ナー。  
 供えに 行くように なって なんだねえ。

C オカネオ ナンボクライ モロテ<sup>△</sup>ドユー モノオー ソノ<sup>△</sup>カ  
 お金を いくらぐらい もらって どういう 物を その 買っ  
 イヨッチャッタカ<sup>△</sup>キュー<sup>△</sup>コトオ<sup>△</sup>チョット<sup>△</sup>ハナシテ<sup>△</sup>モータ  
 ていたか という ことを ちょっと 話して もらった  
 ラ。フン。  
 ら。ふん。

A ソーヤ<sup>△</sup>ナー。ナー。  
 そうだねえ。 ねえ。

B コズカイワ<sup>△</sup>ソレコソ<sup>△</sup>ゴセン  
 小遣は それんや 五銭

A コズカイオ ヨケ<sup>△</sup>モロタンデー<sup>△</sup>ニセンカラ<sup>△</sup>ゴセンマデーヤ<sup>△</sup>  
 小遣を たくさん もらったので ニ銭から 五銭までじゃ  
 ( <sup>B</sup>ゴセン…… ) ナカッタ<sup>△</sup>カナ。  
 なかった かな。

B ウン。ゴセンホドヤ<sup>△</sup>ネー。  
 うん。 五銭ほどですね。



A ウー。 ( B ウー。 ) トモカク ワシラーカ。 コドモジブンニワ  
うん。 うん。 ともかく わしらが 子供時分には  
イッセン<sup>(1)</sup> ダスト アメダマカ。 イツツボ モロタ ナー。 ウー。  
一銭 だすと 飴玉が 五粒 もらった なあ。 うん。  
ソレモ ホンマノ アメデ コシラエタ テセーノ アメダマー  
それも ほんとうの 飴で ころえた 手製の 飴玉  
ヤ ナカッタ カナ。 ソエト アテモン チューンガ ヨーケ  
じゃ なかった かな。 それと あてもん というのが たくさん  
アッテ  
あって。

B アテモン チュータ ネー。 ( A エー。 ) サンカクノ ラクロニ  
あてもん といったわけえ。 うん。 三角の 袋に  
ハイッタ。 ( A エー。 ) アレガ ウレシカッタカ。 (笑)  
はいった あれね。 うん。 あれが うれしかったが。

A ショーガイタノ コンナ モンヤッタ デヨ。 コンナンニ イッセ  
生姜板の こんな ものだった よ。 なんなの に 一銭  
ンダスト。 クレテ。 ヒトツ ムクッテ ミルト。 アタリト カイ  
出すと。 くれて。 一つ めくって みると。 当りと 書い  
タリ イットート カイタリ フンナ モンガ ヨーケ アッタヤ  
タリ 一等と 書いたリ そんな ものが たくさん あったんじや  
ナイカ。  
なにか。

B ホレカラ オミセヤサンノ オミヤゲ カイニ イクンガ ウレシ  
それから お店屋さんの おみやげを 買いに 行くのが うれし  
カッタヤ。 ( A エー。 ) ホンマノ コト。  
かったんです。 うん。 ほんとの こと。

- A ソエト<sup>〱</sup>ニッキスイト。 (B ウン。) ビンニ<sup>〱</sup>ハイッテ。  
それと 肉桂水と。 びんに、はいって。
- B マー<sup>〱</sup>ソーユー<sup>〱</sup>トコワ<sup>〱</sup>ヒドー<sup>〱</sup>チカエヘン<sup>〱</sup>ナー。 (A ウーン。)  
まあ そういう 点は ひどく ちがいはしないうねえ。 うーん。  
オンナシヨーナ。  
おなじようだね。
- A ソラ<sup>〱</sup>ドッコトモ<sup>〱</sup>コドモジブンヤシ、オンナシ<sup>〱</sup>コトヤロ<sup>〱</sup>チ  
それは どんもみな 子供時分だい、 同じ ンとだろう  
ー。ミヤゲー<sup>〱</sup>チューンジャ<sup>〱</sup>カ オミセヤサン<sup>〱</sup>ユー<sup>〱</sup>テードデ<sup>〱</sup>  
なあ。 みやげ というんだろうか。 お店屋さんという 程度で  
カタカタグルマニ ノセテ キタリ、カタデ<sup>〱</sup>三ノテ<sup>〱</sup>キタリ シ  
がたがた車に 乗せて 来たリ、肩で 荷がッ 来たソ  
チャッタ<sup>〱</sup>ジブンヤサカイデ。  
た ころだから。
- 

# 注記

- (1) この格助詞「ガ」は、後の「モロタ」と照応しない不整表現。

## 9. 農家の主婦の苦しみ楽しみ

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)         |
|------|-------|-----|--------------|
| A    | 渡辺 信一 | 男   | 明治43年生まれ     |
| B    | 渡辺 久子 | 女   | 大正7年生まれ      |
| C    | 渋谷 計二 | 男   | 昭和2年生まれ〈司会役〉 |

A ソラ<sup>(1)</sup>ムコハンガ<sup>(1)</sup>ヨカッタデ<sup>(1)</sup>ジエー。(笑)  
そりゃ、むんどのが よかったからだよ。

B ソラ<sup>(1)</sup>ソーユータラ----(笑) ホヤケド。  
それは そう 言ったら----。 だけど。

A ケド<sup>(1)</sup>マー ( B ホンデモ---- ) アノー タカイ<sup>(1)</sup>タカイ<sup>(1)</sup>ユー  
けど まあ だけど ---- あの高 高いと 言う  
ケードー アノー ヤシロノ<sup>(2)</sup>ホーヤラー マタ<sup>(1)</sup>アノー<sup>(1)</sup>シモノ  
けれど あう ハ代の ほうやら また あう 下の  
ホーノ オガ<sup>(3)</sup>オガエノ<sup>(3)</sup>チカクノ<sup>(1)</sup>アノー オンナシ<sup>(1)</sup>オガエ  
ほうの 小貝の 近くの あう 同じ 小貝  
デモー コッチノ<sup>(4)</sup>クリムラノ<sup>(4)</sup>ホーノ<sup>(1)</sup>ドエライ<sup>(1)</sup>タカイ<sup>(1)</sup>  
でも うちの 栗村の ほうの ひどく 高い  
トコモ<sup>(1)</sup>アルシ<sup>(1)</sup>ノー。 オヨ<sup>(1)</sup>オヨギラーデモ<sup>(1)</sup>エライ<sup>(1)</sup>タカイシ  
所も あるしは。 於与岐なんかでも ずいぶん 高い。  
マー タカイト<sup>(1)</sup>イエバ<sup>(1)</sup>タカイモンノ<sup>(1)</sup>チート、ノー、タカイ  
まあ、高いと 言えば 高いものの、 すん、ねえ、高い

グライデ<sup>↑</sup>ソレワ<sup>↑</sup>。エー。マー<sup>↑</sup>ホンデ<sup>↑</sup>ビャクショー<sup>↑</sup>スルンニワ  
ぐらいでず。それはね。 まあ それで 百姓 するためにほ

アノー マエワ<sup>↑</sup>カタデ<sup>↑</sup>モチヨッタサカエデ<sup>↑</sup>イネモチスルン  
あのう 以前は 肩で 持っていたから、 稻持ちする  
デモ ナニ<sup>↑</sup>スルンデモ<sup>↑</sup>ヤッタナリ<sup>↑</sup>マー オマエガ<sup>↑</sup>キテカラ  
にも なに するにも だったし、 まあ、 おまえが 来てから

アノ<sup>↑</sup>リヤカー<sup>↑</sup>モ<sup>↑</sup>アリ、ナヤカイ<sup>↑</sup>スルデ<sup>↑</sup>ホラ<sup>↑</sup>リヤカー<sup>↑</sup>  
リヤカーも あり、 あれこれ するから、 そりゃ リヤカーを  
ヒッパッタリ<sup>↑</sup>ナンカエ<sup>↑</sup>スルンニ<sup>↑</sup>アノー<sup>↑</sup>オクノ<sup>↑</sup>ホーデ<sup>↑</sup>タ  
ひっぱったり あれこれ するために あのう 奥のほうで(土地が)  
カイデ<sup>↑</sup>マー タカツキデモ<sup>↑</sup>タカイ<sup>↑</sup>トコヤサカイデ<sup>↑</sup>エライ  
高いから まあ 高槻でも 高い 所だから つらいとは  
トワ<sup>↑</sup>オモッ<sup>↑</sup>タケ<sup>↑</sup>オモトルケード<sup>↑</sup>ヤッパ<sup>↑</sup>ソレニ<sup>↑</sup>ガ<sup>↑</sup>イ  
思っているけれど やっぱり それに(それ)が

チバン<sup>↑</sup>クルシカッタヤ<sup>↑</sup>ナイ<sup>↑</sup>コ<sup>↑</sup>。

いちばん 苦しかったんじゃないかい？

B ソーヤ<sup>↑</sup>フン<sup>↑</sup>。(<sup>A</sup>フン<sup>↑</sup>。) ホシテ<sup>↑</sup>アノー<sup>↑</sup>コノ<sup>↑</sup>ターニ<sup>↑</sup>ヒ  
そうです。ええ。(ふん。) そして あのう この 田に

ルガ<sup>↑</sup>ヤット<sup>↑</sup>オッタンガ<sup>↑</sup>イチバン<sup>↑</sup>コワカッタ<sup>↑</sup>ナントモ<sup>↑</sup>イ  
蛭が たくさん いたのが いちばん こわかった。なんとも い

エン<sup>↑</sup>ソレワ<sup>↑</sup>モー。コワカッタデス<sup>↑</sup>ターニ<sup>↑</sup>。オヒルマエン<sup>↑</sup>  
えない(くらいに) それは もう。こわかったです。田にね。お昼前に

ナッタラ<sup>↑</sup>ドーニモ<sup>↑</sup>コーニモ<sup>↑</sup>ヒルデ<sup>↑</sup>ヒルデ<sup>↑</sup>ブル<sup>↑</sup>テーニモ<sup>↑</sup>  
なったら どうにも こうにも 蛭で 蛭で 手にも

ヒツクシ<sup>↑</sup>ポスト<sup>↑</sup>オヌイチャンガ<sup>↑</sup>(<sup>16</sup>)オヌイチャンガ<sup>↑</sup>アノー  
くっつくし。そうすると おぬいちゃんが おぬいちゃんが あのう

イヤシンボスルノワ<sup>〳</sup> ヨケ<sup>〳</sup> テーニ<sup>〳</sup> ビッツクノヤ<sup>〳</sup> デッテ<sup>〳</sup> ユー  
「いやしん坊をする者はそれだけたくさん手にくっつくのだよ。」って 言って  
テ<sup>〳</sup> ユーチャッ タクライデ<sup>〳</sup> テーニ<sup>〳</sup> ヤット<sup>〳</sup> ビッツキヨッタデ。  
言われたくらいで 手に たくさん くっついてたものだから。

A ソー ジャ。マー アノ ジブンニワ  
そうだ。 まあ あのころには

B モー ホンマニ ナワデ<sup>〳</sup> サラエタイホド<sup>〳</sup> ビルガ<sup>〳</sup> オッタカ<sup>〳</sup> ワ  
もう ほんとに 縄で さらえたいほど 蛭が いたが  
スレヤセン-----  
忘れられない-----

A ナカグツモー ナカッタシ。  
長靴も なかったし。

B ワタシトコワ<sup>〳</sup> アッ タンデスケド。(A フン。) ホンデモ ハジ  
わたしの実家は(それが) あったんですけど。 それでも 初め

メー ニサンネソワ ハイタケド オヌイチャン<sup>〳</sup> カタズイチャテ  
二・三年は ばいたけど おぬいちゃんが 家に いかれて

カラ モー ワタシ シトリ シゴト センヨーン ナッ タラ<sup>(7)</sup>  
から もう わたし 一人 仕事を しなけりゃならなかったら

モー ヨクモ オソニ ヨーニ ソナ クワイカ ナンジャ  
もう 欲も とても そんな くらいとか なんとか

ユー コトワ モー ワスレテ ナカグツ<sup>〳</sup> ホカイテ ハイタ  
いう ことは もう 忘れて 長靴を 投げ捨てて (田に) 入った

ユーンワ ノコリマス。キョービ。(A フーン。) ソレワ ソレ  
というとは (記憶に) 残ります。今日でも。 ふん。 それは それ

ダケ<sup>〳</sup> ヨー オボエトリマス。(A フーン。) フン ソレダケ ワ  
だけは よく おぼえていますわ。 ふん。 わ

タシニモ<sup>(8)</sup> ヨクガ<sup>(8)</sup> デキタカ ドー ジャ シランケード。ソラ コ  
 たしモ 欲が 出てきたか どうか しらないけれどね。それは  
 ワイ トコヤッ タデス。  
 ンわい 祈だったですれ。

- A フン。マー アレ。アレモ イシバイ マイタリナンカイ スルトー  
 ぶん。まあ あれ。あれも 石灰を 撒いたりなんか すると  
 ヒルモ ナニヤラー スルジャロケード <sup>B</sup> マー エビガニカー  
 蛭も いなくなるんだろうけれど まあ えびがにが  
 ----- ) エビガニカー デカケテカラ スクノ ナッタ ノー。  
 えびがにが 出はじめってから すくなく なった。ねえ  
 オイ。ヒルワ。<sup>(9)</sup> ヘー。ソラ オマー、エビガニモー ナニヤロ ガ  
 おまえ。蛭は。うん。そりゃ おまえ。えびがにも なんだろうかね。  
 イヤ。アノー タタミ ニマイジキホドニ バケツニ ハンブンホ  
 あのう 畳 ニ枚敷くらいに バケツに 半分ほど  
 ド タマルホドー エビガニカー オツタンヤデ ノー。ソラー。  
 たまるほど えびがにが いたんだから ねえ。そりゃ。  
 ( <sup>B</sup> ウン。 ) ハジメワ ドエライ エビガニモー サガシター  
 うん。 はじめは とっても えびがにも 探して  
 チョーホーナ モンジャッタンヤケード ナニヤガナー。モー イ  
 重宝な ものだったんだけれど なんだねえ。もう 今  
 マデコソー ミネ<sup>(10)</sup> キッ タリナンカイ シテカラニ ダイブ メー  
 ZENZO 箱を 叩いたりなんか して それで だいたい 迷  
 ワクニ ナルケド アノ ジブンニヤー ドエライ メズラシカッ  
 感に なるけど あの ころには ひどく 珍らしいか  
 タンヤ ノー。アレ。  
 なんだねえ。あれ。

B メズラシカッター。 (<sup>A</sup> ウン。) ウチ オッタラ エーノニトオ  
珍しかった。 うん。 うちに いたら いいのにと

モ  
思っ

A エー。 ジャコカ ナカッタリ ナンカイ シタデ <sup>V</sup> アエ シタノー  
ええ。 (じゃんが なかったりなんか) したから、あれ 下の  
オジーカ タカイノー。 アノー ダシニ ショー ユーテ ムシッ  
おじさんの家 かねえ。 ああう だいに しょうと 言って むして  
トイテ ホシテ ナヤ シタン ジャカ アノ <sup>V</sup> ダシニ カワリ  
おいて きて なんか したんだが、 ああ。 だいに かわり  
ニ ツコタリ ニワトリノ エサニ トッテ キテ ヤッタリ シ  
に 使ったリ にわとりの 餌に 取って 来て やったリ し  
タコトカ アッタ ノー。 アレ。 (<sup>B</sup> ウン。) ウン <sup>V</sup> マー <sup>V</sup> ナ  
た ことが あった のね。 ああ。 うん。 うん。 まあ、 な  
ンヤロ カヤ。 アノ ヒルニ ワ オマエモ ヨワツタ ヤロ。 (<sup>B</sup> ウン)  
んだらうかね。 ああ 蛭には おまえも 困っただらう? (うん)  
<sup>V</sup> ケド マー センソー チューナリ アノー ドエライ  
けど まあ 戦争中だし ああう ずいぶん  
オマエト フタリデ アッチ イー コッチ イー シタ  
おまえと ニ人で あっちへ 行き こっちへ 行き した  
コトモ ナカッタ ノー。 ホンデモ。 (<sup>B</sup> 笑) アッチ エ イコ  
ンとも なかった ね。 だけど。 あちらへ 行ン  
ニモ キシャノ キップモ カエンナリ  
うにも 汽車の 切符も 買えないのだし

B ノ オジゾー サンイ ツレテ マイッテ モライ マシタ  
お地蔵さんへ 連れて 詣って もらいましたわね。

ナ。ホシテ<sup>（</sup>カエリニ<sup>）</sup> コームリ<sup>（</sup>マーッテ<sup>）</sup> A コームリ<sup>（</sup>マーッ<sup>）</sup>  
 そして 帰路に 河守に 廻って 河守へ 廻っ  
 テ。 } エーガイ<sup>（</sup>イッテ<sup>）</sup> カイッタ。  
 映画へ 行って 帰った。

A ソヤソヤ。

そうそう。

B ソエダケ<sup>（</sup>ノコリマス<sup>）</sup> ワナ。 (笑)

それだけ (記憶に) 残りますねよ。

A ウーン。 (笑) エーガ<sup>（</sup>ミテ<sup>）</sup> マタ<sup>（</sup>ノー<sup>（1）</sup>。ソレモ -----  
 うーン。 映画 見て。 またねえ。

B ソノトキ ソノ トシカラ<sup>（</sup>デケタンデス<sup>）</sup> デ<sup>（</sup>アレ<sup>）</sup> ホンマニ。  
 その 年から できたんですよ。 あれ。 ほんとに。

コドモカ。

子供か。

A カミシンジンヤッタ<sup>（</sup>ノー<sup>）</sup> アレモ。 B ウン。 アレワ<sup>（</sup>ホイデモ<sup>）</sup>  
 神信心だった ねえ。 あれモ。

----) ニネンメヤッタ<sup>（</sup>ゴ<sup>）</sup>。

二年目だったかい？

B ハジメデシタ<sup>（</sup>ノー<sup>（12）</sup>オ。ニネンメ。

初めてした ねえ。 二年目

A ヤッパリ<sup>（</sup>ホンデ<sup>）</sup> カミシンジンモ<sup>（</sup>セン<sup>）</sup> ナン<sup>（</sup>ワイヤ<sup>）</sup>。ホデ<sup>（</sup>  
 やっぱり それで 神信心も なくなっちゃいけない。 で

ドヤ<sup>（</sup>イノー<sup>）</sup> キョートノ アノー、ドーブ<sup>（</sup>ドーブツエンエ<sup>）</sup> ヤ  
 どうかねえ。 京都の あのう。 動物園へ

スコヤッタ<sup>（</sup>カイノー<sup>）</sup> ツレテ<sup>（</sup>イッタンワ<sup>）</sup>。

康子だった かねえ。 連れて 行ったのは。



## 注記

- (1) C氏は、「ジャー」だろうと言う。
- (2) 集落名。
- (3) 集落名。
- (4) 集落名。
- (5) 言い誤りを言いなおした。
- (6) 夫信一代の妹。
- (7) 「しなければならなくなつたら」の意であるはず。しかし「セン  
ヨーンナッタラ」と聞こえる。
- (8) 家に対する執着心を言うか。
- (9) Bの発言重複して聞こえず。
- (10) 「ミネ」の意味不詳。イネ(稲)といちおう解しておく。
- (11) 「またそのうち二人で旅行することもあるぞ」の意。
- (12) 主人に対して、妻が「ノー」を使っている。
- (13) 「マサルさん」が「マザルサン」に聞こえる。
- (14) 「ネヤ」という文末詞はないという。C氏は「ジャ」だと教示す  
る。

### III. 島根県<sup>に た</sup>仁多郡<sup>よこ た</sup>横田町大字<sup>おお ま き</sup>大馬木

収録・文字化担当者 広 戸 惇



## A 収録地点とその方言について

### 1. 収録地 島根県仁多郡横田町大字大馬木小字日向原403番地

### 2. 収録地 概観

横田町は島根県の東南端にある。収録地は旧馬木村であり、大馬木と小馬木に分かれていた。東隣りは旧八川村であり、今は共に横田町と合併した。従って収録地は一山越えれば広島県であり、旧八川村は東は鳥取県日野郡と境を接している。この地方は出雲の最も奥深い地であり、収録地の旧馬木村は鉄道が通っていない。今日でも横田駅からバスまたはタクシーを利用しなければならぬほどの僻地である。出雲の最も山間部といえよう。合併後の今日の横田町は総戸数2,314戸、人口9,958人、そのうち、大馬木、小馬木(旧馬木村)の総戸数471戸、総人口2,314人である。収入は水田と林業のみであり、水という産業はない。だがこの地方は、昔砂鉄を産したこともあり、この方面は、かなりの資料もありそうである。

### 3. 収録した方言の特色

#### ① 方言区画上の位置、隣接諸方言との関係

隣接した広島県、鳥取県の方言の影響はほとんど受けられていると思われる。なお出雲地方北部にくぐり、行キヨッタ、行キョッタなどの進行形が、北部よりも頻度が高い。これはあるいは広島県の影響ではなにかとも考えられる。もっとも出雲地方は、行キヨル 行キョル と現在形は用いられず、常に「タ」を伴った過去形のみに見られる。収録地も同様である。音便形の「貰ッタ、払ッタ」を仁多郡のみがモウータ、ハラータというが、これは隣接する鳥取県日野郡にも行われる。これは鳥取県の影響ではなくて、出雲地方の音韻の歴史からみれば当然のことであり、北部のように促音便を用いることが、却って新しいだろうし、この地方こそ、出雲の古い姿を保持しているといってもよい。

#### ② 音韻上の特色

出雲市の音韻について、かつて国広哲弥氏の調査が、島根県方言辞典にある。仁多郡も同じと思われるので、国広氏の表を示すことにする。

|                              |                       |                      |                         |                         |                         |                         |                         |                         |                                 |
|------------------------------|-----------------------|----------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|---------------------------------|
| ウ <sub>ɪ</sub><br>we<br>{we} | ワ<br>wa               |                      | オ<br>o<br>(o)           | ア<br>a                  | エ<br>e<br>(e)           | イ<br>i<br>(i)           | エ<br>jo                 | ヤ<br>ja                 | ウ <sub>ɪ</sub><br>wja<br>{wjae} |
|                              |                       | フ<br>hu<br>{fui}     | ホ<br>ho<br>{ho}         | ハ<br>ha<br>{ha}         | ヘ<br>he<br>{he}         | ヒ<br>hi<br>{hi}         | ホ<br>ho<br>{ho}         | ハ<br>ha<br>{ha}         |                                 |
|                              | ク <sub>ɪ</sub><br>kwa | ク <sub>ɪ</sub><br>ku | コ<br>ko                 | カ<br>ka                 | ケ<br>ke                 | キ<br>ki                 | ク <sub>ɪ</sub><br>kjo   | カ<br>ka                 | ク <sub>ɪ</sub><br>kja<br>{kjae} |
|                              |                       |                      | ロ<br>ro<br>{ro}         | ラ<br>ra                 | レ<br>re                 | リ<br>ri                 | ロ<br>ro                 | ラ<br>ra                 |                                 |
|                              |                       |                      | ツ <sub>ɪ</sub><br>(tsɔ) | ツ <sub>ɪ</sub><br>(tsa) | ツ <sub>ɪ</sub><br>(tsɛ) | ツ <sub>ɪ</sub><br>(tsi) | ツ <sub>ɪ</sub><br>(tsɔ) | ツ <sub>ɪ</sub><br>(tsa) |                                 |
|                              |                       |                      | ト<br>do                 | タ<br>da                 | テ<br>de                 |                         |                         |                         |                                 |
|                              |                       |                      | ト<br>to                 | タ<br>ta                 | テ<br>te                 |                         |                         |                         |                                 |
|                              |                       |                      | ゾ<br>zo                 | ザ<br>za                 | ゼ<br>ze<br>(dze)        | ジ<br>zi<br>(zi)         | ゾ<br>zo                 | ザ<br>za                 |                                 |
|                              |                       |                      | ソ<br>so                 | サ<br>sa                 | セ<br>se<br>{se}         | シ<br>si<br>{si}         | ソ<br>so<br>{so}         | サ<br>sa<br>{sa}         |                                 |
| ン<br>N                       | ン<br>Q                |                      | ノ<br>no                 | ナ<br>na                 | ネ<br>ne                 | ニ<br>ni                 | ノ<br>no                 | ナ<br>na                 |                                 |
|                              |                       |                      | モ<br>mo                 | マ<br>ma                 | メ<br>me                 | ミ<br>mi                 | モ<br>mo                 | マ<br>ma                 |                                 |
|                              |                       |                      | ボ<br>bo                 | バ<br>ba                 | ベ<br>be                 | ビ<br>bi                 | ボ<br>bo                 | バ<br>ba                 |                                 |

以上の国本哲弥氏の表で見られるように、出雲地方の特色は「ズーズー」であり、五十音図のウ段のう、ス、ル、ツ、ズ、ス、マを欠く。また拗音のう、ウ列の拗音を欠く。したがって、仮名表記はフとツはツ、シとスはス、ジとズはズで示すことにした。ただし、司会者であり杉原清一氏(D)は、他県に於て教育の一部を受けたこともあって、ズーズー併加ほとんど認められず、ツ・スの表記はしなかった。

今一つ音韻上の特色が、仁多郡のみ認められたものがある。これは拙著「小陰方言の研究」の40頁—42頁に述べてあり、これに引用する。それは子音rを中心として前後に母音加くと次のようになる。

(1)  $eru \rightarrow jae$

例、寝る ( $neru$ )  $\rightarrow njae$ 。減る ( $neru$ )  $\rightarrow hjae$

(2)  $iru \rightarrow ja:$

例、着る ( $kiru$ )  $\rightarrow kj a:$ 。生きる ( $ikiru$ )  $\rightarrow ikj a:$

(3)  $iri \rightarrow j a:$

例、着物 ( $kirimon$ )  $\rightarrow kj a: mon$ 。散ります  $\rightarrow ts a:$

$ma su$ に近く、知りませ  $\rightarrow sj a: masen$  といわず、 $s a: m a sen$ という。したがって、 $iri$ は $j a:$ に変化することや、定着しているように見える。

(4)  $uri \rightarrow sa: \text{または } wa:$ 。

例、釣り ( $tsuri$ )  $\rightarrow ts a:$ 。これは仁多郡では $tsu$  (ツ)ではなく、ツり ( $tsi ri$ ) であるため (3) に含まれるべきもので、散りますの散り (ツ<sub>1</sub>り) と同じと見えてもあろう。降りますと例にとると  $Furimasu \rightarrow Fa: masu$  となる。

(5)  $eri \rightarrow jae$

例、蹴ります ( $kerimasu$ )  $\rightarrow kj aemasu$ 、減<sup>ハ</sup>ります ( $herimasu$ )  $\rightarrow hje masu$ 。但し、照りますは  $ta: masu$  に近い。

(6)  $uru \rightarrow wa:$

例、来る ( $куру$ )  $\rightarrow kw a:$ 。降る  $\rightarrow fw a:$ 。但し「<sup>ス</sup>降る」は、 $sw a:$  といわず  $sa:$  という。例外が多いように見えないかと、

シとス、サとツとの区別を持っていなかつたから、*i r u* も *i r i* も同じものとして取扱うべきであるかも知れない。ともかく「エ」は「さんで」、母音が前後に来る時、特殊な変化をする。これは出雲地方でも、この仁多郡にのみ見られる現象である。この(1) — (6)は、広瀬惇著、山陰方言の研究(昭和25年)に既述してある。

ラ行のうち、リ、ル、レ、ロは長音になりやすい。とくにリ、ルは殆ど長音化する。アリマス → アーマス、アル時 → アートキ、コレマデ → コーマデ、トコロ → トコーのように前行母音を長音とする。これは出雲全域がそうである。出雲全域では、セ、ゼは<sup>シ</sup>セ、<sup>シ</sup>ゼと発音される。また、母音イはエ、ユはイに対応し、ヌも唾にノに対応する。エシ(石)、エノ(犬)、イキ(壁)などその例は多いし、ウはオに対応することもあり。オシ(牛)、オマ(馬)。また拗音のうちウ列の拗音は、スーゾー弁の関係で直音化する。キーコー(急行)、ゴーニー(牛乳)、ターガク(中学)。こうした対応関係は老人層に多く、若い世代には急速に減少しつつある。

### ③ 文法上の特色

この録音にあらわれたものを中心に述べる。

#### 1. 代名詞

オラ 最も広く用いられる。複数にオラダ、オラド、オララサ、オラヤサがある。

ワシ オラに比して尊大な言い方。身分のある人がいう。

オマエ 共通語のオマエより、敬意の度合いが高い。共通語のファンタグロに当る。

オマエサン 相手に対して敬意表現としていう。

オマハン オマエサンよりやや敬意が落ちる。

#### 2. 動詞

進行形の(所謂ツツアル)ヨルは中国地方で常に用いられているが、出雲にあっては、不思議にも過去形にしか用いない。それも北部の出雲にはあまり現われなかつた。この仁多郡ではかなり用いられていることが、この録音によっても知られる。行キヨツタの形より、行キヨック

の形が多い。テイルは、出雲の北西部はトルとなるが、仁多郡とはじめ、出雲全般はチョル(チョー)が多い。

音便形にっりとは、貰った、払ったは、出雲地方に広く行なわれるが、この仁多郡と隣接の鳥取県日野郡に限って、モウータ、ハラータとなる。出雲の音韻方則から言えばこれが正当であり、出雲や隠岐のモラッタ、ハラッタを説明する方が困難である。モウータ、ハラータは二音便である。モラウタ $m\ o\ r\ a\ u\ t\ a$ と $a\ u\ t\ a$ の二重母音 $a\ u$ は出雲では(鳥取県も同様)  $a:$ (アー)となるのが出雲の原則である。したがって、モラータ、ハラータが生ずる。例外として、北部出雲地方でも、二音節語、会う、買う、這うは、テ・タに接続する場合には、カータ、カータ、ハータ(時として、アク、カタ、ハタとも)という。形容詞の音便形と同様で 高く $\rightarrow$ タカーテ、浅く $\rightarrow$ アサータ(北部の出雲地方は、タカテ、アサテ)となる。

### 3. 形容動詞

アゲータ、コゲータ、ソゲータ、ドゲータは中国方言ソガイダの変化でアゲータラー、アゲータニ、アゲータッタ、アゲータ、アゲータラと活用する。出雲の北部はアゲダ、コゲダと短い。アゲダはあゑだ、コゲダはこうだの意。

### 4. 敬語

ゴザイマス、ゴザエス、ゴザエス、ゴザイスなどがよく用いられる。ヤンスという言い方が、注(91)に出るが、古い言い方の一つである。ゴザエスがゴザエンスとなる場合もある。ゴザンスも時にいう。ナハルなじるの敬語体がよく用いられる。松江市を $n\ a\ h\ a\ r\ u$ の形が多いようだ。出雲全域に用いられる。

### 5. 副詞

ケー ケー忘れたはつゝ忘れ忘の意。つゝと読めるが、間投助詞的に、意味もなく用いる場合もある。

### 6. 助動詞

断定の助動詞ダは、中国地方は広く $da$ であるが、日本海側は出雲を中心として $ga$ を用いる。出雲の地方で $da$ を用いるのは、この仁多郡と隠



岐阜の一部に限られている。仁多郡も古い人にジャが多く、若い人達にはガが多くなったようである。

#### 4. その他

この地を選んだのは、昔話の最もよく残っている地帯であること。仁多郡、それもこの旧馬木村は、今日なお昔話の宝庫である。北部の赤雲部では、既に収集が困難である。また最も交通不便の地でもある。

今一つはここには杉原清一代のような、よき協力者があつたためである。同代は、昭和11年の生れであるが、県立横田高校に出、兵庫県立兵庫農業短期大学を終え、38年4月から40年3月まで母校の横田高校の農業科に講師として勤め、短大卒業後は、公民館農業参考室相談員、農業協同組合の営農指導員とも勤め、横田町誌編集委員、馬木小学校百年誌編集主幹、現在は自家農業のかたわら、横田町文化財専門委員、県文化財保護指導員（横田町担当）、県埋蔵文化財調査委員（仁多郡、飯石郡、大原郡を担当）という、顔の広し、かつ熱心な協力者があつたゆえである。

この度の録音について、話を引き出す司会者となつて貰つた。

#### B 表記について

イとエは中舌母音である。従つて、母音 イ、エ のみならず、イ列、エ列のすべてにわたつて中舌母音の表記を行なうべきであろう。片仮名の表記の場合はそれができない。また音声記号の場合もそれほど目立っていないからそこまでの必要はあるまい。だがこのうち シ と ス は混同し、共にその中間音となり、古来は文字に書く際これをとり違えることが多し。よつて シ と ス は共に ス と表記する。 チ と ツ も同じように混同する。これを ツ と表記する。濁音の ズ (ヅ) と ジ (ヂ) も共に ズ と表記する。セ、ゼは シェ、ジェ と表記する。司会者の杉原清一代は、教育程度も高く、他県で大学教育も受けた人であるため、ズーゼー弁はあつても僅少と見て、ス、ツ は用いず、シ、ス、チ、ツ で表記した。

## C 収録内容の概説

### 1. タイトル

杉原清一氏の司会にて、話題を変えながら進行して行、たため、次のような内容となる。

- 1、いつも<sup>ぼろ</sup>襦袢を着て欲のなか、た人の話
- 2、こってのにへい
- 3、田植、草取
- 4、盆と祭
- 5、楢刈
- 6、亥の子さし
- 7、膝塗り餅、とろへん、ほとほと
- 8、どんど焼、ひとひ正月、こと祭

### 2. 録音年月日

昭和50年8月20日

### 3. 録音場所

島根県仁多郡横田町大馬木403番地小字日向原 藤原安太郎氏。

### 4. 話し手の氏名、性、生年、職歴、居住歴、言語的特徴など

- A 藤原安太郎、(男)、明治27年生、馬木小学校卒、実業科4年卒、農業の傍、ソロバンの行商としたことあり。方言はかなり古いものを持つ。ていさか、古来のみみか、かなり聞きにくい。
- B 渋谷徳右衛門、(男)、明治33年生、馬木小学校卒、農業、この村から出たことはいり。兵役2年は松江市。よく話す人。
- C 長瀬マサ子、(女)、大正元年生、布勢小学校卒、農業、ここから約16軒北の仁多郡仁多町布施の出身。嫁入りしてこの村に来る。同じ仁多郡にてここと方言は変わりはいり。言葉がはっきりし、よく話す。
- D 杉原清一 (男)、昭和11年生、県立横田高校農業科を卒業、兵庫県立兵庫農業短期大学卒、馬木村小馬木に生れ、ここに居住。公民館農業参考室相談員、農業協同組合営農指導員、県立横

田高校農業科講師、横田町誌編集委員、馬木小学校百年史編集主幹を経て、現在県文化財保護指導員（横田町担当）、県埋蔵文化財調査員（仁多郡、飯石郡、大原郡担当）。短大以外に現在地に居住。方言量も多い。この話を録音するに当り、話を引いた出た司会者として依頼した人。

5. こゝは昔話の宝庫の地であり、藤原代などは昔話を語り人だったので、ここを送った。宿屋などより、くつろいだ所と思ひ、録音は藤原代宅で行なつた。ここまでの案内は島根大学教育学部の田中瑩一助教授に依頼、同席者は以上の四人の外、田中瑩一氏、広木博り五名。池に鯉が居り、水の落ちる音は止めようがなく、戸を開けて行なつた。話の進行は杉原代に一任。後半は話題をずらすためやむなく杉原代の発言が多くなった。我々も意識して、どうしても敬語の形が多くなつたようである。今一つ、藤原老人はキセルによる煙草を吸う人で、話の途中よくキセルの音がする。止めるととりため話をしなくなつてもと恐れ、止めることかどきなかつたのが残念であった。今後は、最初に十分言つておく必要を認めた。幸に司会者がよく話を出して下さつたことで長時間の会話がとれた。

# 1. いつも襦袢を着て欲のなかった人の話

話し手

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)          |
|------|--------|-----|---------------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ      |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ      |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ       |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ(司会者) |

C ナカタン<sup>(1)</sup>ノ オズィーサンワ アノ ナンダエデスィガ アノ ソラ<sup>(2)</sup>  
 中谷(家号)の オズィーサンワ あの なんだえですが あの 上の  
 ノ ウツィノ<sup>(3)</sup> スィット マエノ ソラノトコロネ オマエカントコロ  
 家の ずと 前の 上の 所には あな(の)の  
 ハカガ ゴザエンスィガ (B ハー) アノ ハカワ  
 着が ございますか (はあ) あの 着は  
 アノ イトハラノ<sup>(4)</sup> ダンナサンノ スィーット マイトスィ マイリ  
 あの 糸原の 旦那さんの ずと 毎年 お参り  
 ナハリョツタダケン。 (B ハー) ソエデ アノ ドコ  
 なって いたのだから。 (はあ) そいで あの どこ  
 ダエタ<sup>(5)</sup> アノ カワガエオ スィトラッ シャルトダエデ<sup>(6)</sup> (B ハー)  
 だったか あの 川変えを (はあ) して「だっしや」ということで  
 コノ スィグタニノ カワガ アノ ナガレノトコー マー ナオスィ  
 この 渋谷の 川が あの 流れの所 まで 直  
 テネ。 (B ハイ) ユカス イマゴロノヤノ ブルヤナシカ  
 してね (はあ) 昔 今頃のような ブルヤなど

ブルトーザーヤナンカジヤ ナイデスヤン。

ブルトーザーヤナジでは ないですから。

A ハー ソゲナモノ ナイデスヤンネ。

はあ そんなもの ないですからね。

C ソゲスィテ マー アノ ツクサレタタメニ  $\left( \begin{array}{cc} B & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  アノ  
そうして まあ あの つくされたために

(7)  
マエトスィ イトハラカラノ ボンニ ハカマイリガ アリマジョック  
毎年 糸原(家)の 金に 差参リが ありまいた

デスィ。  $\left( \begin{array}{cc} A & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  エマワ アノ カイホーネナッテカラワ  
です。 今 は あの (農地) 解放になってから

アノ キナサランデスィダドモネ。(8) アゲナハナスィカナニスィ  
あの 来々マラ ないですけれどもね。 あんな 話 が なんが

マッ ト クワスィーコト キイタリナハリヤ。

もっと 詳しいこと 聞いていたさね。

B ヤー ダイタイニ アレフ キーチューマシエンワ。 ダイタイ トニカ  
やあ おいたいに あれは 聞いていませぬわ。 おいたい とにかく

(8)  
ク イー ナンデスィワ。 アー イトハラエ ツクイタ。 イトハラ  
なんですわ。 ああ 糸原へ つくした。 糸原

グタローハンニ ツクエタモンダデワ アーサネスィワ。  $\left( \begin{array}{cc} C & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$   
武太郎 さんに つくしたものでは あらうですわ。

イー イート ウーン アノ スィブタンノ アゴーサントコロカラ  
うん あの 渋谷(小字名)の 阿合(さん)の 所から

(9)  
マエエ。 ハーカラ カワガ ナカヤマエ ムケテ デ"チュウタモシタ"  
前へ。 それから 川が 中屋前へ 向って (流れ) 出ていたのを

ラスィーデスィワ。  $\left( \begin{array}{cc} C & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  ソーデスィワ ムカスィワネ。  
ういいますわ。 そうですわ 昔はね。

(10)

ソレオ カイコンスィテ カワオ オマハントコロノマエネ ツクテ。  
 それを 開墾 して 川を あはたの 前に つけて。

イー ソレカラ コノ ウーン コレオ スィブタニノ アノ ウ  
 それから この うん これを 渋谷の あの う

(11)

ー ジョーブエモ ゴット コスィラエタモンラスィデスィネ。(C ハー)  
 う 工部へも 全部 作った もの でしょうね。(ハエ)

マー アノ コーツィシェーソスィタモンダラスィイデスィ。(A ウン)  
 まあ あの 耕地 整理 したものでしょう。(うん)

(12)

ガ イー マー ダイタイ ソノ イトハラノ イーカラ アノ  
 か まあ かわいい その 絲原の あの

マツィエノハン マツィエハンカラ ズィカタ ツーテ ソノ ナクニナグ  
 松江の藩 松江藩から 地方(役人)といって その 役人が

ムカスィ キョッタモンデスィワ。(C ハー) ソレオ ウン  
 昔 来ていたものでわ。(ハエ) それを うん

イー マー ドノテード オッタカスィランダドエ イー マー  
 まあ どの程度の(人数) 居ったか 知らないけれど まあ

(13)

ツィズィレオキテネ。(C ハー) ツィズィレオキテ ソエカラ イー  
 つづれ(紐)を着てね。(ハエ) つづれを着て それから

(14)

ネングサゲテ モラウヤネ ゲンジュースィテモラーヤーネ ソノ  
 年貢を下げて 貰うように 減税 して 貰う ように その

タノマレタダソーデスィ。(C ハー) トコロガ ソレガ トーテ  
 頼まれたのだ そうですね。(ハエ) 戸が なんか 通って

ネ。(C ハー) マー トニカク イー イトハラノ イー フ  
 ね。(ハエ) まあ じかに 絲原の 故

タローサンワ ズィブン ソノ トクオ スィラレタモンダノーデスィワ。  
 太郎さんは 随分 その 得を された ものだ そうですね。

( C ハアイ ) ( キセルの音 ) ソレデ エー ウーン  
はあい それで ええ うん

マー ソーユー ツナギデ ソノ マー ハカマイリオステ  
まあ そういう 縁故で その まあ 屋敷り えて

(15)

モラウ。 トコロガ ソーユー ソノ イトハラエ ツクエタモン  
貰った。 ところか そういう その 縁原へ 尽したも

(16)

ダトモ イー ダエタエ ケー ボロバックリ マトー<sup>1</sup>ツツタ キ  
おけれども だいたい つい 襦袢ばかり まわっていた 着

ツツタ。( C ハアー ) アンマー コンナ ボロオキ<sup>1</sup>ョータン ア  
ていた。 はああ あんまり 彼は 襦袢 着てゐるから あ

(17)

ノ イトハラノ ノ ダンナサン ダンサントコーカラ ダンナサ  
の 縁原の 旦那さん 旦那さん 所から 旦那さん

ントコーカラ イー キモノオフトカサネダエラ ナンボダエラ  
ところから 着物と 重ね着だか いくらだか

マ ガンズキルホド ソノ モラウ。 オクツテモラウ モツ<sup>1</sup>ガソー  
ま しはやく 着るほど その 貰った。 送って 貰った ものがそう

デス。( C ハアー ) トコロガ ムカスノコトダケン マーアー  
です。 はああ ところが 昔の事だから マー

(18)

(19)

ワスライナンテイワーシェン オラタツ<sup>1</sup>ーダケニ オラワ コゲナモノ  
わしら など 言ひはしない おらだ というのだから おらは こんなもの

ワ イランツィーデ オラワ ツィズレホドアリャーエーツィーデ ソスライ  
は いらないというので おらは うづれほどあれば 多いというので として

(20)

ソノ イトハラカラ アー オクツテモラウ ジュートーノキモノ  
その 縁原から ああ 送って 貰った 上等の 着物

(21)

オ イッサイ ケー イトハラエ モドエテス<sup>1</sup>イマーテ ( C ホーン )  
と 全部 つい 縁原へ 戻して しまって ほおん

イー アゲナモノモラー<sup>チョー</sup>ト<sup>xx</sup> ト ソノ オラガ イーコトガ  
あんなもの 貰っていろと と その 自分が いうことか

トーランケニ<sup>(22)</sup>  $\left( \begin{array}{c} \text{C フーン} \\ \text{ふうん} \end{array} \right)$  ナンダーモラワン。  $\left( \begin{array}{c} \text{A フーン} \\ \text{ふうん} \end{array} \right)$   
通らん かし なんにも 貰わん。

ソイカラ マー ソゲナコトイヤー ホンナラ オマエガ クーホ  
それから まあ そんなこといふのは せれなす お前か 食べろほ

ダー<sup>(23)</sup> トツワケテセッ<sup>チョ</sup>クケネ  $\left( \begin{array}{c} \text{C フーン} \\ \text{ふうん} \end{array} \right)$  イー トツィ イー  
どほ 土地を合けてやておくか 土地

ツィクレト<sup>(24)</sup> ネン<sup>グ</sup>ワイランケン。  $\left( \begin{array}{c} \text{C フーン} \\ \text{ふうん} \end{array} \right)$  オマエニ セー  
作れと 年貢はいらないから。 お前に ちや

ケンツィータラ エンヤ ソゲナモノ モラー<sup>チョ</sup>リヤー コトサラ エ  
かしといたし いや そんなもの 貰っていろば ことさす い

ランケン ナンダー イランケン。  $\left( \begin{array}{c} \text{C エー} \\ \text{ええ} \end{array} \right)$  イー ナ テンイ  
さなから 何にも いらないから。 天夜

ムホーデ<sup>イ</sup> イー ナンダエ イランケン。 イー ボロノ イー ハ  
無<sup>終</sup>で 何も いらんから。 ぼろの

ガコト<sup>(25)</sup> ツィズィレデア<sup>リ</sup>エーケン。 ナンダエ エランズィ<sup>テ</sup>テ イッサ  
下着と っづれで あれば よいから。 何も いらないよとって いっさい

イ<sup>(26)</sup> ヨクオ<sup>xxx</sup> ガ ナカッタモンダ<sup>グ</sup>ネスィ。 ソーユーモンダ<sup>カ</sup>ラ ソ  
欲を が なかた者だということです。 そういふ者だから そ

ノ<sup>(27)</sup> イー マ イツギアル<sup>モノ</sup>ダッ<sup>タ</sup>ラ フイトダッ<sup>ク</sup>ラスィーゴザ<sup>xxxxxxx</sup>  
の ま いちぎある もりあつたさ 人 ぞろえ しゃう こて

イマスィワ。  $\left( \begin{array}{c} \text{C ヘー} \\ \text{へえ} \end{array} \right)$  ワリファイニネ サイキンノ コトデスジェ。  
いそわ。 かりあいにね 最近の ことですよ

イー オラガズィーガ<sup>イ</sup> テンホークネン = オマレテ オーマスィ<sup>テ</sup>ケン  
私の 爺が 天保 九年に 生まれて いまいます



ネ。スーニアタルフトガ ソレガ ウマレ ヲトスィニ スィンダモンダ  
ぬ。 爺 に ある人か そんな 生れた 年に 死んだもんか

ゲネスィワ。ナナジュー ナナジュー ナナサエ タツタ ツー マスィネ。イー  
ということであら。セナ セナセナ だったと、いふやうな。

トコロガ ソノ ウーン ソゲナモンノ イー トウ ツィノモンダケ  
ところか その ううん そんな者の 身内の者だから

ンツィーデ ソノ ウマレタスィブンニヤ タエスィタ イー ヤッハスィ  
というので その 生れた頃には 大変 やっぱり

イトハラサンノ コサクデ ビンボー スィタツタモンダゲナトモ  
糸原さんの 小作で 食ふしていたものだということだから

ソノ イー ムカスィ <sup>(28)</sup> アコギ ツィーダカ ヨロコヒガ トッテモ  
その 昔 あこぎ というのが 善いが とても

ズィカタスィ ツィモンダカラデスィネ。(C ホー) ソーイー ハナスィ  
地方衆(者)というものであらぬ。(ヘイ) そういう 話は

ワ キイタマースィ。マー トニカクネ。  
聞いています。 まあ とにかくね

A ソレワ オマエノ ナンダエマエノ スーカネ。  
それは お前の 何代 前の 人かぬ。

B ナンダエマエテラネ ウツィネ マー ダエタエアノケースィワ ナン  
何代 前 といふ(と)ね 自分の家に まあ おいた、あの系図は 何か

ダエ ワカランガネ (A ホー) ブンケダラスィー ゴザイマスィワ。  
(よく) 分からぬがね (ほお) 分家だらしやう ございますわ。

(A ホー) ブンケダツタ ソレデ  
(ほお) 分家だつて とても

C ソンナラ ウマレルコトワ ウマレタマナハッテモ (29) (B ホー)  
そんなら 生れたころは 生れてゐたからでも

ソノ コメサンオ モラフスイトニ。

その 娘さんエ 貰わすに。

B マー ケッ キョク。

まあ 結局 (とうです)。

C オズーオ<sup>(30)</sup> マー チョッ コスィ フルー イフヤー (B ハー ドクスイン  
おじーを まあ かし 悪く 言えば はあ 独身

ドクスイン) オズーオ サッ シャッタ ヤナコト デ シュワバッ カーナエテ。  
独身 おじーを 存じった ようなことで 傷くことばかり 傷かいて。

B ドクスインデ クラエタモンデスィガ。

独身で 暮した 存てすが。

C ハアーン。

はあん。

B ソエデ ハカガ ワカレチーマスィケンネ。(C ヘーン) スィタニ  
それで 墓が 別かれて いまさらね。 (ええん) 下に

アッタデスィ。(C ヘーン) ソーデ ハカガ アンタ モー  
あつたです。(ええん) それで 墓が あなた もう

フィトリ モー フィツィ アッタラスィイデスィガ ソーガ ガケフズィレ  
××××× もう 一つ あつたらしいですか それか 産くずれ

デ ヌケテネ (C ヘー) イーソレ イマ イミ ナンダイスィ<sup>(32)</sup>  
で 崩れてね (ええん) それ 今 今 何おしていい

アン ブンケワ ブンケダッタラスィー ゴザ<sup>(33)</sup> インスガネ。 マー イ  
ああ 分家は 分家 ぶつたらしく ござりますかね。 まあ

ー ケ ツィマモメトラスィ= フィトリ ホッ ツィデ ケー ソケナ イー  
っし 妻も めとらずに 独りぼっで っし せえな

ウーン ヨクノナイコトオ イーテカラネ イー イー ワーワー  
ううん 欲のない ことと 言って 我々か

オ オモコト ホーラクニ イーチョック ホーラクナナンテ イ  
 思うこと(エ) 。。。放題に 言っていた ほおぐみ きんて いえ

(35)  
 ヤー マタ (笑う) ナンダエダが スーブン イーチョックモン  
 ば また (自分で笑う) 何かだが すいぶん (。。。放題エ) いった

ラスィデスナ。(A ハハー) ソエデ スーット カイホーニ  
 いたものらしいです。(ハハア) それで すうっと 巖地 解放に

ナーマジャ イ イトハラネ ノ ブタローハンカラ ダエガカワ  
 なるまでハ 糸原 の 此太郎 さんから 代が変わっても

ッテモ ヤッホリ ソノ ハカマイリオ スィテモラッ チュッタデスィ。  
 やっほり その 麓 参りて して 墓って います。

(A ウーン) ソレデ ゲンガエ シェキトーガ イー ニジュ  
 うまん それで 現在 石塔(墓石)が ニ重

ーダエノ シェキトーデスィカ ガ ムカシ テンホー スィダエノ ニ  
 台の 石塔ですが が 昔 天保時代の

(36)  
 ノ コサフ アゲナ ビンボーニンガ シェキトーデモ ニジュグエ  
 小作 あんは 貧乏人が 石塔でも ニ重台

ノ シェキトーツート ソリャー アノ マー ツート ジェタクナ  
 の 石塔というと それほ あの まあ 少し せいいつな

(37)  
 モンダッタラスィー ゴザイスィカ イー イトハラ ブタローサンカラ  
 ものちうたうしゅう ございますか 糸原 此太郎 さんから

イー キザンデモラッタモンダソデスィワ。

きざんてもらったものらしいですわ。

(38)  
 A ナンツィー スーサンジャッタアエノ ナマエワ。  
 何という名の 爺さん ちうたかんの 名前ほ。

B スィブヤ シュ シュエキ ツィ (A ホー) シュエキ ツィ ツィー シュエ  
 滋谷 しゅ 末吉 (ハハ) しゅえきち という しゅえ

(39)

キ ツィ シュエキ ツィ ツィー ヨッ タ ソー デ スィ フ。  
 き ち しえき ち と い い よ っ た と い だ す わ。

A スィ カイ ホンナラ スィ キ ツィ カ。  $\left( \begin{array}{cc} B & \text{マー} \\ & \text{マア} \end{array} \right)$  スィ テ キ ツィ カ。  
 す い か い そ れ な ら す い き ち か。 捨 吉 か。

b イヤ スィ レ スィ レ キ ツィ スィ レ キ ツィ ダ エ ラ ソ エ ツィ  $\left( \begin{array}{cc} C & \text{ハハハ---} \\ & \text{ほほほ---} \end{array} \right)$   
 い や す れ す れ き ち す れ き ち だ か そ い つ

イー スィ レ キ ツィ スィ レ キ ツィ ツィー テ テ イー タ デ シュー。  $\left( \begin{array}{cc} A & \text{ホー} \\ & \text{ほあ} \end{array} \right)$   
 す れ き ち す れ き ち と い っ て い っ た で し ょ う。

ト イー ヤ ナ ツィ ナ イ デ スィ フ。  $\left( \begin{array}{cc} A & \text{ホーホー} \\ & \text{ほあほあ} \end{array} \right)$  (キセルの音)  
 と い う よ う な 因 縁 で す わ。

A ホーホー ソーデ  $\left( \begin{array}{cc} B & \text{マー} \\ & \text{マア} \end{array} \right)$  イトハラン ヤッパリ マイラレヨッタ。  $\left( \begin{array}{cc} b & \text{ハ} \\ & \text{ほ} \end{array} \right)$   
 ほあほあ そ れ で 鉢 原 に は や は り 参 ら れ よ っ た。  
 ー  
 あ

C ボンニネ  $\left( \begin{array}{cc} B & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  ズー ッ ト アノ テ マ エ ノ ハ カ エ コ ゲー  
 ほんどうにね ず っ と あ の 自 分 の 墓 へ こ う

マイッ テ ホーカラ ズー ッ ト コ ゲ イ キ テ ウ エ ノ ソ ラ ノ ト コー  
 盆 に ね そ れ か ら ず っ と こ う 行 っ て 上 の 上 の と こ ろ

オ マ フ ッ テ ホイカラ ナ カ ン タ ノ イ マ ノ ソ ノ ハ カ エ マ イ  
 を 廻 っ て そ れ か ら 中 の 谷 の 今 の そ の (男) の 墓 へ 参 っ

ッ テ ブ リー ッ ト マ フ ッ テ コ ン タ ウ ツ ノ ニ ワ エ ア ノ ウ ツ  
 を く る っ と 廻 っ て こ ん ど い は 我 の 家 の 庭 へ あ の 我 の 庭

マ デ モ ド ッ テ スィ モー  $\left( \begin{array}{cc} B & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  アノ タバコ スィ テ オイデニナッテ  
 ま で 戻 っ て 下 あ の 休 ん で お い で に な っ て

$\left( \begin{array}{cc} B & \text{ソゲヤッタデスィ。} \\ & \text{そうであつたです。} \end{array} \right)$  ソエカラ イナシエラレヨッタ。  
 そ れ か ら お 帰 り に な ら れ よ っ た。

B ツーロガ チャント キマッ ショック。

通路が ちゃんと きていた。

C イマングロノ ケンギサンモ ワカイトキワ ツイテゴザッ シャック。  
今頃の 果 識さんモ 若い時は ついて来られた。

13 ソーデス、アネ。  $\left( \begin{array}{cc} C & \text{ハー} \\ & \text{へえ} \end{array} \right)$  ソエデ、マ ヲカス、ノ フィト、ノ ハナス、  
そうであらね。 それで まあ 昔の人の 話。

ダケンダドモ ワカエス、バンニフ、ワ ソノ ウー カネ ウリショッ  
だからだけれど 若い 時分には その 鉄 売 した

タダ。 (キセルの音) マー テツ、イトハラノ カネ  $\left( \begin{array}{cc} C & \text{ハー} \\ & \text{へえ} \end{array} \right)$   
のだ。 まあ 鉄 練 系 の 鉄 (E)

ウツタ モンタエ ドゲタエ イーコンダ、カネウリショッ、タモンタ、タ  
売ったものとか どうとか と、うことだ、 鉄 売 り した も の だ ぞ う だ 。

ネス。 ソーデ アツ ツ、カ、ガタノ、ホーエ イキョウ、ワカエス、ア  
それで あつち 上方の方へ (帯に) 行っていた 若い 時分

ンニネ。  $\left( \begin{array}{ccc} A & \text{フーン} & \text{フーン} \\ & \text{ふうん} & \text{ふうん} \end{array} \right)$  イー イッ、フン マー カネ  
にぬ。 一度 まあ 鉄

ウリネワ ショートオモ、グライフ、アー モンタケネ ボデネ  
売 (12) は しょうと 思う ぐらゐな まあ 着たから ちとモ

サンニョーガ ワカラン モンジ、ナカッ、トラシー。 タエス、タ フラータ  
計算が 合からぬ者では なかつたらしい。 た、した 習った

モンデワ アルマイケ、レドモネ。  $\left( \begin{array}{cc} A & \text{ウーン} \\ & \text{うん} \end{array} \right)$   
者では あらまいけれどもね。

注記

- (1) ナカントアンノは、ナカノタニノというところを、語中のノ、ニは鼻音化してンとなつてゐる。
- (2) ソラ・うえ(上)とソラということは出雲の北部でもいうが、この地方は特に多い。
- (3) 自分の家族、家とウチと称するのには広く用ゐられてゐる。こゝでハ他人の家屋を指してゐる。
- (4) 糸原家は代々この附近の名門の家柄として、広く知られてゐる。
- (5) ドコダエダ どこだ、たかに当る。ドコダはそれだけで疑問を持つ。ドコダエダッタカというべきところの簡略と承える。
- (6) 五段動詞にはッニル、一段動詞にはサッニルという敬語表現がつく。出雲地方で最も多く用ゐられる言ひ方である。トダエデはあまり用ゐない表現で、文法的に説明しにくいが、ということでの意に当る。(5)と関連するが、ドコダがドコダエとなればさうに疑問は強まる。トダエデはトカデに近い言ひ方と承えられる。
- (7) 糸原家のことは(4)にのべたが、出雲南部の名家から墓参をされたことは大変な名譽である。
- (8) この人のみの個人的な癖。エーというべきところである。常はこの人は言つてゐる。
- (9) 屋号
- (10) オマエサンが瞬としてハンとなる。サンよりヤ、敬意が下る。オマエハンがさうにちがったもの。
- (11) カミ(上流)の方。
- (12) それからとも訳せるが、こゝでは間投助詞的な表現。
- (13) 綴織のこと。こゝでは、つぎはぎした粗末な着物。ぼろ着。
- (14) ようにの古い形はやうにである。出雲は出雲音韻変化の規則にしたがつて、二重母音 $\text{au}$ は $\text{a:}$ と化した。したがつてやうにはヤーニ。出雲北部は短くヤニという。この地方も瞬としてヤニと短くする場合もある。
- (15) モラウタは(14)と同じ法則による。ウ音便モラウタは $\text{morr au}$ と

ゑと二重母音ゑゑを持つ。ゑゑはゑゑとなるから、モラータが発生する。但し、出雲の北部はどうわけか、モラッタと促音となる。モラータの地域は、この仁多郡と東側の鳥取県日野郡の二郡のみである。例外として、買う、這う、会うなど二音節語に限って、出雲の北部もウ音便を用い、カータ、ハータ、アータとなる。

(16) 共通語でツイ コンナコトラシタ というのは、出雲全域ではケーコゲナコトヲシタという。それが本義であるが、間投助詞的に無意味、または語のつなぎとして用いられる。

(17) ダンサンといういり方は、ある特殊な名門の家柄のみに用いられた。ここではダンナサン、ダンサンと二つ出ていり、共に特別の家柄に用いられていた。

(18)(19) 自称のワシ、オラの二つを言いわけている。一般の人はオラであり、ワシは身分の高い人の語、尊大な自称である。オラダはオラの複数、オラダナはオラ達であり、これも複数と表わす。ワシラ、オラダナも単数にも用いられ、次にオラワと単数に言い変えている。

(20) モラータは(15)に既出。

(21) スマーテはシマッテの事。(15)(20)と同様にウ音便形。

(22) 一般にケン(理由を示す から)であるが、この地方にはケニが現われる。時にケネともなる。

(23) ケン、ケニ、ケネ。(22)参照。

(24) (22)(23)を参照。同一人の三通りの言い方としていふ。

(25) スゑ という終助詞は出雲地方で広く用いられている。

(26) ゲネスゑはゲナデスの略と思われる。トントニ昔があったゲナのゲナは伝聞を表わす語であり、とかいうことだに当る。

(27) 一議とでも書くべきか。一物あるの意。

(28) あくどい、いじわるの意。このところ意味不明。

(29) ナハルという敬語は出雲では広く用いられている。ッシャルよりも軽い。

(30) 叔父と書くが、この場合は、生家び一生独身で過ごし、嫁もめとらず、婿にも行かない男子をいう。

(31) 敬語表現(6)参照。

(32) 前にも出てゐるが、テイルは仁多郡では<sup>テ</sup>ヨルとなる。出雲市附近はトルとなる。

(33) ゴザンス、ゴザインス、ゴダイマスなどの言ひが出雲地方にある。

(34) イーテは言うてでう音便、カラネはカラニガりの変化。特に意味はないが、よく用ゐる。シテカラネなどもよく用ゐる。念を押す意か。

(35) 言ひすまゝの意か。

(36) あんな、こんな、そんな、どんなは、アゲナ、コゲナ、ソゲナ、ドゲナという。この地方は長音が多く、アゲーナ、コゲーナ、ソゲーナ、ドゲーナが多い。

(37) ゴザインスが、さらにうごまいた形。(33)参照。

(38) ジャツタとタツタの両形が用ゐられ、若し層にハジャツタは嫌われ  
てゐる。

(39) ツーヨツタはト言うに、進行形のヨルのついたもの。仁多郡は北部の出雲地方より、より盛んに用ゐられている。

(40) イータは言ッタのう音便。(34)参照。

(41) 注(14)に述べたが、ここではヤーニが短くなつてヤニとなつてゐる。元来南部の出雲は長音にし、北部の出雲は逆ほつたもの。この地方も時としてヤーニをヤニと短かくする。

(42) ソレテを長音としてソーテという。出雲地方全般かそうである。

(43) シモーフノとも聞えるが、意味不明。シモーフノを印り離してみた。

(44) 現当主の系原義隆氏を指す。

(45) 砂鉄の産地であり、系原家の砂鉄。



## 2. こってのにへい

話し手

|   |        |   |               |
|---|--------|---|---------------|
| A | 藤原安太郎  | 男 | 明治27年生まれ      |
| B | 渋谷徳右衛門 | 男 | 明治33年生まれ      |
| C | 長瀬マス子  | 女 | 大正元年生まれ       |
| D | 杉原清一   | 男 | 昭和11年生まれ(司会者) |

A コッテノニヘー ツーモノガオック。  
こってのにへい という者があつた。

C コッテノヘーダエ (A オックゲナ) アノスイーノ  
こってのへーがい おつたそな あの衆(人)の

A コッテノニバイジャッタダエラ<sup>(1)</sup> ニヘーツーナマエデ ソゲナ ナマ  
こっての(雄牛の)(大まが)にばいあつたのか にへいという名前で そな 和削  
エジャッタダエノー。  
あつたのかのう。

B ツイイ ソイツチャーヌランガ<sup>(2)</sup> マー タイリキブソーノ。  
つい そいつは 知らんが そあ 太力無双の。

A オー (C フーン)  
おお。 ふうん

A コッテオニナータトダエ<sup>(3)</sup> オータトダエ。  
雄牛も 荷つたとか 貢うたとか。

C ナンダエ ウスイガスインデネ コッ テーノウスイガスインデ ソレ フトゾ  
 なんだか 牛が 死んでね だってこの牛が死んで それ(は) 一人

スイテオーテイキテ ウメタトダエラ オーキナ ハカガ オスイウン  
 で 買って 行って 埋めたとか 大まほ墓か お墓 さんの

トコニ アーマスガ。  
 ところに ありますか。

B イヤ ショーグツィグンズィツィノ オビエタダ。 アノ スインダソーデスィ。  
 いや 正月 元日の びっくりしたよ。 あの 死んだそうです。

(A ウーン) トコロガ ウン キンジュエ ショーグツィ テツィダ  
 ううん ところが うん 近所へ 正月 手伝

エオスイテ イー ゴシツィーテ ソノ フレダエタラ ショーグツィグン  
 いるして くれといって(牛を埋めぬ) その ふれを出したさ 正月 元

ズィツィヤナンカエネ ネ ヨー テツィダエニエッテ マー ツィート  
 日 やなどに よう 手伝に行って(やむにはできなかった) もう かし

マテツィータラ イヤ ホンナラ タノマン アノ イー オラガ  
 待てと叫びたさ いや それなら 頼まん あの 自分が

ドゲナト シュバンスィル ソレオ オーテ ケー ドコダエ スィテア  
 どんなと 処分する それを(死んだ雄牛を)買って つい どこかえ 捨て

ルイテ モッテテ スィテタツィーダ。  
 歩いて 持って行って 捨てたというのだ。

A ウーン アゲナモンダ ゲンキナモンダ オッタ ハナスィワ アーター  
 ううん あんなものだ 元気な者があつた 話は あつた

ドモ。(B ハイ)  
 けれども。(はい)

C ソレワ イツィゴロノ ハナスィデショウカ。  
 それは 何時頃の 話でしょうか。

B カーネ。

そうね。

A ムカス、ノ ハナシダラーゾノー。

昔の 話だろうよのお。

B ソレモ アマリ フルイコトワ ナイデス。コノ キンネンネ  
それも あまり 古い事は なりますよ。 この 近年に

(4)  
アート アレフ イー ホー スィ スィ テ アゲタケンネ。

ああと あれは 法事して あげたらね。

C ハー ソゲデスィカ。

はあ そうですか。

B ハー フルイスィーサンカ マー ホー スィーサー ツィー ……………。

はあ 古い爺さんが まあ 法事をするという ………。

C ソリャー オマエサントコーネ。

それは あなたのところに。

B エンヤ コリャー フルー ……。

いいえ これは 古う ……。

C スィブタニニ  $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$  ホンネネ。  
渋谷に そうですか。

B スィブタニトスィテモ  $\left( \begin{array}{c} A \text{ ホー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$  ニヒクネンダッタグラーカ  $\begin{array}{c} \text{ニヒク} \\ \text{ニヒク} \end{array}$   
渋谷としても ニ百 ちたろうか ニ百

7.  $\begin{array}{c} \text{ヒク} \\ \text{ニヒク} \end{array}$  ヒクスィーネンダッタグラーカ ニヒクネンダッタグラーカ イー  
百 十年 ちたろうか ニ百年 ちたろうか

マ テラデ' ネンキガ ワカーマスィケン。  $\left( \begin{array}{c} A \text{ フーン} \\ \text{はうん} \end{array} \right)$  ハーカ  
ま 寺で 年忌が わかりますから。 それか

ラ ソレ イー ホー スィ スィ テヤラー ツィーデ'  $\left( \begin{array}{c} A \text{ ホー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$  ハー  
ら それ 法事をしてやろうというので

ーカラ トーバコスィラエテ マー イー ホーズィスタコトガ ア  
 それから 塔婆 作って まあ 法事したことが あ  
 マスィゲナ。 (A ホー ホー )  
 5ということです。 ( ほあ ほあ )

---

### 注記

- (1) ダエダは 1.の注(5)に述べたが、ここではダエラとなっている。二倍だったのかの意。次の行にはダエノーの形で出ている。
- (2) チャーシリランがとも聞える。これでは意味不明。
- (3) ダエダ、ダエラの原形はダエであり、前のトを受けて「とか」に当る。
- (4) アレトのレが長音化している。アレワもアーワとなってもよい。

### 3. 田植・草取

話し手

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)          |
|------|--------|-----|---------------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ      |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ      |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ       |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ(司会者) |

A マー イマゴロト ムカスィ イツィバンツガーコトワ タウエデスィネ。  
 まあ 今頃と 昔(と) いちばん違うことは 田植えてすね。

( D ハイ ) マー タウエツィート タオズィナラスィスル。( D ハイ )  
 はい まあ 田植えというと 田を地ならしする。( はい )

ウスィノ サンビキカラ ゴフキグラエ ( D ハイ ) エッ ショニツィ  
 牛の 三匹 かし 五匹ぐらいい はい 一緒に連

レテネ トット トット ソノ トバシエテ ソエカラ <sup>(1)</sup> ダマッテ  
 れてね とっと とっと その 飛ばせて それから 黙って

ソノ トバシエテネ ソエカラ スィロオカエテ ゴローツト コノ  
 その 飛ばせてね それから (苗)代をガリて そろあっと この

ナローニスィテ ソエカラ ソコエモツテエッテ コンド ソートメ  
 平らにして それから そこにもらって こんど 早乙女

(2)  
 ガ スィラー ット コー タン ナカエ ハエル。サゲ ツー モノ ガ アッ  
 が ずらッヒ こう 田の中へ 入る。 佐下 という者があって

テ タエコ オタダ エテ スィッポーンポーン スィッポーンポント タエコ オ  
 (居って) 太鼓をたたいて すっぽんぽん すっぽんぽんと 太鼓を

タタエテ (歌) 「コエスィクセーレ タスィネテゴザレ」 ナンツィー  
 たたいて 恋しくあれば 訪ねて来ッ な という

(3)  
 オタヲ オタ一テ ソートメガ コー オエタモンダ =ギヤカニ。  
 歌を歌って 早乙女が こう 植えたものを にぎやかに。

B ソー ソーデスィネ。  
 そう そうですね。

A ソゲスィテ マー ソートメワ カサーノ キーモノ キテノ。(C フフ…)  
 そうして まあ 早乙女は かすりの きもの 着ての。(ふふ…)

ワカエ モスィメカンヤナンカエガ ハリキッテ タオエオスィタモン  
 若ッ せ良さんや などが 張ッ切って 田植をしたもの

ダ。ニギヤカニ。 トコロガ ツィカゴロワ ナント ヨノナカガカ  
 だ。 にぎやかに。 ところが 近頃は ちゃんと 世の中が 変

フッテキテ (C ハハハ…)  
 あって来て (ハハハ…)

タオエダ ツィー タテテ エツィノマニ タオエオ スィタダエシエンダエ  
 田植だ"というたとて いつのまに 田植えを したのか(ないのか)

(6)  
 ワケガワカラシ。(B.C.D 笑) イツィデモ ナンダエ (C ホホ…)  
 わけがわかるん。 いつでも なんた"い

タンナカ アオーナッテ スィマーチョーダ。  
 田の中 青くなって (まってるの)"。

B ナンダエ クルマノ ツィーサイガ グルグルマワスィガ (A オー)  
 何か 車輪の 小さいが(のを) ぐるぐる廻すが

(B ホホ----) アー アオー ナッテ スイマッテ。(A オー)  
 ほほ--- ああ (34) 青くなってしまった。

キカエデ ウエテ スイマイマスイ。

機械で 植えて しまいます。

A (8) フトムカスイノー ソノ サゲダーデ (9) イーヨッタ スイブンノ ソノ  
 ひと昔の その 佐下田で 植えていた 頃の その

ジョー4ヨツイ モノフ サッパリ ナイヤーニナッテ スイマッテ。

情緒 というものは ざっぱり 無いようになって しまった。

C ンー アゲデスイネ。(A カー) マー ワタスイヤ ツイモ ウツ  
 ンん ああですね。 ああ まあ わたし運も (この)家

ニ ヨノニクーマデワ アゲスイテ サゲデ ウエマシヨッタ ケンネ。  
 に 嫁に 来る までは ああして 佐下で 植えていましたからね。

(10) ソエカラ キテカラワネ フノ キタトスイカラ ワカレテネ (A  
 それが (この家)に嫁に来てからね あの 来た年から 別かれてね

アー ) ソーソー ウエニナッテ ホエデ カナイスイー スイテ ウエ  
 ああ 銘々 植えになって それで 家内 中して 植え

マシヨッタ。

ました。

A ホーホー ケー アゲナスイブンニナッテカラ ウエヨッタ ダカ。  
 ほうほう つい あんな頃に なかったら 植えていたのか。

C ハー メーメー ウエデスイダケン (A ホーホー) カナイスイー スイ  
 はあ 銘々 植えですだから (ほうほう) 家内 中して

テ ケー (A ホー) ウエマシヨッタ ドモ クーマデワ (A ホ  
 て つい (ほう) 植えていましたけれど (嫁に) 来るまでは (ほう

(11) ー) アッツイデネー (A アー) サゲダデ ウエマシヨッタ。(A  
 お あっちでねえ ああ 佐下田で 植えていました。

ホー ホー )  
ほあ' ほあ'

B ウーン アサ アサトーニオキ オキテネ。 ( D アサマ ハヨー  
ううん 朝 朝 早く 起きてね。 朝も 早く

ゴザン ショーガ ) アー アサハヨーニオキテ。  
ございましょうが ああ 朝 早く起きて。

A マンダ クラエオツィネ ( B クラエウツィニ ) デカケテネー。  
まだ 暗い 間に 暗い 間に 出かけてねえ。

ヘー タンナカエハエツテ ナエオトル。  
へえ 田の中へ はいって 苗を取る。

B マー イクト イクトネ コノホー ジャ サキー マ フィータキヨ  
まあ 行くと 行くとね この地帯では 先に ま 火をたいた

ツタダ ( C フフフ ... ) アサ アツマルトネ テオ マー  
のだ。 不ふふ ... 朝 集まるとね 手エ まあ

イー ア フクメテヤートカ マー ナントカネ イー アサマ  
ぬくめてやるのか まあ 何とかね 朝ま

フィータキョッタ。ソエカラ ソレデ イー ソローテキタラ ハエッ  
火をたいた。 それから それで (人が) 揃って来たら (田に)入っ

テ マンダ コグレヤーナニ イー  
て まだ 小暗い ようなの

C ナエトリ。  
苗取り。

B ナエヲトリ トリコ スィテネ ソエデ マー ムカスィ モー ヌーコト  
苗を 取り競争してね それで まあ 昔 働いていたこと

(12)

チャー イー マ フトハエ ツィート イー フィル フィルマデト フィル  
には ま ひとへえというところ 昼までと 昼



カラ イッカイタバコヲスイテ イー イッカイタバコダツタカエナ  
から 一回 休憩 をして 一回 休憩 ぶったかいなあ

ー イツバンタバコ ニバンタバコ ツイッテ ショッタカエ マ トニ  
一番 休み ニ番 休み といって していたのか ま とに

カフ タバコマデフ フトハエ ソエカラ マダ ソエカラノ ツイ  
かく 休憩 までには ひとはえ それから まだ それから 後

フトハエ トイーファーニスイテ ヤリョッタダガ マ フトハエハン  
ひとはえ と いうふうにして やっていたのか ま ひとはえはん

フト マ ユード スイブタニラ ツイシ フトハエハントート イー  
ひと ま ちょうど 波谷 などでは ひとはえはん とま

イッ ツインツイノ ナエガアー ツーテテネ イッ ツインツイナエガ アー ツー  
一日(中)の 苗 がある といってね 一日 苗 がある といふて

テ  $\begin{pmatrix} D & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  ソエカラ イー マー タバコニワ アー テ  
それから まあ 休憩 には ああ 茶

ドモモッテデテネ ホーラク オチャヨバレテ ソエカラ コンド  
など 持って 出てね 充分に お茶 を よばれて それから こんど

(13)  
イー ウエサバ ッテ イー へーカラ コンド ソノ サゲ ツー モ  
植え はじめて それから こんど その 佐下 という者

ノガ イマノウター カスラウタウ ウター。サゲガ ツイマリ ソ  
か 今の歌 頭歌 (と) 歌う。 佐下が つまり そ

ノフィノ イー カスラボスイデスイ。イー ソーガ ケー ジェンブ コ  
の日の 頭節です。 それが フロ 全部 こ

ー ソノ マワエテ オマエナニ シューコゲシュー コリャー ドー ニュー  
う その きり廻して お前 何をせよ こうせよ これは どうしよう

ゴー シュート ハズメヨート カ サーハズメヨー タバコ アノ  
こうしようと (仕事と) はじめようとか さあはじめよう 休憩(しよう) あの

(14)

サバ…… トカナントカ タバコショー ハスィメヨー トイー ヤーナ  
 とりかがろう とかなんとか 休憩しよう はじめよう というようば

コトオ ジェンゴ サゲガ アー ドーサ ツィカサトツィョッテ ソーガ  
 コトエ 全部 佐下か ああ 動作(を) 司ってって それか

ヤリヨリマスィタ。(キセルの音) ソエカラ ムカスィワ アー イ  
 (指揮を)していました。 それから 昔は ああ

ー ナンダエ サケーノンマスィラネ。( D ハイ ) マー ハスィ  
 何が 酒をのみましてね。( はい ) まあ はい

(14)

マ マ イマンゴロトワツィガーテ コンド ゴゴニナー ツィート ツィ  
 ま ま 今頃とは違って こんど 午後にはまたというて 昼

ーハンクーテーデ ソエカラ バンマデノアエダネ イッペン ショ  
 飯 食うというので それから 晩(夕食)までの間に 一度 食

クスィオ スマショッタダ ハスィマツィーノオ。( D ハイ ) ソーニャー ゴツィ  
 事を していましただ はしまというのを。( はい。 )

ソーオスィテ イー カケダエタリ ナンカスィマスィラネ。 ーカラ サ  
 ごちそうして 酒(を)飲いたり などしましてね。 それから 鯖

(15)

バーツィケテ クウエサバダナンツィーデカラネ スィオサバー アノ  
 (を)つけて 田植 鯖をなどとって 塩 鯖 ああ

アー ニタヤツィオツィケテ イー ( C 笑う ) マー イー タデマニョ  
 ああ 煮たのをつけて まあ 食べてまし

ッタ。(茶をオアす音、以下少し不明)  
 た。

C ソエカラ アノ ユドモワネ マタ ソコエ ヨバレニイナマスィタ。  
 それから ああ 子供はね また そこへ ごちそうになりに行きました。

( D ハイハイ ) ( B ユドモワネ ) ガッコーカラデモモドートネ。  
 はい はい 子供はね 学校からでも戻るとね。

$\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{array} \right)$  ソエカラ (笑 ッ々カッス) フキノハネ ニスイメ  
 それから 落の葉ね 煮しめ

ツィツィンデ ( D フキノハデスカ ハー ハー ) モラーテネ。 タベ  
 包んで 落の葉でつか はあ はあ 貰ってね。 (お場子)

ント アノ ソノヨコニ ( B タバコノモンヤナンカエ ) コホ  
 食べないか あつ その横に 休憩中の者ヤナンカに 牛蒡

ーヤ フキヤ アノ ニスイメ コスラエタニ サバノニタウエ 4ヨッ  
 ヤ 落ヤ あの(それで)煮 染(を)作ったのに 鯖の煮え上(に) ちよと

トノシエテ モライマスイワネ。 ソーガマタ アノ ナンダエデスイタケ  
 菜せて 貰いますわね。 それがまた あの 何だかですのだから  
 (16)

ン ソレー モラーテ タベニヤ モラーテ フキノハニ ツィツィンデ  
 それを 貰って 食べねば 貰って 落の葉に包んで

モッテイニマショッタヨ。 コトモノトキニワネ。 マ イマンゴロ (   
 (寂に) 持って 帰りましたよ。 子供の時にね。 ま 今頃

笑 ッ々カッス ) ホンネ ハナスイニ ナーマシェン。

ほんとうに (今から思うと) 話になりません。

D コノハニツツンデ モラーコトモ アーデッシューネ。  
 木の葉に包んで 貰う ことも あまでしようね。

B ハー ソーデスイネ マー イロイロトコロニヨッテ  $\left( \begin{array}{cc} C & \text{へー} \\ & \text{はい} \end{array} \right)$   
 はあ そのですね まあ いろいろ 所によつて

ダイブン ツィガー。

大分 違う。

C オマエサングタワ ツィータ シッ4ヨーナハーデショー。  
 お前さん方は 少しは して いないで(しょう)。(17)

D マルデ キオクガナイデスワ ハー。 ( B ~~~~~ )  
 まるで 記憶がないですわ はあ。

C マー ソゲネ イツバネ ウツヤツニモ ヘー ワタスィヤツカ  
 まあ そんなに 一番に 自分達にも へえ あたし達が

キタトキネ ソゲナコタ ナカッタデスィケンネ。 マー アノ サト  
 来た(我家に)時に そんなことは なったですからね。 まあ あの 里(実

ネ オートキノ (A ? ウーン) ハナスィデスィケンネ コ  
 家)に おる時の うん 話を ですからね 子

ドモノトキニ。

供の時に。

B ソーデ タウエサーテヤ マー エー オラフ エ .....  
 それで 田植するといえは まあ 自分は え .....

D ソーデ タウエヤナンカイノ ババワ ドレクライナモンダッタデ  
 それで 田植や なんかの ばばは どれくらゐなものだったで

スカ トージ。

すか 当時、

B ソーデスィネ マ ゲンザイヨカ スコスィ コマニウエチューマスィガネ。  
 そうですわね ま 現在よりか 少し せまく植えていますからね。

D ハイ。

はい。

A マー ロクスィンヨホー ナンカイ イーヨッタケン ジョーギガ。  
 まあ 六寸 四方 などと いらっていたから じょうぎが。

D インヤ アリャー ジョーギ イーマシヨッタカ ワクイーマシヨッタカ。  
 いや あれは じょうぎ(と) いいましたが あく(と) いいました。

A ジョーギ イマシヨッタ ジョーギ マトワリ。  
 じょうぎ(と) いらしていました じょうぎ まとわり。

B ジョーギトカ ワクトカ イーマシヨッタダ。  
 じょうぎとか あくとか 言っていました。

D インヤ リョーホー オクモンダケン ドッサダエラ。  
いや 両方 聞くものだから どうするかな。

B ハー ソー ソー。  
はあ そう そう。

A ドッ ツイモ イーマニョッタ。  
どっちも いいました。

B ドッ ツイモ イーマニョッタネ。( D ハー )  
どっちも いいましたね。( はあ )

A ジョーギダ ツー モンモオー スィ ワクダ ツー モンモオー スィネ。  
じょうぎだ という者もいよし わくた という者もいよしね。

D ナルホドネ。( 問 ) ソノマエノ ツナジダイ ジャー ファーマニテン  
なるほどね。 その 前 の 縄 時代 では ありませんで

スカ。( B エンヤ ) ツナウエノ。  
すか。( いいえ ) 縄 植えの。

B ツィナウエワ マー チョード ウ ツィ / ブラクノ ホー デ ワ ツィナウエ  
縄 植えは まあ ちょうど 自分の 部落の 方では 縄 通え

ワ アンマリ。( A アンマリ ヤラダッタ )  
は あまり あまり しなからた。

A ソーマデワ ケー イッサモッサデ<sup>(24)</sup> ナントナク オエユッタデスィ  
それまでは っい 適 当 に なんとなく 植えていたです

ワ。  
わ。

D ボッヤボッヤデ<sup>(25)</sup>。  
ほッヤ ほッヤで。

C ソーデネ フタスィ コドモノトキニネ アノ フタスィノ ツィツィオヤ  
それでね あたし 子供 の 時 にね あの あたしの 父親

が アノ グンヤクショニ デマシヨッタワネ。 ソーデ アノ ソノト  
が あの 郡役所に 出ていましたですね それで あの その時

キノ アノ マー ブラクノ スーガネ アノ マ ナンジューニタ  
の あの まあ 部落の 衆(人)がね あの ま 陳情 のよう

イナコト グンナョーサレニサレタ テガミ一 アノ ガアッテ ソ  
ノ こと 郡長 さんに された テ紙 と あの があって そ

レヒッパードエテ ヨンデネ (A ホー ) ソエカラ キョーダエ  
れ(と)引っぱり出して 読んでね (ほあ ) それから 兄弟(で)

ダエラ ヨンデ アノ ナンダエ ショッタコトガアッテ ソノ  
出して 読んで あの 何か (たことがあって) その

シェジョーウエ シュー イー トキノ アノ グン グンカラ イー  
正条 植 (と) せよ (と) 言う 時の あの 郡 から 言う

コトドモアッタデスィダラーカ シュージョーウエ シュニャー イケン イー  
ことなどあった ですからか 正条 植 (と) (なければ) いけない(と) 言う

キ (A アー アー ) (B ソー ソー ) ソノトキノ ハ  
時 ああ ああ そう そう その 時の

ンタエオ アノ ブラクガ アノ スィテ グンナョーニ ツインジョーニ  
反対と あの 部落か あの して 郡庁に 陳情 し (26)

テ (A ハー ) ホーカラ ナンダエラ ソノ ムンナラツィガ  
て (ほあ ) それから 何か その みんな達か

マー ワタスィヤツィガ ツィツィオヤラツィガ ホットーデ ソゲナコトオ  
まあ わたし達(か)の 父親達が 発頭で そんなことと

サッ シャエ ツィーヤナ フーナネ (A カー ) コトオイーテ  
したさい というような ふうに (ああ) ことを 言って

カクブラクカラ ハンオスィテ アノ ダエラヤツィ ゴットモラーテ  
各 部落 から 判を おして あの 出したのを (郡庁に) 全部 もらって

モトッテネ  $\left( \begin{array}{c} A \quad \text{ホー} \quad \text{ホー} \\ \text{ほあ} \quad \text{ほあ} \end{array} \right)$  (笑) ナカス) グンチョーカン  
帰ってね

ノ ゴサエテ ソレ ソーガ スイマーテアッタヤツ アノ イテ  
の 下さって それ それが 蔵ってあったやつ あの 見て

スイッ チョーマスイヨ。  $\left( \begin{array}{c} A \quad \text{ホー} \\ \text{ほあ} \end{array} \right)$  ソーデ アノ シュージョーウエカー  
知っていますよ。 それで あの 正条植を する  
(27)

トキニャ マー コラホドナ ホンナラ ソーゾーガ アッタタラ  
時 には まあ これほどの ほんなら 騒動が あっただろう

カノー オモエテ アノ コトモノトキニ イチョーマスイケン。  
かのう 思っ て あの 子供の 時に 見ていますから。

A ハー イヤ ソードーガアッテネー ヤクバノホーカラ ソノ ツ  
ほあ いや 騒動が あったねえ 役場の方から その

ーツガアッテ ヤクバカラ イマワリノモンガキタモンダワネ。(C  
通知が あって 役場から 見廻りの者が来たものだわね。  
(28)

ヘー ) ズーッ トネー。(C ヘー ) ソー スィタ トコロメガ ハナ  
へい ) ずうっとね。(ヘー ) そうした ヒコメが 花屋  
(29)

ヤゲー ツニ ヒョー スィ ツー インキョガオッテカラネ アノ カンガエ  
垣内(屋号)に 兵治という 隠居が おってね あの 電氣市

ツニ サワダサンガ ヤクバカラタノマレテ ソノ シュージョーウエ  
(地名)に 沢田さんが 役場から 頼まれた その 正条植

オシェー ト  $\left( \begin{array}{c} C \quad \text{ハハハ} \dots \\ \text{ほほほ} \dots \end{array} \right)$  ウン ホエカラ コー ソノ ワ  
を せよと うん それから こう その 梓

クー コスィラエテ マクレ  $\left( \begin{array}{c} C \quad \text{ヘー} \\ \text{へい} \end{array} \right)$  タンナカエ ソゲナガ  
を 作って ころがせ (部落の人達は) 田の中へ そんな

エモクイレテ タオエガ デキー アガー モンカー。(C フフ ...)   
材木を入れて 田 植か 出来 ぬが 何かあ。(ヘー へい ...)

(30)

サワダサン スイコスイ ハナガ コークライ ハナヒクダツタ コナ  
 沢田さん 少し 鼻が このくらい 鼻低だった こな

(31)

ハナクター ツーヤナコト イー ケンクラー オイーテカラネ サエ  
 鼻 腐れ というようなこと 言、 喧嘩 を言ッテ 細エ

クニナランダケン  $\left( \begin{array}{c} \text{C} \quad \text{ハハ} \quad \text{---} \\ \text{ハハ} \quad \text{---} \end{array} \right)$  (笑、ききさ) サワダサ  
 にならんのかから(収拾がつかん) のちがひ) 沢田さん

ン エンデ シマワーシヤツタ。  
 帰ッテ しらいなでった。

C ホンナラ ニタズー ジャックモンダネ。  
 ほんなら 仁多郡全部 ちったもんぢね。

A ハー ニタズー。  
 はあ 仁多郡全部。

C ニタズー  $\left( \begin{array}{c} A \quad \text{ハー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$  ソーゾー スイタモンデスイネ。へへ……(笑)  
 仁多じゃう 騒動した もんですね。へへ……

A トコロが ノツィーナッチャー ソノモノオマクラニャー オズィナイーテ  
 ところが 後になつては 何物(梓と指す)ところがでなくては むずかしくて(困難で)  
 (32)

$\left( \begin{array}{c} \text{C} \quad \text{へへへ} \quad \text{---} \\ \text{へへへ} \quad \text{---} \end{array} \right)$  オエアートコーガ ワカラン  $\left( \begin{array}{c} \text{C} \quad \text{ハー} \\ \text{ハー} \end{array} \right)$   
 植えよ ところが わからない

オエラレンツィー ヤーナフーニ ナレテスイマー トネ クシエガツィーテ。  
 植えられたいというふうなふうな 慣れ? しもうとね 癖(習慣)がついて。  
 (33)

$\left( \begin{array}{c} \text{C} \quad \text{フフフン} \\ \text{ふふふん} \end{array} \right)$  ナンナ ショーギマフッテ イエヨッタモンダ。  
 なんでもする 定規 こゝろして 植えよったものだ。

C ホンナラ ケー マー じョーニ ケー エガンダヤーナユメニ  
 ほんなら っい まあ 無性に っい 曲ったようなことに

コー ウエヨッタモンデスイネ。  
 こう 植えよったものぢね。(正条植以前は)。



A ハー ケー スィラー ット ナラン ショッ テネ  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$  ホーカ  
はあ つい ずらあっと ながら いてね

ー ケー アノ ~~~~~。  
つい あの

B ツィート ジョー スィナ モンガ アタマオ  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$   
少し 上手な者が 頭を  
アタマオ ウエダ スィガネ。  $\left( A \quad \frac{\text{アタマオ}}{\text{頭を}} \right) \left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$  ソ  
頭を 植え出すがね。

ーガ ツィート ジョー スィナ モンガ ソレガ  $\left( A \quad \frac{\text{オエダシ}}{\text{植え出し}} \right)$  ウ  
れが 少し 上手な者が それが

エダ スィ ショッタ モンダ。  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$   
え 出ししよったもんか。

A ダンダン ソケー スィラー ット ツィー テ ナラ ンデ  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$   
次々に とこへ ずらあっと ついて 並んで

(34)  
ショッ ショッ ショ タエコニ アワシ テノ ー オター オタエ オタエ  
しゅっ しゅっ しゅ 太鼓にあわせてのお 歌を 歌い 歌い

アトエ スィガ ッテ オエタ モンダ。  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$   
後へ 後退して 植えたもんか。

D ソレデネ。  
それでね。

A ウン ソレガ ソノ オターニ アワシ テテガ コー エッ ショニ  
うん それが その 歌に 合わせ 手か こう 一緒に

ユクカラノ  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$  ソーデ  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$  ナマ ヨコ スィワ ト  
行くからの それで  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$  ぽん ぽん ぽん ぽん

(36)  
ーリョ ッタ。  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$   
通りよった。

B ソエカラ イマワ コーウンキデヤルケニ スロカキナンツーテモ  
それから 今ほ 耕うん機でやうから 代掻きなどといったも

ミヤスー コトデスィダドモ ムカスイワ タウエスィロニナーツート イー  
たやすい ことですけれど 昔ほ 田植代に るまじうと

アレ スィロオカクト ウエート ヤオーテヨロスー。 ゲンザイフ  
あれ 代と掻くと 植えと やわらふと よしい。 現在ほ

マー ツート サキューカイサイテ イー ニワンツィンツート ト  
まあ 少し 先に 掻いておいて ニ三日 しろいと と

(37)

ウン タイゲー キカイデ ウエニクーゴザンスィダケニ スィマスィ  
うん るまじ、 機械で 植えにくう ございますから します

ドモネ。ムカスイワ アー イ (咳) ソコオ スィロオカク スィダ  
けれどもね。昔ほ ああ とも 代と掻く るまじ

ウエマスィダケニ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \quad \text{ハー} \\ & \text{はあ} \quad \text{はあ} \end{array} \right)$  ソコエ ソエデ スィロカク  
植えまうのかから 代と掻く

ニ サンビキツケテカクト イー マエ マヨウスィ  $\left( \begin{array}{cc} C & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$   
のに (牛と) 三匹 つけて 掻くと 前 前牛

マエオ カクモンオ マエウスィーテ イーヨックモンダ。 ソーガ  
前を 掻くものと 前牛と 言ふよつたものだ。 それが

ソノ チャント スィロノミツガ アーマスィダ。 ヤッパリ コー カ  
その ちゃんと 代の 道か あります。 やっぱり こう 掻

(38)

(39)

クニ ミツガアッテネ イー キーワットカ ワークトカネ  $\left( \begin{array}{c} D \\ \text{はあ} \end{array} \right)$   
くは 道があつてね 切り鋤とか 割り鋤とかね

ハー  $\left. \begin{array}{c} \text{はあ} \end{array} \right)$  イー ナントカ コー ソノ .....  
なんとか こう その .....、

(40)

D モー イッパシ イーテゴサッシャイ。  
もう いっぱし 言つて下さい。

B イー キリクッネ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  フリクッ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  ソエカ  
 切り金銀ね 割リ金銀 それか

ラネ オラドンツィガ キーチャーチャー イー キリクッ フリクッ ン  
 だね 私達が 南にいますよは 切り金銀 割リ金銀 そ

エカラ タスキガケ ツーモンオ キーチャリマスヨ。(キセルの音)  
 ねから 袴掛 というものを 南にいますよ。

(41)  
 ハー ソレデ(咳) ソーデ コー マングッ イママスイトネ カナラ  
 はあ それで それで こう 馬鉄 行きますとね 必ず

スィ ソノ イックワイ トーラトコロオ ニクワイフコー オナスヤ  
 その 一回 通ったところを 二回はこう 同じよ

ーネ コーイカンヤニ カナラスィ コー イッタトコーワ コー  
 うに こう行かないように 必ず こう行ったところは こう

イフヤーナフーニ チャントネ イー スィロニ。  
 行くようなふうには ちゃんとね 代に。

A サカメニモドスィツイート。  
 逆目(逆に)にもどすと。

B トツィガ キマッヤオーデスィダ  
 道が きまっちゃうです。

A ドロガ ヨートケー (B ハーカラ) オナスィホーエ カエタジャ  
 泥が 良く溶ける。 それから 同じ方向へ 搔いたでは  
 ドロガトケン。  
 泥が溶けん。

(42)  
 B ハバノ シェバイ フボヤナンカエフ ソゲナ リクツィガ イケンケニ  
 幅の狭い 窪やなどは そんな 理屈(が)では いけなリガ

ハーカラ コー ヤッパリ ソノ コー マー アー コーエツテ  
 それから こう やぱり その こう まあ ああ こう行って

コゲナ モー ハツノス<sub>1</sub>ガター ドタエナコトニ アルキマショッタ。  
こんな もう ハの字型 のようなことに 歩きました。

サンビキツケ<sub>4</sub>ヨーケニ アルキマショッタ。イー ゴ<sub>1</sub>ットザ ソノ  
(牛E)三匹ついていたから 歩きました。 全部 ぞり

ウス<sub>1</sub>ツ<sub>1</sub>カマエ<sub>4</sub>ョート トソノ オナス<sub>1</sub>トコロアルカンヤーニネ。イ  
牛Eつかまえていふと その 同じとこE歩かぬようにぬ。

ー エー ス<sub>1</sub>コーニ イー ソレデ マヨ<sub>1</sub>ー (オセルの音) マ  
... 具合に それで ま

マエウス<sub>1</sub>ツ<sub>1</sub>ーダカ マヨウス<sub>1</sub>ガ ショー<sub>1</sub>ス<sub>1</sub>ナト ス<sub>1</sub>ロガ エス<sub>1</sub>コーニ  
前牛<sub>1</sub>というか まよ牛<sub>1</sub>が 上手なと 代か ... 具合に  
(43)

ナルス<sub>1</sub>ネ。ソレデ ウン フェタダト イー ナー<sub>1</sub>ダイト サカメニ  
なるしね。 それで うん 下手なと 撫でると 逆目に

イカンコン ナー<sub>1</sub>ダイト イケント コーイーヤナコトオ デ マ  
行かなくて 撫でると いけないと こう言うようなことを で マ

ス<sub>1</sub>ロガキヤーマショッタ。

代搔(E)やりました。

D サンビキテユーコトワ チャント キマリグ<sub>1</sub>ッタワケデスカ。  
三匹と 言うことは ちゃんと きまりお<sub>1</sub>った歌ですか。

B マ コノホー<sub>1</sub>ジャ。  
ま この地帯では。

A マエゴロワネ ゴ<sub>1</sub>フキグ<sub>1</sub>ライマデ  $\begin{pmatrix} D & ハイ \\ & はい \end{pmatrix}$  ショッタコトが ア  
前頃 はね 五匹ぐ<sub>1</sub>らいまで していたことか あ

ーソーデス<sub>1</sub>ワ。 $\begin{pmatrix} D & ハイ \\ & はい \end{pmatrix}$  ダドモ マー ダエブン ノツ<sub>1</sub>ニナッ  
うそうですわ。(44) けれども まあ だいいふん 後になっ

テ メー<sub>1</sub>メーニ サーマイゴ<sub>1</sub>ガ タエガエ サンビキ ドコニモ  
て 銘々に 尻舞子が たいがい 三匹 どこにも

オーマシヨ ッタモンデスィワ。

居りましたものですわ。

B スィント ムカスィワネ ナラベスィロテ イヨ ッタモンデスィ。 ウスィカン  
ずと 昔はね ならべ代と いったものです。 牛 三

ビチ ナラベタモンダエスィテンダドモ ゴフィヨ サン ゴフィヨデモ  
匹 並べたものだから(どろ)知らね。サカども 五匹 三 五匹でと

ロッピヨデモ  $\begin{pmatrix} 0 & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  ウスィ ナラベテネ。  $\begin{pmatrix} 0 & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$   
六匹でと 牛 並べてね。

ソエカラ マンガが ツーサイデスィ ムカスィノワ。 ヤッパリ オツ  
それから 馬 鉄が 小まゝで 昔のは。 ヤハリ 社の

ラツィネモ コノキンネンマデ アリヨッタ。  
家にも この 近年まで ありました。

D アー ロッポンズメノヤツガ アーマスガネ。  
ああ 六本爪のやつが ありますからね。

B マー ツーサイヤツィガ ソーデ コー ウスィ ナラベタッotte カキョ  
まあ (鉄の)小まゝやつが それで こう 牛 並べておいて 搔

ッタモンデスィワ。 マー ウー ン マ ドゲナフーナ ヒ、ホーデ  
いたものですわ。 やあ ううん ま どんなふうな 筆法で

カキョ ッタモンダエラ アノ スィロヤリヨッタモンダエラ アー  
(代と) 搔いたものか あの 代(搔)と やっていたものか ああ

へー イー スィーフト メー スィノ ショキ  $\begin{pmatrix} 0 & \text{ハ、ハー} \\ & \text{は、はあ} \end{pmatrix}$  ワ ウー  
へえ ずと(昔) 明治の初期 は うう

モット -----。

もつと -----。

A ソーデ ヒョットスィルト ソノ ナラベタヤツィオ ツクヤ ツィオ オー  
それで ひょっとすると その 並べた奴(牛)と 突く奴が いる

グケンネ。  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right)$  ソーカラ アスィコエ ナラベマスィタオ  
 のがからね。  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right)$  そゆから あそこへ 並べましたか  
 (45)

$\left( \begin{array}{c} D \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right)$  ツノボーシ ツー トコロエ。  
 角帽子 という ところへ。

D ツノボーシネ。  
 角帽子ね。

A アレオ チャント ハメテネ。  
 あゆを ちゃんと はめてね。

B アレ <sup>ハ</sup><sub>xxx</sub> ハメマスィガ。  
 あゆ(エ) はめますか。

A ヤリョッタモンデスィ。  
 やったものです。

B モー ナラベズィロナンツィート ソリヤー ナカナカ ソノ イーソー  
 もう 並べ代 などというところを なかなか その 男が  
 (46)

ナ モンダッタソーデヤンスィネ。アー ヨソカラ じーチョンタ  
 な もりがった そうでござりますね。 ああ 他の地方から 見に来た

ナー コノヘンデ ヤリョッタモンデスィワ。  
 という この辺で やったものですわ。

D ソーデ イワユル アノ ハナダウエノブント オーダウエノブー  
 そゆで いわゆる あの 花田植 の合と 太田植の合  
 トワ マタ ナゴードスカ ヤリカタガ。  
 とは また 違うのですか 方法か。

B ハイ アノ ハナダウエ ツーブンワ ウスィクヨーノブンデシヨーガ。  
 はい あの 花田植という分は 牛飼養の分でしょうが。

D ウスィクヨーノブンデスィガネ。  
 牛飼養の分ですがね。

B ハー コリャー ツイガイマ スヨ。  
はあ これは 違いますよ。

A アレワネー アリャー ー。ー。  
あれはねえ あれは ー。

B アリャー シェン シェン ツイガイマ ス。  
あれは 全く 違います。

A タオエノ マツリ デスィダケンネ。  $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right)$  ソーダケン アリャ  
田植の 祭 ですたがりね。 それから あれは

ー アノ ビンゴノ ホージャ ホソイ マンダツケテ ヤーフォーデスィ  
あの 備後の方では 細い 馬鉈とつけて やりようです

ガネー。  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハー ハー} \\ \text{はあ はあ} \end{array} \right)$  ココデ アノ  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ココシヤ} \\ \text{ここでは} \end{array} \right)$   
がねえ。 ここで あの

ヤッタコトガ エツドアーデスィワ。  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right)$  アー ナンツィー  
やったことが 一度 あるですわ。 ああ 何という

(47) (48)  
クカネ アスィコノ メノコスィヤネ。  
ところかね あそこの 明の越 はね。

B アノ エボスィ。  
あの 井伏。

A ア エボスィノホー タワデネ  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$  ヤッタコトガ アー  
あ 井伏の方 峠でね やったことが ある  
が。  
が。

(49)  
B アサヤマ。  
朝山。

A ウン アサヤマ。  
うん 朝山。

B カツエモンツイ バクローガネー。  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \end{array} \right)$  アーガ  
勝右衛門という 博 勞がねえ。  $\left( \begin{array}{cc} \text{はあ} & \text{はあ} \end{array} \right)$  あれが

ヤッタコトガアーデス。 コリャー スイロカクニモネー イー イロ  
やった ことがあゝです。 これは 代と搔くにもねえ 色

イロ メーズインガオッテ。

え 和人が 居って。

(50)

A ツァーノ スイゴモーダコトノネー ウグイスノ タニワター トカ  
鷗の 樂 じもりおことのねえ 鶯の 谷 湧り とか

イーヤーナ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \end{array} \right)$  コノ スイロジツガアッテネー  
言うように  $\left( \begin{array}{cc} \text{はあ} & \text{はあ} \end{array} \right)$  この 代道があつてねえ

$\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \end{array} \right)$  コー フトツノ タエモツテエツテ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \end{array} \right)$   
 $\left( \begin{array}{cc} \text{はあ} & \text{はあ} \end{array} \right)$  こう 一つの 田へもつていつて  $\left( \begin{array}{cc} \text{はあ} & \end{array} \right)$

ツオカクヤーナモンダネ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \end{array} \right)$  ウスイオ グッノカク  
画と書く ようなものだね  $\left( \begin{array}{cc} \text{はあ} & \text{はあ} \end{array} \right)$  牛を 画の型

ニ アルカセラレヨッタ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \end{array} \right)$   
に あるか せた。  $\left( \begin{array}{cc} \text{はあ} & \end{array} \right)$

B ダケン ソゲサート ケー スイジエンテキニ  $\left( \begin{array}{cc} A & \text{アー} \end{array} \right)$  スイロテ  
だから そうすると つい 自然的に  $\left( \begin{array}{cc} \text{ああ} & \end{array} \right)$  代で

モナースイネ。

も なる (搔ける) しね。

D ソレカラ ウシイレテ アルカシャーヨカッタ  $\left( \begin{array}{cc} A & \text{ハー} \end{array} \right) \left( \begin{array}{cc} B & \text{ハ} \end{array} \right)$   
それから 牛を 入れて 歩かせればよかった。  $\left( \begin{array}{cc} \text{はあ} & \text{はあ} \end{array} \right)$

A ソレ サン<sup>xxxx</sup> サンスイーモ ゴスイーモデ ヤッタラーゾネ アルカシエ  
それ 三つも 五つ(頭)もて やつたであらうよね 歩かせ?

ルバカリ ~~~~~ ハー ソーダケニ ケー ソノ ソー  
ばかり  $\left( \begin{array}{cc} \text{はあ} & \text{はあ} \end{array} \right)$  それだから つい その それ



ニ スバ フサイレテネ。 ( D ハイ ) タンナカ サエニョワ  
は 柴 草を入れたね。 ( はい ) 田の中(は) 最初は

ソゲー スバノヤマーニタエナトコーニ ハエラシエテ ( D ハイ )  
そう 柴の山のようなところに (牛を)入させて

ハー トッ ドンドン フンコンデスィマーケニ ( D ハイ ハイ )  
はあ とんとん 踏み込んでしまつから ( はい はい )

ドローン ドローン スィレネ タオエガ オエラレン。 ( D ハー  
ビローン ビローン してね 田植か 植えられない。 ( はい

ハー ) ソエカラ ソノ タオエノ アノ タエコオ タタクモ  
はあ ) それから その 田植の あの 太鼓を たたく者

ンモ アノ フツィーノサゲダトフ ツィガーフネ ドーツケテネ ( D  
も あの 普通の 佐下田とは 違つたわね どうしてつてね (

ハイ ハイ ) ソエカラ ドーン ドーン。  
はい はい ) それから ビーン ビーン。

D ハー ドーツカー。 ( C ハイ )  
はあ どうを使う。 ( はい )

(52)

B ドーツカッテ ヤッパリ アノ イー コモリガヤル。  
どうを使って やはり あの 小森が行なう。

A アノ スィキヲヤーマスィタガ アゲナフーネ。  
あの 式をやりましたか あんなふうにも。

B ウスィ ウスィクヨーモ アーデスィワ アー。  
牛 牛 供養も ああですわ ああ。

A アレガ アノ タオエマツィーツィーデスカ。 ( D ハイ ハイ )  
あれか あの 田植祭 というのですか。 ( はい はい )

ヤリョッタ モンデスィワネ。

やったものですわね。

D ソレカラ マー イナネンノ キョージ タッタモ イーテイキヤ  
 とゆから まあ 一年の 行幸 順々に 言って行けば  
 ソゲシテマー タウエガスト アー コンダ ナニニナー マスカ  
 そうしてまあ 田植がすむと まあ こんなのは 何になリネスカね  
 ネ ドロオトシガアーマスカ イー……  
 どう落しかつ ありますか

B ハンゲツォーモンガ。  
 半夏というものが。

D ハンゲマデ イキマスカ。ハー ハンゲワ マタ ムカシャ ドゲナ  
 半夏まで 行きますか。 はあ 半夏は また 昔は どんな  
 ヤーカタデ ショックモンデスカ。  
 やりがたで していたものですか。

A ウ マー ハンゲノ マキーコスラエテ クーコター (C フフ……)  
 う まあ 半夏の うまき(粽)を 作って 食うことは (ふふ……)  
 エマンガロモ カワーマシェンネー。(一同笑う)  
 今頃も (昔と) 変わりませんねえ。

D ソーデ ヤスミダダケン。  
 そで (田植もみ) やすみだから。

A マ タウエー シマート タノクサガ ハエマステネー。(D ハイ)  
 ま 田植を 終わると 田の草が 生えましてねえ。(はい)  
 タノクサトーガ ラクニナイデスカケン。(D エー) ランキ  
 田の草取りが 楽 にないですから。(天気)  
 アツイニネー。(D ハイ) マー ソノ イワイダラージネ ハン  
 暑いにねえ。(はい) まあ その 祝をろうどね 半夏  
 ゲニワ フトトーリ マ タノクサ スマッテ。  
 にハ 一通り ま 田の草(も) 終えて。

(53)  
C タグーマフ イツイ イツゴロカラ マクーマニョッタダラーカネ。  
田車は 何時頃から ころがしたんだろうかね。

A ソーノフネー (B ソーデスイネー。)  
それのわりにー そうですねえ。

C タグマ マクリフ ----。  
田車 ころがしわ ----。

(54)  
A オソイト マッシャイネ。  
遅いと 思っなさいね。

B オソイスイネ。 ( A ハー )  
遅いよね。 ( はあ )

(55)  
D イヤ タマタマネ じョッタラ ソノ ハッタンズリガ アリヤミ  
いや たまたまね 見ていたさ その 八反ずりか ありまい  
デネ。  
えね。

B ハー ハッタンズリネ。  
はあ 八反ずりね。

D コンド ハッタンズリト タグルマノ ファイノコガデラキマニラネ。  
こんど 八反ずりと 田車の あいつが 出て来まね。

A エー。  
ええ。

C ドゲナモンダッタデシューカ。ハッタンズリドマ スッチョーマスワ。  
どんなものだろうでしょうが。 八反ずりなとほ 知っていますわ。

D ハッタンズリノ ツメガネ ( C ハイ ) マエト ウシロニファッ  
八反ずりの 爪かね ( はい ) 前と 後にあって  
テ ( C ハイ ) マンナカエ タグルマヒトツワツコガ ハイッ  
 ( はい ) 真中へ 田車(の)ひとつ枠が 入っ

トリマスワ。(C ハー。A ハー) ホデ イッポンエデスワ。  
ていますわ。(はあ はあ) それで 一本 柄ですわ。

ハッタンズリトイッショテ (A ハー) (C ハー) (B ハーハーハー)  
ハ反オリと 一緒に (はあ) (はあ) (はあはあはあ)

(C ハーハー) ソエカラ ソノ ツズキニ (C ハー) ニオ、  
(はあ はあ) それから どの 続きに (はあ) ニ本

ンノ トリイサンノ ワクノ (b ハー) トッテノツイク タク  
の 鳥居さんの 梓の (はあ) 取手のついた 田

ルマニナッテ (A ハー) フターツ (C ハー) ワ ココエ  
車になって (はあ) ニッ (はあ) わ ニニヘ

(C ハー) (B ハイ) フネガツイデ (C ハイ) トユー ドー  
(はあ) (はい) 舟が ついて (はい) と 言う どうも

モ ジュンバンニナッ 4ヨー (B ハー) ヨーデスガネ ノーキグカ  
順番になって (はあ) ようでるかね 畚桶具が

ラミルト。

すみと。

A マー ソノ タノクサトリガスィント ハンゲガキテ (B ハー) ソノ  
まあ その 田の草取りが すむと 羊夏が来て (はあ) その

マキ コスィラエテ クベーフケデスィワ。

5まき(5) 作って 食べるわけですわ。

D ハンゲマデニ ホンナラ タノクサトッテニマー ワケデスカ。  
羊夏までには それから 田の草 取ってしまう 訳ですわ。

C エンヤ ウソデスィワ。(A ハー) エンヤ ハンゲカラモ トー  
いゝえ 遠いすわ。(はあ) いゝえ 羊夏からと 取

マショッタガネ。ドヨーノ ホンネ キューワ スィローゴローグナ  
つて いましたかね。土用の ほんとに 今日は 四郎 五郎 石<sup>(56)</sup>

ンツィーデ トーマショッタガネ。

なぞと言って 取りましたかね。

(57)

A ウン ソゲナスィブンツ トリヨッタユトカアーカエネ。

うん そんなとくは 取っていたことをあがえね。

C ハー ソレデ オージェーステ オーグサ トリマショッタフ。(A  
はあ それで 大勢して 大草(沢山の草) とっていったわ。

デデトルニャー ソゲニトリヨッタダラーカ ウーン。) イマニゴ  
手で取るには そんなに 取っていたらどうか ううん。 今頃

ロコソ マ ハンゲマデニ クエグエ トッテスィマーケレドネ。(A  
こそ ま 半夏までには たいてい (草E)とって(もうけね)ね。

ハー ) ハタケモ シェニャーエケマ シンダケン ソノアエダデ。(A  
はあ ) 畑も しなけねばいけませんのだから その間で。

ハー ) ダケネ マー イツィバニクサドマ ソリャー ハンゲマデ  
はあ ) だから まあ 一番目の草をど それで 半夏まで(に)

トーカモスィレンガ マー ハンゲカスィンデカラ。

取るかも知れんか まあ 半夏がすんでから (草E取った)。

D ナンバンマデ トリヨッタデショーカー。(C ハー ) ナンバンマデ  
何番(草)まで 取っていたでしょう。(はあ) 何番まで

トリヨッタデショーカー。

取ったでしょうか。

C ニバンクサマデ トーマショッタ。ニド トーマショッタケンネ。

二番草まで とっていった。二度 取っていったからね。

D サンバン。

三番。

C ソーデネ ワタスィ フノ マンダ フノ オカーサンノ マメデ  
そうでね ね あの まち あの お寺の 元気で

- D オチノハナシマデワ デテコートワ オモワダッ ク。(C ハハハ...) (私 一 同 笑 う )

## 注記

- (1) ダマツテ といっているが、意味不明。無言で一軒懸命の意であろう。
- (2) 田植の指揮者、役名。
- (3) イエタモンダとも聞こえる。
- (4) (5) 音韻に詳述したが、カスリ(餅)は  $k\alpha s\alpha r i$  であり、 $\alpha r i$  は  $s\alpha$ ; または  $w\alpha$ ; と音変化、ここでは  $k\alpha s\alpha$ ; となり、着物は  $k i r i m o n o$  であり  $i r i$  は  $j\alpha$ ; となるので  $k j\alpha: m o n$  となる。
- (6) いつの間にかの意らしい。
- (7) 聞こえにくく、グルグルであろう。
- (8) フトと聞こえる。
- (9) イーヨッタに聞こえるが、ウエーヨッタ → イーヨッタ であろう。
- (10) ホカラとも聞こえる。
- (11) 里(実家) を指す。
- (12) 休憩から休憩までの間を指し、作業時間の単位を示す語。
- (13) 取り付くとサバルという。子供が母親の着物にサバル。狐が人にサバル。ここでは植えはじめをいう。
- (14) サバリハジメヨーと言いたるところ。
- (15) カラネは不要の語であろう。ソレデエソーデカラニ、ソーデカラネ などという。
- (16) うれしがったと言いたるところ。
- (17) オマエサンは目上に対する言葉。
- (18) テヤはト言エバ(トイヤー → テヤ)と思われる。
- (19) 株と株との間隔。
- (20) 田植定規。
- (21) 梓。
- (22) マトワリの意味不明。
- (23) 綱をはって目じるしとしての田植。
- (24) (25) 共に擬音語であり、寸法なしの適当な植え方を指している。
- (26) シンナをムンナといっている。聞きなれない言ひ。

- (27) ホンナラはそれなりという時に使う。この場合特に意味はない。
- (28) 強めによくメをつける。トコロによくつける。
- (29) 注(15)参照。
- (30) コナは人を指す場合は軽侮を含む。コノとか彼とかに当る。
- (31) 注(15)参照。
- (32) 音韻の部に説いたが 植え子 は  $u e r u \rightarrow u j a e$ 、それにトコロがつき、ウヤエトコロ  $\rightarrow$  ウエアートコー と変えられた。
- (33) マクルはころがすの意。出雲ではよく用いる。
- (34) 植える音。
- (35) 不明
- (36) 進行形。出雲では過去にしか用いない。
- (37) ゴザンスはガザリ高い敬語。
- (38)(39) 共に代掻きのコース(通路)の名称。
- (40) 下りの最も敬意ある表現。
- (41) 代掻きのコースの一つ。
- (42) 水田の畦にかこまれた一区画をクボという。窪の漢字があてはまることが不明。
- (43) 撫でる  $-n a d e r u \rightarrow n a d j a e$  であるがナーダに近しい。音韻の項(1)参照。
- (44) 仕事の後始末とする牛。
- (45) トコロエと聞こえる。角にかぶせるものと角帽子
- (46) ございまちのやまくたけた言いかた。ゴザンス  $\rightarrow$  ヤンス であろう。
- (47) クは区ととれ子か、本人はトコ(所)と言ったつもりのものである。
- (48) 明の越は地名。ヤネと聞えるが、ワネらしい。次の行の井伏も地名。
- (49) 朝山は姓。畜産家で朝山勝右衛門という人。
- (50) 鷄ツル  $t s u r u \rightarrow t s w a :$  となるためのツァーとなる。
- (51) 太鼓の一種、横から打つ太鼓。
- (52) 部落名。
- (53) 除草に使う道具。グルグル回して土を起す鉄製の小さい車。



(54) と思ひなごころは、ト思ワッシャイ → トマッシャイとなふ、玄く出雲地  
方を用いる。

(55) 四車の前身で、板に爪をつけ、柄をつけた除草機。

(56) 四日目、五日目の意。

(57) アーカネと念と入れとアーカエネ。

(58) 司会者（杉原代）の家号。

## 4 盆と祭

話(手)

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)          |
|------|--------|-----|---------------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ      |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ      |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ       |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ(司会者) |

D ボンノギョージワ イマンゴロアンマリカワーマセンカ イマンゴロト。  
金 の 行 事 は 今 頃 (と) あ り 変 わ り ま せ ん か 今 頃 と。

B アー ボンノギョーザナンカ カワランジャー アーマヘンカ。(D ハイ)  
あ あ 金 の 行 事 な ん 変 わ る な... の で は あ り ま せ ん か。 (は...)

A トクニ カワリャー スイマシエンネ マー ボンオドリ エライスイマシエノ  
特 に 変 わ り は し ま せ ん ね ま あ 盆 踊 り (近 年) 大 変 し ま せ ん わ。

フ。ハー ハー ケー エマンゴロノヤーネ テレビガ アー シナ  
は あ は あ つ い 今 頃 の よ う に テレビ オー あ り の で は

(1)

スイネ スイマシタケネ バンニャー ワケーモノ テラ モー ミツノ  
ないね。 (ますのた)から 晩には 若い者(が) 出て もう 道の

ハタデデモ ツイト ナルイト ロガアリャー スイキ ソノ ヤーハ  
端ででも 少し 平坦な所があれば すぐ その 「やあは

トナイテテ オドリ (C へへ……) ショッタジケンネ。 ボンニャ テラ  
と「な」ると 踊り (へへ……) して「た」る「が」ね。 金には 寺

ノ ニワエエッテ スイゴンツニャー ショーコー スイノバンダ スイヨ  
の 度へ行って 十五日 には 妙綱寺 の 晩だ 十四

ツカニャー アンヨースイバンカイノ。

日 には 安養寺 (の) 順番が「の」。

B スイロクンツカ アンヨースイノバン。

十六日か 安養寺 の番。

A スイロクンツカ アンヨースイノバン イーヤナコトデ ソノ テラ  
十六日か 安養寺 の番 (と) いろいろなことで その 寺

ノニワデ オドリョッタケンネ。 ダケン ボンノ ツキニナリャー ケ  
の 度で 踊っていたからね。 だから 金の 月になれば つ

(2)

(3)

ー マイバン ソノ ウターゴエト ウタゴエガ キキヨッタ。 イ  
い 毎晩 その 歌う声と 歌声が 聞いていた。

マンゴラー アーマヘンフネ。

今頃は ありませぬわね。

B ボンマエニナートネ ツマリ ソノ ケーコトカネ ナントカデ

金前になりとね つまり その 稽古とかね 何とかで

モー ウー ボンオドリノ イー ワ サカンデゴザンショッタワ。

もう うう 金踊りの 盗んでございましてわ。

ボンダトイヤー ケー オドラニャ イケンヤーナ ココロガスチヨツ

金だと言えど つい 踊らなくては いけないような 心かしてワ。

テ。

D (4)  
クドキノ ダシモンモ イロイロ アッダデシユーガ。  $\left( \begin{array}{c} A \text{ ハー} \\ \text{口説の} \text{ 出し物も} \text{ いろいろう} \text{ あったでしょうが。} \text{ はあ} \end{array} \right)$   
 $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$

A  
イロイロ アーマスタネー コナエダ テレビデモ フノ ヤーマ  
いろいろう ありましたねえ 先日 テレビでも あの ヤリネ  
スタガネー  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハイ} \\ \text{したがねえ} \text{ はい} \end{array} \right)$  マー オド…… フーヤナンカエ ヤッ  
また 踊(リ)の) 格好やねど、 やは  
パー カワリヤースイマシエンフ。 ソーデモネ アカサイト イマト  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハ} \\ \text{リ} \text{ 変りはしませんわ。} \text{ それでもね} \text{ 昔と} \text{ 今と} \end{array} \right)$   $\left( \begin{array}{c} \text{はい} \\ \text{はい} \end{array} \right)$  ハー。  
はあ。

D  
コナエダ コマキノホーテ ナントカイーチヨーマシタヨ。 4ー  
先日 小馬木の方で 何とかまっまいましたよ。 ぐん  
コノゴロ オドリ ショーリャクサーヤ = ナッダノーターテ (一回笑)  
この頃 踊(と) 省 田舎 するように だったのとおと云って  
(キセルの音) モー ナート イーテキカセンケン (笑、おかし  
もう 少し 言っ2聲)かせはいから  
ら) ソーカラダグナ ナーヤーナコトデスタ。  
それから(それが原因)だかな というような ことですね。

(5)  
B  
コーノ コーノ インキョサンノ オトーサンガ コノホーデワ イ  
この人の この人の 隠居さんの お父さんと このほう(この地方)では  
ー アノ オドリノ オンドトーノネ イー マ アドキトイーヨ  
あの 踊りの 音頭とりのね ね 口説と言って

ッタモンダ<sup>カ</sup> アー オドリノウタノ イー マー イー タイテ  
いたものだから ああ 踊りの歌の まあ たいて

ー マ ジョーズツィーダイ ( D ハイ ) ダイタイ ハー コノ  
ハ マ 上手というのか ( はい ) たいてい はあ この

ホー コノホーノ オドリウ タイター ココノ コノ オトーサ  
ハ この方の 踊りは たいてい この この お父さ

ンガ スィショーサンデスィワ。

んか 師匠さんですわ。

D アー ソゲデスカ ( B ハー ) クトキオヤッテオラレウ。  
ああ そうですが ( はあ ) 口説をやってもらった。

B ハー ハー コリヤー イロイロナ アー トテモ ソラ イー ケ  
はあ はあ これは いろいろな ああ とても それは よい 芸

ーガ ジョーズィダッタモンデスィズィ。オドーコトヤネ アゲナウタ ソ  
カ 上手 だったものですよ。 踊るにせやね あんな歌 そ

(6)

エカラ イー アタゴサニノ フェネ ( D ハイ ) コーガマー  
れから 愛宕さんの 笛ね ( はい ) これか まあ

ジョーズィ コノホー ジー マー。

上手 この地方では まあ。

(7)

A フィフキ タイコタタキナー インナコーノツィツィオヤダリョッタモン  
笛吹き 太鼓 たたきなあ 皆 このの 父親 ちんち もの

ダ。

だ。

B コノオトーサンデスィ。ホーダケン アー ギオンバヤスィツィー アノ  
このお父さんです。 それがダ ああ 祇園 囃子 という あの

フィーノ フィー フィー フキカタワ コノホー ジー ココノ オトーサンホガ  
笛の ふふ 吹き方は この地方では この お父さんの子

スィシッヲモンワ ナカッヲモンデスィ。 ( D ハー ) ホーダケン  
知った者は ほかったものです。 (はあ) それだから

コーネ ツィイラ フー タ モナー アノ フィエオ フー タ モナー ウツィネ  
この人について 吹いたものは あの 笛と 吹いた者は (おの) 家(の)

(8)

モ ギオンバヤスィモ スィツチュー。ヘー エマンガロノスィーフ アン  
(家族)も 社 団 嘲子も 知っている。もう 今頃の人は あま

マリ オーカク ……。

り おおかた (知っていいい)。

A アー エマンガロノモノワ スィランネー ( B ハイ )  
ああ 今頃の者は 知らんぬえ。 (はい)

D オーマキノ アタゴカンワ マ シナガツデスカ コマキハ ハナガ  
大馬木の 愛宕さんは ま 七月ですが 小馬木は 八月

ツデスカネ。

できかね。

B ハイ ソーデスィネ。

はい そうですね。

D ドゲネスカ ダシモンノ ジョーキョーヤ ナンカエワ カワッラオリマ  
どうですか 虫と物の 状況や何かは 変わっております

センデスカ。 ( B マー ) ヤッパリ ナンダエデスカ カシ  
せんですか。 (はあ) やはり 何んでもおか 正

ラウサト。

打ちと。

B コノホーワ カワッ チョーマスィワ。 ( A ハハ…… ) カイキニワ シ  
この方は 変わってまいりますわ。 (はは……) 最近では

ンフトニナッ チョー。(一同笑、ここのとこを子明) ヤランダケン。  
しなないことになっている。 やらなりのおかし。

A オーマキ サンブラク = ワケテ マッ 4 ヨー = ネ。 ( D ハイ )  
大島木(と) ミツの部落に 合けて やつて いるのにね。

サンブラク ノ バンガキテモ セラヘンダケンネ。 ( D ハイ ) ココ  
ミ部落の 順着が 来ても やつて いるのだからね。 この  
ンホーノモナー。  
地方のものば。

D ソゲイー ユトダッタ デスカネ。  
そういふことを したのかね。

A ハー タンボット オートゲブラクガネ ( B ボクガ ) フタフ  
はあ 反保と 大崎部落かね 僕が ニ部  
ラウ マー バッカード。  
落(が) やるばかりで。

B テラノ ホンドーノ スィタニアー ハー ツー ト モスホスィ シェター (9)  
寺の 本堂の 下にある もう ところ 虫喰いしたけれど  
イケンヤーニナッ 4 ヨー ( 不明 )  
いけりょうに なっている

C サンネレ = イ ツィトドマー スィナハラニャー ホンニ マタ ( B ワ  
三年に 一度でも (虫喰い) したからね ほんとに また  
スィレー 。 D ワスレー ワスレー。 ) モー ワスィレラ スィマーヤ  
忘れる 。 忘れる 忘れる。 もう 忘れた しょうよ  
ーニ ナーマスィケンネー。 ( 一同の語混雑不明 )  
うに なりますからね。

A ファーフキドマー オランヤーニナー。  
虫喰などは いけないようにする。

B アゲダネー。  
ああだね。

D フエフキー オラーシマセンヤーニナッテ  
 笛吹き 居らな。 ようになって。

(10)

A ハー ドータタキ オスィエアーモンガ イスィハラ  $\left( \begin{array}{c} D \\ \text{ハイ} \end{array} \right)$  ナン  
 はあ 胴たたき(太鼓たたき)教え子 香か 石原 は...

ダエガノー アーガ フトリオーフ ドータタフコト マー スィッ  
 とかいう あれか? 一人おるわ 胴をたたくこと(と) 子あ 知っ

トー ナンナト。フエフクモナー スィラン オラン。  
 といふ 何でも。 笛を吹く者は 知らな。 居らな。

B ウメキサンガ ドゲ+カネ。  
 梅木<sup>ん</sup>さか(いさか) ぐんはかね。

C フクサダサンノ マー フカレマスィサナ ワカイ ワカテデ。  
 福定さん か 子あ 吹かれまということぞ 若。 若手ぞ。

A ダエショードマ  $\left( \begin{array}{c} C \\ \text{ハー} \end{array} \right)$  スットーラレーカモスィレンネ。  
 少々は はあ 子あ 知っていられるかも知れんね。

C ソエカラ ノバラフクサダサン ワカテデ。  $\left( \begin{array}{c} A \\ \text{ハー} \end{array} \right)$  ソエカラ  
 それから 野原 福定さん 若手ぞ。 はあ それから

ウメキサンヤネ グラエナコトジヤイダラーカネ スィランワ。  
 梅木さんやね ぐらゐなことではないおるうかね (ほかに) 知らな。わ。  
 (11)

D ヨコガユーテ ナンデスガ ケト アタゴワンノトモモ ボッポッ  
 横座言。て なんぞすわ 少し 受宿さんの 行列も ほっほっ  
 シナカンセニヤ (一同笑う) イケマセンジ。  
 しなされねば いけませんよ。

C ワタスィラツィンタイナ モンデモネ オナゴガ タンボノホーエデテ  
 わたしたちのようは ものでもね 女子が 反保(地保)のおへ出て  
 モ ホンネ フトノ タンボノホノシーノ アゲイワレマスィスィ。  
 もほんとに 人の 反保のテの人の ああ言われずすよ。



マー ホンネ カワフガスノ ホーノニヤ オヤカタサンバツカー オ  
 まあ ほんとうに 川東(地帯)の方の(人)には 親方さん ばかり あ

ラッ シューダケネ ホンネ アゲナ アノ ナンダエ カッ シューシエン  
 られるのだから ほんとに あんば あの 何も (なすりなり)

コトナンツイコトイーテカラ (笑... ながら)  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハハハ...} \\ \text{ハハハ...} \end{array} \right)$  ホンネ  
 ことなどいうこと 言って ほんとに

ドマカサレテ。

ごまかされて。

A ワカエモンが オランヤーナツタカラ ヤメタデス。 $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハイ} \\ \text{ハハ} \end{array} \right)$   
 若い者が 居るまいようになったから やめたです。

ソイツイオ ケー イッペンヤメート ヨー クタンフーデスワ。  
 それを つい 一度 やめると よう (二度と) 出来ないうてすわ。

$\left( \begin{array}{c} B \text{ ハー ハー} \\ \text{ハハ ハハ} \end{array} \right)$

D トクニ ドータククモン ガッコー コドモデスカラ  $\left( \begin{array}{c} A \text{ ハー} \\ \text{ハハ} \end{array} \right)$   
 とくに 胴もたたく者(は) 学校(に行く)子供でスカラ

コレガ マタ ニンズーガ ソロワンデ。  
 これが また 人数が 揃わなくて。

A ニンズーガ ソロワンデスワ。 $\left( \begin{array}{c} b \text{ ハー} \\ \text{ハハ} \end{array} \right)$  トコロが ドーオ  
 人数が 揃わないうてすわ。 と3カ 月同と

ソイツイアラベラレター フトツデモエーケン ヤレツイーダ オラネ  
 三つ 道べられては 一つでもよいから やれというのだから

—  
 ねえ。

B マー ソゲダフネー。  $\left( \begin{array}{c} A \text{ ウーン} \\ \text{ウーン} \end{array} \right)$  エー。  
 まあ そうだねえ。 ええ。

A ソゲスィテ デントー ノコエトキヤー。  
 ようして 伝統(E) 残しておけば。

C ソゲカーカ ナンゾ ムラデ ホゾンクワイとタエナモノ コスラエ  
 そうすゝか 何か 村で 保存会 のようなもの 作。

テ (A アー) ケー ドッコモ ド、コノコラツモ ホンノコ  
 て (ああ) っい どこも どの子供達も ほんとう

ター ウーン ナンダエデシケンネー (A ウーン) ホゾンクワイ  
 は ううん 何ですからねえ (ううん) 保存会

ニステ マ カンネンニ イツドナート。  
 にして 三 三年に 一度なりと。

A ニギヤカニ ヤーモンフ ホソーテモエーケン (C フーン)  
 にぎやかには やすものは 細くてもよいから (ふうん)

デントー ノコエトキヤー マタソレオ フツイーニ イクトキニャー  
 伝統(E) 残しておけば また それを 普通に 行く時には

オーキンナツテ ニギヤカニナー。(B ソーダツネ)  
 大きくなって (いつかは) にぎやかになる。 そうだね

A ココンホーモ イツバンデ ヤリョッタユトガ アーダケン。(C エー)  
 この地方も 一番目で やっていたことが あるのだから。(ええ)  
 (12)

B エー ソー ソー (間) マ ムカシワ イー コノイツブダンノ  
 ええ そう そう 昔は この一合団の

ノ マタゴサンノ ダシモノオ ニーツイヤーナコトデ (C ハー)  
 の 愛宕さんの 出し物と 見るというようなことで (はあ)

イツバンデ ヤリョッタユトガアー。  
 一番目で やっていたことがある。

D カサホコノウエノ カザリワ カガリツケツ アヤツリヤナンカエ  
 傘 鉾 の上の 飾りわ 飾りつけは 操り(人形)など

コマキノバヤイニアーマス。オオマキノバヤイニワ ドゲデスカエネ。  
 小馬木の場合には(は)あります。 大馬木の場合には どうですかえね。

(13)

B オマキノ バヤイニ アリョツツィラー アルアル ダイダイ (A  
 大馬木の 場合に(モ) あったであろう あるある だいたい

ホー ) ホンスイキニヤリヤー (A ホー ) アーマスイヨ。ハー  
 ほう ) 本式に やれば ほう ) ありますよ。 ほう

アノ オドーヤーナヤツィガネ。 (A ハー )  
 あの 踊るよう なのがね。 ほう。

(14)

A マズ ソーサイコー スイトイーノワネ ハンヤノ エマンゴロ ナンツ  
 ます 総裁 講師 というわけね 羊屋(屋号)の 今頃 なんという

(15)

ーカエノ アリヤー スィツショーワ。 ハナーキーコトノ フンナート  
 がい の あれは 知っているわ。 花を扱うことなの 何でも

(B フーン ) フーン アーガ フトリオー。(器) ハー (器)  
 ふうん ふうん あれが ー人 ます。 ほう

ナンカ フェフキノ アノ カサノ フェリ ズーット コー ツィター  
 何か 笛 吹き の あの 傘 の ベリ(ふち) ずうっと こう 付くさ

ネ (D ハイ ) アリヤー ナンツィーモンダエ。  
 ね。 あれは なんというものか。

D ナンターマスカ。  
 何と言いますか。

A ハー アノ。  
 ほう あの。

B ナンツィーカイネ  
 何と言いますか。

A ナンツィータカエノ アリヤー ハンヤワ スィツショー ホカニヤー ヘー  
 何と言いますか あれは 羊屋は 知っている 外には もう

スワッパ モンガ オランヤナガ。  
知った しかつ おりないようたが。

B      イヤー      ねー。  
          い、やあ      ねえ。

D ソゲシテ、リャー コマキノ アタゴワンノホーガ ナート 4カニ  
 そうしてみれば、 小馬木の 愛宕 5600ガ 少く 昔流  
 1/2-オ ヤッ 43-マヌナー  
 E やってゐますなあ。

B     アー     コリー     マー     .      $\left( \begin{array}{cccc} 0 & 1 & 1 & 1 \dots \\ & 1 & 1 & 1 \dots \end{array} \right)$

A ソリャー デントーテキニ マイネン ヤラッ シャー ケニネ タエン。  
 そのハ 伝統 日ダニ 毎年 ヤリマスヨカシ 絶えん。

B    タエンガネ      アーイーコトデ      マタ      ミナラーテネ      マタ      アノ      イ  
          絶えんかね      ああ 昔うこひて      きた      見習ってね      きた      あの  
                                         (16)

一 ハナデモツクーコト マダ アー オフ アトエムケテ オク  
花でも作ると きた ああ 後へ向けて 送

- マナ  $\begin{pmatrix} D & \text{ハイ} \\ & \text{ハイ} \end{pmatrix}$  ナー マスィガネ。 タバコ スィ ユー ト ケー グエ  
 3 ような (ふうに) ナリ マナカネ。 休んで... も ヒ ツ... たい。

タエネ ナーナッ テシマー。

たいに なくなってしまう。

D アノー カザグールマノ タケノホネエネ  $\begin{pmatrix} B & H I \end{pmatrix}$  コガ マ  
あのうち 風車の タケノ骨へぬ ニウ

ゲルコトが　ワカランデネ。(笑いながら)  
曲げる　ことが　合かないでね。

B ソーデスネ。  
そうですね。

D (笑) ながら ) ナンギシタデスカ ( B ハイ ) ケ アゲナコ  
 難儀したのですか ( はい ) つい みんな？

トデスケンネ。ダモ... ( 間 )

とびすからぬ。でも...

## 注記

- (1) 理由と示すカウはこの地方ではケニ、ケネ、ケシの三つが用いられる。
- (2) ウターゴエとウタゴエに言い直したと思われず、ウタゴエがほろウゴエウであるべきである。
- (3) キキヨッウは進行形、キキヨッウにもなる。
- (4) 口説き。金歌のリーダー、または歌詞を指す。
- (5) コレノがコーノとなったもの。
- (6) 愛宕神社。
- (7) コレノ → コーノであるが、このコーノは自分の父親を指しているから、ココノの意。
- (8) もう少しをヘー少しというのは、この地方でいうが、本雲北部は言わない。
- (9) ウシ(牛)はオシのようにウはオとなるが、ムシ(虫)はモシとなる。ムカシ(昔)はモカシ、時にムカシに近い対応関係がある。
- (10) オシエル(おしゑる)は音韻変化にしたがっておしゑじゑとなり、録音ではオスゑアー、オスゑヤー、オスゑヤエなどと聞こえる。
- (11) izzoriの横座から出た語。横から口を出すこと。
- (12) 地区の別名。
- (13) アリョツツィラーはアリョツタラーと同じ形。共通語のタロウは本雲、鳥取県ではタラーとなる。ツィは文語の完アの助動詞の「つ」であり、石見ではツローの形で出る。
- (14) 総裁または総宰だろうという。講師はつけたりの事。それ以上のことは分からず。
- (15) 切子はkiriでkjゑになる。司会者はキヤーと言うが、キーコトに聞こえる。
- (16) 作はtsukuru → tsukwゑになる。

## 5. 箱メリ

話(手)

| (略号) | (氏名)   | (性) | (生年)     |
|------|--------|-----|----------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ  |
| D    | 杉原 清一  | 男   | 昭和11年生まれ |

D イネカリノ ハジメデスワネ。  $\left( \begin{smallmatrix} B & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{smallmatrix} \right)$  ネンチュー ツズケテ  
箱メリの 初めですわね。 年中 続けて

イーマスト オハツホオア<sup>(1)</sup>ギャー イーヤナコトワ サレマセンデスカ。  
言いますと お初 徳をあげる 言うようなことは できませんですか。

B ムカスワ ウツヤツ ヤリョッタガネ。  
昔は 私の家など ヤってましたわね。

D ダイコクサントコロエ。  
大黒さんのところへ。

B ダイコクサンニ コー  $\left( \begin{smallmatrix} D & \text{ハー} \\ & \text{ほあ} \end{smallmatrix} \right)$  タバーニシテ アゲテネ。  
大黒さんには こう 東にして 上げてね。

$\left( \begin{smallmatrix} D & \text{ハイ} & \text{ハイ} \\ & \text{はい} & \text{はい} \end{smallmatrix} \right) \left( \begin{smallmatrix} C & \text{へー} & \text{へー} \\ & \text{へー} & \text{へー} \end{smallmatrix} \right)$

D タバニシテ モッテ イカレヨッタデスカ。  
東にして 持って 行きなさいってわね。

B イヤ ア タバシヤ コー マー ツーサイ。  
いや あ 東では こう まあ 小アリ。

D  $\frac{\text{ハイ} \quad \text{ハイ}}{\text{はい} \quad \text{はい}}$  ツーサイタバデ ハー。  $\left( \begin{smallmatrix} C & \text{へー} & \text{へー} \\ & \text{へー} & \text{へー} \end{smallmatrix} \right)$   
小アリ 東で ほう。

B ウツヤ ツニャー イー ウツノウラガ <sup>(2)</sup> ロースインガ アゲナコト  
 私の家などでは 私の家の私(私)の 老人が あんなこと

サシラヨッタニ  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$  イート スィーニカナカナニ ナ  
 させられていた ナニ株 は"ダリに な  
<sup>(3)</sup>  
 ーデ<sup>ニ</sup>スィ<sup>ニ</sup>デ<sup>ニ</sup>ネ。  
 ですね。

D ジューニカナニ ハー。  
 ナニ株に はあ。

B ハー スィーニカナイヤー イマンゴラ コゲンナー。 $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$   
 はあ ナニ株と 言えば 今頃は こんな(大抵に)な。 $\left( \begin{array}{c} \text{はあ} \end{array} \right)$

トースィフ コマイ コマイモンダ。 $\left( \begin{array}{c} C \text{ ハー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$  スィーニホンジャ  
 当時は 小じい 小じい ものだ。 ナニ本では

ナカッダケン スィーニカナ。  
 なかったから ナニ株。

A カナダフ。  
 株だよ。

C スィーニホンジャー アーマシシカネ ナンボモ コレクライナヤツガ  
 ナニ本では ありませんがね いくらも これくらゐやっか

$\left( \begin{array}{c} D \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right)$  ナンネンモ スィスィレテ  $\left( \begin{array}{c} B \text{ ソー} \\ \text{そう} \end{array} \right)$  ホンネ  
 何年も 燃れて  $\left( \begin{array}{c} \text{そう} \end{array} \right)$  はいとうに

$\left( \begin{array}{c} B \text{ アゲデスィフ} \\ \text{あみですわ} \end{array} \right)$  エラエ エラエホド クローニナツタノガ  
 ひどく ひどいほど 黒くなったのか

ナンスィーネンマエノガ コゲズーツ  $\left( \begin{array}{c} B \text{ ホイカラネ} \end{array} \right)$  アー  
 何十年前のか こうすうと それから あり

マショツタドモ。  
 ましたけれど。



B アー タケオユー<sup>xxxx</sup> コーワゲテネ サンバイワンニアギー メッ ツ  
あ あ けりこ こう こう 曲げてね さんはいさく(田の神)にあげ 三つ

ホド タテラカエテ アゲターナンカ スイマヒョツタ。ソエカラ イ  
ほど 立てて あげたりなんか していました。 それから

ー ツカクノ ウー カンクントコーエ モッテエッテ イー ン  
近くの 神様の所へ 持って行って

ナエタリネ。ソエカラ イー マ ソエカラサキ ヤキゴメー ツク  
供えたりね。 それから ま それから先 焼米 作

ッテネ。

ってね。

(4)

D ン フライコメ  
う ふらい米

B ア フラエコメ ( D ハイ ) フラエコメ ツクッテ イー カ  
あ ふらい米 ( はい ) ふらい米 作って ……

ニサンニ ソナエタリ スイマヒョツタ。

神様に 供えたり していました。

D フライコメワ コリヤー キマツタダネージャラーガ タウエーネ セ  
ふらい米 これは 決まった(習慣)ではなかったが田植に

ワニナツタトコロネ クバーツタフンカ ショツタヤーナ キモサー  
世話になった所に 配ったりなど していたような 気がする

デスガ アギンコト ヤッバリ ショツタモンデスカ。

ですか あんなこと ぜっばり していたものですか。

B サー ネー イー ウツヤツ ツゲナコトオ スイマヒヤツタ ムカ  
さあ ねえ 私の家など そんなことを してせんでした。昔

スイワネー ショツタカエ スイレマシエンガ。 ( D ハー )  
はねえ していたかも 知れませんか。 ( はあ )

A エマンゴラー フラエコメ アンマリ シェンジヤーネーカ。  
 今頃は 小さい米 あまり しないではないか。

C ソデーカモ スレマシェン。  
 そうかも 知られません。

D コマイトキ =  $\frac{\text{シッ 4 ヨーダトモネ}}{\text{小さい時に 知っていたけれどもね}}$   $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハイ} \\ \text{はあ} \end{array} \right) \frac{\text{タウエガ オセ}}{\text{田 木直(か)で"おせ}}$

$\frac{\text{ワニナ ッ タト コーエ}}{\text{話になった所へ}}$   $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハー ハー} \\ \text{はあ はあ} \end{array} \right) \frac{\text{ソノ 4 ヨンホー ワテダトモ}}{\text{その 少しずつたけれども}}$

$\frac{\text{ソノ ハツドリダ イーコトデ}}{\text{その 初取りだ(と) 言うことで}}$   $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right) \frac{\text{フライゴメニシ}}{\text{ふらい米にし}}$

$\frac{\text{テ}}{\text{て}}$   $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right) \frac{\text{モッテ エカシヨッタ}}{\text{持って 行かせていた}}$   $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right) \frac{\text{デスガネー。}}{\text{ですがねえ。}}$

C ハー  $\frac{\text{サン スイゴー ワテネ}}{\text{はあ 三 四合 ずつね あつね}}$   $\frac{\text{アノ ハー オヤガ}}{\text{あつね 親か}}$   $\frac{\text{モッテ エカシヨ}}{\text{持って 行かせ}}$   
 $\frac{\text{ツタケン フラエゴメ ハー}}{\text{ついたから ふらい米(と) はあ。}}$

B アゲデ。  
 ああで。

C オマエサン ツモ マンダ フーン ソゲンコト オボエ ヴォーナハー  
 あなたがたも また ふうん そんなこと 覚えていなさ  
 か。  
 か。

D ナートワネ。  $\left( \begin{array}{c} C \text{ ハー} \\ \text{はあ} \end{array} \right)$   
 少しはね。

C ワスィヤ ツィガ コドモノトキネ フラエコメ ツーダデ イマノハナスィ  
 私達が 子供の時に ふらい米 というで 今の話

ネ サンスイゴーフテ  $\left( \begin{array}{ccc} D & ハイ & ハイ \\ & はい & はい \end{array} \right)$  スイー フラ スイー バコ  
ね ミ四合すう じやう ちやう

ニイレテネ モッテイカシラレマ ショッタ。ドコエモッテエケ カネ  
に 入れてね 持って 行かせられていました。 どこへ持って行け かし

コエモッテエケ。

こへ もって行け。

D ソーダッダダラーカ。

そうだったんだろうか。

A エマンガロモ ヤッパー フラエゴメ サッシャーカ オマエントコロ。

今頃も やっぱり ふぶい米 作りなすか あやふふとこ

C ヘヘ-----スィヤスィマシエン。(一同笑う)

D トント ~~~~~ シマセンネ。

とんと

しませんね。

B タマニネ タマニ コー ムナクツノ ヤオイコメガ イネーオー

たまにね たまに こう 水口の やわらかい米が 稲を刈り

スィブンニャ ヤー オ ソノ イー オラカ ムカスィノ モンダダケン

頃には やあ お そり ねが 昔の稲たから

コスィラエテ コドモニ タベサシェー。  $\left( \begin{array}{cc} D & ハー \\ & はあ \end{array} \right)$  イマンガロ

作って 子供に 食べさせた。 今頃

ワネー アレ アノ エッターナニカ スィマスィテモネ  $\left( \begin{array}{cc} D & ハイ \\ & はい \end{array} \right)$   
わねえ あれ あの 煎ったり ねど しませんね

モ アノ コメニサーユトガ ユット フズィユーニスィテネ  $\left( \begin{array}{cc} C & ハー \\ & はい \end{array} \right)$   
も あの 米にすることか ちやうど 不自由にしてく

マー シーマイキニイレテ ナンタビモ スィヤー コメニャナーマスィ

まあ 精米機に入れた 何度も すれば 米にはなります

ダトモネ ムカス、ノヤーネ ス、イシヤデ ツクトカ ナントカ イーヤ  
 けれど、もね 昔のように 水車<sup>で</sup> 搗くとか何とか 言うよ

ーナコトガ ナンダイ アーマヘン ス、マシエンダケン。ダトモ マ  
 うな コトガ 何んにも ありません (きせんのち)から。 けれど、も

ホトンド ス、マシエンネ。

ほとんどの しませんね。

D デアリャー フライコメツ アノ スルコメ ヒンシュガ キマッ<sup>チョツ</sup>  
 で、あれは ぶ、い米は あの すき米 品種が 決まってい

タツク マー ハヤ イケバン ハエーヤツニ ナーワケデ、ニョーカ  
<sup>××××</sup>  
 たわけ ちあ 一番 早、いやつ(米)に なりわけでしようか

う。

う。

B ハイ マー メス、ラス、ーガ エーデ、ス、ダケンネ。(D ハイ ハイ)  
 はい ちあ 珍らしいのか よい、ですのちからね。(はい はい)

ワシトートサエ イーヨッ<sup>タ</sup>モンダケン

早稲取りとてえ 言っていたものだから

D ハー ワシトリイーヨッ<sup>タ</sup>ダカ (B ハイ) アレオ。(B ハイ)  
 はあ 早稲取り(と)言っていたが (はい) あれを。(はい)

ハー ハー。

はあ はあ。

B アー ハヤイノガ トク<sup>タ</sup>ョーデ、ス、デネ。ソエデ、イー ゴクワシデ、  
 ああ 早、いのか 特徴ですでね。 それで 極早稲で

(D ハイ) トッテ マ メス、ラシー ス、マイオ ヲクッテ  
 はい 取って ち 珍らしい 新米を 作って

(D ハイ) ソエカラ イー カ、サニニ ソナエマシテネ イ  
 はい それから 神様に 供えましてね



A ソゲダラーノ ブンカガイガ ノコッヤョー。  
 そうなろうのお 文化殿が 残っている。

B アー アル。  
 ああ ある。

D ホンナラ オラ マダ ソノ ウワテ エキマスシヨ。 マダ ツカ  
 せぬが ね まね その 上手に 行きますよ。 まね 使  
 ー 4ヨーマス。  
 ってます。

A ホーン ソゲーデ ゴザスカ。  
 ほおん そうでございますか。

D (笑) (タカス) ノーグヤニキテ アキニコト イーテ イケンダ  
 農具屋に来て あんなこと 言って いたや。

ドモ。(笑)  
 けれども。

B タネー トッター ナンカイ スーダネ ケッ、キョク イマ マンタ  
 種を 取ったり ね するのね 結局 今 ね  
 ツカワレートコ アーマスヨ ホカニ。(A フーン)  
 使われる所 ありますよ 他に。(ふふふ)

D タネトリ = ボリー ボリー。  
 種取りに ボリー ボリー。

B アー ソー ソー (D ダイジローブデス) (A ホーン) イー  
 ああ、そう、そう 大丈夫です (ほおん)

イマンゴロノ ウー ナンデスワ イー ダッ、コクニ カネチリナ  
 今頃の 何人ですか 脱穀(機)に かけたリネ

ンカスー ツー ト コメンナッカリネ ドーフレガエッ、ターステ イ  
 びするといふと 米に なったリね 胴割れが 入ったリして い

ケンダケン イマ ムカス<sub>1</sub>ス<sub>1</sub>キオ アーデ カーツート ケー …。  
 けなりのから 今 昔式を あれで すまというと つい……。  
 (7)

D ケタクソダダケン  $\begin{pmatrix} B & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  カガマタガ エッハイ デデ。  
 下チくそだだから ガガまたか いっぱい 出る。

B ハー ホがキレマシテネ。  $\begin{pmatrix} D & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  (会話記録) ソーデモ  
 はあ 穂か叩かましてね。 それでも

マー アンジェンシェーガ アーマスワ。  $\begin{pmatrix} D & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  タネモント  
 まあ 安全性が ありますわ。 種物と

スィケーネー アンジェンシェーガ アーマス。 ソエカラ ブツァー ブツァ  
 してはねえ 安全性が あります。 それから ブツァー ブツァー

ー コギマシダケンネ エー マガッパ モニヤナ ニカエモ。  
 扱いますのだからね ええ 違ったものやなども。

D ハイ ハズセマスケンネー。  $\begin{pmatrix} B & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  (P27) ソーデマー  
 はい はずせますからねえ。 それでまあ

ムカシノ イネカリナーノワ ヲノ カルイッホーデシユー ソト  
 昔の 箱メリリというのは その メリメリーでしよう 外

デコイデ ナンケーヤーナユト アリマセンダケン。  
 で扱いて なんだというようなこと ありませんのだから。

B サー。  
 さあ。

A ソダーワ ゴザイマシエンツネ サキーカッタヤツァー ソノ サキー  
 そうは ございませしかね 先に 刈ったやつは その 先に  
ソノ サキー・ソノ ゴリゴリヤッテネ。  
 その 先に その ゴリゴリ扱いてね。

D サキー ヨーナデニ マタ ボツボツ ヤッテネ ソーデ ハデー  
 先に 夜仕事に また ぼつぼつ やってね それで 稲刈け

ニカイ ツカーヤーナコトガ アーデスカ。  
(7) ニ回 使うようなことが あるですか。

A ア ハデー アケテ マター ツギ カキヤ ツヤナ コチー アー  
あ 箱がけを 空けて また 次(の次の箱を)がけるといふような ことは あり

マヒョダッタ。  
ませんでした。

D ハー ソゲデスカ ハー ハー。(8) ローデ ナンデスカ  
はあ そうですか はあ はあ。 それで 何ですか  
タバモ オーキイ タバデショウカ (8) ニナギリハン  
東も 大きい 東でしょうが ミナギリハン

A ニナギリネ カリョウタ。  
ミナギリ 刈っていた。

D ニナギリデスカ。  
ミナギリですか。

B (9)  
ハー ニナギアデ ゴザエス。 (A ハー)  
はあ ミナギリで ございました。 (はあ)

D ウチャー ニナギリハンダッタ。  
私の家は ミナギリハン だ。

B ハー ソゲデス。 ハー。  
はあ そうでした はあ。

D (10)  
デタラメニ ボクショーナ。  
でたうめには 朴 性 だ。

B ハイ ソーデス。ワネー。  
はい そうですかねえ。

D ヒトナギリ フタナギリ ニナギリデ イナワニ イワエヨッタ。  
ひとなぎり ふたなぎり ミナギリで 一棟に 結んでいた。



B ハー コレガ ヒトナギリ コレ ミッ ツィ (20) スィ ソレデ……。  
 はあ これが ひとなぎり これ ミッ し それで……。

C アンタト コーワ アー ソリャー イツノコト デスィカネ ミナギリハ  
 あんたのところは ああ それは 何時の事ですかね みなぎりハ  
 ン。  
 ン。

D ドーリョク イレルマデデス ハットーキデ ダッ コクカー ヤーン  
 動力(1) 入るまでです。 発動機で 脱殻するように  
 ナーマデデスガ。 (C ハーン) エー テセンバデ コグシグイワ  
 なるまでですか。 (はあん) ええ 千千歳で 扱う時代は  
 ミナギリハン。  
 ミナギリはん。

C ハーン ホンナラ マエノ ハナスィデスィネ。 (D ハイ)  
 はあん それが 前の 話ですね。 (はい)

D イネカリ ャーガ ノ ャッ ャツタ モンダケン ソレー シラデテ  
 箱(1) 帖(1) 残っていたものをから それを 盗んで  
 イキヨツタラ ソノ… (C ハー)  
 行ったら その… (はい)  
 (11)

A ホー オラダン ミナギーデ カリョッタ。  
 はあ 私達は みなぎりね 刈っていた。

B ハイ タイラー アノ ミンナ ミナギラデ ゴザエスィ。  
 はい たいてい あの みんな みなぎりて ございます。

(12)  
 D ソーデ つリガケモ アノー シナガンニ<sub>xx</sub> ノ フリガケニ カケ  
 それで 割り掛けも あのお セミに の 割り掛けに 掛け  
 ……。  
 ……。

B ハイ ハイ ムカス<sub>イ</sub>ワ アゲデス<sub>イ</sub>ガ。  
はい はい 昔は ああですが。

D アゲデスカ ヤッパリ。  
ああですが やほり。

B イヤ ゲンザイワ オツ<sub>イ</sub>ヤツ<sub>イ</sub>ワ フタ ツ<sub>イ</sub>= フッテ ケー フタツ<sub>イ</sub>=  
いや 現在は 私の衣<sub>イ</sub>は ニつに割<sub>イ</sub>って ツッ ニつに  
ケー。(D ハイ ハイ ハイ)  
っ。  
はい はい はい

D マハンブンニ。  
真半分ニ。

B ムカス<sub>イ</sub>ワ ス<sub>イ</sub>ツ<sub>イ</sub>カン。  
昔は セミ。

D シチサンデスネ。(B ハー D ハー)  
セミですネ。 はあ はあ

B フリアイニ アーデモ <sup>カ</sup> ヨー カンソーサーツ<sub>イ</sub>ー マス<sub>イ</sub>タス<sub>イ</sub>ネ。  
割合に あれでも か よう 乾燥 する といひますよね。

ゲンザイワ アゲナコトオ ス<sub>イ</sub>チ<sub>イ</sub>クト フ<sub>イ</sub> ダッコクニ カケラ  
現在は あんな事を してあくと あの 脱穀に かから

レニヤーニ ----。

れないように ----。

D オジナーイーデスツネ。  
難儀、ですわね。

B オス<sub>イ</sub>ナイーテ イケマヘン。  
難儀で いけません。

D ソーデ<sup>(13)</sup> ハデバツ ナンボ<sup>(14)</sup> フナサオ ヤサオデスガ。  
それど はで<sup>ハ</sup>は 七<sup>ク</sup>つ 七棒 八棒ですか。

B アー マー ナナサオ。  
あゝ あゝ 七 棹。

D ナナサオ。  
七 棹。

B ナナサオデス、 コノホーワ ホトンド、 ナナサオデス。  
七 棹です この地方は ほとんど 七 棹です。

A タイゲー ナナサオデスネ。 ( B ハー )  
たいてい 七 棹ですね。 ( はあ )

D マンダ、ー ヤサオノド、ーク ツカッ、 ヲー マスカ、 ダイタイ ジ、クカ、 (15)  
まゝ ハ 棹の道具 使っていますか、 たいたい 車か、

モターテ ヤレント オモイナサイマセ、 (笑)  
重くて やれな、い、と 思、います、せ。

B コマキエイクト ヤサオガ (混線不明)  
小馬木へ行くと ハ 棹か

D オトコガ ホソーテ (混線不明) (笑)  
男が 小さくて

モターテ ヤレマセンケンネ。  
重くて やれませんか、ね。

B アンニョーデ、キンゲン、ホーエ エ エクト マ ヤサオ ホト、ン  
安養寺 近辺の 方へ え 行くと ま ハ 棹 ほとん

ド、 ヤサオデス。 タカエワ ス、タカラ マー オナゴス、ーガ ナ、ケ、  
ど ハ 棹です。 高いわ 下から まゝ 女子最が 投げ

ーガ、 マ、 ツカエ エネ ドモ、……。  
それが ま、 短い 稲 7、2、……。。

D ヨー ナゲマセンガネ。  
よう 投げませんか、ねえ。

B (16) マタデ<sup>1</sup>ス<sub>1</sub>カ。  
また<sup>2</sup>ス<sub>2</sub>カ。

D マタデネ。  $\left( \begin{array}{cc} B & \text{ハハー} \\ & \text{ははあ} \end{array} \right)$  ワサオワ マタデカケーラ シイデス  
またでぬ。 上様は またでかけたし、てす

17 ( B ハハハ—ハイハイ )  
わ。 はははあ はいはい

B マタ ウ ナラ  $\overline{r}_{xx}$  ラクネ スイモネ  $\begin{pmatrix} D & \text{ハイ} \\ & \text{ハイ} \end{pmatrix}$  ナゲーヤナラ  
また う 女 S S 楽 ですけれどもね 指のようイェス  
ト、ラモ。  
ととも。

D イヤ・マツ　　ヲフ＝　　アーマセンガネ　　ヲテアカズ。  
 いや　また(も) 染に　　アリマセンカね　　ワカアス。

B マー オツィ アー オツィヤツィ ニワ マー マイヂー ウ ウー  
 子あ 和の家 ああ 和の家なとこには 子あ 前頃(ほ) う ううん

オナゴ<sup>カ</sup> ヨロク<sup>ン</sup> ダ<sup>ニ</sup>タダ<sup>ケ</sup>ニ ナゲヨ<sup>リ</sup>タダ<sup>ケ</sup>ニ モー 六  
女子<sup>カ</sup> 弱く<sup>セ</sup> ち<sup>ッ</sup>だ<sup>ッ</sup>た<sup>ッ</sup>か<sup>ッ</sup> 左<sup>ガ</sup>て<sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>か<sup>ッ</sup> もう 六

オデ ヤリマス。 ( D ハー ) ゲンザイワネ ナナマオ=ス  
 棒で やりました。 はあ 現在 はね セ棒にシ

チー マスヨ      ンナ。       $\begin{pmatrix} D & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{pmatrix}$       アー      ハデ"カーカ"      タユギ"ラ"

ていますよ      全部。           ああ      はで"作りか"      大儀"て"

エケマヘン イマンゴラー コタバ=サーダテン ハデスィラ バ  
、いけせん 今頃は 小束にすゝめがさ はでの面(面積)

ツノー タクサン シェンナラ エデネ。 (オセロの音)  
 ぼっかり 沢山 しなとてはなやなにてね。

D ウキヤ 十ノ マー トー ジノ ナンダ エダッ クデマネ カー  
 私の家なび その まあ 当時の 何だえだったで可ね 刈り

バツカシデ ガット ケー カリス マイナーマデ カッテシマッテ  
 はかりで ずっと つい けり終りにまで 刈りこまうて

$\begin{pmatrix} B & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  ソエカラ コンダー ター ッタモ コグダシエナリ  
 それから 今度は 次オに 極く段にそれ

ー コグエッホーデスダー。  $\begin{pmatrix} B & \text{ハイ} & \text{ハイ} \\ & \text{はい} & \text{はい} \end{pmatrix}$  ショ ッタモシタ  
 は 極く一オですあ。 してゐるもの。

$\begin{pmatrix} C & \text{フーン} \\ & \text{ふん} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} B & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$

## 注記

- (1) 聞きとれなリ。発音者はアギヤーといっているといふ。a g e r u  
→ a g j a e とナリ、j a に a g j a: といっている。
- (2) 広島県には俺をウラというところもある。元来出雲はウラオとナリ  
勝手で、ウラは珍らしい。オラの言い違いかも知れなリ。
- (3) カナは株のこと。何故株をカナというか不明。
- (4) 二行前にヤキゴメがある。同じものをフライゴメという。フライ  
ゴメでは外来者に分かりにくいと思い、まずヤキゴメというスリし。
- (5) 自分を卑下してテマエといっている。
- (6) ナ歯で扱ぐ音。ナ歯は機械のナリ時代、穂から籾を落す道具。
- (7) 籾のまだついている穂先。
- (8) 三回にぎるのをミナギリ。
- (9) m i n a g i r i → m i n a g j a: → ミナギヤー。ミナギアに  
近く聞こえる。
- (10) 素朴なという意。
- (11) オラ → オラドモ → オラダ → オラダワ → オラダンと思われ。
- (12) 束にした籾を割って稲架にかける。
- (13) 籾を刈って架けるものがハデ、ハデバはその場所の本義だが、ハデ  
ラツクル、ハデバラツクルは同じことにいう。
- (14) 竹の桿を横に組む。出雲地方は、他地方よりかなり高い。七桿は竹  
の段が七、八桿はさらに一本多くそれをけ落しこになる。
- (15) ハデはまず、長い木の束を何本か打さ込む。これを柱にして、横に  
竹を組む。軸とはこの木の束をいう。八段の竹を組めばそれをけ落し  
杉の柱を要する。(桧の外に、栗の木も用いる。北部の出雲地方は杉の木  
が普通)
- (16) 「また」は又のこと、木の先が二つに分かれているもの、またはえが  
えになつて二つの金具をつけた棒。

## 6. 亥の子さん

### 話し手

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)     |
|------|--------|-----|----------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ  |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ |

A イノコサンツィーモノワ コッ、ツィニャー アンマリ ヤッタコトワ ア  
亥の子さんというものが こゝろには あまり やったことは あ

リマシエンワ ( D ハー ) ハー ウツワ ソノ スィンスーデ  
りませんわ。 ( はあ ) はあ 私の家は その 真宗で

スィンスーワ ナンダミダブツィツィーモンデ ナンダー フゲナフーナ  
真宗は なむあみがぶつというもので なんにも あんまりうな

キョーズィワ アンマリ シェヌ カレーデス、タダケンネ。  
行事は あまり しない 寂例 でしたのだからね。

B ウツヤツィ = .....  
私の家はどに ---。

C イノコサンイワイノ ジューイツィグツィノ イ イノヒデシユーガ  
亥の子さん祝の 十一月の 亥の日でしょうが。

B ハイ ハ マ ハズメテノ イノヒニャー  
はい は 子 初めての 亥の日には

C フーン ナンノ アレ イワレデ ( B コノホージャー ) モツツィ  
ふうん 何の あれ 因縁で この地方では 餅と搗

ーテ イワフレルコトデスィカイネ。

いて 視ハなせることデオカハね。

A カトノホージャーネー イノコサンノバンニ イワワノモノワ ジャー  
平野部の方ではねえ 亥の子エルの 晩に 視わぬ者は 蛇

ウメ コウメイーテ (C フーン ソー ソー) ソノ コトモヲ  
生め 子生め(と)言ッて ふうん そう どう その 子供カ

アルクコター イー (C ハー ) ハナスイワ チキョックドモ  
歩くことは へえ 話ハ 聞ッていたけれども

コノホージャー ソゲナコト ナイ。

この地方では そんなこと 無い。

C コノアンデモ アゲナコト イー マショッタヨ。 イノコサンノバンニ  
この辺でも あんまりこと 言ッていましたよ。 亥の子エルの 晩に

モツィツィイテ イワワヲ (A ハー ) モノワ ジャウメコウメ (A  
餅搗ッて 視わぬ はあ 者は 蛇を生め子生め

ウー ) ツノノハエタ コウメ (A ウー ウー ソラー ) イ  
角の生えた 子生め うう うう それハ 言

ーテ アノー イー マショッタケンネ。

ッて あのお 言ッてましたからね。

A イータコター イー ヨッタドモ。

言ッたことは 言ッていたか。

C チョード イマンガラー。

丁度 今頃は。

A アルクコトモアー オラダーリョッタ。

歩く子供は みたかった。

C ナンダエ イワヤー シュンネ ナンダエ ツノノハエタコドモ (A  
何も 視ッもしないのに 何も 角の生えた子供



ハハー ) オマレ タコト キキマシエンダケン (笑... ねから) ムカ  
 ははあ ) 生まれたこと 聞きましたから 昔

ス、 / ハハ.....  
 の はは.....

B マー コノオーザー イノコサンヒニャー アー ハタケデ ダエコ  
 まあ この地方では 亥の子さんの日には ああ 畑で 大根  
 トランナンツァー コトガネ ( D ハー ) マー スーカンニナッ  
 取りない などということかね ( はあ ) まあ 習性になっ

キョーマスィワネ。マー ムカスィカラ イーヨッタ モンデスィガ。 ( C  
 っリ子すわね。 まあ 昔から 言っていたものですか。 )

~~~~~ ナンゾアッタ モンデ ~~~~~ ) イマワ ドゲナコトダエ  
 何が あったもので 今 は どうな ことが

ス、ランガ マー。
 知らんが まあ。

C アリャー イノコサンノ フデスィカエネ アノ ダイコンノ オーキナ
 あれは 亥の子さんの 日 ですかね あの 大根 の 大きな
 オト オーキネナー オトオ キワト スノーゲナコト ナン.....,
 音 大きくなる音 聞くと 死ぬ子 とうな こと なん.....。

A アゲーナコト イーヨッタ ヤーナキガ (1) ショーガ。
 あんなこと 言っていたような気が すうが。

C フーン ダイコヌキエ イキマシエンダケン。
 ふうん 大根 抜きへ 行きませんでしたから。

A アンマリ イノコサンナンツァーモニャ ノンズン モタダッタネ。
 あまり 亥の子さん などいうものには 関心を 持たなかったね。

B アゲデスィタネ。
 ああでしたね。

A アー ト / スイナギョースイワ ナカック。
 ああ 特殊な 行事は 無かった。

D イエニヨッテ イロイロ アッパヨードスガネ ドーモ。 (A ハー)
 家によって いろ いろ あったようですかね どうも。 (アア)

注記

- (1) すゝは $S_{\text{ルトル}} \rightarrow S_{W2}$: びびりか、一般には S_{2} : とする。こゝで
 は S_{j2} : となっている。たゞし基が聞きにくくはっきりしネリ。同会
 者の杉原氏の助言による。

7. 膝塗り餅・とうへん・(ほとほと

話し手

| (略号) | (氏名) | (性) | (生 年) |
|------|--------|-----|---------------|
| A | 藤原安太郎 | 男 | 明治27年生まれ |
| B | 渋谷徳右衛門 | 男 | 明治50年生まれ |
| C | 長瀬マス子 | 女 | 大正元年生まれ |
| D | 杉原清一 | 男 | 昭和11年生まれ(司会者) |

C ジュー=グツィノ ツィイタツィデスィタ。 フザノリ。
十二月の ついたちでした。 膝塗り。

D アツキゾー=ニテ スルト (C ムー) マクレテモ ケガセニ
小豆雑煮 煮て 塗ると (ムー) 転んでも 怪我をし
ヤー=。(B ハイ ソー ソー) (朗)
なように。 はい そう そう

C . シューグツィ= ナーマスィトネー ホンネ アノ ヤマー ヤマエ イ
正月に はりまちとねえ ほんとうに あの ママ ママ
カレー スーワ ヤマユキノ キョースィガ アーマスィダケン ムーカラ
かれる人は 山行きの 行事が ありますのだから それから

ツキジメイーテ アノ コメ イッ ショーホド ウスノナカエ イ
搦き初め(と) 言ッて あの 米 一升ほど 臼の中へ 入

レテ マー ツクマネ スィテネ ソエカラ カミ アノ ナカオリオ
れて まあ 搦く真似してね それから カミ あの 中折エ

ヘリノトコロ コゲ ヌーテ ソーカラ ソコンフカエ イレテネ
ヘリの所 こう 縫うて それから その中へ 入れてね

ソノ ツイタコメオ。ホエカラ ちよっと マタ ヌーテ ソノ ダ
その 搦いた米を。 それから ちよっと また 縫うて どの

エコクサンニ アゲ^ルキマシヨッタ。ソーガ ツキジメーダイーテ
大黒さんに あげておきました。 それから 搦き初め(と)言ッて

ソエカラ マー ヌイゾメガアーマスィフネ。マー イロイロナ 色
それから まあ 縫い初めがありますわね。 まあ いろいろ 行

ースィガ アーマスィ。イマ ナンダリ アゲーナコト シャーシェンデスィ
事が あります。 今(は) 何も あんまり しませんで

ケンネ。ソエカラ ナン -----。

からね。 それから なん -----。

D タツタモ カジエテミテ クダサンセ ドゲナ キョーゾカ アッ
順に 教へてみて 下さいませ どんな 行事か あり

マニタカネ。

ましたかね。

A マー オラドマネー ズイー ズイー ゴン ズイーヨツカカエナ (C
まあ 私達などねえ じゅうごん 十四日かッね

ナヌカネナリャー アノ オカエサンオ) ズイーゴンツノバンカ ト
七日になれば あの お粥さんを 十五日の晩か と

ロヘンオ シヨッタエ。(同笑) ワケチモンが ソノ
ろへんを していた。 若い者が その

ナンダエ ウマダエ ナンダエ イレテ オイテ (A オーマー
なんか 馬か 何か 入れて おいて ああ まあ

ワラオマコスィラエタナー) アノー エンガワニ オクトネー
茶馬(と)作ったなあ あのう 縁側(り)に 置くとねえ

アー トロフンガ キター ハマー とスィカケ4pレー イーテ ホ
ああ とろふんか来たあ 早く 水(エ)かけてやれ 言って (5) せ

イカラ マー カクレ4pート ヨー アノー とスィー マカキエ
ゆから まあ かくれといると よう あのう 水(エ)を ま かける

テテ ナンデスィカネ ソコエ アノ モツィエレテネ ホエカラ タ
といて なんですかね そこへ あの 餅(エ)入れてね それから 出

エ4pクト マタ モツテ インデスィケンネ。タツタ キンネンマヲ
しておくと また 持って 帰るのですからね。 たった 近年まで

アゲナコト スィマニョッタスィ。ネード ゴネンヤ スィーネンヤ ニエ
あんなこと してましたよ。 丁度 五年や 十年や し

ンデスィダドモ モーシコスィマエゴロマダ。

ないですけれども もう少し 以前とまで(していた)。

B アレフ スィーヨツカダツク。ソエカラ イー マスィ イー ナメカ
あれは 十四日だった。 それから ます 七日

ニ オカイオタベテ ソエカラ コンド スィーイツィンツィニヤ アツチ
に お粥(を)食べて それから こんど 十一日には 小豆
(6)

ゾーニータベテネ タウツィーショツタダ。タウツィワ イー セトクワ
雑煮(を)食べてね 田打(を)していただ。 田打は ひと金炊

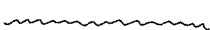
ニシェンゴク フタクワネ マンゴク 1クニ カスィスィラスィツィーテ
二十石 ふた金炊で 萬石 4金炊に 教知(を)言(て)って

イー タウツィーショツタダ。アサマトーニ クライアイダニ イー
田打もしていただ。 朝早く 暗い間(に)

タンナカエ イレテネー。
田の中へ 入れてねえ。

D ソレワ マツカガリオ モッテエッテ。
それは 松飾を 持って行って。

B ハー マツカガリオ ハー ソゲ オサメテ ソエヲテ ---。
はあ 松飾を はあ そう 収めて それから ---。

C  エマンガロ スィナハーデスィカ フーン。
今頃 しなでいますですか ふうん。

B ソレガスィント コンド マー トロヘンデモスィテ ヘーカラ コン
それからすむと こんな まあ とろへんをどして それから こんな

ド ズーゴンツィノ (A ドンドマン) ドンバマンニ オカエト
ど 十五日の どんどん どんどんに お粥を

モクイテ ヤスィヨッタダ。

ど 食べて 休みました。

D マー オトコシーワ ソゲーシテ トロヘンデスカ オナゴシーワ
まあ 男衆は そうして とろへんですが 女衆は
(ク)

ホトホトガ アリヤーセンデスカ。

ほんとほか ありませんか。

A ホトホトイーモノワネー アンマリ アンマリ イヤー マイノヲ
ほんとほんと(ト)言うものはねえ あまり あり いやー 前の日

ニ ヤリヨッタデスワ アンマリ ユタカデナイトコーノストタツオ
に やってましたですわ あまり 豊かで ない 所の 人達か

ネー モツヨケー ツーケランヤーナモンガ モツモウエニ ホト
ねえ 餅沢山 搦っているような者が 餅(E)貰いに ほと

ホトガイーテ エキテモライヨッタネ。(D ハー) (間) ソリヤ
ほんと(ト)言って 行って貰っていたね。(はあ) それ

ー アンマリ ワーサアソビョーカ ツート モツモラー ツー コト
は あまり 悪戯遊びよりか 少し 餅(エ) 貰うということ

ガ ソノ ホン ホン ^{ススス} スィタッタデス。 トロヘンワ ソノ アソビ
カ その 本質 だったです。 とろへんは その 遊び

デ ワーサデ サワグカ オモスロカッソツケデスワ。

デ 悪戯デ 騒ぐのが おもしろかったわけですね。

D ホトホトニャ ナニモツテ イキョッタデスカ。

ホトホト には 何(エ) 持って 行ってたのですね。

A シニツナギドモ モツテエッタモンジナエカ。 (D ハー) (167)
鉄 っな子でも 持って行ったものでないか。

注記

- (1) 中折紙のこと。半紙などまんなかと二つに折ったもの。
- (2) 水田の中に、刈り入れた後、積んである葉。出雲の北部はスススといふ。あそにお。
- (3) 銭さしともいう。一文銭を通しておく小縄。
- (4) トロヘンの語義は不明だが、冬の一つの遊び。餅貰い。子供や若者が、貰った餅を食べることを楽しみにする。しかし、受取る時、その家の人から水をかけられる。
- (5) かける、kəkeru → kəkjəe (カキエ)。
- (6) 田打ち行事のこと。
- (7) 豊かでない人の餅貰い。

8. どんど焼, ひとひ正月, こと祭

話し手

| (略号) | (代名) | (性) | (生年) |
|------|--------|-----|---------------|
| A | 藤原安太郎 | 男 | 明治27年生まれ |
| B | 渋谷徳右衛門 | 男 | 明治33年生まれ |
| C | 長瀬マス子 | 女 | 大正元年生まれ |
| D | 杉原清一 | 男 | 昭和11年生まれ(司会者) |

D ソーデ トンドサンニ ナリマスネ
それで どんどさんには なりまよね

B ハー (問) (答エマエと音) トンドサンワ ムカスワ……
はあ どんどさんは 昔は……

A ソリャー コノ クレターヨッテネ。
それは この 組中(が)寄ってね。

B クミアーテ イー シェーダエニ。
組合って 盆大に。

A シュエグツィ カガツタモノオ ゴット モツヨッテ ハーカ タチ。
正月 飾ったものを 全部 持ちよって それから ケ

ーマンテカエ タテチエテ フータエテ ソノ タケノ カエック
を真中へ 立てておいて 火をたいて その ケの 倒れた

ホーガ マンガエーツィーコト ナンツーテネ (B ハー) ヤ
方が 運がよいということ 何と言ってね (ハッ) ヤ

ーマシヨッタワ。

っていましたわ。

B イー カキヅメヤナンカエ ス₁4ヨッタ ヤツ₁ネ $\left(\begin{array}{cc} A & \text{ア一} \\ & \text{ああ} \end{array} \right)$ モッ
書き初めやなにが していた やつ(物)ね

テエッテ コー イー ー ツ₁ケテ ハナス₁ヨッタワ。

て 行って こう 火₁エフケテ 放₁してゐた。

A タカーニ アガッタホーガ $\left(\begin{array}{cc} B & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$ ジョー₁ニナー ツー₁パ
高く 上がった方が (字が)上手になる と言う

ーナコトエッテ マー ヤ ハズ₁ンデ ヤリヨッタデス₁ワネー。 キンネ
ようなこと(エ)言₁って まあ ヤ 弾₁んで や₁っていたでわねえ。 近年

ンワ アゲナコトモ ネヤネナーマス₁タワ。

は あんなことも ないようになりましてわ。

D トンドカンオ カー₁クボワ コーキマッ₁ ャー₁マシタデスカ。
どん₁ど₁さん₁を する 田₁は こう 決₁ま₁っ₁て いた₁た₁です₁わ。

A ズ₁ー₁ ゴンツ₁デス₁。
+ 五₁日₁です₁。

D イヤ タガ。
いや 田₁か。

A マー ホボ キマッ₁ ャー₁マシタネ。 ク₁ズ₁ー₁ ソノ ヨーコトデス₁。
まあ ほぼ 決₁ま₁っ₁て いた₁た₁ね。 組₁中₁(か) その 寄₁る₁こと₁です₁。
ケン マンナカ アターノ イー₁ホー₁ノ₁トコロエ。
から 真₁中₁ あたりの いい₁方₁の 所₁へ。

D ソノ トンドー₁クボ₁ナンチ₁テ キマッ₁タ トコー₁ワ ナイワケ₁デ₁イ
その とんど₁う₁(達)田₁など₁と₁言₁って 決₁ま₁た 所₁は ない₁言₁た₁です₁。
ネ
ね。

A ハー ホー ツィヤナコトフ ケー ヤッ タコター アーマヘノフ ナ
 はあ (意味不明) ツィ ヤったことは ありませんわ な
 ントナク ズィー ゴン ツィノ アサマニ。
 んとなく 十五日の 朝に。

D イヤ イヤ ヨロシユーゴザエンスケドモ ウキンホーシヤー トンドー
 いや いや よろしくございますけれども 私の方では とんどら
 クボダイーテネ (B ハー ハー) キマッ チョーデスワ。
 空 だと言ってね はあ はあ (田が) 決まっているですわ。

B ハイ ソーデスィ。
 はい そうです。

A クボ'ガネー ホーホー ハハー ソゲ'ネマシヤー。
 空 かねえ ほう ほう ははあ そんなにまでは。

B ソゲ'ネマデワー ドーモ。
 そんなにまではあ どうも。

A ソーデ' ナカッ タヤーデ'スィネ ウツィノホーシヤー。
 そうで' なからなようで'すね 私の方では。

D ソエカラ コンド'ワ (P69) (小...戸で) ナニニナーマスカネ
 それから こんどは 何になりますかね
 ハツカシヨーグワ ツー...。
 はつか正月...。

C ズィーロクン ツィワ トキノ ショーグワ ツィダエッテ ヤスィンマニョツタガネ。
 十六日は 時の 正月 だ(と)言って 休みましたかね。

(D ハー ハー) ホトケサンノニュークワツ (D ハー ハー)
 はあ はあ 仏さん の 正月 はあ はあ

ヤスィン マシツタガネ コンダ ハツオショーグツツ ニスィーハ ツムニツィガ
 休み ましたか ね。 こんどは はつか正月 (2) ニ十八日か
 シアツィ マツリ。 (107) フター ショーグツツ。
 杓子祭。 ヴヒヴ 正月。

B フター ショーグツツ。
 ヴヒヴ 正月。

C ニグツツノ ツィタツィガ ソーデ エー スィマ スィ。 (107)
 二月の一日か それで もう すみます。

D (ハミッ声マ) ニグツツニ ハイッテカラワ ドケニナリマスカエ
 二月に 入ってからは どんな になりますか ね。
 ネ。 (107)

C コトマツリ イー イーコトワ アノ イワレマシツタガ アリヤー
 ことまつり ^{ムムム} 言うことは あの 言っておられたか あれは
 (3)
 ナンノコトデスィカ。 コト エワイッテネ アノ ナンナト アノ
 何の事ですか。 こと祝と言ってね あの なんでも あの

シオケゴハンナト コスィラエテ スィボニスィテネ ホエカラ アノ
 塩気御飯(まぜめし)なりと 作って 苞 にしてね それから あの

ジュニ (キセルの音) ジェンノ ヤナギデ ハスィコスィラエテ
 ナニ 膳の 柳で 箸(5) 作って

ソレ アノ ツィナイデネ ホエカラ フッカケケエタリナンカ サ
 それ あの つないでね それから ひっかけておいたり など マ

ジュナハー リョツタ。 ソレ ナンノ ツィーデスィダエラ スィラン。 コトエ
 せなさっていた。 それ 何(の) というのですやう 知らん。 こと祝

ワエダ ツィーテ (B ハー ソー ソー) アリヤー ニグツツデ
 だ と 言 っ て (はあ そう そう) あれは 二月で

スタカエネ。

したかや。

B アー ニグツィゴロデワ ナカッタカエネ。(聞)

ああ 二月頃では なかたかね。

D ソースル ダイタイ ホンナラ ソー シマスト ショーガツキョージモ
そうする(と) だいたい それなら そうしますと 正月行事も

オワリマスト コンタマタ ハルノ サクノジュンビニ ナルワケ
終わりますと こんどはまた 春の 農作の準備に なるわけ

ですネ。

ですね。

B ハイ アデーデスネ。

はい ああですね。

A マー ニグツィ カングチャー オーイキガフツテネー。マー コタツ

まあ 二月 三月は 大雪が降ってねえ。まあ 炬燵

で アタツテ モツドモ クーテ コタツデ" ケー アタツター
で あたって 餅でも 食って 炬燵で つい あたったり

チャドモ ノンダーシー タエガエ クラエチーマスワ。

茶でも 飲んだりして) たいがい 暮していますわ。

D ~~~~~ (声小く不明)

B ハー マー ニグツィ カングツィワ ナニブン ⁽⁴⁾ フル コノホーフ
はあ まあ 二月 三月は なにぶん 昼 この方は

アー イキガ オーゴザイスイダケン ナンダー ナーマニエノワ。

ああ 雪が 多うございますから なんにも ありませんわ。

D ヤマコドマ サーモノワ ソーデモ ヤマエ エキヨツタ モンデスィ
山仕事など する者は それでも 山へ 行っていたものです

ドモ ソゲー ネーモナー ナニスィー モーケガ アーシヤー アリア
けれど も そう(で) ないものは なにする(でもなく) もうけが あるで"は ありま

シズネ ドッコダリ ハハハ ----- (笑う) イマシゴロノ、セーネ。
せずね どっこも ほはは ----- 今頃のようにね。

ソノ スイゴトニ テルツィー コトニ イカンデスィケン。
その 仕事に 出るといふことに はかなのですがさ。

注記

- (1) 畦にかこまれた水田をクボという。窪の漢字でよいかは不明。
- (2) 石見ではヒテーショーガツ。出雲はフテーショーガツ。ヒテーは一日中をいう。この場合は二月一日をいう。
- (3) コトヨワイとも聞こえる。村中の行事ではなく、一部に行なわれたものらしく、よく分らない。
- (4) 昼の間も雪で仕事が出来ない意らしい。

昭和55年 1 月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘 3 丁目 9 番14号
電 話 東 京 (900) 3111(代表)

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

| | | | |
|------|-----------------------------------|---------|--------|
| 1 | 八丈島の言語調査 | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 2 | 言語生活の実態
——白河市および付近の農村における—— | " | " |
| 3 | 現代語の助詞・助動詞
——用法と実例—— | " | 2,000円 |
| 4 | 婦人雑誌の用語
——現代語の語彙調査—— | " | 品切れ |
| 5 | 地域社会の言語生活
——鶴岡における実態調査—— | " | " |
| 6 | 少年と新聞
——小学生・中学生の新聞への接近と理解—— | " | " |
| 7 | 入門期の言語能力 | " | " |
| 8 | 談話語の実態 | " | " |
| 9 | 読みの実験的研究
——音読にあらわれた読みあやまりの分析—— | " | " |
| 10 | 低学年の読み書き能力 | " | " |
| 11 | 敬語と敬語意識 | " | " |
| 12 | 総合雑誌の用語(前編)
——現代語の語彙調査—— | " | " |
| 13 | 総合雑誌の用語(後編)
——現代語の語彙調査—— | " | " |
| 14 | 中学年の読み書き能力 | " | 400円 |
| 15 | 明治初期の新聞の用語 | " | 品切れ |
| 16 | 日本方言の記述的研究 | 明治書院刊 | " |
| 17 | 高学年の読み書き能力 | 秀英出版刊 | " |
| 18 | 話しことばの文型(1)
——対話資料による研究—— | " | " |
| 19 | 総合雑誌の用字 | " | " |
| 20 | 同音語の研究 | " | " |
| 21 | 現代雑誌九十種の用語用字(1)
——総記および語彙表—— | " | " |
| 22 | 現代雑誌九十種の用語用字(2)
——漢字表—— | " | " |
| 23 | 話しことばの文型(2)
——独話資料による研究—— | " | " |
| 24 | 横組みの字形に関する研究 | " | " |
| 25 | 現代雑誌九十種の用語用字(3)
——分析—— | " | " |
| 26 | 小学生の言語能力の発達 | 明治図書刊 | 2,100円 |
| 27 | 共通語化の過程
——北海道における親子三代のことば—— | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 28 | 類義語の研究 | " | " |
| 29 | 戦後の国民各層の文字生活 | " | 400円 |
| 30-1 | 日本言語地図(1) | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ |
| 30-2 | 日本言語地図(2) | " | " |

| | | | |
|------|---|---------|--------|
| 30-3 | 日 本 言 語 地 図 (3) | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ |
| 30-4 | 日 本 言 語 地 図 (4) | " | " |
| 30-5 | 日 本 言 語 地 図 (5) | " | " |
| 30-6 | 日 本 言 語 地 図 (6) | " | " |
| 31 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 | 秀英出版刊 | 450円 |
| 32 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)
——親族語彙と社会構造—— | " | 品切れ |
| 33 | 家庭における子どものコミュニケーション意識 | " | 350円 |
| 34 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅱ)
——新聞の用語用字調査の処理組織—— | " | 品切れ |
| 35 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)
——マキ・マケと親族呼称—— | " | 450円 |
| 36 | 中学生の漢字習得に関する研究 | " | 5,000円 |
| 37 | 電子計算機による新聞の語彙調査 | " | 品切れ |
| 38 | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ) | " | 2,800円 |
| 39 | 電子計算機による国語研究(Ⅲ) | " | 700円 |
| 40 | 送 り が な 意 識 の 調 査 | " | 1,500円 |
| 41 | 待 遇 表 現 の 実 態
——松江24時間調査資料から—— | " | 900円 |
| 42 | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ) | " | 1,200円 |
| 43 | 動 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究 | " | 5,000円 |
| 44 | 形 容 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究 | " | 3,000円 |
| 45 | 幼 児 の 読 み 書 き 能 力 | 東京書籍刊 | 4,500円 |
| 46 | 電子計算機による国語研究(Ⅳ) | 秀英出版刊 | 700円 |
| 47 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)
——性向語彙と価値観—— | " | 700円 |
| 48 | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ) | " | 3,000円 |
| 49 | 電子計算機による国語研究(Ⅴ) | " | 900円 |
| 50 | 幼 児 の 文 構 造 の 発 達
——3歳～6歳児の場合—— | " | 品切れ |
| 51 | 電子計算機による国語研究(Ⅵ) | " | 1,000円 |
| 52 | 地 域 社 会 の 言 語 生 活
——鶴岡における20年前との比較—— | " | 1,800円 |
| 53 | 言 語 使 用 の 変 遷 (1)
——福島県北部地域の面接調査—— | " | 2,500円 |
| 54 | 電子計算機による国語研究(Ⅶ) | " | 1,000円 |
| 55 | 幼 児 語 の 形 態 論 的 な 分 析
——動詞・形容詞・述語名詞—— | " | 品切れ |
| 56 | 現 代 新 聞 の 漢 字 | " | 3,000円 |
| 57 | 比 喩 表 現 の 理 論 と 分 類 | " | 6,000円 |
| 58 | 幼 児 の 文 法 能 力 | 東京書籍刊 | 5,500円 |
| 59 | 電子計算機による国語研究(Ⅷ) | 秀英出版刊 | 1,300円 |
| 60 | X線映画資料による母音の発音の研究
——フォネーム研究序説—— | " | 2,500円 |
| 61 | 電子計算機による国語研究(Ⅸ) | 秀英出版刊 | 1,300円 |
| 62 | 研 究 報 告 集 (1) | " | 1,700円 |

| | | | |
|----|---------------------------------------|-------|--------|
| 63 | 児 童 の 表 現 力 と 作 文 | 東京書籍刊 | 6,000円 |
| 64 | 各 地 方 言 親 族 語 彙 の 言 語 社 会 学 的 研 究 (1) | 秀英出版刊 | 2,000円 |

国立国語研究所資料集

| | | | |
|------|----------------------------|---------|--------|
| 1 | 国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17～24年) | 秀英出版刊 | 45円 |
| 2 | 語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例—— | " | 品切れ |
| 3 | 送 り 仮 名 法 資 料 集 | " | " |
| 4 | 明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目 | " | " |
| 5 | 沖 縄 語 辞 典 | 大蔵省印刷局刊 | 3,500円 |
| 6 | 分 類 語 彙 表 | 秀英出版刊 | 1,800円 |
| 7 | 動 詞 ・ 形 容 詞 問 題 語 用 例 集 | " | 1,700円 |
| 8 | 現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中間報告) | " | 500円 |
| 9 | 牛店安愚楽鍋用語索引 | " | 1,500円 |
| 10 | 方言談話資料(1) ——山形・群馬・長野—— | " | 6,000円 |
| 10-2 | 方言談話資料(2) ——奈良・高知・長崎—— | " | 6,000円 |

国立国語研究所論集

| | | | |
|---|-------------------|-------|--------|
| 1 | こ と ば の 研 究 | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 2 | こ と ば の 研 究 第 2 集 | " | " |
| 3 | こ と ば の 研 究 第 3 集 | " | " |
| 4 | こ と ば の 研 究 第 4 集 | " | 1,300円 |
| 5 | こ と ば の 研 究 第 5 集 | " | 1,300円 |

国立国語研究所年報 秀英出版刊

| | | | | | |
|----|------------|------|----|------------|------|
| 1 | 昭 和 24 年 度 | 品切れ | 16 | 昭 和 39 年 度 | 品切れ |
| 2 | 昭 和 25 年 度 | " | 17 | 昭 和 40 年 度 | 250円 |
| 3 | 昭 和 26 年 度 | 160円 | 18 | 昭 和 41 年 度 | 300円 |
| 4 | 昭 和 27 年 度 | 160円 | 19 | 昭 和 42 年 度 | 300円 |
| 5 | 昭 和 28 年 度 | 品切れ | 20 | 昭 和 43 年 度 | 品切れ |
| 6 | 昭 和 29 年 度 | 200円 | 21 | 昭 和 44 年 度 | " |
| 7 | 昭 和 30 年 度 | 品切れ | 22 | 昭 和 45 年 度 | " |
| 8 | 昭 和 31 年 度 | " | 23 | 昭 和 46 年 度 | 450円 |
| 9 | 昭 和 32 年 度 | " | 24 | 昭 和 47 年 度 | 450円 |
| 10 | 昭 和 33 年 度 | " | 25 | 昭 和 48 年 度 | 品切れ |
| 11 | 昭 和 34 年 度 | " | 26 | 昭 和 49 年 度 | 600円 |
| 12 | 昭 和 35 年 度 | 350円 | 27 | 昭 和 50 年 度 | 700円 |
| 13 | 昭 和 36 年 度 | 160円 | 28 | 昭 和 51 年 度 | 非売品 |
| 14 | 昭 和 37 年 度 | 220円 | 29 | 昭 和 52 年 度 | " |
| 15 | 昭 和 38 年 度 | 250円 | 30 | 昭 和 53 年 度 | 800円 |

国 語 年 鑑 秀英出版刊

| | | | |
|------------|-----|------------|-----|
| 昭 和 29 年 版 | 品切れ | 昭 和 34 年 版 | 品切れ |
| 昭 和 30 年 版 | " | 昭 和 35 年 版 | " |
| 昭 和 31 年 版 | " | 昭 和 36 年 版 | " |
| 昭 和 32 年 版 | " | 昭 和 37 年 版 | " |
| 昭 和 33 年 版 | " | 昭 和 38 年 版 | " |

| | | | |
|-----------|--------|-----------|--------|
| 昭和 39 年 版 | 品切れ | 昭和 47 年 版 | 2,200円 |
| 昭和 40 年 版 | " | 昭和 48 年 版 | 2,700円 |
| 昭和 41 年 版 | " | 昭和 49 年 版 | 3,800円 |
| 昭和 42 年 版 | " | 昭和 50 年 版 | 3,800円 |
| 昭和 43 年 版 | " | 昭和 51 年 版 | 4,000円 |
| 昭和 44 年 版 | 1,500円 | 昭和 52 年 版 | 4,500円 |
| 昭和 45 年 版 | 1,500円 | 昭和 53 年 版 | 4,600円 |
| 昭和 46 年 版 | 2,000円 | 昭和 54 年 版 | 4,800円 |

日本語教育教材

| | | | |
|-----------------------------------|-------------------|---------|------|
| 1 日 本 語 と 日 本 語 教 育
——発音・表現編—— | 国立国語研究所
文化庁 共編 | 大蔵省印刷局刊 | 650円 |
| 2 日 本 語 と 日 本 語 教 育
——文字・表現編—— | " | " | 850円 |
| 3 日 本 語 の 文 法 (上) | ——日本語教育指導参考書 4—— | " | 450円 |
| 4 日 本 語 教 育 の 評 価 法 | ——日本語教育指導参考書 6—— | " | 450円 |

| | | | |
|-------------------------------|----------------------|-------|--------|
| 高 校 生 と 新 聞 | 国立国語研究所
日本新聞協会 共編 | 秀英出版刊 | 280円 |
| 青年とマス・コミュニケーション | 日本新聞協会
国立国語研究所 共編 | 金沢書店刊 | 品切れ |
| 国立国語研究所三十年のあゆみ
——研究業績の紹介—— | | 秀英出版刊 | 1,500円 |

日 本 語 教 育 教 材 映 画 一 覧

(各巻16ミリカラー、5分、日本シネセル社販売)

| 巻 | 題 名 | プリント価格 |
|------|------------------------------------|---------|
| 第1巻 | これはかえるです——「こそあど」+「は～です」—— | 30,000円 |
| 第2巻 | さいふはどこにありますか——「こそあど」+「が～ある」—— | " |
| 第3巻 | やすくないです、たかいです ——形容詞とその活用導入—— | " |
| 第4巻 | なにをしましたか ——動詞—— | " |
| 第5巻 | しずかなこうえんで ——形容動詞—— | " |
| 第6巻 | さあ、かぞえましょう ——助数詞—— | " |
| 第7巻 | うつくしいさらになりました ——「なる」「する」—— | " |
| 第8巻 | きりんはどこにいますか ——「いる」「ある」—— | " |
| 第9巻 | かまくらをあるきます ——移動の表現—— | " |
| 第10巻 | おかねをとられました ——受身の表現 1 —— | " |
| 第11巻 | どちらが好きですか ——比較・程度の表現—— | " |
| 第12巻 | もみがとてもきれいでした ——「です」「でした」「でしょう」—— | " |
| 第13巻 | きょうはあめがふっています——「して」「している」「していた」—— | " |
| 第14巻 | そうじはしてありますか——「してある」「しておく」「してしまう」—— | " |
| 第15巻 | おみまいにいきませんか ——依頼・勧誘の表現—— | " |
| 第16巻 | なみのおとがきこえてきます ——「いく」「くる」—— | " |

(第1巻～第3巻は、文化庁との共同企画・VTR価格1/2インチオープンリール21,000円、3/4インチカセット20,000円)

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS

SOURCE X-IV

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 4)

CONTENTS

Foreword

Purpose and Outline

Text

- Part 1 : HUKUI PREFECTURE (Town Simonakatuvara, City
Takefu)
- Part 2 : KYÔTO PREFECTURE (Hamlet Kannondô and Sakura,
Town Takatuki, City Ayabe)
- Part 3 : SIMANE PREFECTURE (Hamlet Ômaki, Town Yokota,
District Nita)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
TOKYO JAPAN

1980